

飯土井中央遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

建 設 省
群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

群埋文 発掘調査報告書台帳登記

1 報告書ID : 20005 - 0123
 2 報告書名 : 飯土井中央遺跡
 フリガナ : いいどいちゅうおういせき
 3 副題 : 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 4 シリーズ名 : _____
 5 分冊区分 : 分冊数 2 1 本編
 6 発行 : 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 7 編集 : 岩崎 泰一
 8 発行年月日 : 1991/11/27
 9 掲載遺跡 : 組織 : 20005 - 00104 飯土井中央遺跡
 いいどいちゅうおういせき
 地域 : _____

群埋文 遺跡台帳閲覧

1 事業ID : 20005-00104
 2 遺跡名称 : 1 組織 : 20005-00104 飯土井中央遺跡
 いいどいちゅうおういせき
 地域 : _____
 3 事業名称 : 1 飯土井中央遺跡
 4 遺跡略称 : JK30
 5 所在地 : 1 群馬県前橋市飯土井町字中央22-4他
 6 経緯度 : 東経 _____ 北緯 _____ 1/4メッシュ _____
 7 調査組織 : 20005 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 8 調査原事業名 : 国道改築
 9 調査面積 : 一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
 10 調査区分 : 10000 m2 11 調査期間 : 1986/01/30~1986/08/31
 12 時代 : 3 時代 : 旧石器 時期 : _____ 遺跡種別 : _____
 13 備考 : 古墳時代以降の遺構あり, 事業団報告123集, 年報6

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	
No. 98-4466	平成10年5月13日	(8)

飯土井中央遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

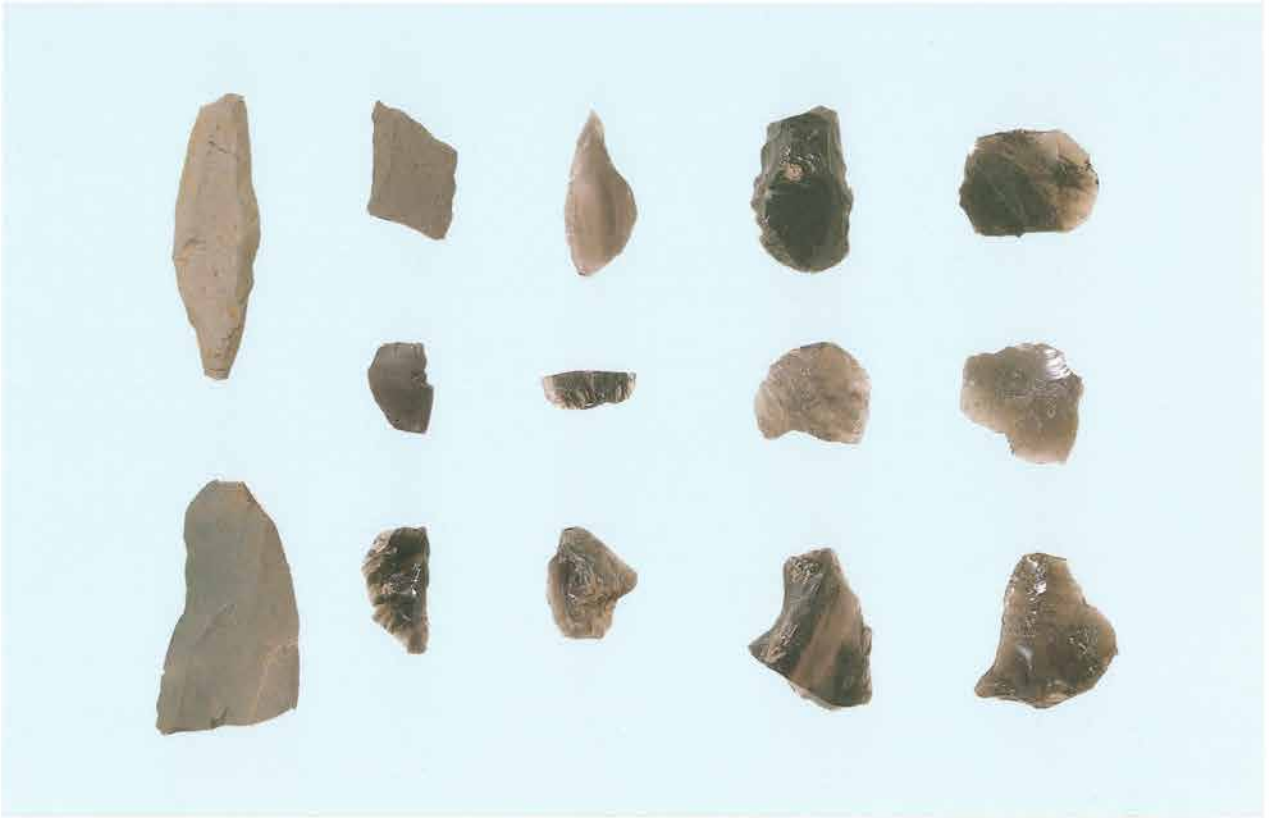
建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景



ローム層の堆積状態



旧石器時代の石器



縄文草創期の土器

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行なわれています。

本書は、昭和60～61年度に発掘調査をしました飯土井中央遺跡の報告書ですが、旧石器時代文化層2面、縄文時代の遺物包含層より出土した早期の土器等の貴重な調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成3年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小 寺 弘 之

例 言

1. 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い事前調査した、事業名称「JK30^{いいどいちゆうわう}飯土井中央遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する方法を採用している。本書では、より範囲の広い中央の小字名を冠し、「飯土井中央」と呼称した。
3. 遺跡所在地 群馬県前橋市飯土井町字中央22-4・24・26-1 他
4. 事業主体 建設省関東地方建設局高崎工事事務所
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 昭和61年1月30日～昭和61年8月31日
7. 調査組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 白石保三郎・井上唯雄・大沢秋良・上原啓巳・桜場一寿・定方隆史・国定 均・
笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
調査担当 原 雅信・岩崎泰一・金井 武
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成2年6月1日～平成2年10月31日
10. 整理組織 事務担当 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・神保侑史・能登 健・岩丸大作・国定 均・
笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・野島のぶ江・
今井もと子・松井美智子・角田みづほ
整理担当 岩崎泰一
青木静江・大川明子・神谷みや子・鈴木紀子・関 正江・南雲富子・松岡陽子・
横坂英実
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・北爪健二・小材浩一
11. 本書の編集執筆は岩崎泰一が行っている。なおⅢ-4a(1)、縄文土器については原 雅信・藤巻幸男が執筆している。
12. 石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会所属）に依頼した。
13. 分布図原図作成は下記の業者に依頼した。
遺物分布図の原図の作成……中央航業株式会社
14. 挿図中に使用した方位は、真北である。
15. 遺構実測図は以下の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。
住居……………1/60 道状遺構……………1/200
住居のカマド……………1/30 土坑……………1/40・1/60
溝……………1/800
16. 遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示した。なお、小形石器（石鏃等）は縮尺を変えてあり、その都度縮尺率を表示した。
旧石器単独資料……4/5 住居出土の土器……1/2・1/3
 〳 接合資料……1/2 石製品……………1/3

縄文時代の石器……1/1・1/2・1/3・1/4・1/6

土器……1/1・1/2

17. 遺物写真図版は実測図を掲載した順に時代毎に整理し、実測図と対照できるように図版の右下に挿図番号を示した。

18. 石器実測図中の矢印は使用痕が確認出来る範囲を、網がけの部分は以下の部分を示している。



繊維土器

19. 旧石器の遺物分布図中に使用したマークは以下の器種を表している。

◆ ナイフ形石器

■ 搔器

◇ 彫器

□ 削器

▲ 加工痕ある剥片

◊ 使用痕ある剥片

☆ 石核

★ 敲石

● 剥片

・ 砕片

☆ 礫・礫片

20. 本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際して前橋市教育委員会、及び地元関係者の多大なる御支援を戴いた。ここに記して感謝の意を表す次第である。

21. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保存してある。

目 次

卷頭写真
序
例 言

I 発掘調査の経過	1	IV 古墳時代以降の遺構と遺物	85
1. 調査に至る経過	1	1. 概 要	85
2. 調査の方法	2	2. 住 居	85
3. 調査の経過	3	3. 墓 壙	95
4. 遺跡の位置と周辺遺跡	4	4. 道路状遺構	96
5. 基本土層	6	5. 溝	97
6. 土 坑	98		
II 旧石器時代の遺構と遺物	8	V 成果と課題	105
1. 概 要	8	1. 旧石器時代	105
2. 出土石器	9	2. 縄文時代	111
3. 石器の分布	27		
a. 礫 群	27	付 計測値一覧表	113
b. 石器の集中地点	28		
c. 接合資料の分布	33		
d. 同一母岩の分布	35		
4. 小 結	39		
III 縄文時代の遺構と遺物	43		
1. 概 要	43		
2. 集 石	43		
3. 土 坑	44		
4. 包含層出土の遺物	49		
a-1 出土土器	49		
a-2 出土石器	54		
b-1 土器の分布	78		
b-2 石器の分布	81		

挿 図 目 次

第1図 上武道路計画図……………1	第42図 包含層出土の土器
第2図 調査範囲(旧石器)……………2	(第4群・第5群土器)……………53
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡……………5	第43図 包含層出土の土器(第6群土器)……………54
第4図 基本土層……………7	第44図 器種構成……………55
第5図 出土石器(1)……………9	第45図 石器と石材構成……………56
第6図 出土石器(2)……………10	第46図 包含層出土の石器(1)……………57
第7図 出土石器(3)……………11	第47図 包含層出土の石器(2)……………58
第8図 出土石器(4)……………12	第48図 包含層出土の石器(3)……………59
第9図 出土石器(5)……………14	第49図 包含層出土の石器(4)……………60
第10図 出土石器(6)……………15	第50図 包含層出土の石器(5)……………61
第11図 出土石器(7)……………16	第51図 包含層出土の石器(6)……………63
第12図 出土石器(8)……………17	第52図 包含層出土の石器(7)……………64
第13図 接合資料-4(1)……………19	第53図 包含層出土の石器(8)……………65
第14図 接合資料-4(2)……………20	第54図 包含層出土の石器(9)……………66
第15図 接合資料-4(3)……………21	第55図 包含層出土の石器(10)……………67
第16図 接合資料-13(1)……………22	第56図 包含層出土の石器(11)……………68
第17図 接合資料-13(2)……………23	第57図 包含層出土の石器(12)……………69
第18図 接合資料-1……………24	第58図 包含層出土の石器(13)……………70
第19図 接合資料-6・7……………25	第59図 接合資料-2……………72
第20図 接合資料-11・12・8他……………26	第60図 接合資料-12……………73
第21図 1号礫群と周辺出土の石器……………27	第61図 接合資料-11……………74
第22図 石器の分布……………29	第62図 接合資料-13・16……………75
第23図 石器の分布(1号ブロック)……………30	第63図 接合資料-4・17……………76
第24図 石器の分布(2号・3号ブロック)……………31	第64図 接合資料-8・30……………77
第25図 石器の分布(4号ブロック)……………32	第65図 石器と土器の分布……………78
第26図 石器の分布(5号ブロック)……………33	第66図 型式別土器の分布
第27図 接合資料の分布(1号・2号・3号・	(爪形文・押圧縄文・無文-1)……………79
4号・5号ブロック)……………34	第67図 型式別土器の分布
第28図 石材別分布(黒色安山岩・黒曜石)……………36	(捺糸文-1・3・4、無文-2~7)……………79
第29図 石材別分布(黒色頁岩他)……………37	第68図 型式別土器の分布(田戸上層)……………80
第30図 石器の出土層位……………40	第69図 型式別土器の分布(黒浜・諸磯・
第31図 Bq-4G VII層の膨張現象……………41	縄文-1・2)……………80
第32図 石器石材と文化層区分……………42	第70図 石材別石器の分布(1)……………82
第33図 礫の分布(集石)……………43	第71図 石材別石器の分布(2)……………83
第34図 陥し穴の分布……………44	第72図 接合資料の分布……………84
第35図 土坑(陥し穴)(1)……………45	第73図 1号住居跡……………86
第36図 土坑(陥し穴)(2)……………46	第74図 1号住居跡出土遺物……………87
第37図 土坑(3)……………47	第75図 2号住居跡……………89
第38図 土坑(4)……………48	第76図 2号住居跡カマド……………91
第39図 包含層出土の土器(第1群土器)……………49	第77図 2号住居跡掘り方……………92
第40図 包含層出土の土器(第2群土器)……………51	第78図 2号住居跡出土遺物……………93
第41図 包含層出土の土器(第3群土器)……………52	第79図 土壙(30号土壙)と出土遺物……………95

第80図	道路状遺構	96
第81図	溝	97
第82図	土坑（1）	98
第83図	土坑（2）	99
第84図	土坑（3）	100
第85図	土坑（4）	101

第86図	土坑（5）	102
第87図	土坑（6）	103
第88図	土坑（7）	104
第89図	ロームの堆積状況と石器の出土層位	106

付 図 遺構配置図

表 目 次

第1表	器種組成と石材一覧表	8
第2表	1号住居跡出土遺物観察表	88
第3表	2号住居跡出土遺物観察表	94

第4表	30号土坑出土遺物観察表	95
第5表	土坑一覧表	104

図 版 目 次

PL 1	遺跡の遠景	4. 60号土坑セクション	
PL 2-1.	B区調査風景（西側より）	5. 62号土坑	
	2. B区南壁セクション（P～Nライン）	6. 62号土坑セクション	
PL 3-1.	1号礫群確認状態	PL 8-1.	66号土坑
	2. 1号礫群確認状態と石器（手前）出土状態		2. 66号土坑セクション（1）
	3. 1号礫群出土状態（1）		3. 66号土坑セクション（2）
	4. 1号礫群出土状態（2）		4. 66号土坑 坑底裁ち割り調査
	5. Bq-4G VII層の膨張現象（VI層上面で確認）		5. 40号土坑
PL 4-1.	1号ブロック石器出土状態（1）		6. 40号土坑セクション
	2. 1号ブロック石器出土状態（2）		7. 40号土坑 坑底裁ち割り調査
	3. 3号ブロック石器出土状態		8. 同 pit 部分
	4. 4号ブロック（西側から）	PL 9-1.	1号土坑
	5. 4号ブロック（北側から）		2. 2号土坑
PL 5-1.	石器（第5図1）の出土状態（1）		3. 3号土坑
	2. 石器（第8図7）の出土状態（2）		4. 33号土坑
	3. 石器（第17図4）の出土状態（3）		5. 32号土坑
	4. 石器（第18図1）の出土状態（4）		6. 32号土坑セクション
	5. 石器（第6図1）の出土状態（5）		7. 34号土坑
	6. 石器（第6図3）の出土状態（6）		8. 35号土坑
PL 6-1.	C区・D区 旧石器試掘調査区全景	PL 10-1.	1号住居跡全景
	2. B区 縄文土器・石器の分布		2. 1号住居跡セクション
PL 7-1.	39号土坑		3. 1号住居跡遺物出土状態
	2. 39号土坑セクション		4. 1号住居跡カマド・遺物分布
	3. 60号土坑（南側から）		5. 1号住居跡掘り方

- PL11-1. 2号住居跡全景
- 2. 2号住居跡全景・遺物分布
- 3. 2号住居跡北カマド付近遺物出土状態
- 4. 2号住居跡東西セクション
- 5. 2号住居跡東西セクション
- PL12-1. 2号住居跡北カマド・遺物出土状態
- 2. 2号住居跡東カマド
- 3. 2号住居跡貯蔵穴
- 4. 2号住居跡貯蔵穴セクション
- 5. 2号住居跡全景
- 6. 2号住居跡掘り方
- PL13-1. 30号土壙（墓壙）
- 2. 30号土壙（墓壙）セクション
- 3. 道路状遺構1（北側から）
- 4. A・B区道路状遺構2（南側から）
- 5. 道路状遺構セクション（1）
- 6. 道路状遺構セクション（2）
- PL14-1. 1号溝（東側から）
- 2. 1号溝全景（西側から）
- 3. 1号溝セクション
- 4. 4号溝全景
- 5. 4号溝セクション
- PL15-1. 23号土坑
- 2. 27号土坑
- 3. 25号土坑
- 4. 15号土坑
- 5. 6号土坑
- 6. 11号土坑
- 7. 22号土坑
- 8. 17号土坑
- PL16-1. 26号土坑
- 2. 19号土坑
- 3. 64号土坑（南側から）
- 4. 64号土坑セクション
- 5. 65号土坑（南側から）
- 6. 65号土坑セクション
- 7. 8号土坑
- 8. 20号土坑
- PL17-1. 4号土坑
- 2. 18号土坑
- 3. 21号土坑
- 4. 10号土坑
- 5. 40号土坑
- 6. 41号土坑
- 7. 40～43号土坑
- PL18-1. 42号土坑
- 2. 36号土坑
- 3. 43号土坑
- 4. 5号土坑
- 5. 37号土坑
- 6. 37号土坑セクション
- 7. 13号土坑
- 8. 16号土坑
- PL19 出土石器（1）
- PL20 出土石器（2）
- PL21 出土石器（3）
- PL22 出土石器（4）
- PL23 接合資料（1）
- PL24 接合資料（2）
- PL25 包含層出土の土器（1）
- PL26 包含層出土の土器（2）
- PL27 包含層出土の土器（3）
- PL28 包含層出土の石器（1）
- PL29 包含層出土の石器（2）
- PL30 包含層出土の石器（3）
- PL31 包含層出土の石器（4）
- PL32 包含層出土の石器（5）
- PL33 接合資料（1）（縄文）
- PL34 接合資料（2）
- PL35 1号住居跡出土の遺物
- PL36 2号住居跡・30号土壙（墓壙）出土の遺物

飯土井中央遺跡



国土地理院 25000分の1 (大胡)

I 発掘調査の経過

1. 調査に至る経過

建設省は一般国道17号の交通混雑を解消するため、精力的に大規模バイパスの建設を進めている。その一つが上武道路で、深谷市東方を起点とし、利根川を渡河して群馬県に入り、前橋市の市街地を北側に迂回して、前橋市田口町で現道に取り付く全長41.4km(内、高崎工事事務所管内36.5km)の道路である。事業自体は昭和41年度に大宮工事事務所で調査が開始され、昭和44年度に高崎工事事務所が引き継いでいる。本県では昭和46年3月に尾島～伊勢崎、昭和58年3月に国道50号まで都市計画が決定を見た。

県教育委員会は、昭和45年度に計画道路を中心に幅2kmの区域の分布調査を終えており、472カ所に上る遺跡を確認していた。上記都市計画の決定に伴い、発掘調査の諸準備を終え、昭和49年度から開始した。

当初、1班で進めてきた発掘調査も、工事の進捗に対応して、昭和59年度から3班、60年度から4班編成で対応することになり、昭和63年度で国道50号まで調査を完了した。この間、県教育委員会は埋蔵文化財の調査部門を独立させ、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を設立し、同年以後の発掘調査・整理事業は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施している。

今回報告する飯土井中央遺跡は、昭和59年度事業の中で試掘調査を実施した地点で、この時点で縄文時代の土坑や古墳時代の住居を確認している。また、地形的に見て台地全面に遺構・遺物が広がる可能性を残しているため、最終的にS T 942～955、全長50mの全面調査が決定したのである。

なお、上武道路は平成元年3月3日に国道50号線(前橋市今井町)から国道354号線まで、40.4kmが共用され、後は上武大橋の完成を残し、埼玉県側と接続するのを待つばかりである。



第1図 上武道路計画図

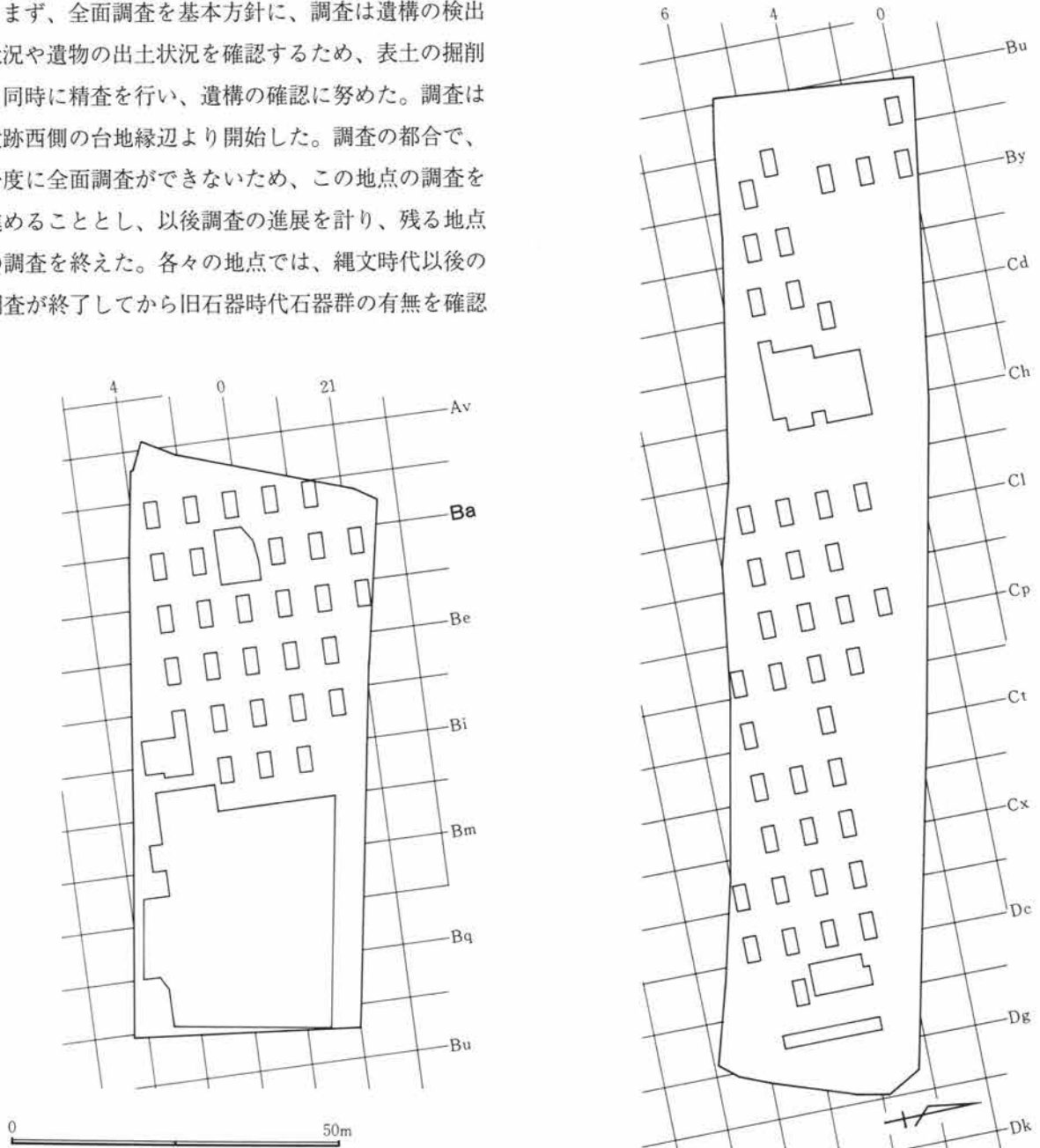
2. 調査の方法

前年に実施した試掘調査の結果、住居2軒と数基の土坑が台地縁辺を中心に確認され、確実に遺構が存在すること、縄文早期や前期の遺物包含層が存在すること、を確認した。更に、地形的に見て旧石器時代の遺物包含層も存在する可能性が極めて大きいことから、その確認を考慮して、調査に臨んだ。

まず、全面調査を基本方針に、調査は遺構の検出状況や遺物の出土状況を確認するため、表土の掘削と同時に精査を行い、遺構の確認に努めた。調査は遺跡西側の台地縁辺より開始した。調査の都合で、一度に全面調査ができないため、この地点の調査を進めることとし、以後調査の進展を計り、残る地点の調査を終えた。各々の地点では、縄文時代以後の調査が終了してから旧石器時代石器群の有無を確認

するため、試掘調査を実施している(第2図)。調査は2m×4mの試掘坑を遺跡全面に設定した。石器が出土した地点では、その周辺を拡張して調査を行い、その分布状況や出土層位を確認した上で、必要と認められた場合には重機を用い、上層の土を除去した。

なお、現地に赴いたときには、既に調査地内には農道が数本存在していた。この農道は周辺住民の生



第2図 調査範囲(旧石器)

活にも欠かせないため、調査するためには仮設道路の確保が必要だが、現実には仮設道路の確保が難しく、遺構・遺物の多い台地の縁辺部分を調査できない状況が生じたのである。路線に面した商店街や住宅地の調査と共に、生活に欠かせない農道の調査は、今後は是非とも解決すべき重要な課題である。

3. 調査の経過

発掘作業の都合で、昭和61年の1月下旬から隣接する飯土井二本松遺跡の調査と平行して調査した。上武道路関連の調査対象地内には縦横に農道が走り、作業道や生活道に使用している。この道の下を調査するためには、別の道を確保する必要が生じるのであり、一度に全体を調査できないため、調査にはそれだけ時間を要した。飯土井二本松遺跡の場合も同様で、農道の付け替え準備に時間を取られ、なかなか調査が進展していかない状況の中で、多少なりとも調査を進めておきたい、という事情も一方にはあり、年度内で飯土井二本松の調査終了を睨み、同時に、飯土井中央もA区・B区の調査終了を目指した。重機で除去した表土は遺跡東側のC区・D区に盛り土して、調査が終了次第、残土を移し調査に取り掛かる方向で、効率的調査に努力した。

遺構の分布密度は薄く、試掘調査の結果を良く反映していた。それでも遺構は遺跡西側の台地縁辺に集中する傾向が窺われ、縄文時代の土坑や古墳時代・平安時代の住居や土坑など、複数の時代に互る遺構を検出した。更に、台地縁辺には縄文の遺物包含層が良好な状態で遺存しており、意外に時間を要した。特に、縄文草創期の爪形文土器が出土した地点では、より丁寧に精査を試みる必要が生じた。また、縄文遺構の埋土は包含層に良く似た褐色土で、大部分は包含層の調査が進展する過程で確認され、ここでも意外に時間を要した。以下、調査日誌を元に、調査の進捗状況を報告しておく。

調査区内には、国家座標に一致するよう100m毎に基軸線を設定して、西側からA区・B区・C区・D区と呼称した。更に1辺4mを単位に分割して、北西隅を基点に南北方向に0～24の算用数字を当て、東西方向にa～yを付した。

1 月期 表土を重機で除去した後、1月30日より、A区・B区の調査に入る。

2 月期 古墳時代の住居の他、土坑や溝、道状遺構の確認・調査と平行して、包含層の調査を実施した。既に、この段階で爪形文土器が出土しており、周辺を精査した。一部で旧石器の試掘を開始している。

3 月期 飯土井二本松遺跡の調査を終了するため、一時調査を打ち切る。

4 月期 縄文の包含層、及び、旧石器の試掘調査を継続している。台地縁辺で礫群を検出した。

5 月期 縄文の包含層を調査していく過程で土坑が検出され、この土坑の調査を行う。また、試掘調査の結果、ほぼ旧石器の分布域と出土層位が確定され、包含層より上層のロームを重機で除去し、本調査に備えた。遺跡に仮置していた表土の移転場所が決定したため、排土の運搬作業を開始した。

6 月期 台地縁辺の調査が終了したため、この部分を埋め立て、事務所の移転とC区・D区の表土除去が決定した。旧石器の本調査と、C区・D区の遺構調査を平行して実施したほか、農道部分の調査準備も入り、そのうえ梅雨とも重なり、作業が遅延した。

7 月期 C区・D区に調査の主力を移し、旧石器の試掘を継続した。梅雨時期でもあり、水位が上がり、暗色帯以下の調査が難しいため、調査区北側に溝を掘り、水中ポンプで排水して調査した。

8 月期 8月の中旬に調査が終了し、遺物の水洗・注記、図面整理を行う。下旬より次の調査に入る準備を平行して行い、8月29日を以て調査を終えた。

4. 遺跡の位置と周辺遺跡

赤城山は第三紀の複合成層火山で、四方に広大な裾野が展開している。山体の東南側や南西側には、長大な崖線が形成され、東南側には大間々扇状地が南西側には広瀬川低地が広がる。山頂からみて東南から南西の山麓には大小の河川や湧水が多く、山体は浸食が進み、長狭な沖積地と丘陵性台地が交互に入り組む複雑な地形を呈している。標高500m以下の山麓一帯には遺跡が密集して分布しており、その調査例も多い。一方、勢多郡赤城村の沼尾川以北の西麓から北麓一帯では、深いV字状の谷地形が発達しており、雄大で平坦な台地地形が展開している。西麓一帯は山林が多く、遺跡の分布状況は不明だが、大小の河川に沿う台地縁辺や湧水を伴う谷頭には、遺跡の存在が十分予想されよう。

以上、山麓一帯の地形と遺跡の立地傾向の概要を指摘した。山麓には粕川扇状地や白川扇状地など、小規模な扇状地が存在しており、最近の発掘調査の成果でも氾濫性の堆積物が起伏に富むローム台地を覆い、平坦な台地を形成している事例（神沢川流域）や、河川性堆積物で沖積地の一部が台地化した事例（江龍川流域）を確認しており、山体の複雑な地形変化が判明してきている。山麓の末端を東西に横断する上武道路関係の遺跡では、五目牛清水田遺跡や飯土井二本松遺跡で上述した地形変化に似た状態を確認しており、地形変化と遺跡の動態を連動して分析する必要性が生じてきている。

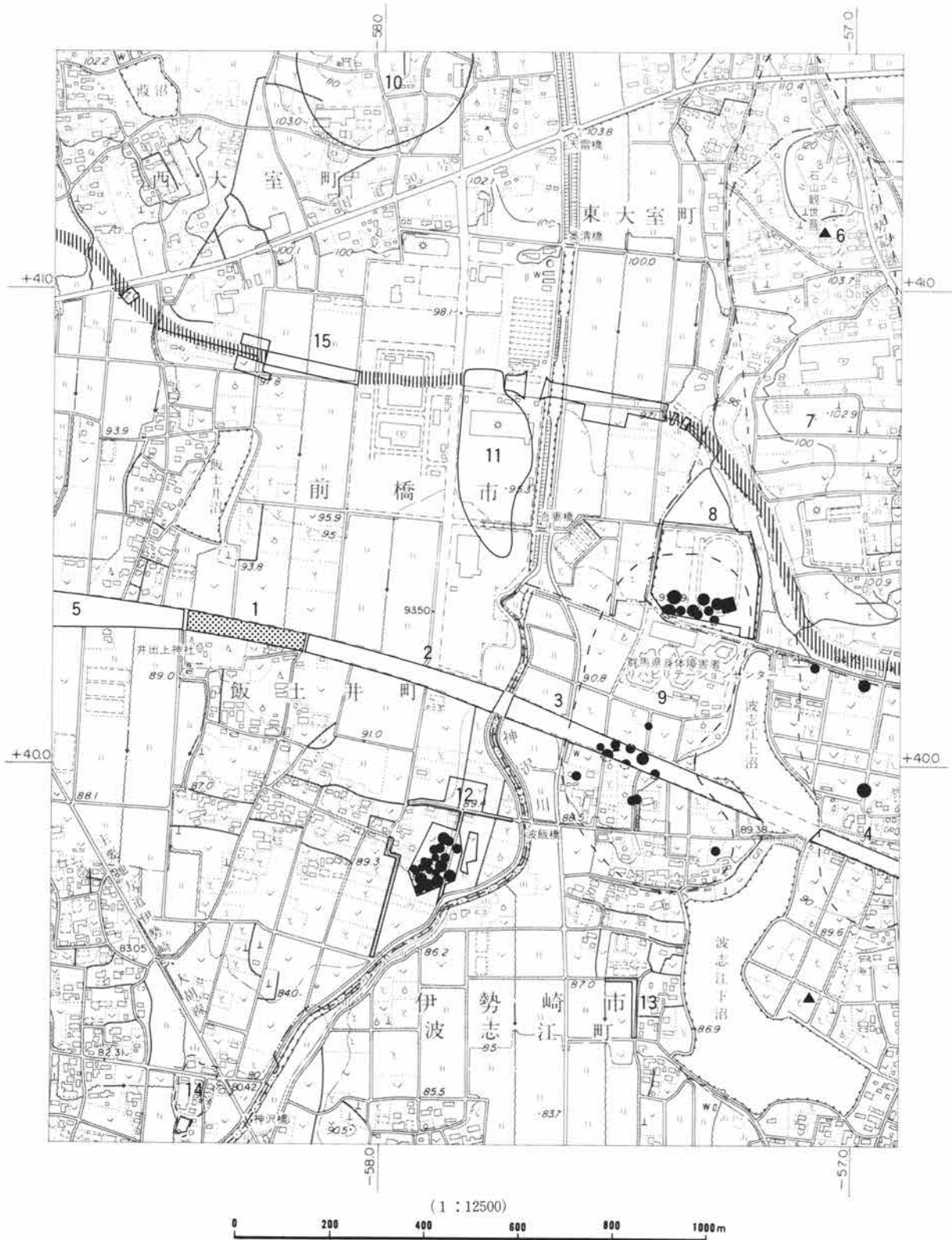
飯土井中央遺跡は、神沢川右岸の丘陵性台地上に位置する。この台地は見た目に平坦だが、本来台地は神沢川の旧流路で二分され、起伏に富む地形を呈していた事実が遺跡に隣接する飯土井二本松の調査成果から判明した。この神沢川の旧河道を境に西側の台地部分が遺跡の調査範囲で、付近には圃場整備事業に伴う調査事例も多い。

旧石器時代 調査事例は概して少なく、上下二層に石器群が出土した下触牛伏遺跡（8）や、上武関連の飯土井二本松遺跡（2）、波志江六反田・天神山

遺跡（4）、二ノ宮千足遺跡、二ノ宮谷地遺跡など、9遺跡を確認している。上武関連の調査では旧石器時代石器群を対象に試掘調査を実施している。その結果、遺跡の規模は大小さまざまだが、ロームが堆積している台地では石器が必ず出土しており、県内でも有数の「遺跡密集地帯」を形成している。石器の出土層位は「暗色帯」が最も多く、As-BPの降灰以後に属す石器群が次ぐ。細石刃段階の石器群は概して少なく、以上の傾向は県内に共通している現象であり、今後の分析が期待されよう。

縄文時代 遺物のみ出土する遺跡が圧倒的に多い。明確な遺構を伴う遺跡は概して少なく、下触牛伏や二本松遺跡（11）、荒砥二之堰遺跡（12）に住居が存在するのにすぎない。中期を主体に前期から後期に及ぶ住居35軒を検出した荒砥二之堰遺跡は地域の中核的集落を呈しており、その北側の飯土井二本松遺跡（2）にも同時期の遺構や遺物が存在しており、遺跡規模の一端が窺える。また、この台地先端には同期の集落（荒砥前原遺跡、14）が存在しており、台地全体に集落が点在している。このほか、飯土井二本松や波志江六反田（4）、下触牛伏では多数の土坑（陥し穴）を検出している。遺物関係では縄文晩期を除く遺物が出土している。特に、草創期関連の遺跡が密集して分布する傾向が確認されつつあり、中央遺跡（1）や下触牛伏では少量だが爪形文段階の土器が出土している。周辺地域には多量の石槍が出土した石山遺跡（6）も存在しており、遺跡分布の在り方が注目されよう。現状では、神沢川左岸に前期の土器を出土する遺跡が多く分布するのに対し、神沢川右岸に中期の土器を出土する遺跡が分布するかのようだが、右岸一帯には氾濫性堆積物（砂壤土）が起伏に富む丘陵性の台地を厚く覆い、中期以前の遺跡は砂壤土の下に深く埋没している可能性を残す。飯土井二本松の調査は、砂壤土の間に黒色土が堆積しており、二度に亘る河川氾濫の時期が明確に把握され、重要な知見を齎した。その後、飯土井二本松の北側を前橋市が調査しており、成果を期待している。南麓一帯には類似した状況が想定され、

4. 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

I 発掘調査の経過

今後とも注目していきたい。

弥生時代 この周辺地域では荒口前原遺跡や荒砥高原遺跡で中期後半の遺構を確認しているほか、鶴ヶ谷遺跡や上ノ坊遺跡で後期の遺構・遺物を確認しており、該期の遺跡は条件の良い沖積地を選び、点在して分布する。この時期の遺跡は概して少なく、飯土井二本松や二之堰に終末段階の土器が出土している。

古墳時代 古墳時代の前期や中期の遺跡は、前代の遺跡分布と同様だが、確実に増加傾向を示している。特に、江龍川流域や神沢川流域には中期の方形区画遺構や、前期から中期の大規模な拠点集落が出現しており、これ以後集落が更に増加する。遺跡周辺でも飯土井二本松や二之堰、飯土井上組遺跡（5）で前期の住居や墓域を、下触牛伏で後期の住居を確認している。また、遺跡周辺には片田山古墳群（7）や天神山古墳群（10）が存在しており、後期古墳が集中分布する。調査例も多く、下触牛伏や今宮遺跡

（3）、二之堰で多数の古墳を調査しているほか、牛伏1号墳・2号墳・祝堂古墳（片田山古墳群）、宮貝戸1～3号墳・三郷村74号墳（宮貝戸古墳群）など単発の調査例も多い。後期古墳は赤城山麓末端に点在する独立丘陵を選地する傾向が指摘されよう。

奈良・平安時代 この時代の集落は更に調査例が多く、飯土井二本松・二本松・波志江六反田・今宮・上組で集落を確認している。発掘調査では必ず集落の一部が調査範囲に入り、広範に該期の遺跡が分布している。神沢川流域には、飯土井二本松や二本松など前代から継続する集落が多い。水田址の調査例は多く、今宮ではAs-B下の水田を確認している。**中世以後** 中世関連の遺構には遺跡北側に中世用水遺構・女堀（15）が東西に貫流している。このほか周辺地域には赤石城址（14）や今井城など館址が点在している。

5. 基本土層

上武道路は、沖積地と丘陵性の台地が交互に入り組む山麓末端を東西に分断して走る。周辺地域には河川氾濫に起因する沖積地の台地化や、同様な河川氾濫で台地全体が覆われ、見た目には平坦な台地が存在するなど、複雑な地形観を呈している。本遺跡の周辺地域にも同様な地形が見られ、特に、東側に隣接する飯土井二本松では砂壤土の上下に遺構・遺物が検出され、地形変化と土地利用が密接に関係するということを改めて感じた。上述した河川氾濫は、今回報告する中央遺跡では確認できない。

土層の堆積状態は、部分的にAs-Cを混入する黒色土が堆積する地点や、第II層の層厚が相違していた他には、遺跡全体が同様な土層の堆積状態を示していた。特に、ローム層の堆積状態は他の赤城山麓の丘陵性台地に立地する遺跡と同様な堆積状態を示しており、周辺の遺跡との対比にも耐え得る、と考えている。

ここでは、堆積状態の良いB区の土層図を示し、その概要を報告しておく。

第I層 表土。遺跡西側の台地縁辺には、部分的に圃場整備段階の客土が存在する。このほか、部分的にAs-Cを混入する黒色土が堆積する（I b層）。

第II層 黄褐色軟質ローム層。いわゆる「ソフト・ローム」で、その下面には顕著な凹凸が見られる。上面には縄文時代の土器や石器が出土する傾向が指摘されよう。周辺の下触牛伏遺跡では風化の相違を基準に上下2層に細分している。

第III層 黄褐色硬質ローム層。白色パミス（As-S P）が混入する。第IV層と区別する基準は色調の相違で、III層はIV層に比べ、やや明るい色調を呈す。これより以下、硬質のロームが続く。

第IV層 暗褐色硬質ローム層。As-B Pを塊状に

混入する。全体に砂質で、黒色の鉱物を多く含んでいる。上層の石器群の包含層で、IV層からV層に黒曜石主体の石器群が出土している。

第V層 赤褐色硬質ローム層。硬質で、台地の平坦部分に安定して堆積しており、台地の縁辺ではその堆積が不明瞭である。牛伏の基本土層にはない層位だが、その後の調査では周辺地域にも確実に堆積している。上層の石器群の包含層である。

第VI層 暗褐色軟質ローム層。V層とVII層の漸移層で、全体に白味が強い。下層の黒色安山岩主体の石器群はVI層からVII層まで出土している。

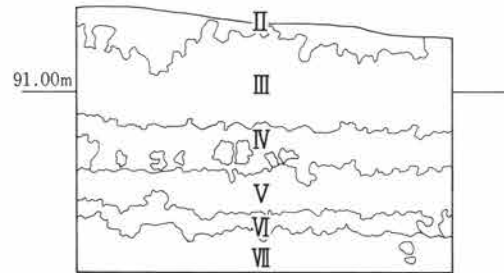
第VII層 暗褐色軟質ローム層。本層の上位部分にATの極大値を持つ。本層直下より礫群が出土したほか、下層石器群（黒色安山岩）の出土層序でもある。

第VIII層 暗褐色軟質ローム層。VII層・VIII層は暗色帯に相当する。VII層に比べ、やや明るい色調を呈す。

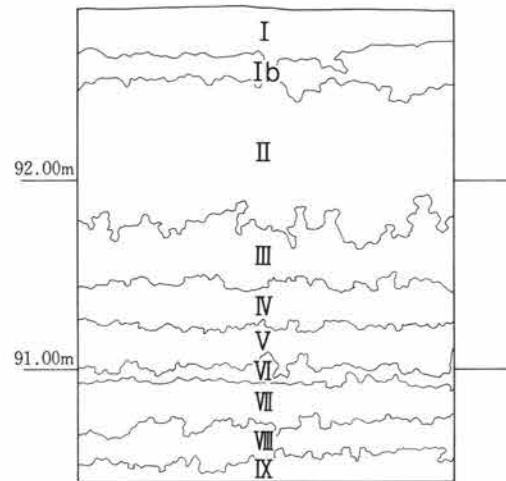
第IX層 褐色硬質ローム層。粘性が強く、黒色鉱物を多く含む。

第X層 八崎軽石層（HP）

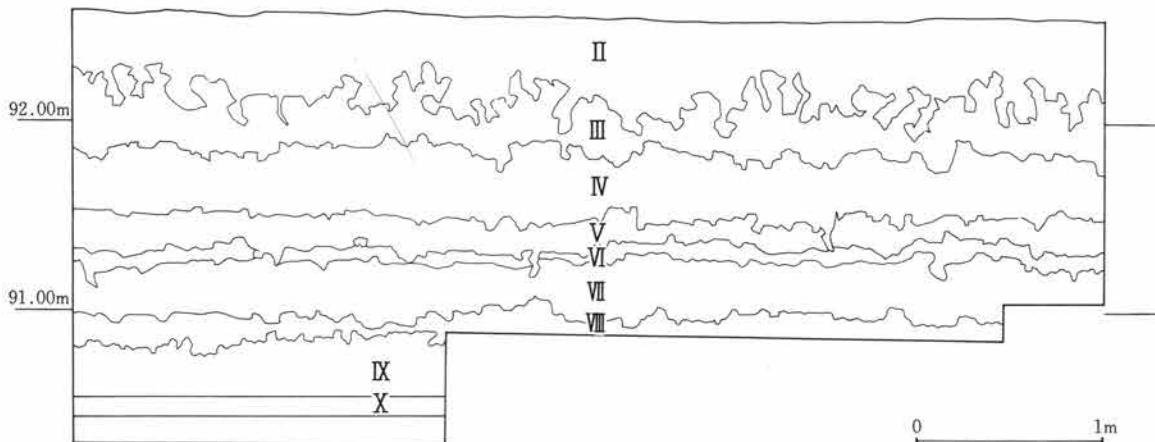
B区 a-0グリッド



B区 k-22グリッド



B区 n・o-5グリッド



第4図 基本土層

II 旧石器時代の遺構と遺物

1. 概 要

この時代の石器が出土する可能性の最も強い台地縁辺から試掘調査を開始した。その結果、台地縁辺で礫群1基の存在を、台地縁辺から約40mも内側の地点で、石器の分布を確認した。

石器自体の出土は約170点と概して少なく、石器の集中地点、5カ所を確認したのにすぎない。石器の出土層位は第IV層から第V層と第VI層から第VII層で、出土層位の違う石器群を確認した。上層出土の石器群は黒曜石が主体で、下層出土の石器群は黒色安山岩が主体で、使用石材の面でも大きく異なる。前者は全体に散漫な状態に分布しており、石器組成も剥片や碎片の量より加工痕や使用痕が顕著な石器

が多く出土しており、この地点以外で製作した石器を搬入している可能性が強い。一方、後者は良く集中しており、接合資料も多く存在していることから、前者とは対照的な在り方を示している。黒色安山岩や黒曜石を除く石器石材は、珪質頁岩や輝緑凝灰岩が上層出土の石器群に、緑色片岩など片岩類や変質玄武岩、蛇紋岩が下層出土の石器群に伴出するのは確実だが、黒色頁岩の帰属は決定材料に乏しいため、判断できない。

なお、台地縁辺検出の礫群周辺で出土した剥片は黒色安山岩を用いており、下層出土の石器群に似た母岩を用いている。両者には接合資料が存在せず、現状で証明は困難だが、両者は確実に近接しており、石器群の位置づけには絶好の材料になるだろう。

器種 ブロック	ナイフ 形石器	彫器	掻器	削器	使用痕 有剥片	加工痕 有剥片	石核	剥片	碎片	敲石	礫	合計
1号ブロック	1				1		2	27	54			85
2号ブロック		1			5		2	9	1			18
3号ブロック								2	5		1	8
4号ブロック	1		1		4	1	3	5	12		3	30
5号ブロック				2	3	1		1	5			12
1号礫群											26	26
ブロック外	1				1		1	8	4	2	14	31
合計	3	1	1	2	14	2	8	52	81	2	44	210

石材 ブロック	黒曜石	チャート	黒色頁岩	黒色安山	珪質頁岩	ホルンフ	輝緑凝灰	輝緑岩	変質玄武	デイサイ	雲母石片	蛇紋岩	粗粒安山	緑色片岩	黒色片岩	合計
1号ブロック	2		1	82												85
2号ブロック	12		1		1		4									18
3号ブロック	5			2							1					8
4号ブロック	25						2	1					2			30
5号ブロック	12															12
1号礫群										2			24			26
ブロック外	2	3	4	7	1	1			1		2	1	7	1	1	31
合計	58	3	6	91	2	1	6	1	1	2	3	1	33	1	1	210

第1表 器種組成と石材一覧表

2. 出土石器

総計210点の石器（44点の礫を含む）が台地西側のA区・B区に出土している。石器が出土した地点は平均斜度1°を測り、非常に平坦な地形観を呈す。一方、礫群の出土地点は台地から水田へ移る地形の変換点上に位置し、石器の出土地点とは約48mの距離を隔てている。

出土石器には、各々形態の違う3点のナイフや、搔器・削器・彫器が存在するほか、明瞭な使用痕の残る剥片が多く出土している。出土石器は剥片や破片が全体の8割（44点の礫を除く）を占めている。現状では、石器群は黒曜石の一群と黒色安山岩の一群に大別され、剥片や破片は前者の一群には少なく、後者の一群に多く、後者は石器製作の様相を明瞭に示している。石器分布の中央が攪乱でHP（X層）まで破壊され、更に南側の側道部分に一部調査できない地点が存在したため、組成自体に不確定要素を残す。

ナイフ形石器（第5図、第6図1・2）

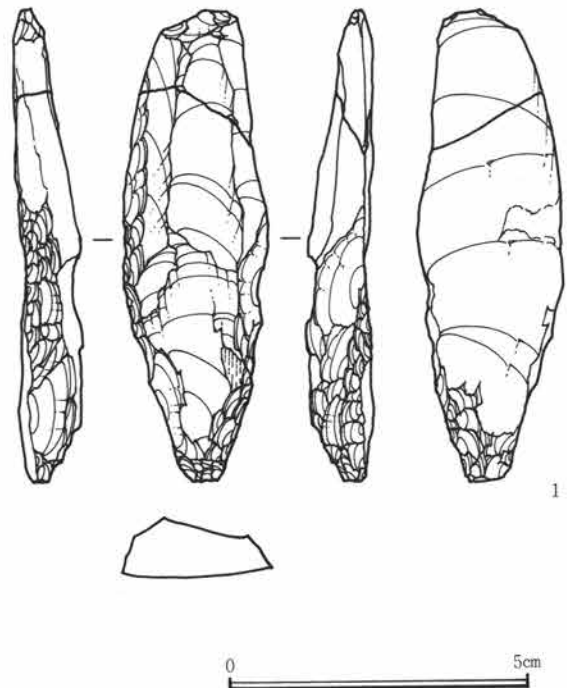
3点が出土している。3点とも石器の形状や加工部位が大きく異なる。

第5図1は、左右の側縁が平行する縦長剥片を素材に用いている。基部側の両側縁に加工を施し、石器を作出している。調整加工は表裏両面に施され、表面側の加工は急峻に、裏面側の加工は平坦剥離に近い状態で施しており、この平坦剥離で素材剥片のバルブを除去している。このほか、石器の先端にも粗い加工を施し、石器形状を整えている。素材剥片は平坦打面より剥離している。なお、石器先端に施す加工は、素材剥片の形状に起因する加工か、石器再生に伴う加工か、判断できない。黒色頁岩。Bk-3G出土。

第6図1は、やや幅広の縦長剥片を石器素材に用いている。調整加工は二側縁に施され、石器刃部を左側縁に作出している。石器形状は左側縁が直線的で、右側縁が大きく膨らみ、側面からみた石器形状

は振れている。調整加工は裏面側から表面側に向け施され、この加工で打面を除去している。調整加工は右側縁下半部に集中する一方、右側縁上半部には微細な加工を施す程度で、素材剥片の形状を上手に利用しており、概ね、石器の長軸と素材剥片の剥離方向は一致する。なお、石器裏面・左側縁の剥離面は他の剥離面と著しく異なる風化面が存在しており、何等かの原因で剥落した可能性が強い。黒曜石。4号ブロック出土。

第6図2は、左右の側縁が平行する縦長剥片を素材に用いている。この石器は他の18点の剥片や石核と共に接合（接合資料-4）した石器で、接合資料自体は大形の板状剥片を素材に用い、剥離した平坦部分を打面に両端から横長の剥片を剥離してから、この部分に両設の打面を設定し、上下両端から剥片を剥離している。この石器は両設打面から剥離した剥片の1枚で、その初期段階で剥離しており、顕著な打面調整を施している。調整加工は左側縁と剥片端部に裏面側から表面側に施され、石器形状は端辺加工のナイフの形状に近い。石器の長軸と素材剥片の剥離方向は概ね一致している。黒色安山岩。1号



第5図 出土石器（1）

II 旧石器時代の遺構と遺物

ブロック出土。

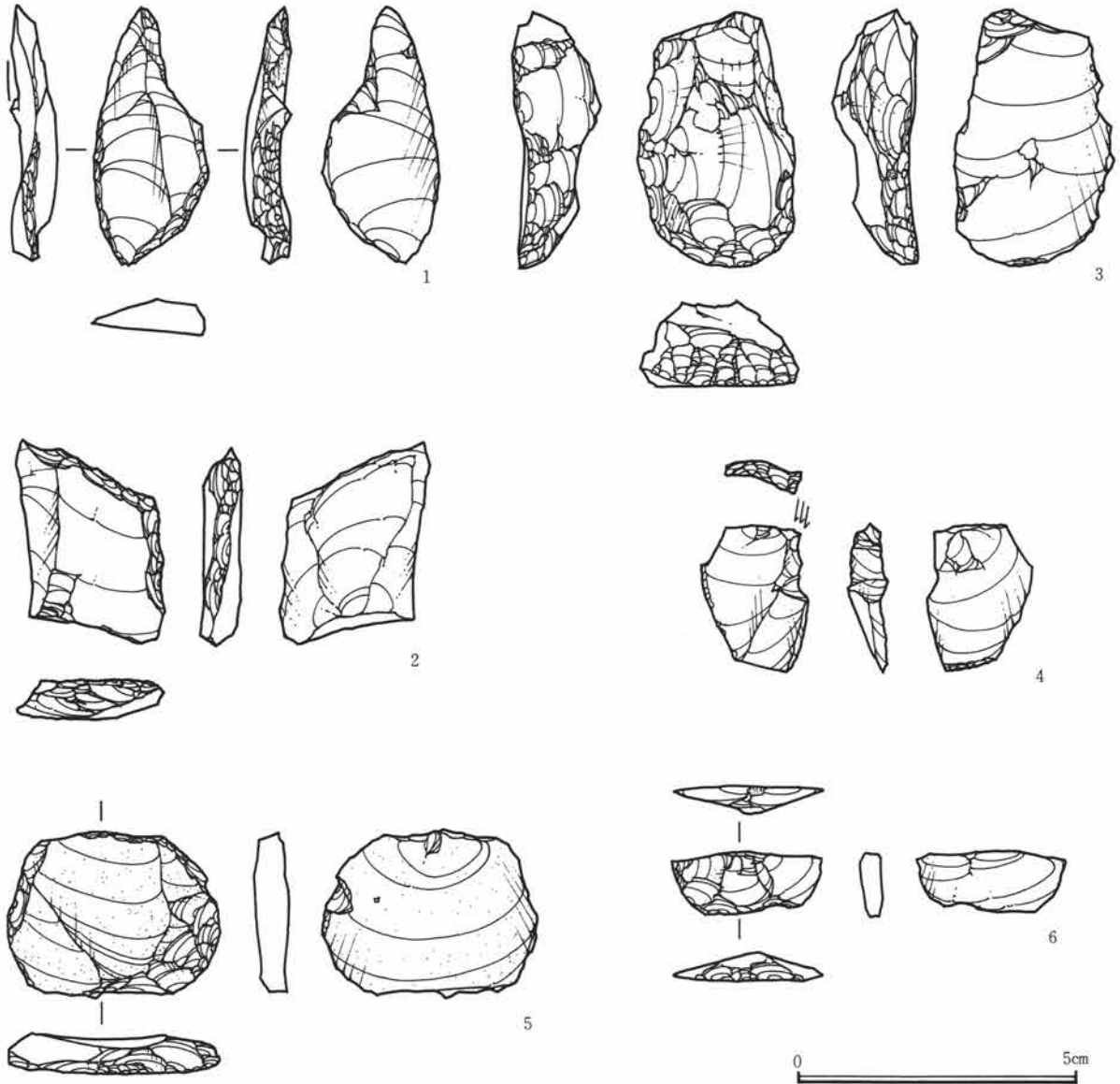
搔器 (第6図3)

1点のみ出土している。やや厚手の縦長剥片を素材に用いている。石器上端を除き、調整加工は全周している。石器端部の加工は丁寧で、縞状の剥離が形成され、留意して刃部を作出している。側縁の加工は粗い。石器表面には剥片の剥離方向と直交する剥離面が存在している。剥片の打面部分は分割され、そのため打面形状は全く判断できない。石器端部の縁辺には微細な使用痕が生じているほか、裏面中央

付近には斜行する線状痕が認められる。なお、この素材剥片の第一次剥離面は周辺の加工部分に比べ、全体に光沢が鈍い。現状では打面部分が遺存せず、剥離の前後は不明だが、剥片剥離→調整加工→石器製作というような一連の製作工程の中で単純に把握できない部分も残している。黒曜石。4号ブロック出土。

彫器 (第6図4)

1点のみ出土している。やや幅広の剥片を素材に用いている。素材剥片の打面には顕著な打面調整が



第6図 出土石器 (2)

施され、この部分から器体の軸に直交するよう石器の刃部（機能部）を作出している。また、石器端部には微細な加工を施している。肉眼で明確な使用痕は確認できない。珪質頁岩。2号ブロック出土。

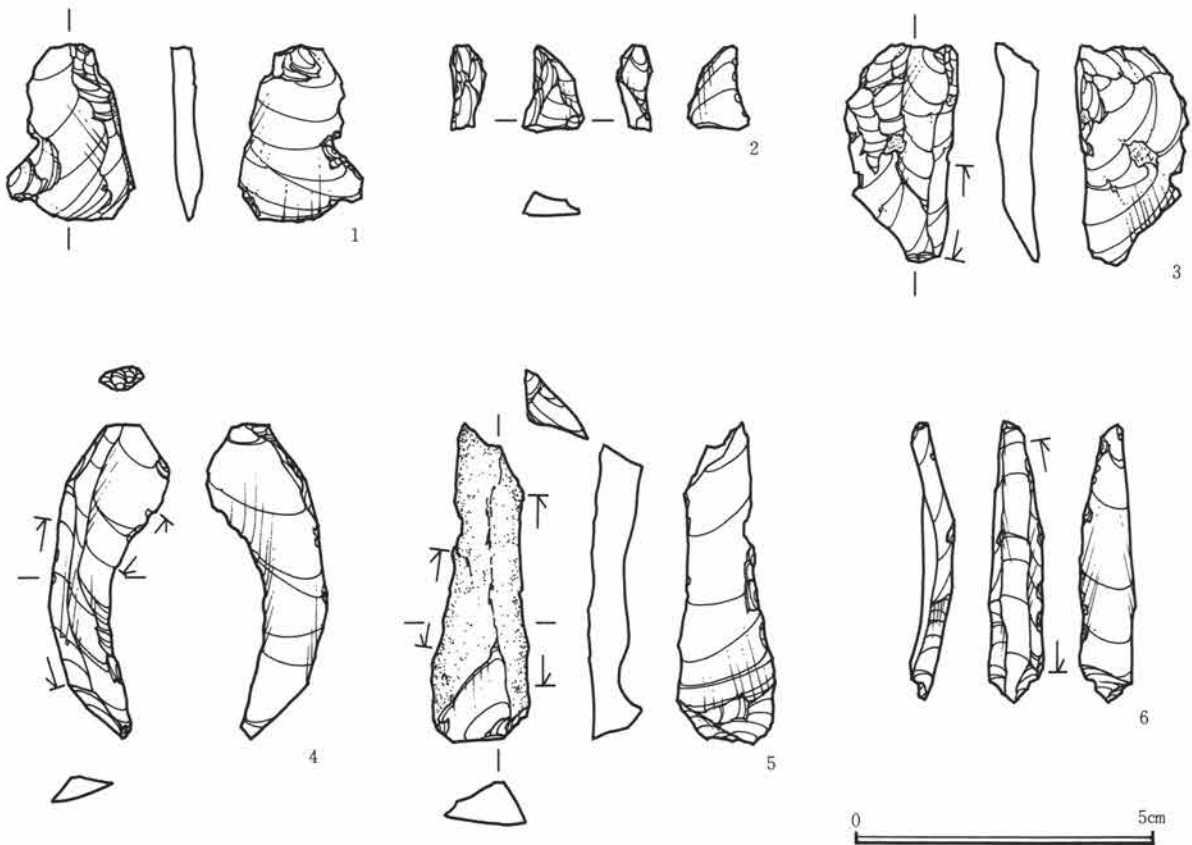
削器（第6図5・6）

2点のみ出土している。5は、打面調整の顕著な調整打面より剝離した横長剝片を石器素材に用いている。打面部分を除き、調整加工は全周しており、右側縁の加工は浅く丁寧で、その他の部位ではやや粗い加工を施し、その加工状態は加工部位で大きく異なる。剝片端部や側縁には、素材剝片の一部が折れた痕跡が見られ、こうしたことから上述した加工の在り方の相違が生じた可能性が高い。また、この石器には、素材剝片自体と調整加工部分の光沢が異なり、剝片剝離段階から石器製作まで相当な時間が経過している可能性が高い。黒曜石。5号ブロック出土。6は、やや幅広の剝片を素材に用いている。

調整加工は剝片端部に集中し、側縁の加工は浅く、剝片端部の加工は急峻で、その加工状態は加工部位で違う。加工してから石器が破損している。裏面の斑晶の部分から破損しているため、恐らく素材剝片の剝離段階で破損する遠因が生じていた可能性が高い。黒曜石。5号ブロック出土。

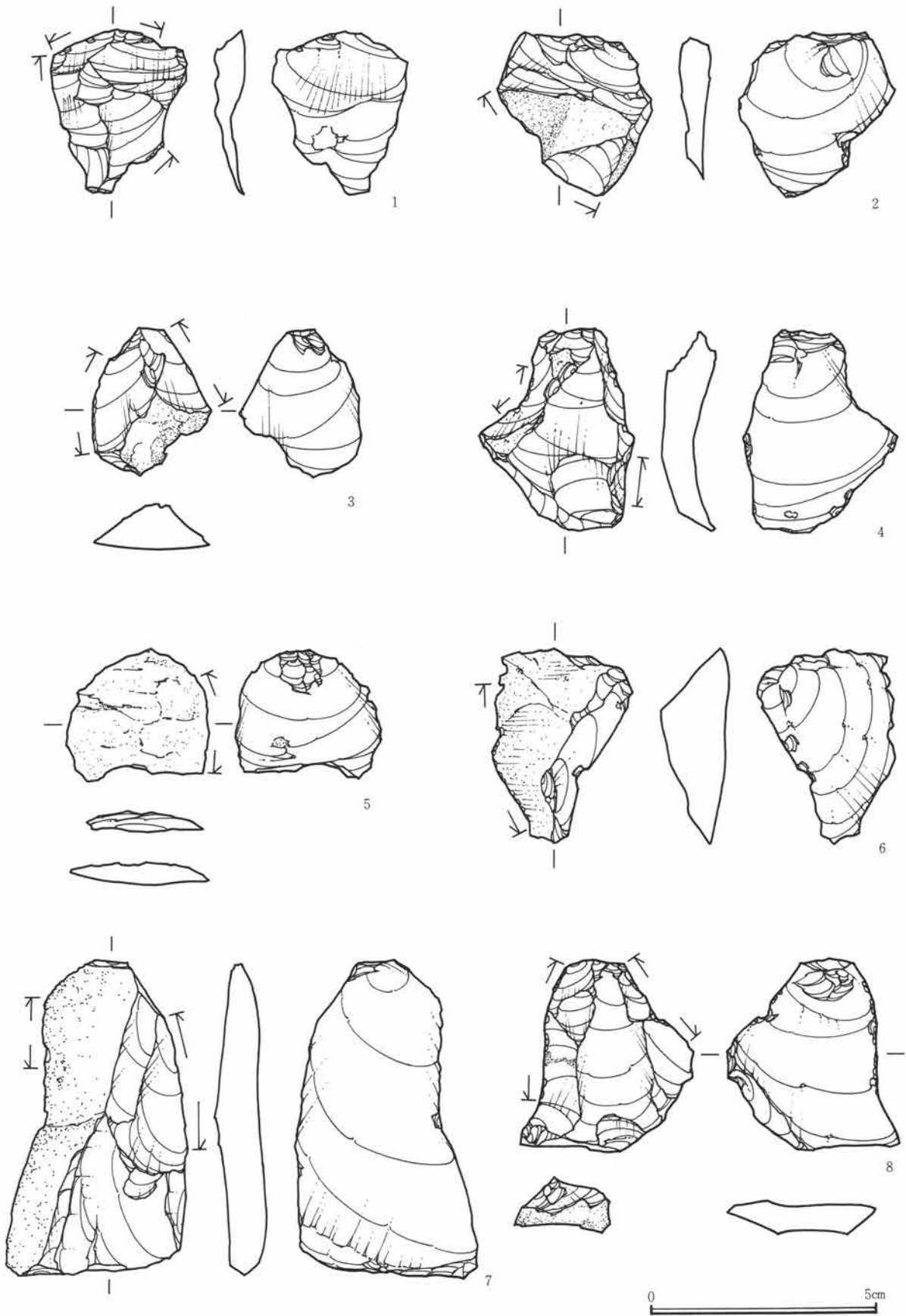
加工痕ある剝片（第7図1・2）

2点が出土している。1は、幅広の縦長剝片を素材に用いている。素材剝片は一部礫面を残しており、剝離の初期に剝離している。明瞭な打面の調整は見られない。石器刃部は微細な加工でノッチ状に作出され、この部分以外には加工は施されない。黒曜石。5号ブロック出土。2は、素材剝片・石器の形状は器体の大半を欠損するため、不明確である。石器に施す調整加工は微小・急峻で、やや粗い。弧状の刃部を形成している。黒曜石。4号ブロック出土。



第7図 出土石器（3）

II 旧石器時代の遺構と遺物



第8図 出土石器(4)

使用痕ある剥片（第7図3～6・第8図）

14点が出土している。刃部の確保が容易な形状の良好な剥片を用いている。通常、縦長剥片を用いる場合には側縁が刃部に、横長剥片を用いる場合には剥片端部が刃部に使用する場合が多い。この遺跡の場合には横長剥片の使用頻度は概して少なく、石器表面の一部に礫面を残す縦長剥片の側縁を刃部に用いている資料が圧倒的に多い。剥片表面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向に一致しており、同一の剥離手法で作出した可能性が高い。

第7図3～6は、細身の縦長剥片を素材に用いている。側縁に微細な使用痕が生じており、剥片形状の良好な側縁を選び、刃部に使用している。3・6は右側縁に、4・5は左右の側縁に使用痕が生じている。欠損で打面形状の不明な1点（5）を除き、2点（3・6）が平坦打面から、1点（4）が調整打面から剥離している。4点とも黒曜石を用いる。3は2号ブロック、4・6は4号ブロック、5は5号ブロックから出土している。

第8図1～6・8は、黒曜石を用い、石器に使用している。三角形に近い形状の剥片（1～3・6）や、幅広の縦長剥片（4・8）が素材剥片に選択され、両者の剥片とも形状の良好な剥片の側縁部分を刃部に使用する。また、石器素材には表面に礫面を残す剥片を多用しており、剥離の初期に作出した剥片を意識して選択している可能性が高い。1・5の2点の打面形状は点状打面に近い。1・6の2点は2号ブロックから、2は1号ブロックから、3は5号ブロックから、5・8の2点は4号ブロックから出土している。

第8図7は、石器表面に礫面を残す縦長の剥片を素材に用いている。左右の両側縁に使用痕が見られ、石器刃部に使用している。礫面の遺存状態から判断して、剥片剥離の初期段階に剥離した可能性が高い。剥片の表面に残る剥離の方向は、剥片の剥離方向に一致している。他の黒色頁岩に比べ、風化は弱く、やや珪化の進んだ黒色頁岩を石器素材に用いている。Bo-3 G出土。

石核（第9図）

8点が出土している。ここでは、接合資料の中に入る石核（接合資料-1・4・13）を除き、単独で出土した石核3点を図示した。剥片剥離の状態は個体で大きく異なり多様性に富む、同一打面から連続して剥片を剥離していく資料や、頻繁な打面転移を伴い剥離が展開する資料が存在する。

第9図1は、石核の表裏両面に礫面を残す石核で、その形状は角柱状を呈す。石核自体それほど大きくなく、剥片の剥離点数も少ない。石核の下面を除く各面で剥離作業を行い、幅広の小形剥片を剥離している。石核の上面や裏面には微細な剥離が連続する。黒曜石。2号ブロック出土。

第9図2は、裏面に礫面を残す方形の石核を素材に用いている。石核上面には、同心円状のリングが観察され、凍結氷解作用で割れた状態に良く似た痕跡を残している。この部分を打面に剥片の剥離作業は行われ、小形剥片1枚を剥離している。このほかにも、右側の側面を打面に剥離を試みた痕跡を残す。石核両端の剥離は打点（パルプ）が明瞭ではなく、石核の分割も考えるべきなのかもしれない。黒曜石。2号ブロック出土。

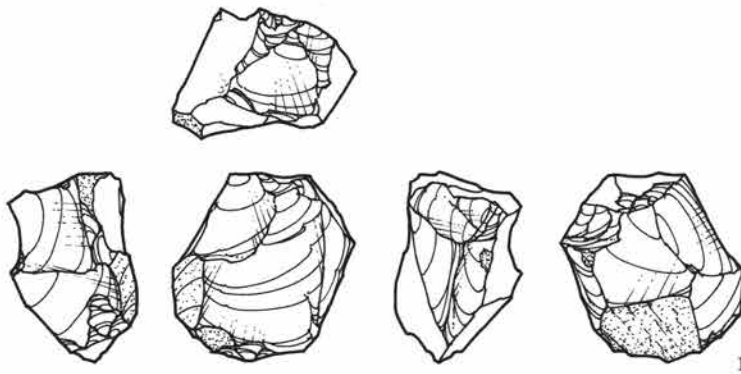
第9図3は、角柱状を呈す石核で、石核裏面には風化の顕著な剥離面を持つ。剥片剥離は打面転移を伴い、左右の側面を除く各面で剥離が展開している。剥離は石核正面→石核の上下両面→石核正面の順で行われ、一定形状の剥片を連続して剥離した状態は看取されない。石核上面には微細な打面調整の痕跡が残る。黒曜石。4号ブロック出土。

剥片（第10・11図）

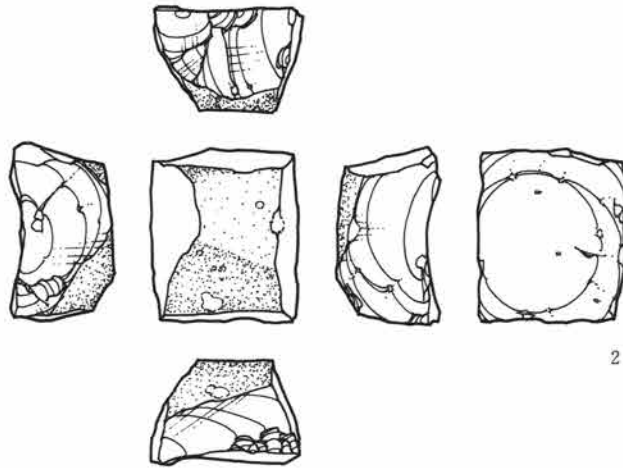
52点が出土している。黒色安山岩が31点・黒曜石が13点と両方で全体の80%以上を占めている。ここでは、単独で出土した19点を図示した。

第10図1～6は、左右の側縁が平行した形状の良好な縦長剥片の一群で、斑晶の混入が少ない質の良い黒曜石を用いている。打面を欠損する資料（5・6）や点状打面を形成する資料（1・2）を除き、

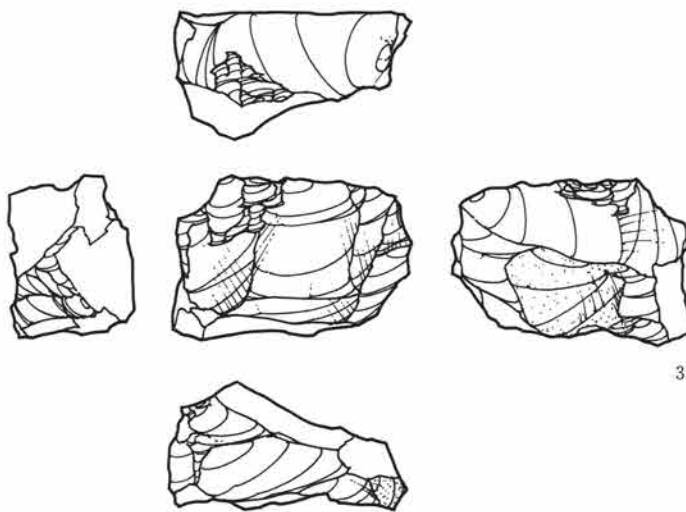
II 旧石器時代の遺構と遺物



1



2

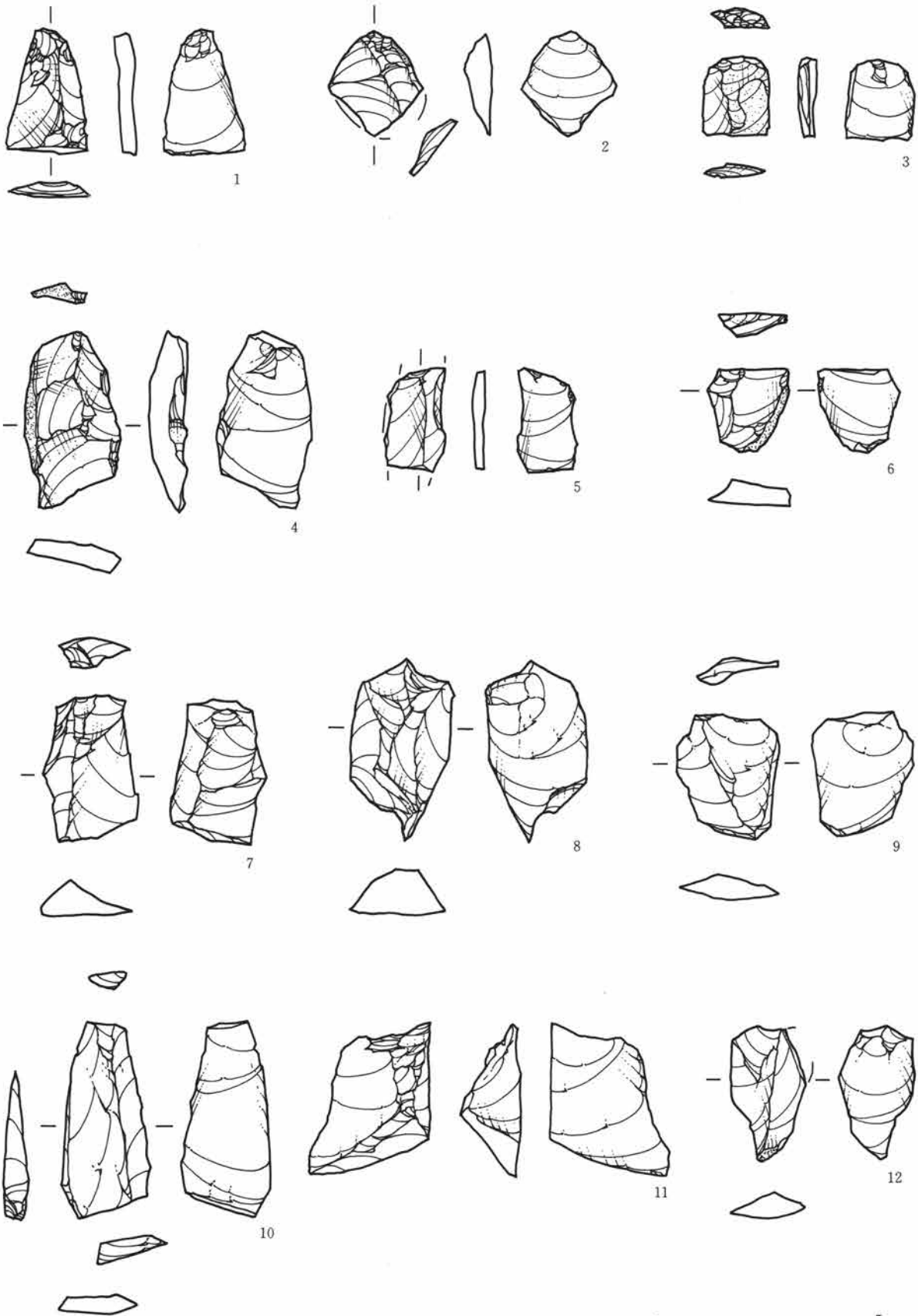


3



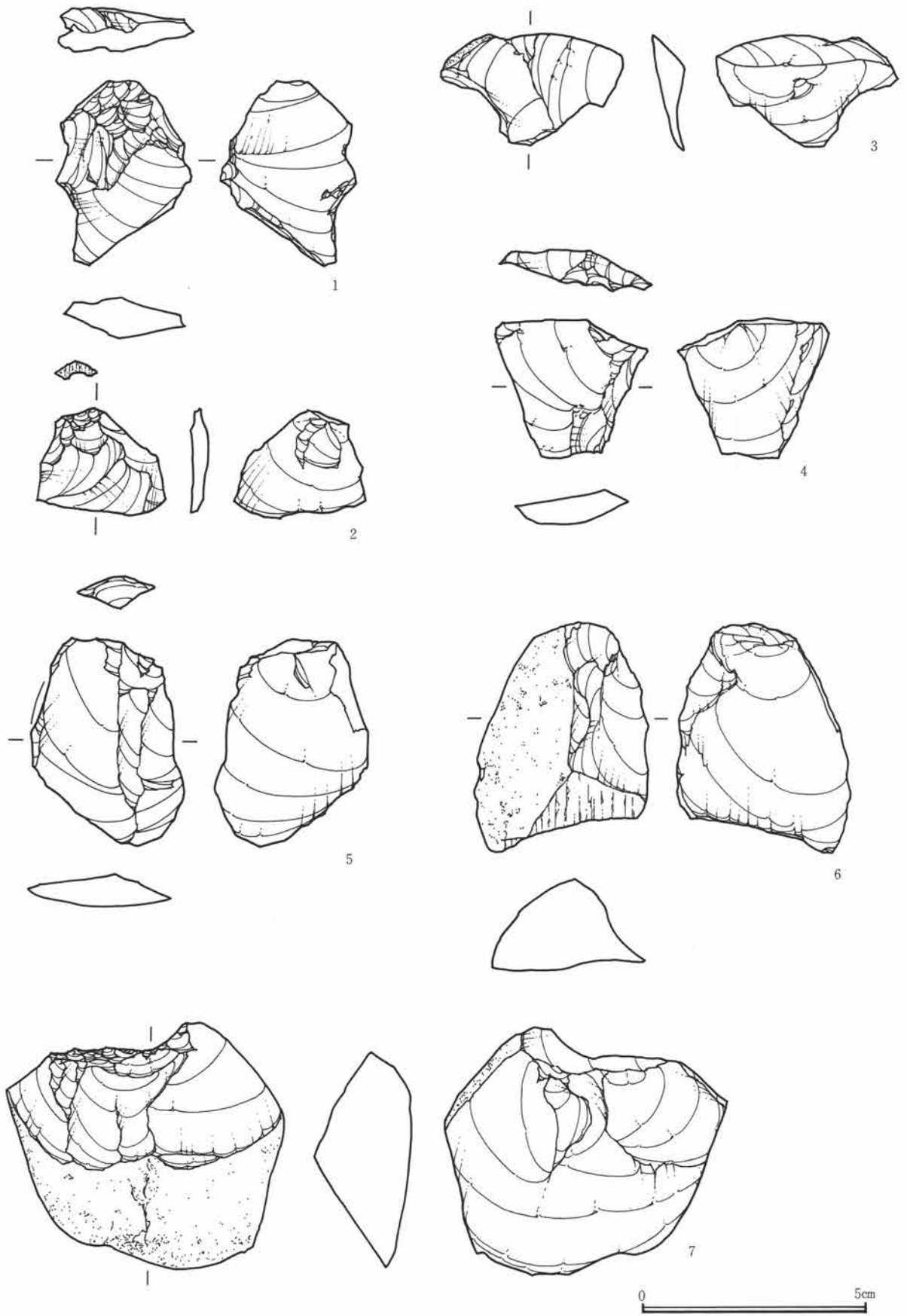
第9図 出土石器(5)

2. 出土石器



第10图 出土石器 (6)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第11図 出土石器 (7)

調整打面より剥離した資料(3)と礫面を打面に剥離した資料(4)が共存する。剥片表面に残る剥離方向は、概ね剥片の剥離方向に一致する。このほか、少数だが両設打面の存在を示唆する剥片(2・4)が出土している。1・3は4号ブロックから、2・5は2号ブロックから、4は3号ブロック、6は5号ブロックからそれぞれ出土。

第10図7～11は、やや幅広の縦長剥片の一群で、黒色安山岩を素材に使用している。剥片は平坦打面より作出され、打面調整や頭部調整は確認できない。素材剥片の表面に残る剥離の方向は剥片の剥離方向に一致している。7～9・11は1号ブロックから、10はBp-3Gから出土した。

第10図12は、先端が尖る小形剥片で、黒色頁岩を素材に使用している。剥片は平坦打面より作出され、剥片上端を一部欠損している。1号ブロック出土。第11図1・2は、やや幅広の剥片で、黒曜石を用いている。2点とも頭部調整が顕著に見られ、平坦打面から剥片を剥離している。1は2号ブロック、2は4号ブロックから出土している。

第11図3～5は、やや幅広の剥片で、黒色安山岩を用いている。3は広い平坦面を持つ剥片で、平坦

打面より作出しており、剥離の初期段階に剥離している。打角は鈍角で、打面調整・頭部調整とも確認できない。4は3と同様に広い剥離面を持つ剥片で、打点は稜上に位置する。剥離の初期段階に剥離している。5は幅広の縦長剥片で、平坦な打面より剥離している。3点とも1号ブロックから出土。

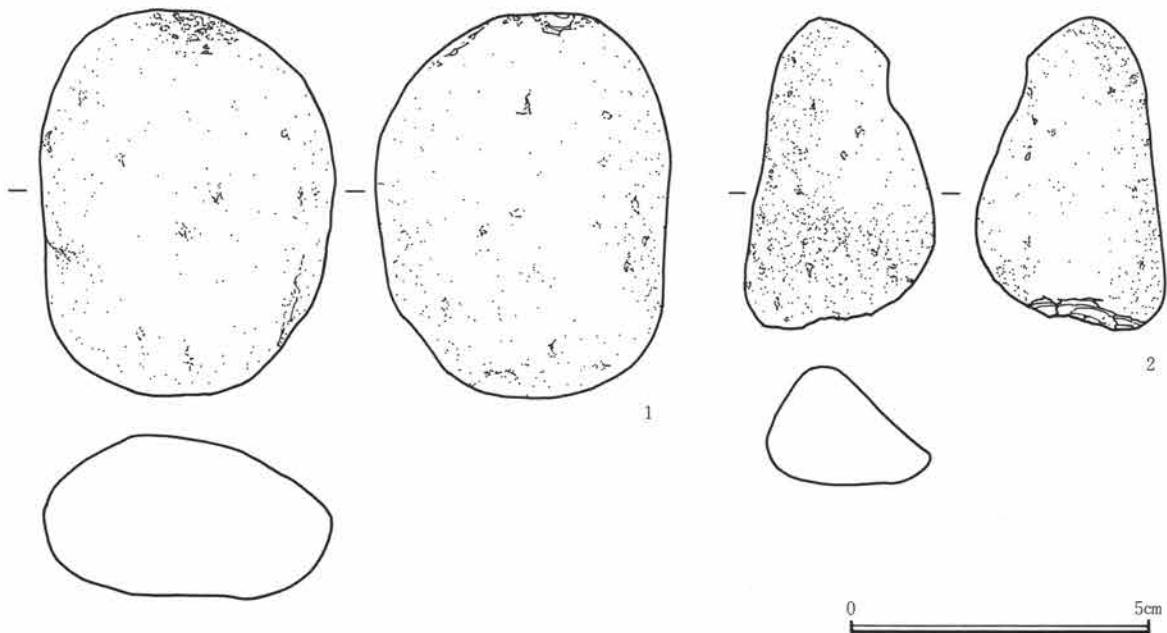
第11図6・7は、幅広の剥片で黒色頁岩を用いている。2点とも平坦打面から剥離しており、礫面を表面に残している。6はBr-4Gより、7は2号ブロックより出土。

敲石(第12図)

2点が出土している。非常に小形で、敲石の中では小さい部類に属す。

第12図1は、扁平な楕円形状を呈す円礫を用いている。礫の小口部分に打痕が集中している。その他の部分には明瞭な打痕は確認できない。粗粒安山岩。ブロック外(Bo-5)より出土。

第12図2は、扁平な楕円形状を呈す円礫を用いている。礫の下端部分は打撃で破損するほか、側縁に打痕が存在している。粗粒安山岩。Bm-3G出土。



第12図 出土石器(8)

接合資料

接合作業の結果、14例54点（礫の接合1例を含む）が接合している。接合率は25%に達している。ほぼ同一母岩からなる輝緑凝灰岩や黒色安山岩は良好な接合資料が多く、剥離実態も明瞭だが、複数の母岩からなる黒曜石の接合例は極めて少ない。

接合資料—4（第13～15図）

20点が接合している。大形剥片を石核の素材に用いている。剥片剥離工程は大きく二分され、石核の左右両端で横長剥片を連続していく剥離する工程と、この剥離が終了してから両設の打面から剥離を行う工程に大別されよう。

大形剥片石核の両端で剥離を行う前半の剥離は、石核の表裏両面で剥離が大きく異なる。即ち、石核裏面では平坦な広い剥離面が一度の剥離で形成され、その状態は打面作出にも酷似しており、打面作出の剥離と評価して全く支障ない。一方、正面の剥離は同一打面より横長の剥片（1～9）を連続して剥離している。その状態は石核裏面の状態とは大きく異なり、打点の選択方法も石核正面左側より右側へ一度で移動するなど、一見して石核裏面の打面に平行するよう打面の作出を意図した剥離ではない。以上の剥離の在り方から、一連の石核正面の剥離は打面作出と評価するより剥片の剥離が目的と評価すべきことを暗示するかもしれない。その後、石核は二分され、それぞれ大小2点（10・19）の石核で剥離が展開していく。剥片の打角は 120° ～ 130° を測る。

後半の剥離は、上下両端に設定した打面から剥離が展開する。この段階の剥離が前半の剥離と違う点は打面を丁寧に調整している点で、特に11のナイフや14～16の剥片（第15図）には顕著な打面調整を施している。恐らく、前半段階の打角が鈍角で、打面が薄く、十分な強度を持つ打面を確保するため打面を調整している可能性が高い。ナイフの素材（11）を剥離した打面では、11と前後して同一の打面から3枚の剥片を連続剥離している。12～15と16～18を剥離した一連の剥離の前後関係は不明だが、打面の

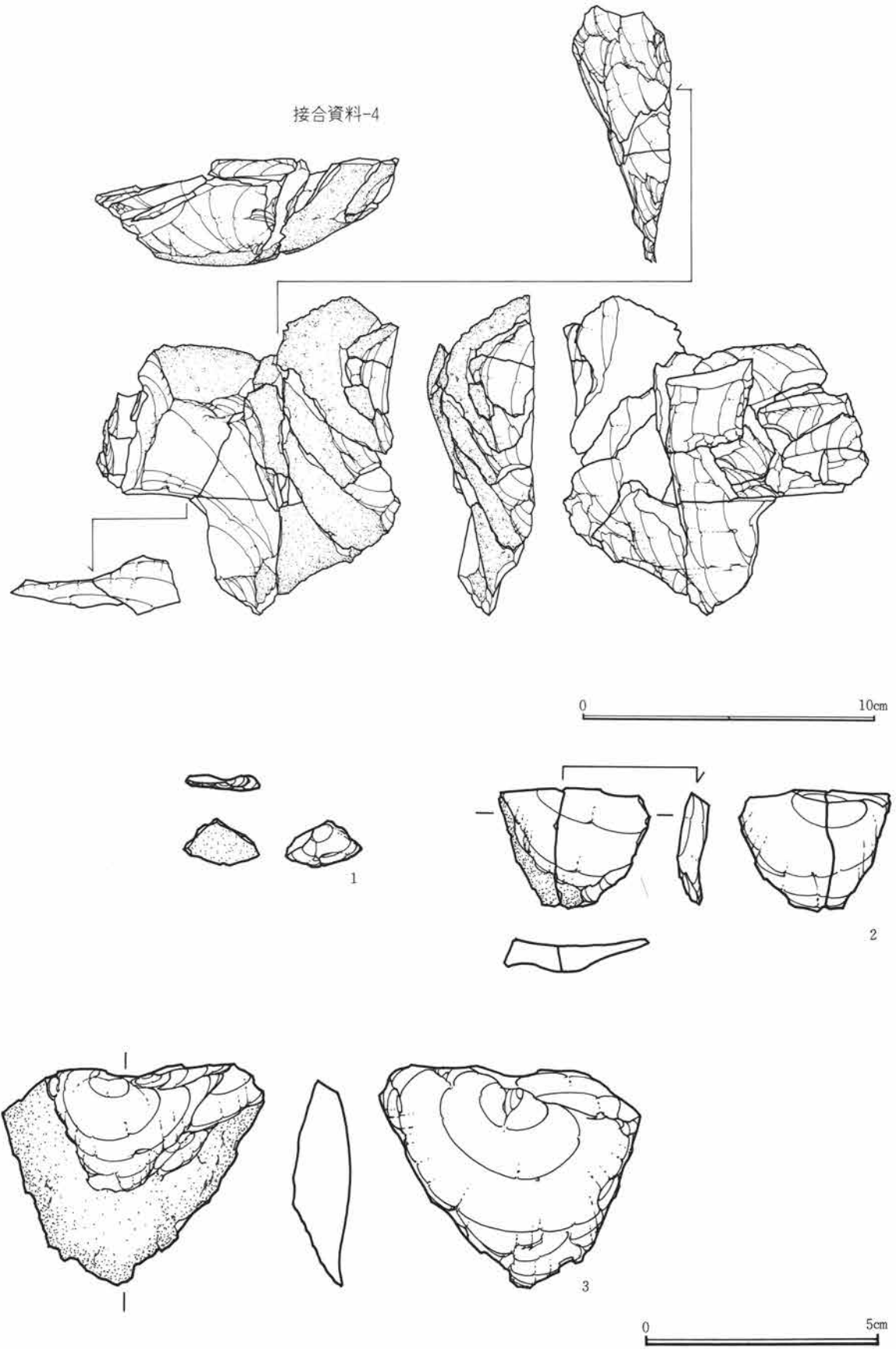
調整や剥離の在り方から判断するなら、12～15の剥離が16・17の剥離に先行する可能性が高い。16・17の打角は各々 142° ・ 118° を測る。

接合資料は剥片剥離の在り方からみて前半の剥離と後半の剥離に大別され、更に、後半の剥離は両設打面から剥離する一群（11・12～15）と、打面転移を伴う16・17の一群に二分されよう。前半段階に剥離した1～9の剥片や後半の16・17の剥離は、打面の作出が唯一の目的ではない。何故なら、石核正面では、石核裏面と同様な平坦な広い剥離面を一度に形成せず、9枚もの剥片を連続剥離していること、そのうえ、剥片剥離が石核正面左側から開始され、それから一度に石核の右側へ打点を移動して、剥片を剥離しており、単に打面を作出しているとは断言できないからでもある。一方、後半の16・17の剥離では、打面転移して18の剥片を剥離する以前に18と同一打面から複数の剥片を剥離しており、この場合には打面作出の性格を強く反映する。即ち、打面の作出と、素材剥片（目的剥片）の剥離の両者を併せ持つ剥離、といえよう。黒色安山岩。

接合資料—13（第16・17図）

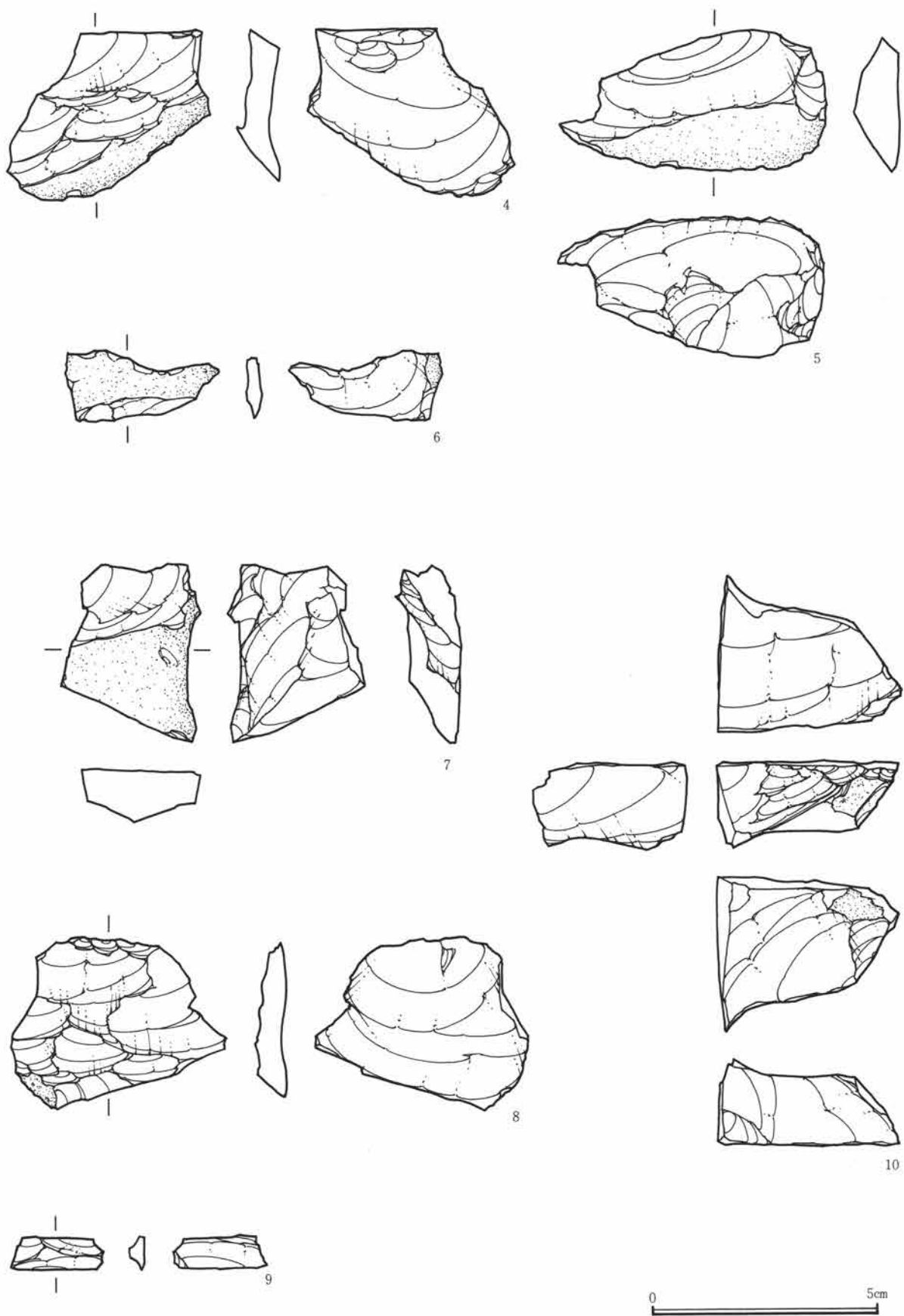
剥片3点・石核1点からなる接合資料で、円礫を素材に用いている。素材は均質な厚味を持ち、礫の小口部分から剥離を行う。剥片剥離は打点を左右に振り、徐々に後退するよう展開し、平坦な打面からやや幅広の剥片を連続剥離している。剥片・1には剥片の剥離方向に直交する剥離が存在する。剥離が一度で終了していることから、打面転移に伴う剥離というより作業面調整と評価されよう。

剥離は礫の小口部分から徐々に後退して展開している。礫は側面からみて三角形状を呈し、一定幅の作業面を確保している。そのため、剥離が進行するにつれ、剥片は徐々に大きくなる特徴が指摘されよう。途中で剥離を終えているため、これ以後、剥離が打面転移して展開していくのか不明だが、現状では剥片の側縁形状を重視した剥離、といえよう。輝緑凝灰岩。

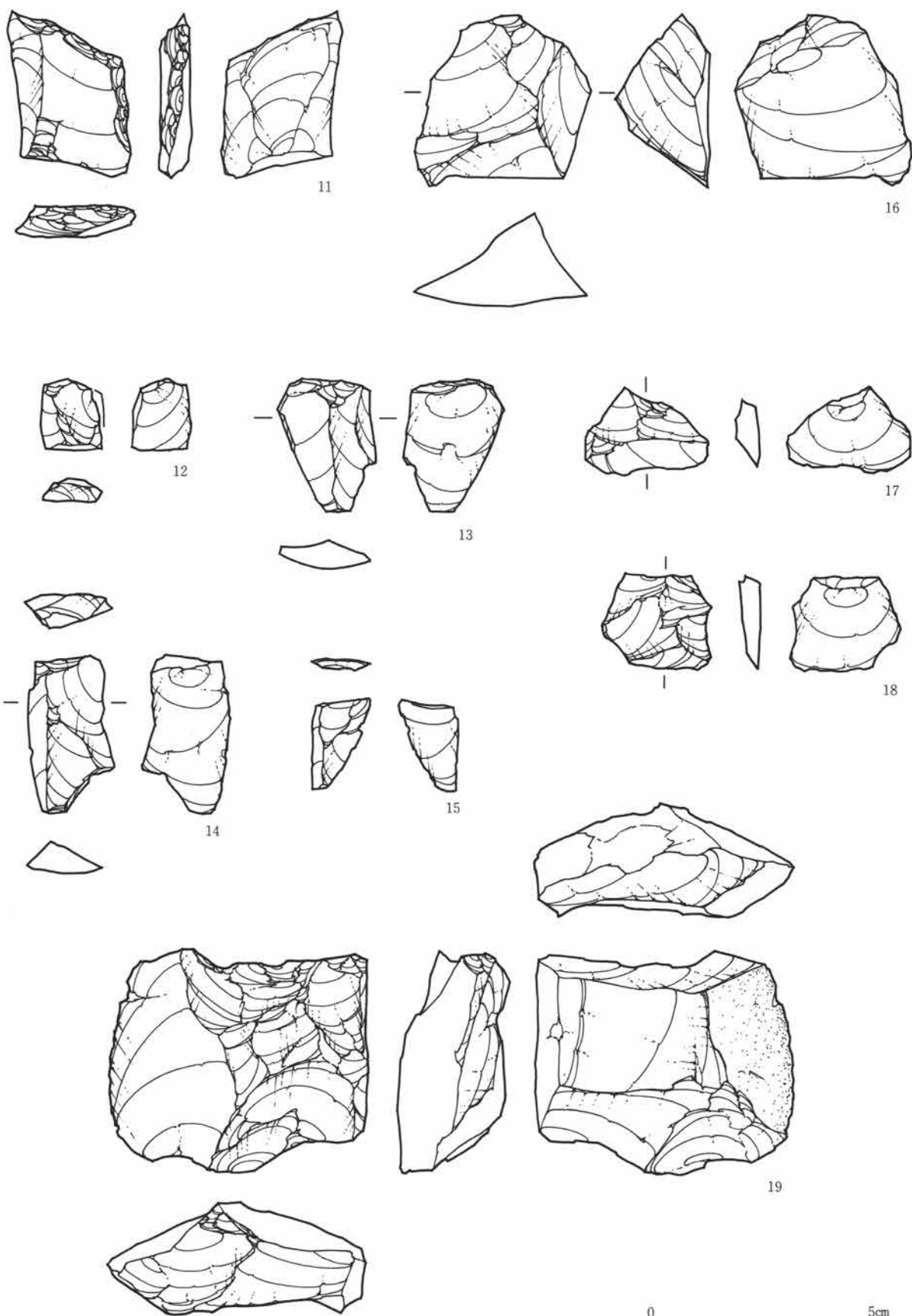


第13図 接合資料-4 (1)

II 旧石器時代の遺構と遺物

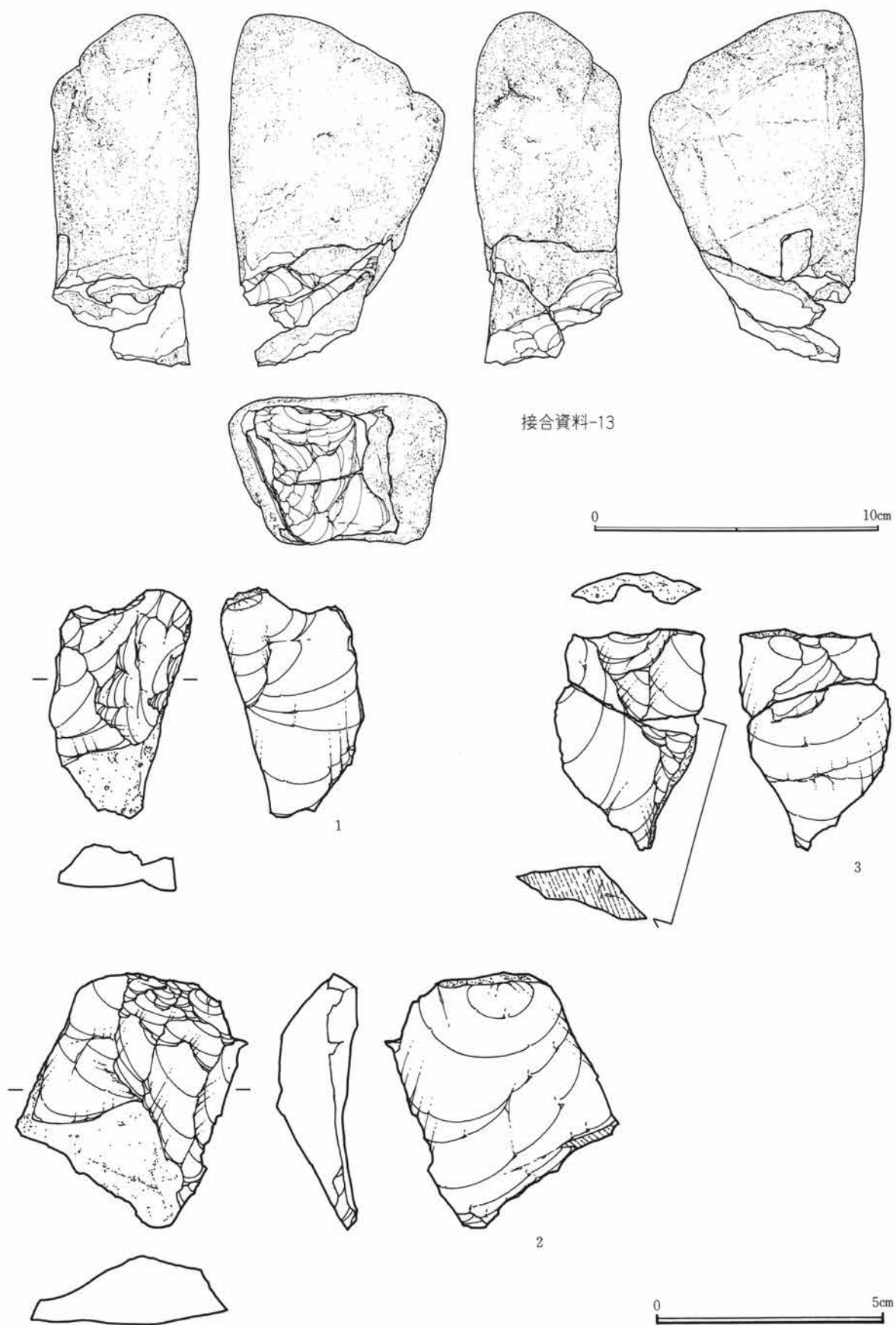


第14図 接合資料—4 (2)

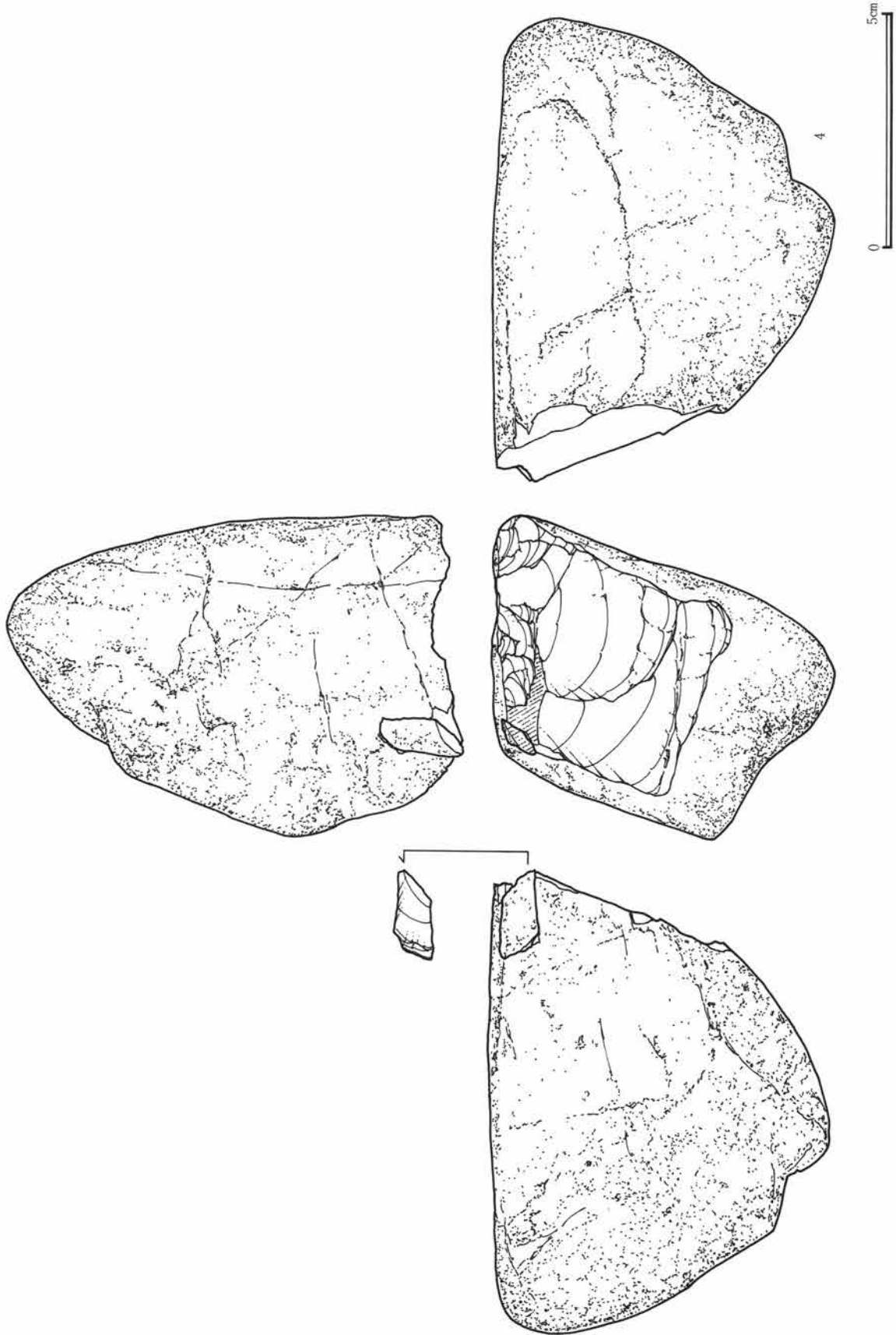


第15図 接合資料—4 (3)

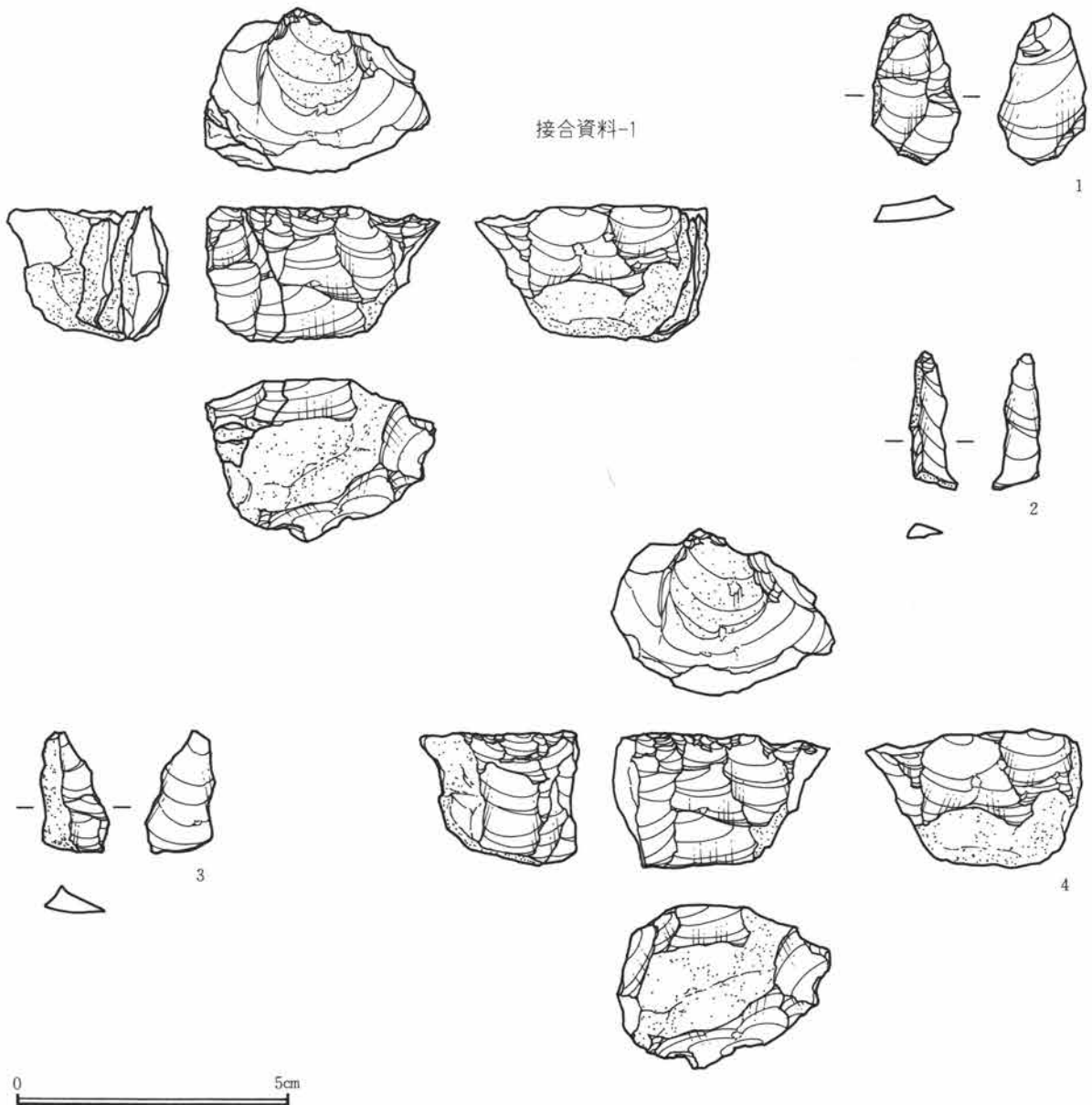
II 旧石器時代の遺構と遺物



第16図 接合資料-13 (1)



第17図 接合資料-13 (2)



第18図 接合資料-1

接合資料-1 (第18図)

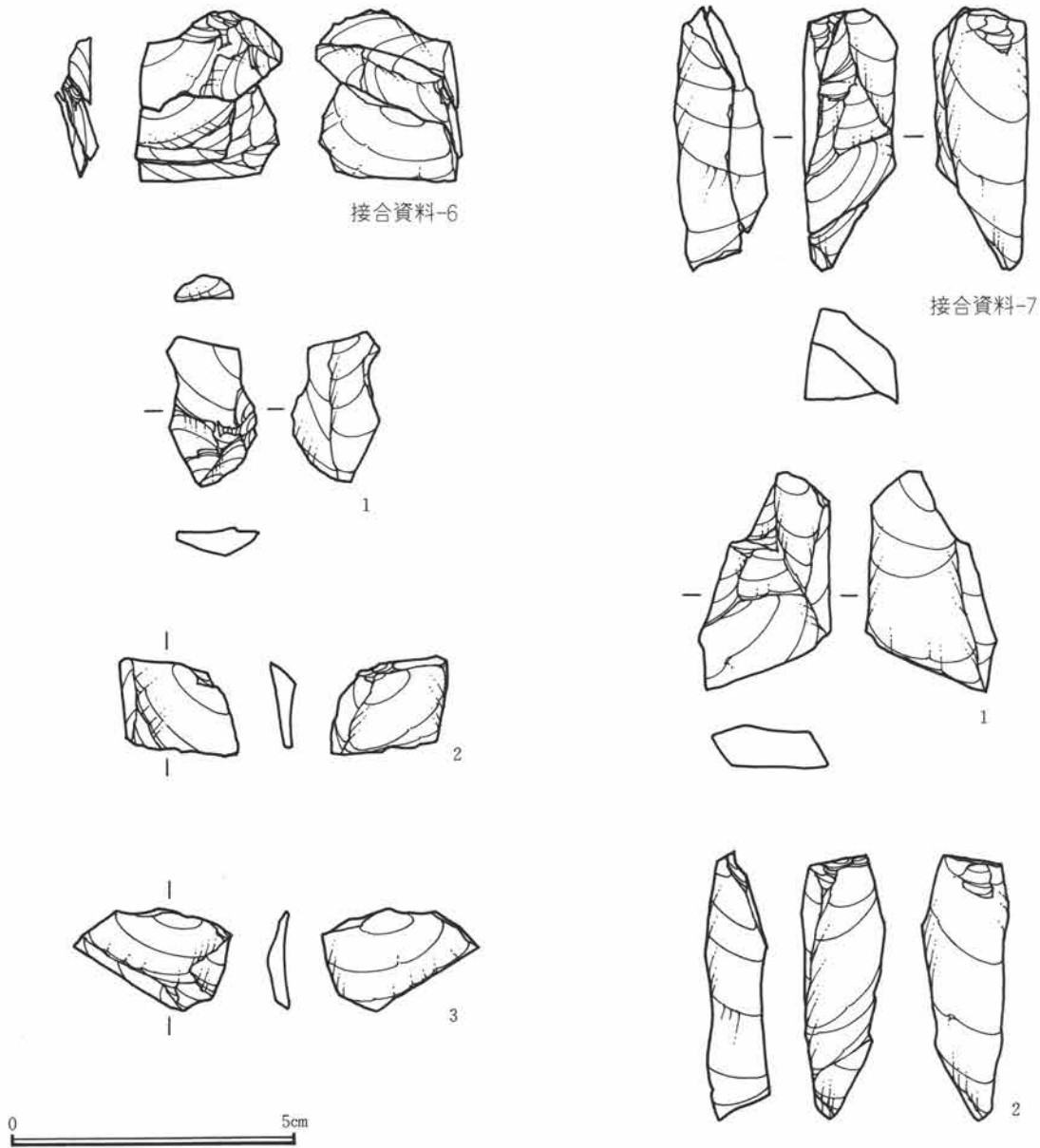
剥片3点・石核1点よりなる。左右の側面・石核下面に礫面を残し、剥離は全周する。平坦打面より剥離は行われ、打面調整や頭部調整は確認できない。作出した剥片の形状は小形で、縦長剥片を意識して剥離している。剥離は石核の正面を中心に展開する一方、接合した3点の剥片は石核の左側で集中剥離している。3点とも点状打面に近く、打面の管理は行き届いている。剥片剥離は途中で終了しており、石核は柱状に近い石核形状を呈す。黒曜石。

接合資料-6 (第19図)

3点よりなる。同一打面から2点の剥片(1・2)を連続剥離してから、打面を転移して剥片(3)を剥離している。打面調整・頭部調整は確認できない。接合資料-4と同一母岩。黒色安山岩。

接合資料-7 (第19図)

2点よりなる接合資料で、2点とも同一打面より剥離している。やや縦長の剥片で、剥片の側縁には石核の平坦面(分割面)を共有している。打面形状



第19図 接合資料-6・7

は点状打面に近く、打面の管理は行き届いている。
接合資料-4と同一母岩。黒色安山岩。

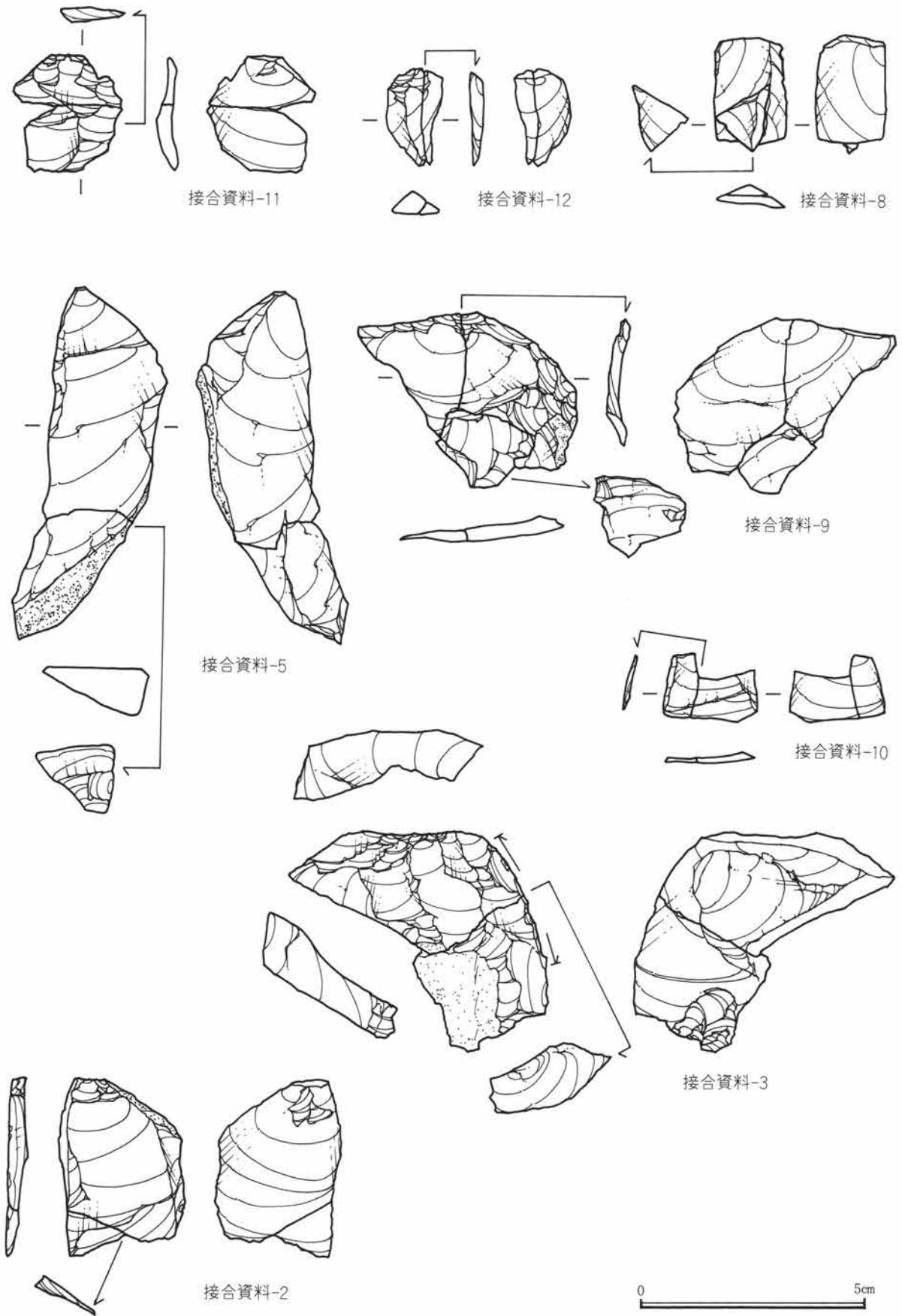
接合資料-5・8~12 (第20図)

2点よりなる接合資料で、縦位・横位に接合する
接合資料を中心に、黒色安山岩の一群を一括した。
縦位に接合する資料は剥離段階で生じた破損だが、
破損理由の不明な資料も多い。

接合資料-2・3 (第20図)

2点よりなる接合資料で、横位・斜位に接合する
資料を一括した。破損理由は不明だが、恐らく剥離
段階で欠損した可能性が強い。2例とも平坦な打面
より剥離され、石器石材は質の良い黒曜石を用いて
いる。

II 旧石器時代の遺構と遺物



第20図 接合資料-11・12・8 他

3. 石器の分布

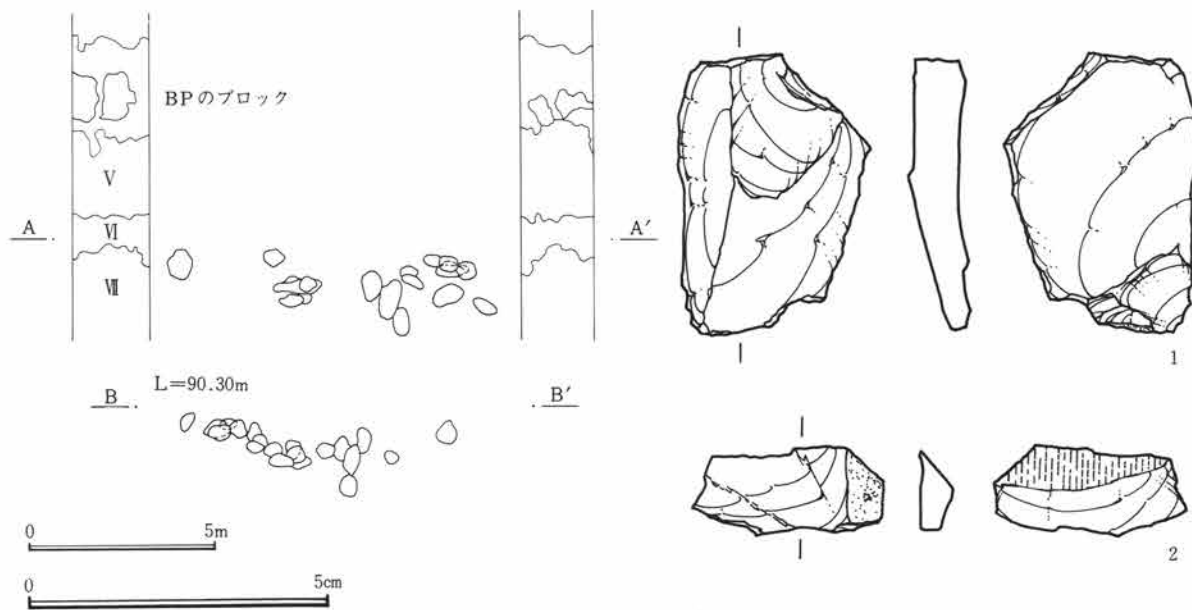
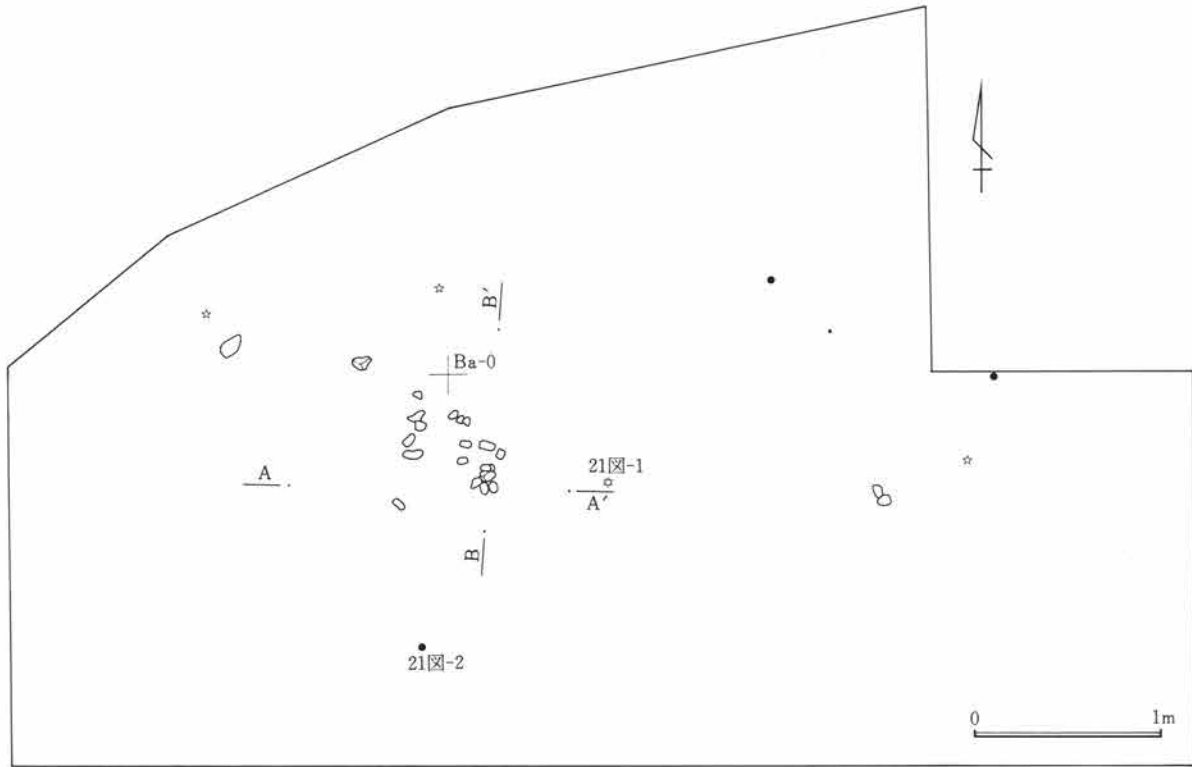
a. 礫群

礫群は台地西側の縁辺に近い Ay・Ba-24・00G で検出した。台地縁辺に存在した唯一の遺構で、単独に分布している。台地縁辺の試掘調査ではこの地

点以外には礫群や石器集中地点は存在せず、礫群の出土した地点に限定して調査した。

1号礫群（第21図）

総計26点の礫からなる。礫群は長軸0.9m・短軸0.5mの範囲に集中して分布するほか、周辺にも若干分布している。礫は総て300g未満で、100g前後



第21図 1号礫群と周辺出土の石器

II 旧石器時代の遺構と遺物

の礫を多用している。接合資料1例（接合資料-14）と礫片2点を除いて、小形・完形の円礫が圧倒的に多く、礫は総て粗粒安山岩を用いている。礫群はⅦ層最上層（暗色帯）に出土しており、垂直方向の分布状態から判断して、「掘り込み」を伴う可能性も指摘されよう。礫群を構成する礫にはタールが付着する礫や若干赤化した礫も多い。石核1点（第21図1）・剝片2点（第21図2）が礫群の周辺より出土している。

b. 石器の集中地点

礫を除く石器の集中地点は、台地縁辺から約40m内側の地点（B区nライン～rライン）で確認した。この地点は平坦で傾斜（平均斜度1°を測る）も緩く、台地縁辺で検出した礫群の立地とは相違している。石器は長軸24m・短軸16mの範囲に分布しており、概してその分布は狭く、5カ所の集中部を形成していた。石器が集中分布する地点の中央は、圃場整備の時点で深さ2m以上が掘削され、少なくとも石器分布の一部を破壊している。そのうえ、調査範囲が路線に限定され、更に側道部分の調査も諸々の事情から困難で、石器分布の有無や石器の移動関係など確定できない部分も多く、出土石器を分析するのに多大な制約条件を残した。

石器の出土層位は1号ブロックがⅦ層から、2号～5号ブロックがⅣ層・Ⅴ層を主体に出土しており、若干石器の出土層位は相違している。

1号ブロック（第23図）

Bq・Br-3・4Gで検出した。今回の調査で確認した5カ所の石器集中地点の中で、最も東側に位置する。石器分布の西側は攪乱で一部破壊され、正確な分布範囲は不明だが、石器分布の主体は確認し得た。Bq-4Gに多出するほか、その東側にも石器が分布していた。現状で、石器は長軸6.4m・短軸3.6mの範囲に集中して分布していた。石器は約50cmの高低差を持ち、Ⅵ層からⅦ層に出土した。Ⅶ層上半に多出している。

通常、礫群は地域に豊富な石材を利用する。赤城南麓では、礫群には粗粒安山岩が多用され、磨石や凹石の石材選択傾向に一致しており、この遺跡の場合も同様な傾向を示している。ただ、出土した礫は小形・完形の円礫が主体を占め、磨石や凹石に使用するの難しい。礫の採集地点は遺跡周辺に求めるのが妥当で、上述した小形円礫は、隣接する飯土井二本松遺跡の旧河道で確認している。

85点の石器が出土しており、剝片や碎片が組成の主体を構成する。このほかには、側縁・剝片端部に調整加工を施したナイフ（第6図2）や使用痕ある剝片（第8図2）、2点の石核（接合資料-4）が出土している。石材は黒色安山岩を主体に、黒曜石（2点）と黒色頁岩（1点）が出土しており、単純な石材組成を占めている。接合資料8例（接合資料-4・6～12）を確認しており、総て黒色安山岩を用いている。

出土した石器は黒色安山岩が圧倒的に多く、良好な接合資料を得た。原石を分割して石核素材を獲得しており、現状では他の地点で得た石核を搬入して剝片を剝離した可能性が高い。また、接合状態より判断して、空白部分も極めて少なく、石器や剝片を遺跡外部に持ち出している可能性も低い。この地点で剝離は完結しており、極めて石器製作の場の色彩を濃く残している。

2号ブロック（第24図）

Bo-5Gで検出した。調査区内の最も南側に位置する。石器は全体に散漫な状態で分布しており、石器分布の北側部分は攪乱で欠落している可能性が残る。現状で、石器は長軸3.6m・短軸1.6mの範囲に分布している。石器は約20cmの高低差を持ち、Ⅴ層を中心に出土した。

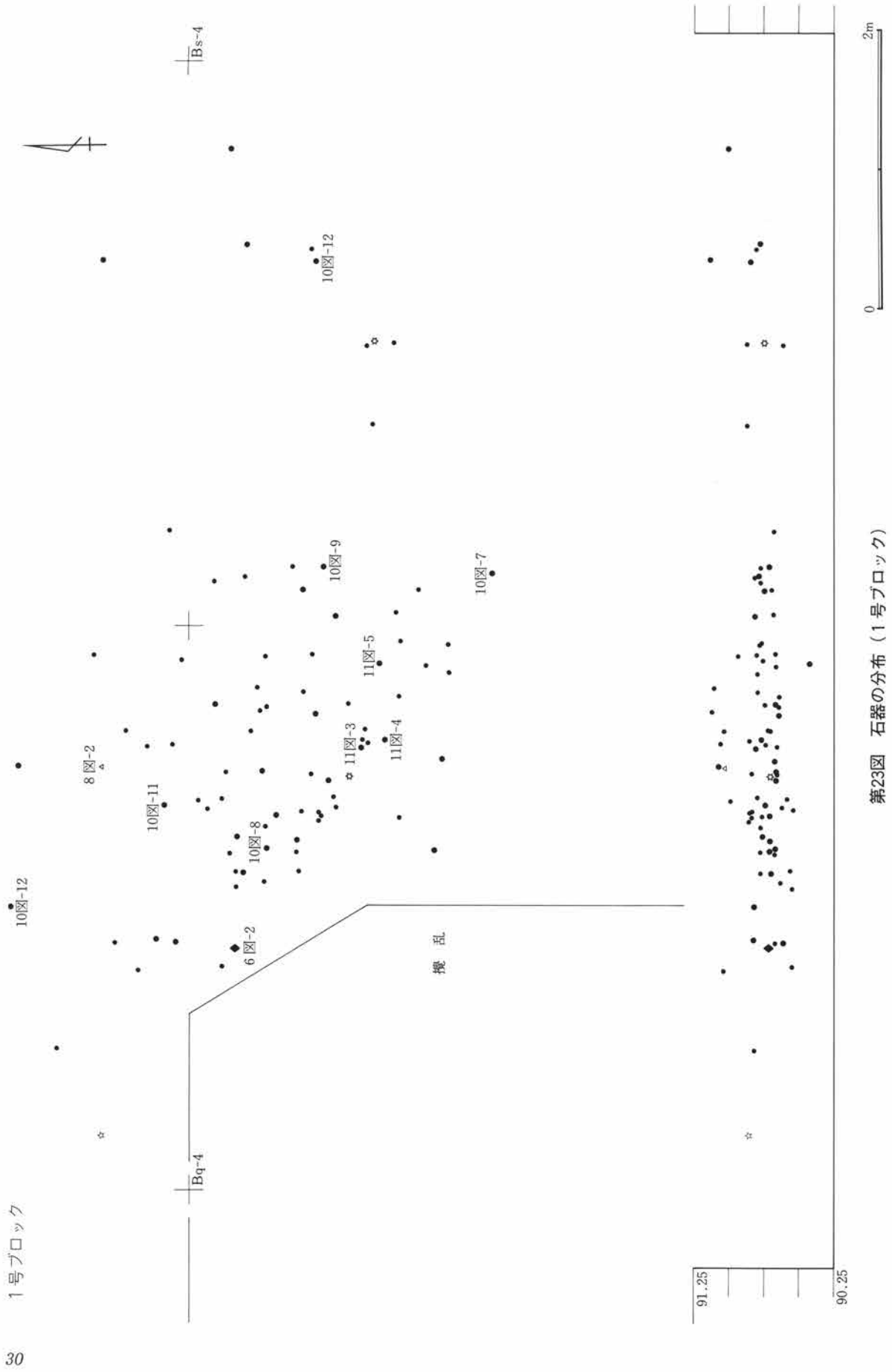
18点の石器が出土している。剝片が主体で、ほかには彫器1点（第6図4）が出土した。剝片に比べ、碎片の量が少なく、使用痕の残る剝片（第7図3、

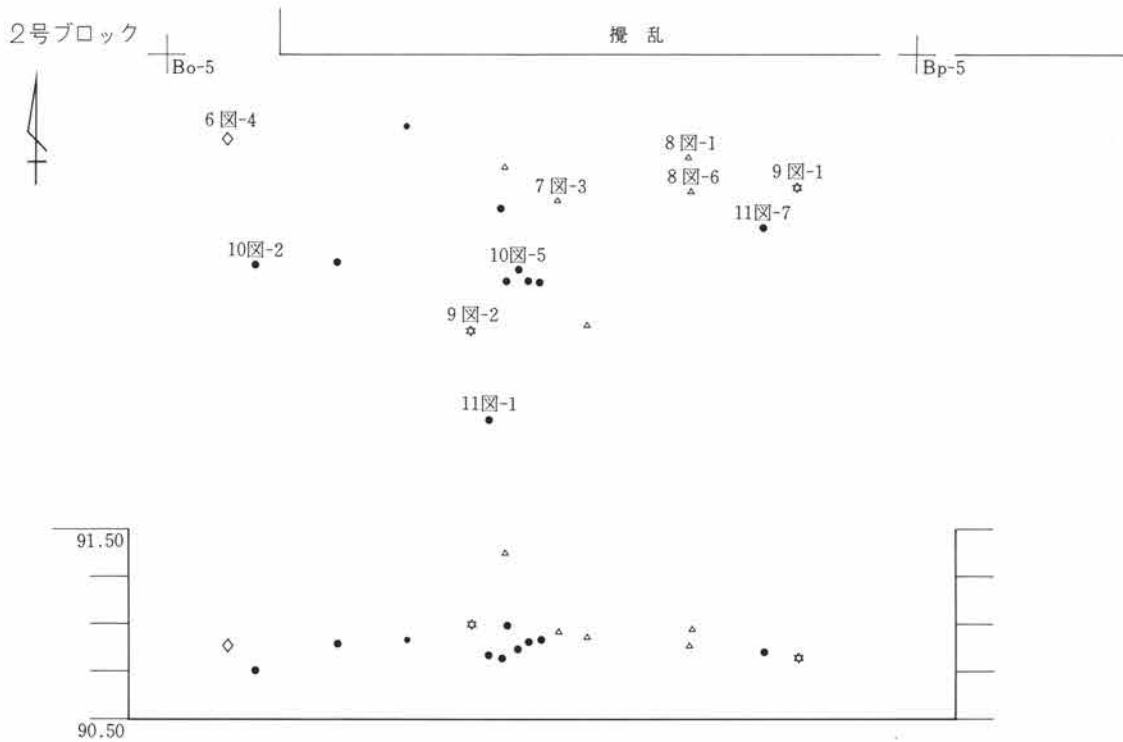
3. 石器の分布



第22図 石器の分布

II 旧石器時代の遺構と遺物



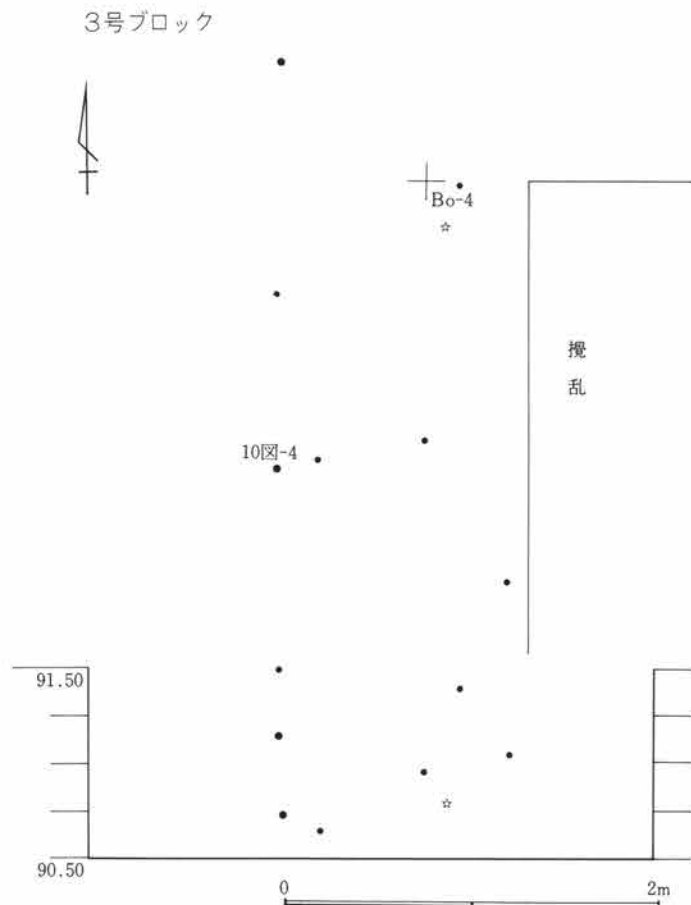


第8図1・6)も5点と多く、石器製作の痕跡には乏しい。石材は黒曜石が12点と主体を占めており、このほか黑色頁岩・珉質頁岩(各1点)・輝緑凝灰岩(4点)が組成する。接合資料2例(接合資料-3・13)を確認しており、このうち1例(接合資料-13)は4号ブロックと接合関係を有している。

全体に石器分布は散漫だが、その主体的分布域は確認し得た、と考えている。

3号ブロック (第24図)

Bo-3 G・4 Gで検出した。調査区内の最も西側に位置する。石器は散漫な状態で分布しており、石器分布の東側部分は攪乱で欠落している可能性が強い。現状で、石器は長軸3.2m・短軸1.6mの範囲に分布している。石器はⅢ層からⅦ層まで約80cmの高低差を持ち出土している。他の地点と比べ、レベル的な安定性を欠き、出土状態が著しく異なる。8点の石器が出土してお



第24図 石器の分布 (2号・3号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

り、2点の剥片と5点の碎片、礫片1点からなる。石材は黒曜石が5点と主体を占め、このほかには、接合関係を持つ黒色安山岩(接合資料-5)と雲母石英片岩(1点)が出土している。なお、上述の雲母石英片岩はⅦ層の出土で、より下位に出土している。

4号ブロック(第25図)

Bo・Bp-2Gで検出した。確認した5カ所の石器集中地点の中で、最も北側に位置する。石器の分布範囲も明確に把握され、良好に遺存している。その分布範囲は長軸5.2m・短軸2.2mで、ほぼ楕円形状に散漫な状態で分布している。石器は約50cmの高低差を持ち、Ⅳ層からⅦ層に出土している。

30点の石器が出土しており、剥片や碎片が組成の主体を構成する。このほか、二側縁加工のナイフが1点(第6図1)・搔器1点や、加工痕・使用痕を残す剥片も多く、石器製作の痕跡と共に石器使用の

痕跡も同時に残している。石材は黒曜石が25点と多く、ほかには輝緑凝灰岩や粗粒安山岩が組成する。接合資料2例(接合資料-1・13)を確認している。

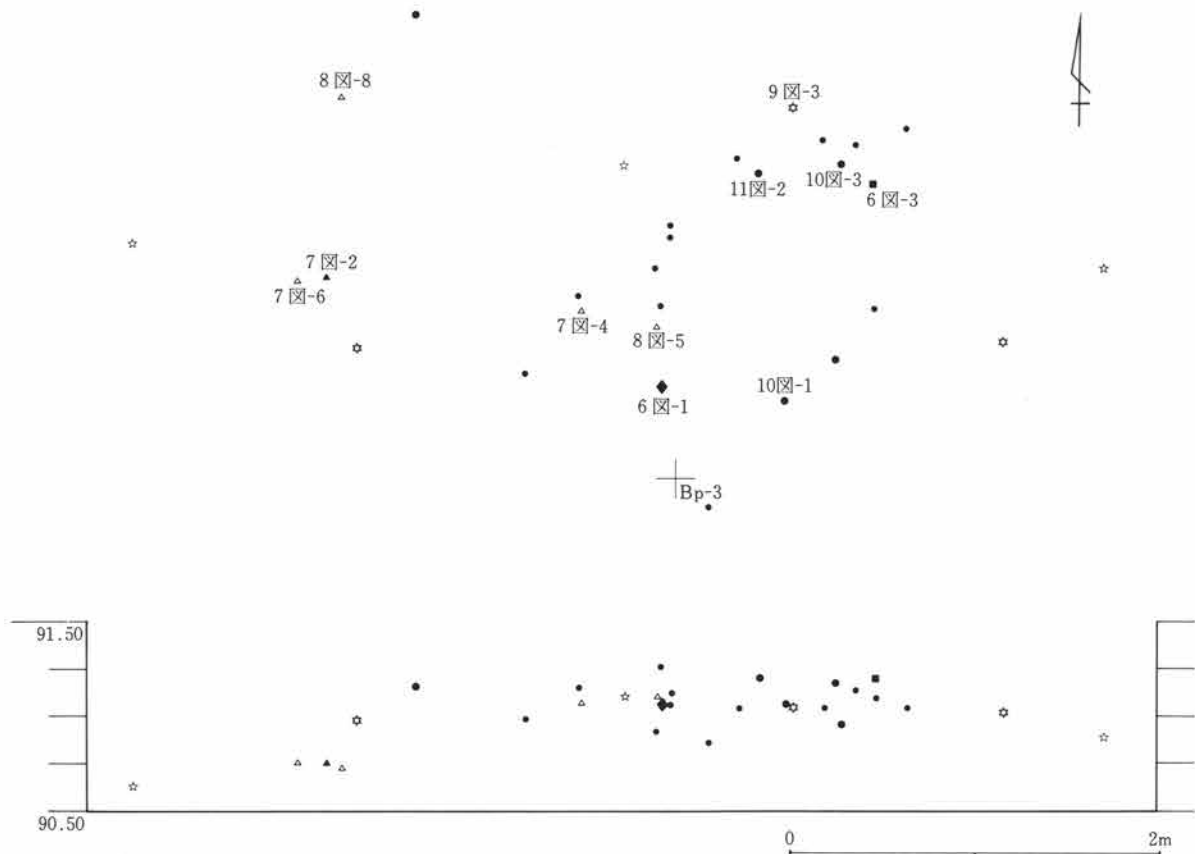
この地点では、石器が比較的高低差を持ち、Ⅳ層からⅦ層まで出土している。出土量のピークはⅣ層下部からⅤ層上半を示し、この付近に本来の文化層(生活面)が存在していた可能性が指摘されよう。Ⅶ層に出土した石器(黒曜石)も、本来はⅣ層下部からⅤ層上半に位置したものと、考えている。

5号ブロック(第26図)

Bp・Bq-3Gで検出した。1号ブロックと4号ブロックの間に隣接して位置する。石器は長軸3.3m・短軸2.8mの範囲に散漫な状態で分布する。石器は約30cmの高低差を持ち、Ⅳ層下部からⅤ層に多く出土している。

12点の石器が出土している。碎片が5点と最も多

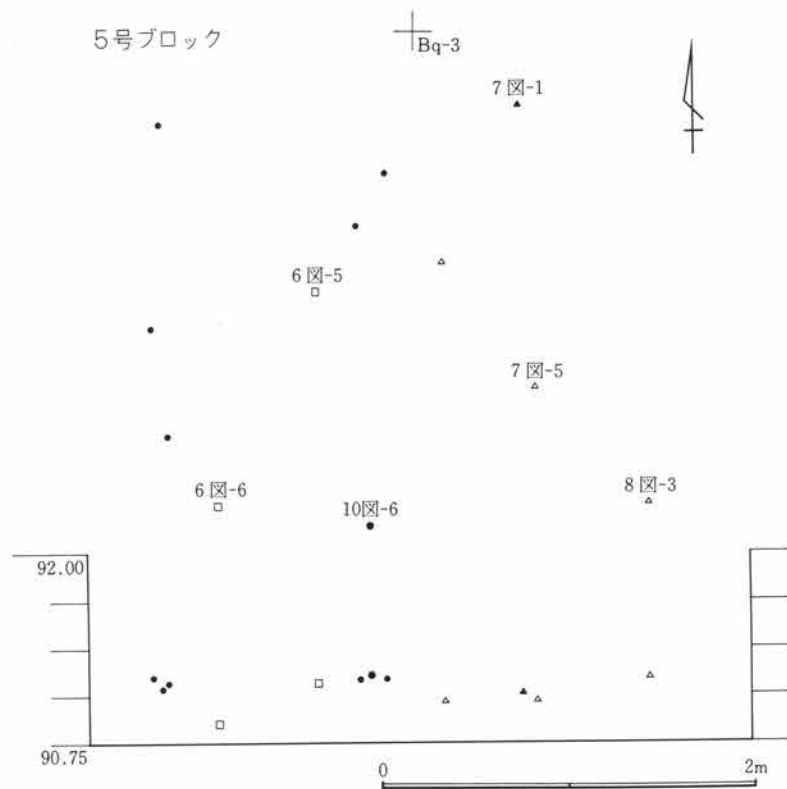
4号ブロック



第25図 石器の分布(4号ブロック)

3. 石器の分布

く出土する一方、削器(第6図5・6)や加工痕・使用痕を残す剥片も多く出土しており、石器を製作している痕跡は乏しい。寧ろ、そこには使用の場の色彩が強い。石材は総て黒曜石からなり、単純な石材組成を示す。接合資料1例(第20図、接合資料-2)を確認している。



第26図 石器の分布 (5号ブロック)

c. 接合資料の分布

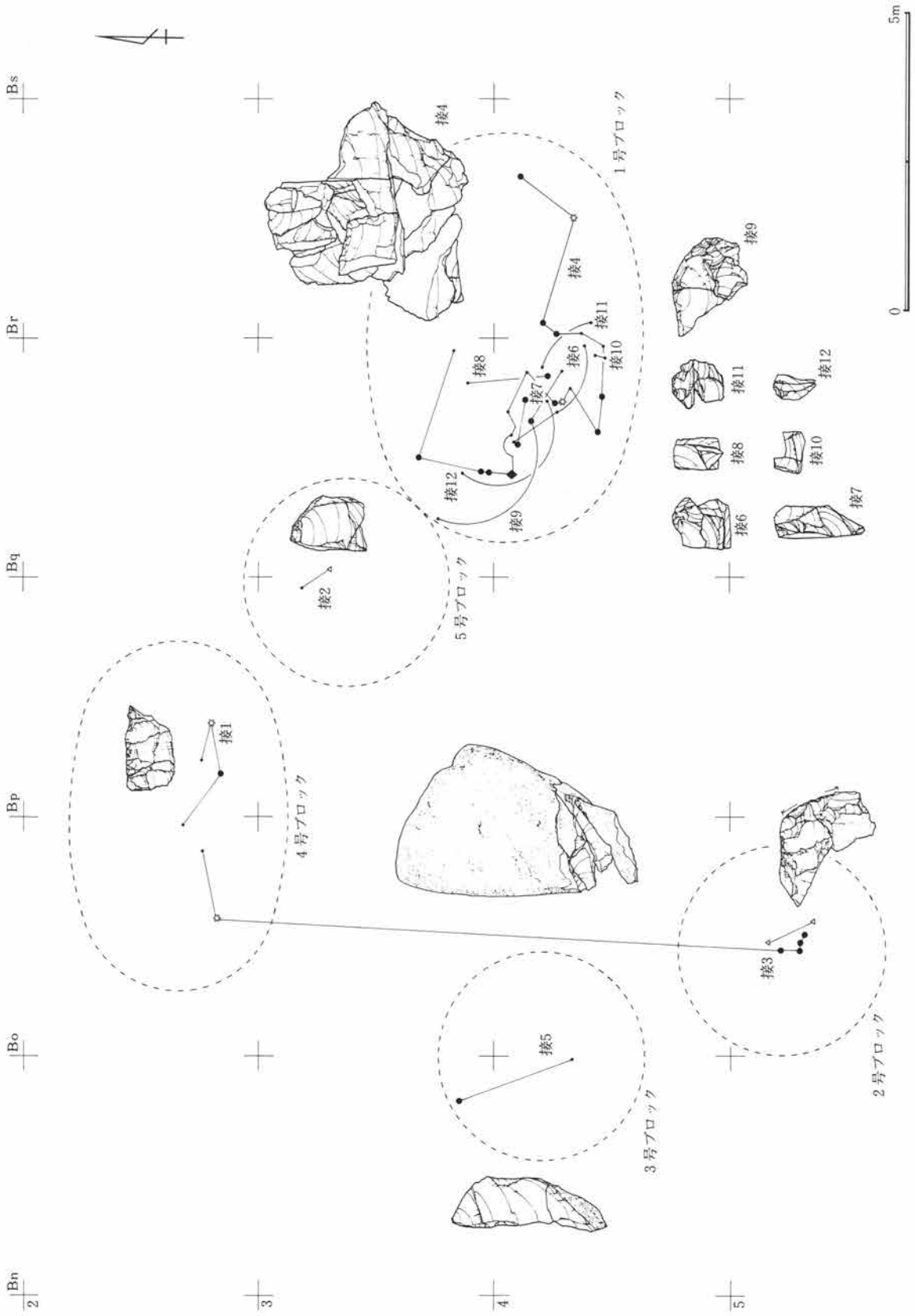
接合作業の結果、14例の接合資料を得た。この中には、礫の接合資料1例を含み、全体に接合資料の数は少ない。それでも全体の25% (54点)が接合しており、一定の水準に達している。だが、この数字も石材毎に大きく異なり、一定ではない。特に黒曜石の接合率は低く、明確な剥離地点は調査区内では確認できない。恐らく、この地点以外で剥離し、剥片の状態で搬入した可能性が強い。ここでは接合資料に限定して、その分布状態を記述する。

接合資料-1 (第18図)の分布 石核1点・剥片3点が4号ブロックに分布している。この付近には剥片も多く出土しており、この地点で剥片剥離している可能性が強い。接合状態より判断して、石核上面の平坦打面の作出以後、約10点の剥片を剥離していることから、作出した剥片の動向を分析すべきである。現状では、接合した3点の剥片は剥離の最終段階に

連続して剥離していること、他の資料を含め全体に剥離作業は顕著ではないことから、この遺跡で剥離する以前に他の地点で剥離を終了している可能性を指摘しておきたい。黒曜石。

接合資料-13(第16・17図)の分布 石核1点・剥片3点・碎片1点からなる接合資料で、2号ブロックに剥片が、4号ブロックに石核と碎片が各々分布している。調査区内では剥離の初期剥片は確認できないため、他の地点で剥離した可能性を残す一方、「試し割り」の可能性も残す。輝緑凝灰岩。

接合資料-4 (第13~15図)の分布 石核2点・剥片11点・碎片7点と側縁・剥片端部に調整加工を施すナイフが1点接合している。接合資料は1号ブロックに集中して出土しており、剥片の剥離は同一地点で終了している。板状の大形剥片を石核素材に用い、剥離は展開している。石核の消費も効率的で、良く一連の石器製作工程を示している。集中して剥片や碎片が出土しており、石器の製作地点を示唆してい



第27図 接合資料の分布 (1～5号ブロック)

る。

また、石核（第15図19）が上述した剥片や碎片と距離を隔て出土していることから、石核を持ち出している可能性も指摘されよう。黒色安山岩。

接合資料-2・3（第20図） 2点よりなる接合資料で、接合資料-2が5号ブロックに、接合資料-3が2号ブロックに各々分布している。2例とも2点の資料が接合して1枚の剥片に復原され、剝離段階

d. 同一母岩の分布

出土石器は、黒曜石の一群と黒色安山岩の一群に大別され、このほか黒色頁岩や他の石材が単独の状態でも出土している。今回の発掘調査で検出した石器には接合資料が少なく、剥片剝離の良好な資料も少なく、母岩の分類は極めて難しい。調査範囲が路線に限定され、更に、石器分布の中央地点が攪乱で石器分布の有無さえ確認できない状況で、石器の移動や遺跡の構造など、分析の制約が著しい。

通常、母岩の分類は困難な場合が圧倒的に多く、確実に同一母岩と断定するには、例えば、他の資料に比べ特徴的な節理や色調を有しているとか、接合して原石の状態まで復原するとか、相当な根拠を要し、そのうえ、母岩の分類は資料点数の増加に伴い困難性を増す。そのため、不確定要素が多い母岩の分類は放棄され易く、何等記述することなく、分析材料の欠落する報告も多い。砂川遺跡の報告以来、母岩の分析は遺跡の構造解明に必要な不可欠な基礎的作業に位置づけられ、社会構造の実態解明に迫り得る可能性を秘めた有効な分析手法でもある。母岩の分類を放棄するということは、遺跡構造や社会構造の解明を放棄することにもなり、それはそれでよし、とするならば別だが、母岩分類が必要であるということになれば、同一母岩の分類が充分ではなくても何等かの方法で図示、或は、記述する方法を考えていくべきであろう。現状では、何が不明で、何が分かるのか、それだけでも記載しておくべきと考えている。ここでは、上述した見解を踏まえ、石器分布の全体が分かるよう可能な限り配慮して、その分布

で欠損した可能性が強い。黒曜石。

接合資料-6~12（第19・20図） 総て黒色安山岩の接合資料で、1号ブロックに分布している。剥片と剥片が接合したのは3例（接合資料-6~8）で、他は縦位や横位に接合する資料（接合資料-9~12）である。接合資料-4の分布と重複しており、同一母岩の可能性が強い。

状態を石材別に分け図示した。

分類作業の結果、主体的に石器群を構成する黒色安山岩や黒曜石を除き、黒色頁岩や珪質頁岩、他の片岩系石器は単独出土する傾向を示していた。

黒色安山岩の分布（第28図）

総計91点が出土している。黒色安山岩は6種類に分類が可能で、その特徴を以下に記す。

黒色安山岩-1 全体に細い筋が入り、やや色調は暗い。褐色の斑晶を含む。

黒色安山岩-2 1に似た特徴を示す。若干色調が明るい。黒色安山岩-1がⅦ層（暗色帯）から出土するのに対し、2はⅤ層から出土するため、土質の影響で、色調が相違する可能性が強い。本来は同一母岩と考えている。

黒色安山岩-3 微少な斑晶を含み、黒色安山岩-1に色調が似る。1や2に特徴的な細い筋は見られない。

黒色安山岩-4 全体に色調が明るく、黒色安山岩-2に似た特徴を持つ。1に特徴的な筋状の縞は見られない。

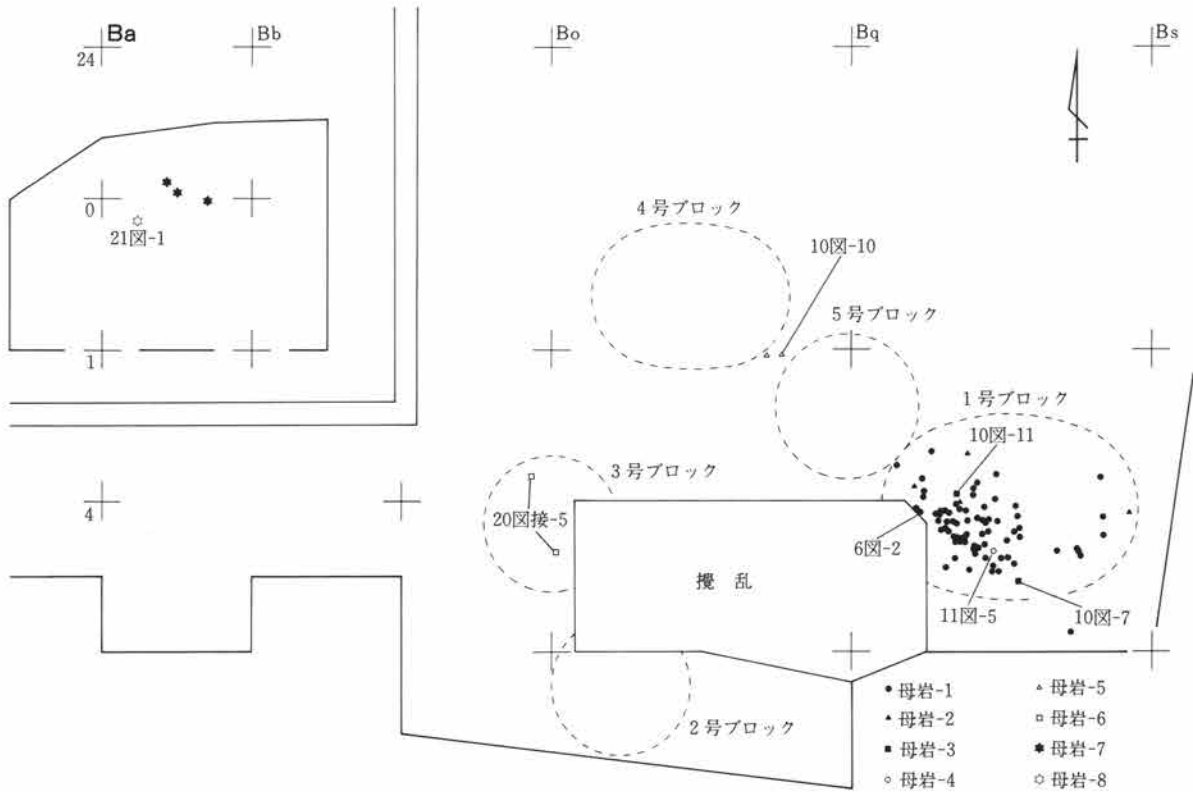
黒色安山岩-5 表面に斑点が見られ、やや目が粗い。全体に斑晶の混入は少ない。

黒色安山岩-6 3に似た石材観を持ち、斑晶の混入は少ない。1や2に特徴的な細い筋は見られない。黒色安山岩-3と同一母岩か。

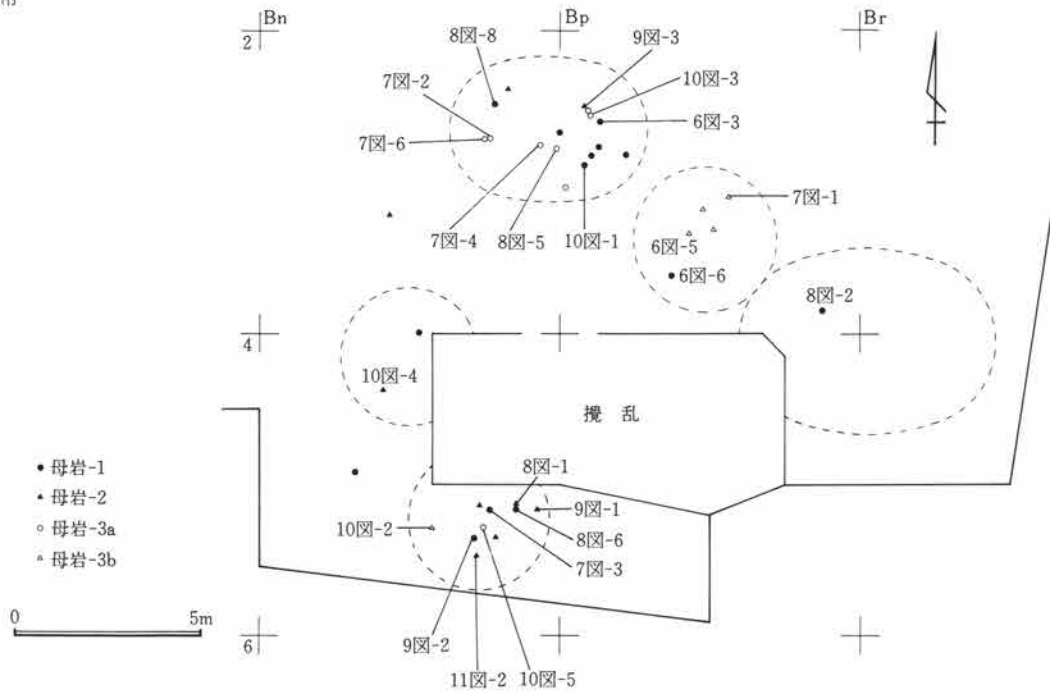
以上6種の母岩は、黒色安山岩-1・2・3・4が1号ブロックに、石材観の似た黒色安山岩-5は4号ブロックと5号ブロックの中間に、黒色安山岩

II 旧石器時代の遺構と遺物

黒色安山岩の分布

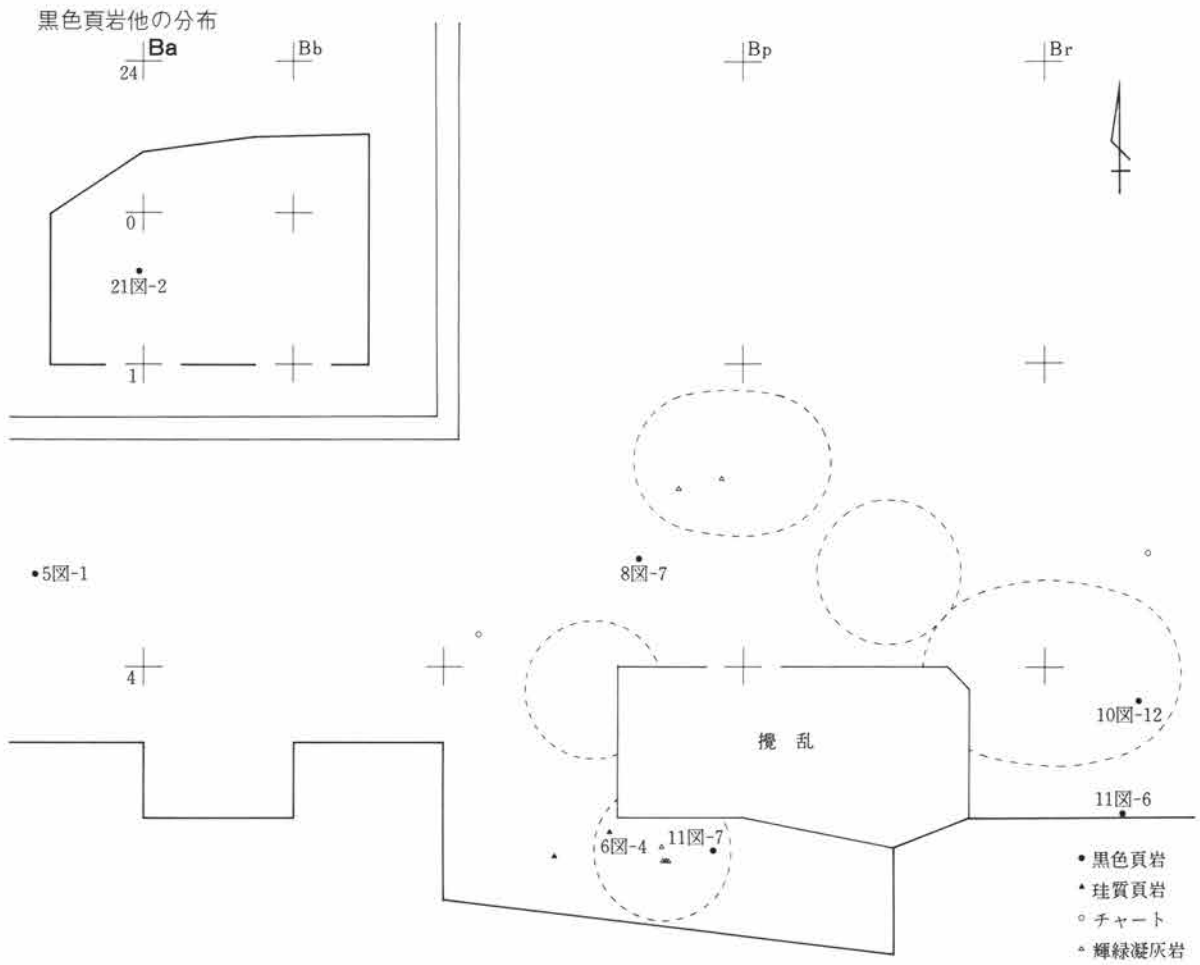


黒曜石の分布

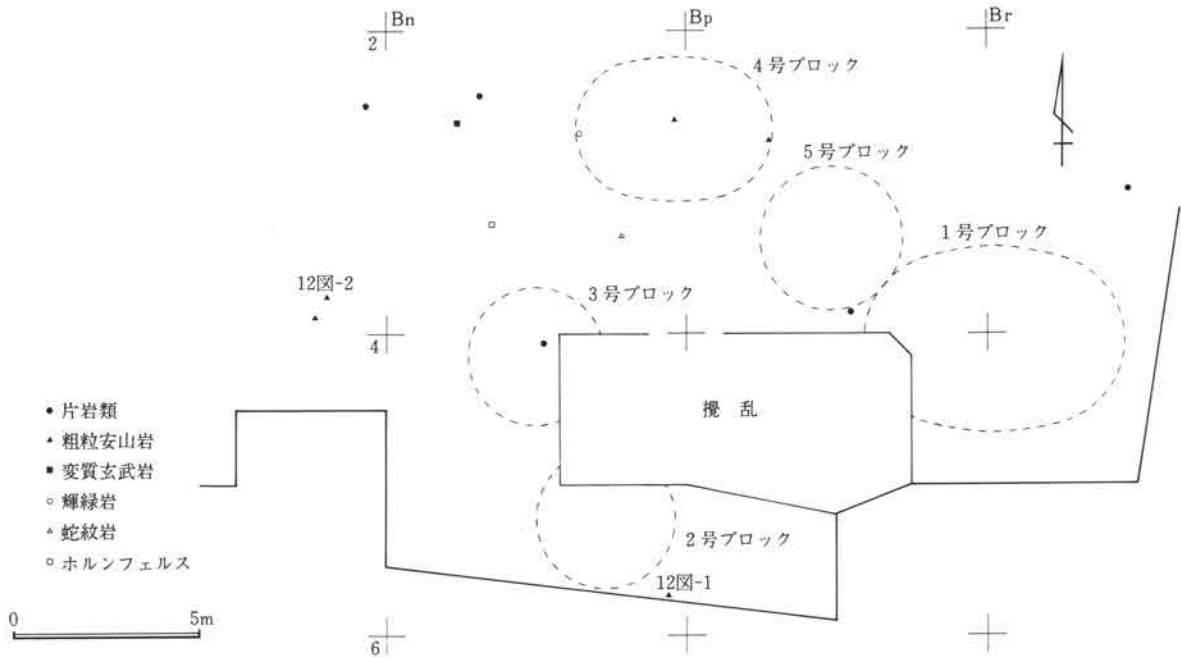


第28図 石材別分布 (黒色安山岩・黒曜石)

3. 石器の分布



片岩類他の分布



第29図 石材別分布 (黒色頁岩他)

II 旧石器時代の遺構と遺物

ー6は3号ブロックに分布している。黒色安山岩ー1・2には接合関係が確認できないため、両者が同一の母岩なのかどうか、証明は不能だが、斑晶の入り方や筋状の特徴的な縞が共通しており、同一母岩の可能性が高い。黒色安山岩ー3・6も同様に同一母岩の可能性が高い。また、黒色安山岩ー3～6は単独、或は数点の出土で、剝離の痕跡が乏しく、他の地点から剝片を搬入したもの、と思われる。1・3～6はⅥ層・Ⅶ層に出土している。

なお、このほかにも台地縁辺で検出した1号礫群の周辺から4点の黒色安山岩が出土している。このうち、石核(第21図1)を除く3点は黒色安山岩ー1に酷似した特徴を持つ。

黒曜石の分布(第28図)

総計58点が出土している。母岩の分類が困難で、母岩の正確な個数は判断できない。石器表面の特徴から少なくとも三分され、更に縞構造の入り方で細分されよう。ここでは、大別した黒曜石の分布状態を中心に、細分した黒曜石の分布を併せ、その分布の在り方を説明していく。

黒曜石ー1 少量の斑晶を含む黒曜石を一括した。このなかには、透明感や縞構造の微妙な相違も存在している。

黒曜石ー2 石器表面に茶色の縞模様が入る黒曜石を一括した。黒曜石ー1と同様に透明感や縞構造の微妙な相違が存在する。斑晶は含まない。

黒曜石ー3 黒曜石ー1・2に分類できない黒曜石を一括した。斑晶を含まず、筋状に縞の入る黒曜石(a類)と、斑晶を含まず、絹雲状の縞模様を持つ黒曜石(b類)からなる。a類はb類に比較して、透明感が強く、透明部分と縞の境が明確である。

以上4種の母岩は、黒曜石ー1が2号ブロック・5号ブロックを主体に分布するほか、1号・3号・5号ブロックに各1点、黒曜石ー2は5号ブロックを除く2号～4号ブロックに分布しており、各地点に分布する傾向を示している。一方、黒曜石ー3はブロックに偏在する傾向が窺われ、黒曜石ー3 aが

4号ブロック、黒曜石ー3 bが5号ブロックを主体に分布している。

黒曜石ー1・2の中には黒曜石ー3に似た縞構造を持つ資料が多く存在している。全体に斑晶の入り方は少なく、小形剝片では斑晶が確認できない場合も十分予想され、1・2には同一母岩を含む可能性も否定できない。そこで、細分要素の残る黒曜石ー1・2を3と同様な基準で細分し、その分布状態を検討した。その結果、細分した状態では分布の偏差は存在せず、満遍なく分布していた。上述した母岩の分類は不確定要素を多く残す一方、石材別に見た黒曜石の器種構成の在り方(作出器種に比べ、剝片や碎片の量が少なく、この地点で石器製作したとは想定できない)や殆ど接合関係が確認できないことから、黒曜石の大部分は別の地点で製作した石器や剝片の搬入も予想され、こうした事情も上述の母岩分布に反映している可能性も強い。

その他の石材分布(第29図)

黒色安山岩・黒曜石の他に、10種類の石材が出土している。輝緑凝灰岩を除き、資料点数が少なく、分布も散漫で集中性を欠き、単独出土の資料が多い。また、より下層から出土した資料が多く、輝緑岩や蛇紋岩、黒色片岩や緑色片岩の片岩類、粗粒安山岩・変質玄武岩など、礫片の状態でも出土している資料も多く、その帰属を特定するのは難しい。ここでは、上層出土の資料と下層出土の資料に大別して、その帰属が特定可能な資料を中心に説明しておく。

上層から出土した資料には、輝緑凝灰岩(第16・17図、接合資料ー13)と珪質頁岩(第6図4)が該当する。輝緑凝灰岩は2号・4号ブロックに分布しており、石器の出土層位も他の黒曜石と同じレベルから出土している。一方、珪質頁岩は2号ブロック、及び、周辺出土の剝片1点で、黒曜石の出土層位にレベル的に一致する。このほか、石器の形態の特徴から下層の石器群に伴う可能性の強い石器が1点(第5図)出土している。他の石材は石器の形態的な特徴が乏しいため、その帰属時期は不明と判断した。

4. 小 結

今回検出した石器は12m×20mの範囲に5カ所の石器集中地点を形成して分布していた。石器分布の中心部分を攪乱で欠き、この地点に石器の集中地点が存在していたのか否か、不明だが、仮に石器分布の存在を想定した場合でも、石器の分布範囲は狭く、該期特有の小規模な石器群と考えている。出土石器には16種に及ぶ石器石材が確認され、実に多様な石材が存在していた。このうち、主体的に石器群を構成したのは黒曜石と黒色安山岩で、その他の石材は量的にも少なく、単独か、単独出土に近い状態で出土している。出土石器群は、黒曜石を用いた一群と黒色安山岩を用いた一群の二群に大別され、前者はIV層下部からV層上半に、後者の石材はVII層を主体に出土しており、それぞれ出土層位を異に出土した。恐らく、石器の出土層位に関するこの相違は石器群の時期差を確実に示しており、台地縁辺で検出した礫群を加え、二枚以上の文化層が存在したということを示しているのである。問題は少数だが存在する単独出土の石器・石材の帰属で、どの程度まで確実な分離が可能なのかということである。文化層の分離、即ち、石器群の同時性の確認は、石器の形態的特徴から分離するのが理想だが、現実には、それだけでは分離できないため、石器群の同時存在を直接証明する接合資料を中心に、同一母岩の分布や石器の出土層位など、様々な状況証拠を総合判断して分離している。ここでは石器群の同時性の確認を目的に論述していく。

今回の発掘で検出した石器に関する説明は既に述べた。石器は2地点（ここではそれぞれA地点・B地点と呼ぶ）で確認され、以下それぞれその概要を指摘しておく。

A地点（1号礫群の周辺）

礫群はVII層上位部分で検出した。その出土状態は「掘り込み」が存在した可能性を残す一方、土層には明確な「落ち込み」が存在せず、通常の堆積状態を示しており、VI層の堆積段階以前の所産と考えている。

また、周辺から出土した石器は4点で、第21図に図示した2点がV層、他の2点がVII層からそれぞれ出土している。

B地点（石器集中地点、1号～5号ブロック）

黒色安山岩が主体の1号ブロックを除き、2号～5号ブロックは黒曜石が主体に分布している。前者はVII層を主体に、後者はIV層下部からV層上半を主体に出土した。このほか、輝緑凝灰岩や珪質頁岩・黒色頁岩が出土しており、一部の石材を除き、単独出土する石器が多い。この単独で出土する石器の帰属が問題で、決定材料は極めて乏しい。

以上が出土石器群の全体的傾向だが、石器石材の相違だけでは文化層は分離できないため、出土状態・母岩の特徴・形態の特徴など個別に観察して、その傾向を指摘しておきたい。

黒色安山岩 B地点、特に、1号ブロックを主体に分布するほか、A地点・B地点に各4点が出土している。接合資料も多く、母岩6個を確認した。VII層を主体に出土したほか、V層にも若干出土している。V層に出土した資料とVII層に出土した資料では色調が大きく異なる。同様な状態はB地点だけではなく、A地点でも見られ、同一母岩でも色調が出土層位で相違する可能性を示している。石器を包含する土質が石器表面の風化の相違に強く影響する上述の想定は、色調の違う石器と石器が良く接合する事実を良く反映している。また、1号ブロックではVI層上面でVII層を確認しており（第31図）、土層の堆積が一樣でないことを示していた。このVII層の「盛り上がり現象」は自然営力に起因する現象と思われ、石器が移動する一因と考えている。なお、3号ブロックの資料（第20図・接合資料-5、母岩-6に分類）や4号ブロックと5号ブロックの中間に出土した資料（第10図10、母岩-3に分類）は量的にも少なく、その帰属は明確ではない。

黒曜石 1号ブロックを除く各地点で出土している。全体に接合資料が少なく、母岩の異同を元に石器群の同時性を考えるしかないため、不確定要素を

II 旧石器時代の遺構と遺物

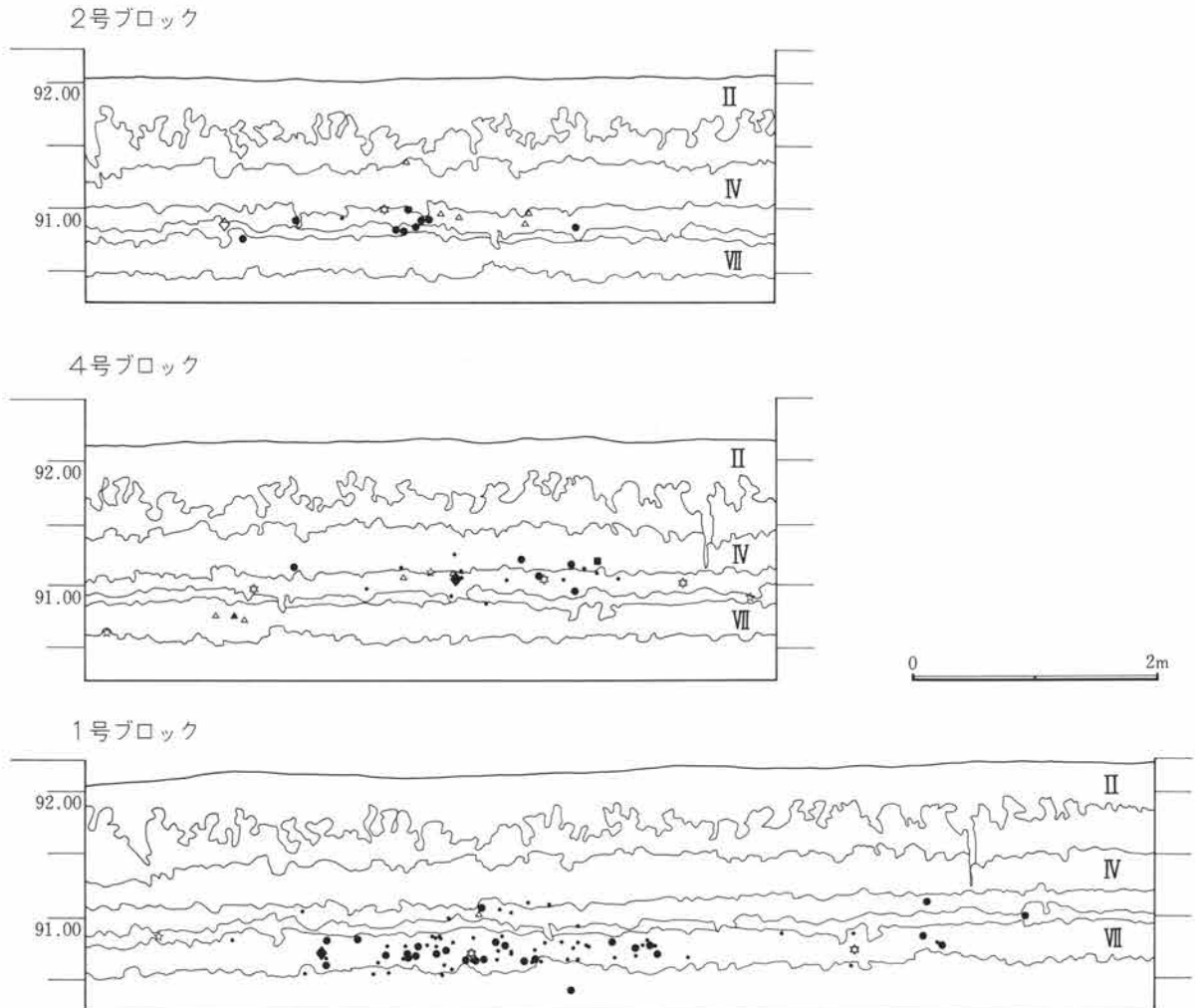
多く含んでいる。現状では母岩は斑晶の入る母岩(母岩-1)と、茶色の特徴的な縞模様の入る母岩(母岩-2)の二群に大別され、更に上記分類の範疇に含まれない資料を縞の入り方の相違で二分(母岩-3 a・b)した。この分類を元に、その分布状態を図に示した。その結果、1~4の母岩は1号ブロックを除く石器の集中地点に存在すること、同一母岩が偏在すること、同時に上述した偏在する同一母岩が少量だが他のブロックにも存在する事実が確認され、ほぼ同時存在した可能性が強い、と判断した。なお、黒曜石の大部分はIV層下部からV層上半の出土だが、VII層にも3点ほど出土しており、うち2点(第7図2・6)は上層出土の黒曜石に極めて良く似た資料が存在するのに対し、1点(第8図8)は小粒の斑晶を多量に含んでいる。遺跡外部から搬入

している可能性が強く、その帰属は判断できない。全体に、接合資料が少ないため、剥片剥離の痕跡に乏しい。恐らく、素材剥片の状態で外部から搬入した可能性が強い、と考えている。

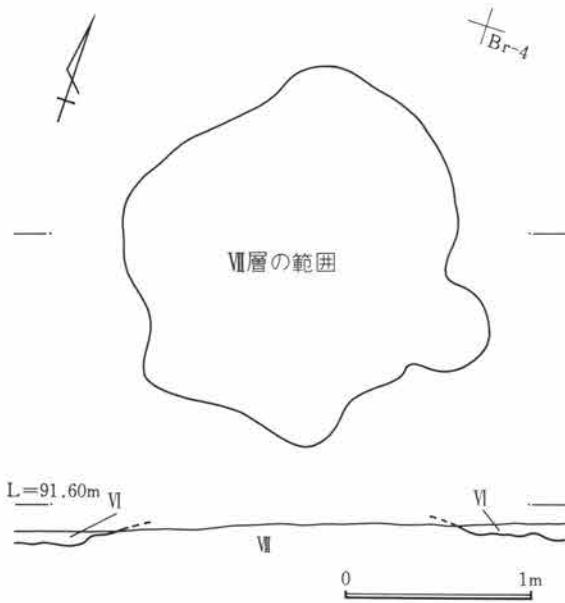
輝緑凝灰岩 2号・4号ブロックで検出した。この地点以外には確認できない。石器の出土層位や分布状態から考えて、黒曜石主体の上層の石器群と同時存在した可能性が強い。

珪質頁岩 2号ブロック及び、その周辺で検出した。資料数量も少なく、帰属を判断するのは困難だが、石器の出土層位は他の黒曜石と同様で、調整の行き届いた打面から槌状剥離を施し、機能部を作出していることから、多分に上層の石器群と同時存在した可能性が強い、と思われる。

黑色頁岩 全体に散漫な分布傾向を示し、その帰属



第30図 石器の出土層位



第31図 Bq-4 G VII層の膨張現象

は明確に判断できない。このうち、Bk-3 Gで検出した二側縁加工のナイフは形態的特徴からVII層の堆積以前の石器と明確に判断されよう。石器の出土層位もVII層で、上記の想定を支持している。なお、他の黑色頁岩の一部には石器の集中地点に重複分布する資料が存在している。現状では、層位的に分離できない状況で、一概に黑色頁岩の帰属は決定できない。

その他の石材 黑色片岩や綠色片岩の片岩類の他、輝緑岩・蛇紋岩・粗粒安山岩・変質玄武岩など多種多様な石材が出土している。単独出土の石器が多く、石器集中地点の西側に分布する傾向が強い。全体にVII層から出土しており、出土層位は下層の石器群に一致する。通常、上記石材は打製石斧や磨製石斧の素材に用いる以外には使用頻度が低く、他の剥片系石器に用いる事例は極めて少ない。このことから考えて、石斧の多出する時期に相当する下層の石器群に帰属する可能性が強い。

以上、母岩の特徴を中心に、若干の形態的特徴や分布状況を検討した。その結果、石器群は大別二群に分離され、調査時の所見と一致した。即ち、今回

検出した石器は、黒曜石・珪質頁岩・輝緑凝灰岩の一群（第一文化層）と、黑色安山岩を主体に、黑色片岩・綠色片岩の片岩類や輝緑岩・変質玄武岩の一群（第二文化層）からなること、文化層・石器群の分離は石材だけでは困難で、黑色安山岩主体の第二文化層にも黒曜石が、黒曜石主体の第一文化層にも黑色安山岩が組成する可能性を示していたのである。更に、一部の定形石器を除き、黑色頁岩は出土点数も少なく、また、形態的特徴にも乏しいため、時期決定は極めて難しく、ここでは出土層位を根拠に推定しているのにすぎない。

分析は意図に反し、石器の形態的特徴の抽出に踏み込んだ分析は欠落しており、同一母岩の分析、及び、石器分布・出土層位の分析に終始した感が強い。何故なら、定形石器が極めて少なく、剥片の分析が大きな比重を占める中で、その剥片の分析から出土石器群を二群に分離する十分な属性が抽出できないためでもある。即ち、上層の剥片は打面調整が顕著で、打面が狭く、なかには点状打面も多く存在するのに対し、下層の剥片は打面調整が顕著な剥片も存在する一方、広い平坦打面を持つ剥片も多く、一概に時期決定の根拠にはできないことから、分析に限界を感じたからでもある。特に、第二文化層の接合資料（第13図、接合資料-4）には、同じ接合資料でありながら打面調整の有無が見られ、個別剥片の特徴から、剥片の時期を決定するには極めて難しい状況が存在していた。その背景には、同じ石核でも目的剥片の形状に応じ、石核の形状に即した打点の選択や打面調整を意図的・選択的に行う剥離の実態を反映しており、時期的に相対的な多寡は指摘できても、特に、個別剥片では時期決定の決定材料とはならない、と理解されよう。

1	2	3	4	5	6
輝緑凝灰岩					
黒曜石					
珪頁					
黒色頁岩					
黒色安山岩					
<p>----- は第II文化層に帰属する可能性を示している</p> <p>----- は第I文化層に帰属する可能性を示している</p>					
第II文化層			第I文化層		

第32図 石器石材と文化層区分

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

1. 概要

縄文時代の遺構は土坑13基を検出したほか、集石1基を確認したのにとどまる。全体に、遺構は台地縁辺に分布する傾向を示しており、その分布状態は概ね土器や石器の分布と一致する。通常、赤城南麓では縄文時代の住居や土坑はソフトローム（Ⅱ層）に似た褐色土で埋没しているため、Ⅱ層上面で遺構を確認するのは極めて難しい。この遺跡にも同様な状況が当て嵌まり、遺物包含層を調査していく過程で、Ⅱ層上面より約10cmほど掘り下げた段階で上記遺構を確認したのである。その結果、残存壁高は本来ある壁高より低い状態を示している。

3号土坑を除き、上記土坑や集石には伴出遺物がほとんどないため、その所属時期は決定できない。また、遺構の周辺から出土した土器も複数型式からなるため、遺物分布から遺構の構築時期を推定するのも難しく、こうした観点でも遺構の所属時期を判断できない。ただ、隣接する飯土井二本松遺跡ではある程度、構築時期の限定が可能な土坑を検出していること、また、土坑は列状に配置する場合も多く、この遺跡の東側までその一部が続く可能性が高い。仮に、こうした推察が事実であるならば、今回検出した一部土坑の構築時期は確実に前期後半から中期前半に限定されよう。

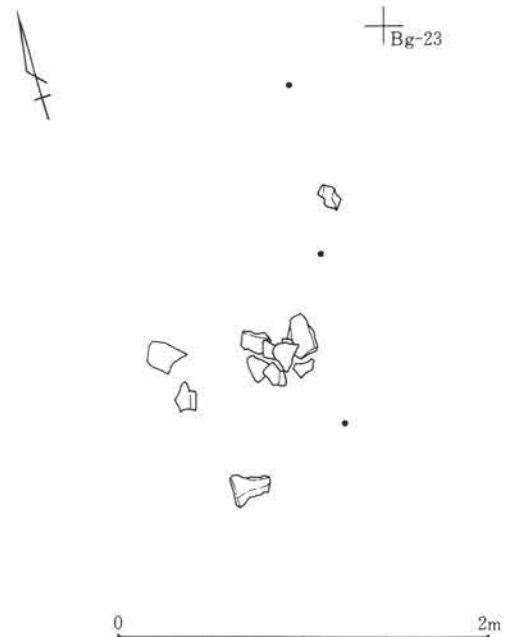
このほか、今回の発掘では台地西側の縁辺部分を中心に土器や石器が多量に出土している。出土土器の内訳は、草創期前半の爪形文土器や押圧縄文土器、草創期末葉の撚糸文土器、早期前半の沈線文土器、前期後半の黒浜式土器・諸磯式土器が主体を占め、このほかにも、数例だが台地の中央付近から中期や後期の土器が出土している。その分布状態は良好に集中する土器型式と、疎に分布する土器型式が指摘されよう。石器も土器と同様に台地の縁辺を中心に出土している。

2. 集石

集石は1基のみ確認した。台地西側の縁辺に近いBf-23Gを中心に長軸1.8m・短軸1.2mの範囲に分布するほか、この集石の西側の地点（Be-23G）にも散漫に分布している。整理の段階で集石と認定したため、判断材料は乏しい。そのため、現状では出土状態や「掘り込み」の有無は断定できない。

集石は板状を呈す粗粒安山岩の角礫で構成され、大形の礫で約1200g・小形の礫で約200gを測り、その平均重量は約580gである。出土した礫には、部分的に破損面が存在することから、その接合関係を検討した。その結果、1例2点の接合資料を確認している。

検出した集石には全く円礫を含まず、専ら角礫を用いており、それぞれ良く似た岩相を持つ。また、現在でもこの石材は遺跡周辺の露頭（独立丘陵など）には豊富に存在している。こうしたことから角礫は同一地点で採集し、遺跡に搬入した可能性が強い、と推定されよう。



第33図 礫の分布（集石）

3. 土 坑

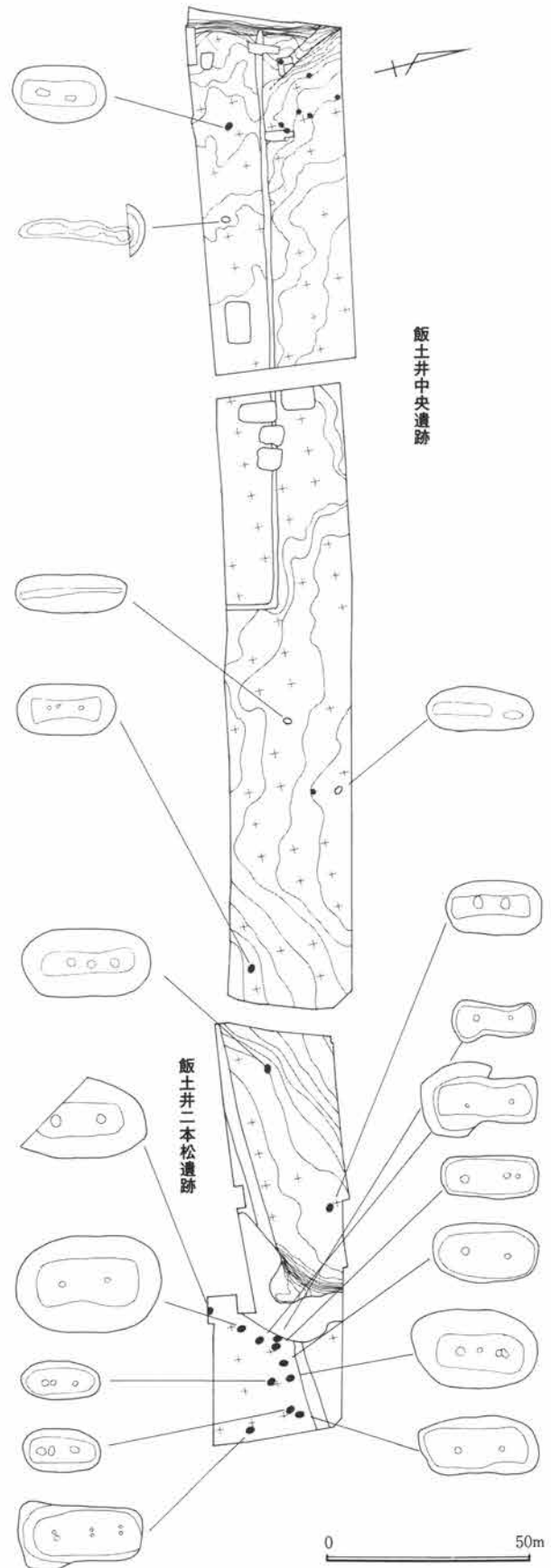
縄文時代に属す土坑は13基を確認している。13基の土坑は、形態的側面や機能的側面から大別して二分され、更に、その形状や規模から四種に細別されよう。

I類 狩猟用の「陥し穴」と考えられる土坑を一括した。土坑の形状や下部構造の相違で二分されよう。
a類 長軸2.5m～3.5m・短軸0.8m～1.2m・深さ0.5m～0.8mを測る溝状の土坑で、「Tピット」と称している「陥し穴」である。坑底は幅20cm前後と狭く、短軸での断面形状はV字状かU字状を呈している。

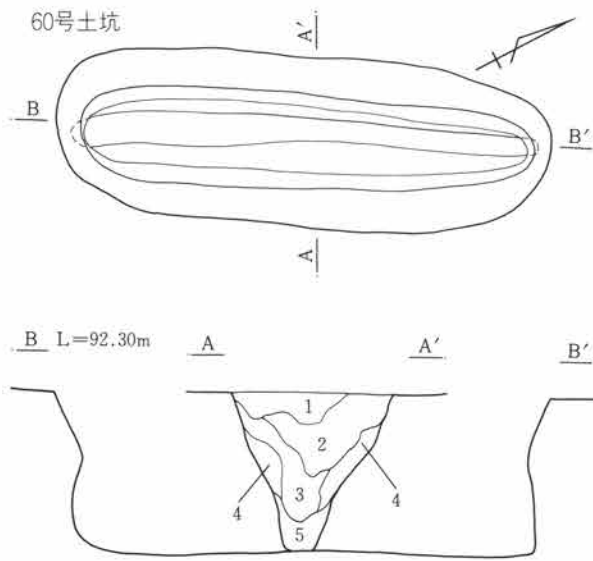
I a類の土坑には60号・39号・62号土坑(第35図)が該当する。3基とも台地縁辺よりやや離れて位置する傾向が窺われ、I b類の土坑の分布状態とは大きく異なる。検出した土坑の中では60号土坑が本類の土坑の典型に最も近い。長軸の断面形状も両端の壁面が深く抉れ込んでおり、その特徴を良く示している。一方、39号・62号土坑には、そうした特徴が見られないうえ、坑底の凹凸が激しく、土坑が完成しているのか判断に迷う。土坑はロームに類似した褐色土で埋没しており、最終的に包含層の調査が終了した時点で確認している。遺構に伴う遺物が検出されないため、その構築時期は不明である。

b類 長軸2.2m・短軸1.1m～1.3m・深さ0.8mを測る土坑で、坑底に下部構造を持つ「陥し穴」である。今回検出した土坑の坑底には2カ所のピットを持ち、漏斗状の断面形状を呈している。

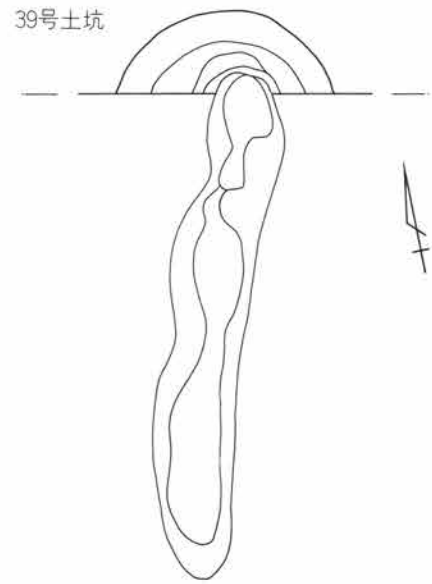
I b類の土坑には、66号・38号土坑(第36図)が該当する。66号土坑が調査区東端のDd-11Gに、38号土坑が調査区西端のBd-2Gにそれぞれ位置しており、I a類の土坑よりやや台地縁辺に近い地点に占地する傾向が指摘されよう。その平面形態は38号が楕円形状を呈す一方、66号は直線的で長方形に近い。坑底の施設は2基とも2カ所にピットを持つ一方で、38号土坑では逆茂木を差し替えた可能性を示していた。土坑の上層には若干黒味の強い土が



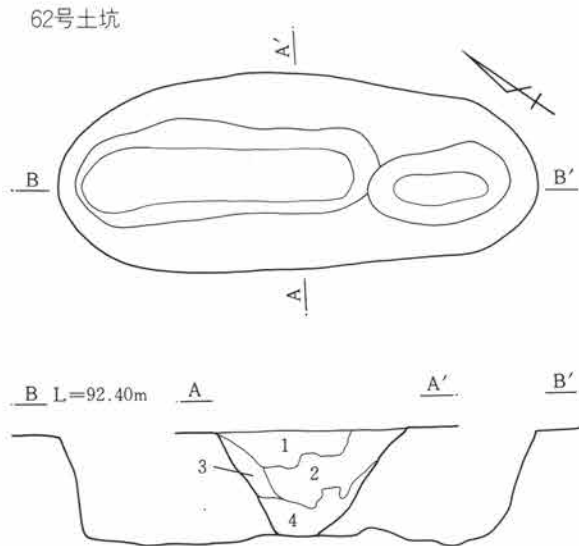
第34図 陥し穴の分布



1. 暗褐色土 ローム粒を混入。しまりは弱い。
2. 黒褐色土 ローム粒を混入（1層より少ない）。しまりは強い。
3. 暗褐色土 ローム粒・ローム土を多く混入。しまりは強い。
4. 褐色土 ローム土を主体とする。しまりは弱い。
5. 〃 ローム粒を主体とする。しまりは強い。



1. 暗褐色土 ローム粒・ローム土を多く含む。粘性に乏しく、しまりは弱い。
2. 褐色土 ローム粒を主体とする。粘性に富む。
3. 〃 ローム土を多く含む。2層よりやや色調は暗い。粘性に富む。



1. 暗褐色土 ローム粒を混入する。
2. 黒褐色土 ローム粒・炭化物を混入する。しまりは強い。
3. 褐色土 ローム粒を主体とする。しまりは弱い。
4. 〃 ローム土を主体とする。しまりは強い。

0 2m

第35図 土坑（陥し穴）（1）

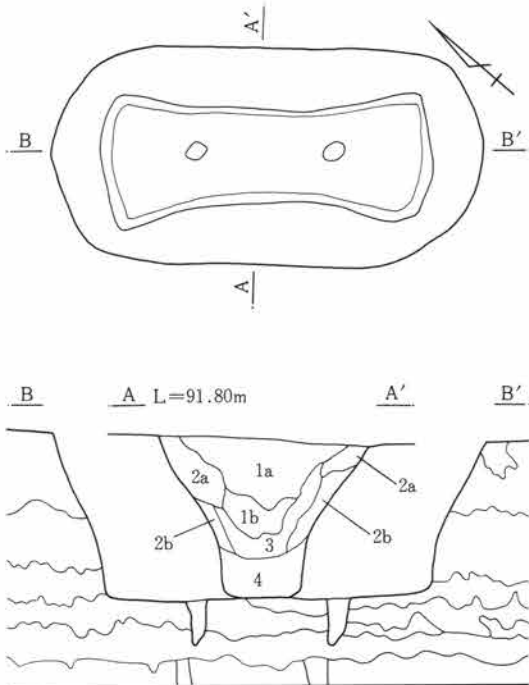
Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

埋没しているため、I a類の土坑に比べ、その確認は易しい。土層は全体的にレンズ状に堆積しており、自然埋没状態を示していた。

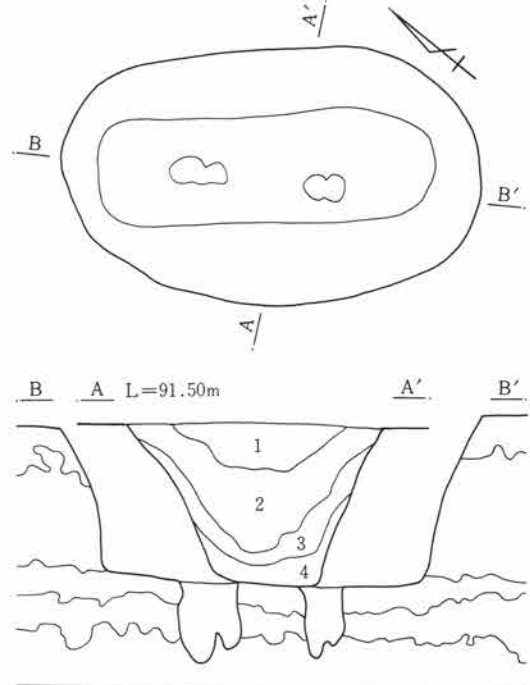
なお、土坑の構築時期は不明だが、特に、遺跡の東側で検出した66号土坑の場合にはこの遺跡に隣接する飯土井二本松遺跡で検出した土坑群を含む分析を要す。旧河道の両岸に分布していた飯土井二本松の土坑群は、河川性氾濫層の層位的関係や土坑より出土した遺物から前期後半から中期前半に構築時期

が限定され、その構築時期が明確な希な例である。左岸と右岸に展開する土坑群の同時性は疑問だが、その分布状態は列状の配置形態を取り、土坑の平面形態や下部施設、埋没土層の在り方も類似していることから、この列状に配置した土坑一群が有機的に関連して機能していた可能性を暗示している。今回検出した66号土坑は飯土井二本松で検出した旧河道の右岸に展開する2基の土坑と一体に構築され、機能していた可能性が指摘されよう。

66号土坑



38号土坑



- 1 a. 黒褐色土 ローム粒を混入。粘性・しまりは強い。
- 1 b. 〃 1 a層よりローム粒を多く混入。
- 2 a. 暗褐色土 褐色土をブロック状に混入。
- 2 b. 〃 ローム粒・ローム土を多く混入。しまりは強い。
- 3. 褐色土 ローム粒・ローム土を主体とする(崩壊土)。
- 4. 暗褐色土 ローム土を主体とする。壁体崩壊土か。坑底に近い部分では粘性が強く壁体崩壊土とは区別されよう。

※ pit には黒色有機質土の堆積は確認できない。

- 1. 暗褐色土 やや砂質で、黒褐色土を斑状に含む。
- 2. 黒褐色土 粘性に乏しく、やや砂質。ローム粒を少量含む他、暗褐色土を斑状に含む。
- 3. 暗褐色土 暗褐色土を少量混入する。粘性に乏しく、やや砂質。
- 4. 褐色土 ローム土を多く含む層。

※黒色有機質土の堆積は確認できない。pit を差し替えている可能性が強い。

0 2m

第36図 土坑(陥し穴)(2)

Ⅱ類 楕円形状の平面形状を持つ土坑を一括した。土坑の用途は確定できないため、土坑の深浅で二分した。

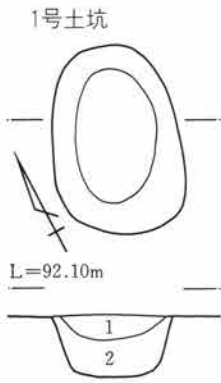
a類 長軸1.0m～1.3m・短軸0.8m～1.0mを測り、その平面形状が楕円形状を呈す土坑を一括した。本類の土坑は深さ0.3m前後で、平均して浅い。概ね、タライ状の断面形状を呈す。

Ⅱ a類の土坑には、1号～3号土坑（第37図）が該当する。3基ともロームに似た褐色土で埋没しており、最終的に包含層の調査が終了した時点で確認した。土坑の時期は不明だが、3号土坑の埋土より爪形文の土器片が1点（第37図1）出土しており、

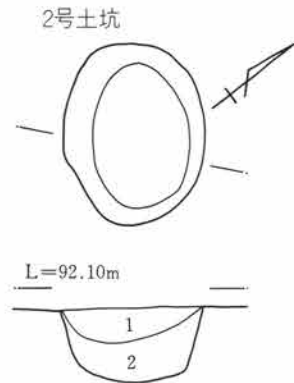
その形態が似る土坑3基の構築時期を示す可能性を残している。

b類 a類に分類した土坑に比較してやや大形で、長軸1.5m・短軸1.0mを測る。本類に分類した土坑は深さ0.8m前後を測り、a類の土坑に比べ、平均して深い。

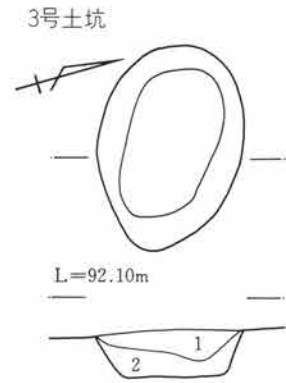
Ⅱ b類の土坑には、32号～35号・63号土坑（第37・38図）が該当する。C区で検出した63号土坑を除き、4基とも台地西側の縁辺に位置する。その確認状態はⅡ a類の土坑と同様で、褐色土を主体にレンズ状の堆積状態を示していた。坑底までやや深く、その機能は不明である。



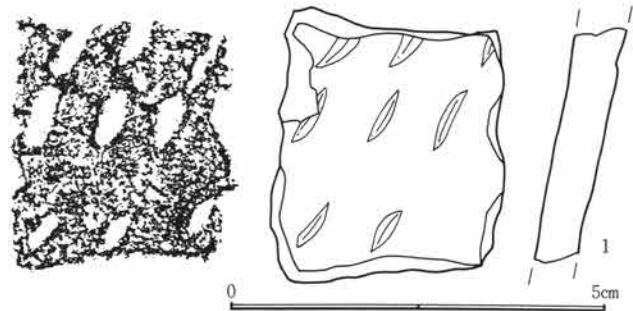
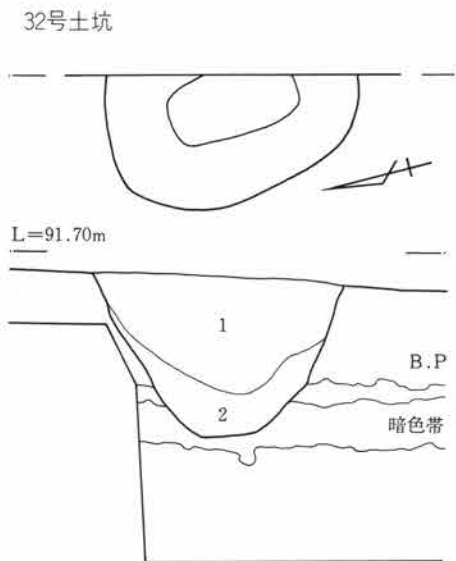
1. 暗褐色土 ローム粒を含む。
2. 〃 ローム土を多く含む。



1. 暗褐色土 ローム土と炭化物を少量混入。
2. 〃 ローム粒・ローム土を多量に含む。



1. 暗褐色土 ローム土を混入。
2. 褐色土 ローム土を多量に含む。

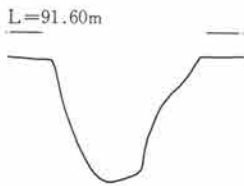
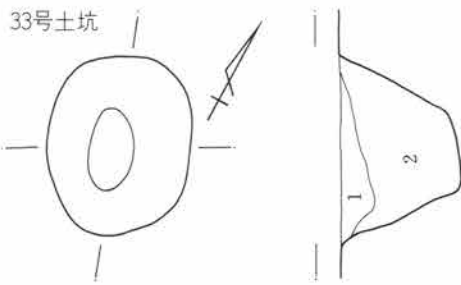


1. 暗褐色土 白色パミス・ローム粒を混入。しまりは強い。
2. 〃 ローム土を多量に混入する1層よりやや明るい色調を呈す。

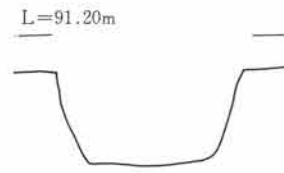
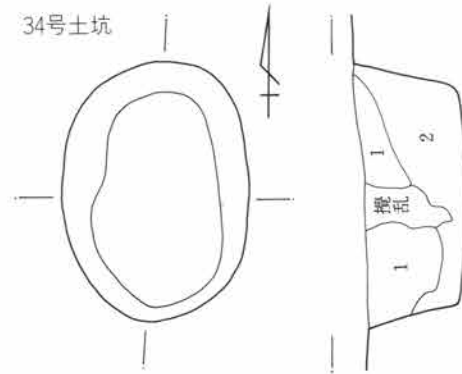


第37図 土坑（3）

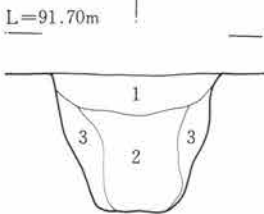
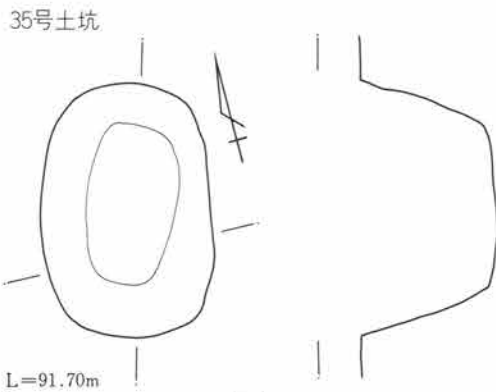
Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



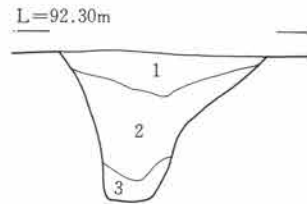
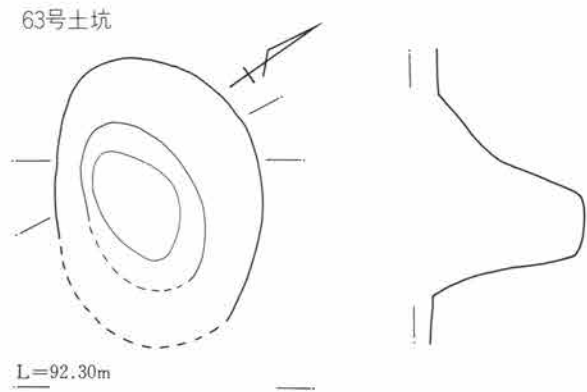
1. 暗褐色土 ローム土を多く含む。
2. 〃 ローム土を多量に混入し、全体によくしまっている。



1. 暗褐色土 ローム粒・硬質暗褐色土ブロックの混入。かたくよくしまっている。
2. 褐色土 1層にロームブロックを含み、色調がやや明るい。



1. 暗褐色土 ローム粒・ローム土の混入層。しまりは強い。
2. 〃 ローム粒・ローム土の混入層。しまりは強い。1層よりやや明るい色調を呈す。
3. 褐色土 ローム土を主体とする（崩落土）



1. 褐色土 ローム粒を多量に混入する。しまりは強い。
2. 暗褐色土 白色バミスを少量混入する。
3. 〃 3層に比べやや明るい色調を呈す。白色バミスの混入は少ない。

0 2m

第38図 土坑（4）

4. 包含層出土の遺物

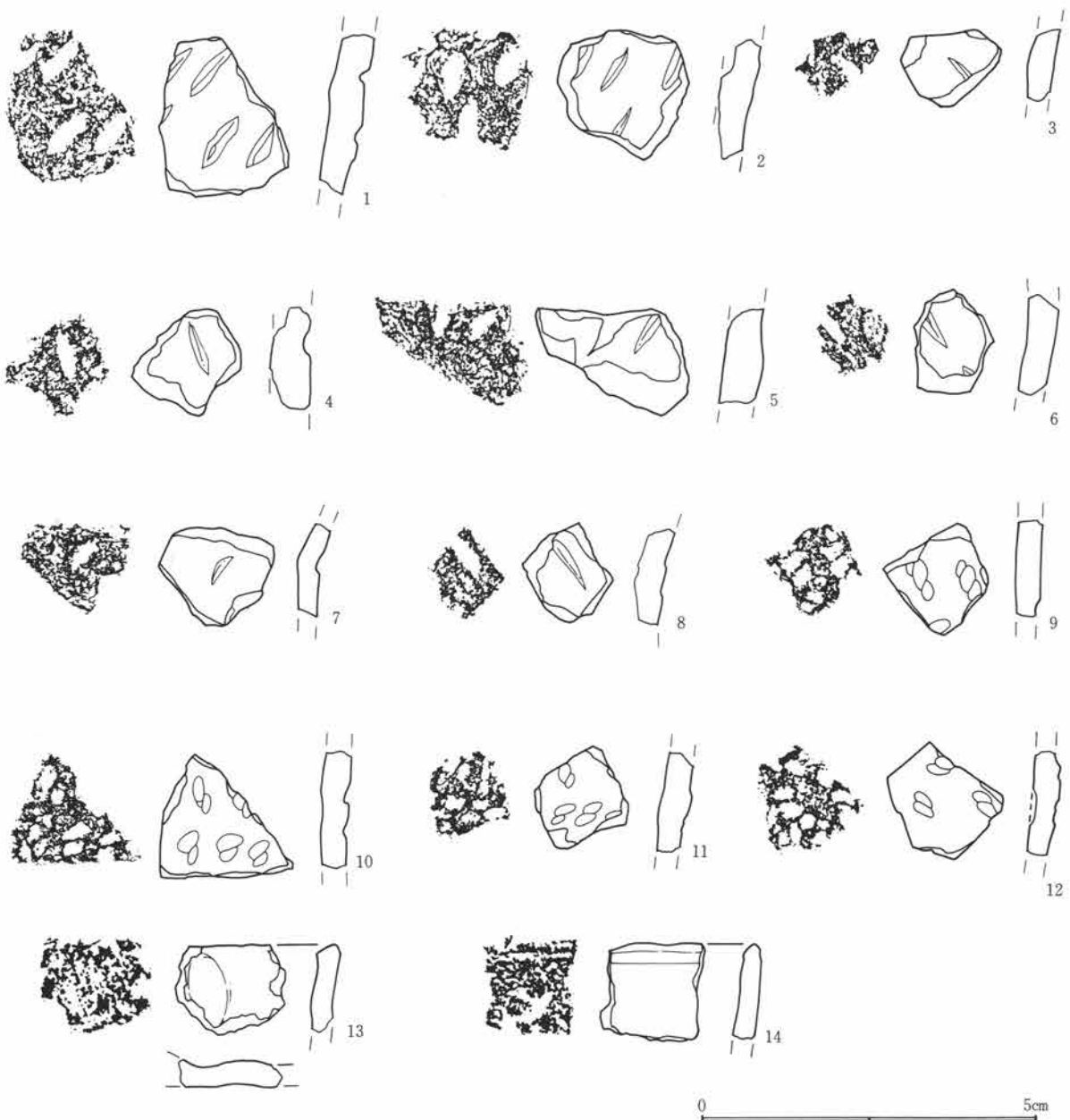
a-1 出土土器

今回の発掘調査では総計216点の土器が出土した。その大半は台地西側の縁辺に近いA区とB区に出土しており、特に、B区北側のⅡ類土坑(1号～3号)の周辺と、B区南側の2号住居周辺、Bp・Bq-23・24G付近の3地点に集中して出土している。大部分が包含層(第Ⅱ層)の出土で、遺構に伴う遺物は極めて少ない。この地点全体がⅡ層自体の遺存状態が良好で、遺構部分を除いて、本来の遺物分布状態を反映している可能性が強い。出土土器は1類～8類に分類され、撚糸文系土器群や前期後半の土器を主体に出土している。

めて少ない。この地点全体がⅡ層自体の遺存状態が良好で、遺構部分を除いて、本来の遺物分布状態を反映している可能性が強い。出土土器は1類～8類に分類され、撚糸文系土器群や前期後半の土器を主体に出土している。

第1群土器(第39図)

草創期前半の土器を一括した。爪形文を施す一群(a類)と、押圧縄文を施す一群(b類)、および、



第39図 包含層出土の土器(第1群土器)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

無文の一群（c類）の三群からなる。

a類 爪形文土器は3号土坑から出土した1点（第37図1）を加えて、9点が出土している。3号土坑の1点を除いて、他の8点（第39図1～8）は器壁が剥落しており、その遺存状態は悪い。爪の形状や土器の胎土が類似する一方、爪の方向が違う土器が存在することから、複数個体が混在する可能性も否定できない。

8点とも斜位施文を特徴とし、同一方向の爪形文を横位帯状に施文している。1・2・4の爪形文は2帯～3帯に施文され、同一の方向に傾いている。完全な状態で残る爪形文は長さ8mm～10mm・幅2mm～3mmを測り、人の爪か、爪に類した工具を用いて、施文している。爪形文は全体的に鋭く、レンズ状の平面形態を呈す。その断面形状は中央が深く、左右に大きく開いており、やや歪んだV字状の断面形状を呈している。剥落が激しいため内面の整形は不明だが、外面は丁寧に研磨され、焼成も良好で、やや赤味の強い色調を呈す。器壁は4mm～6mmと薄く、胎土には黒色鉱物や白色鉱物を多く含む。石英の混入は少ない。

b類 押圧縄文は4点（第39図9～12）が出土している。b類に分類した土器は整理段階で確認した。爪形文土器と同様に横位帯状の文様構成を採る一方、斜位と縦位を一带づつ交互に組み合わせ施文する。原体はL撚りの1段の縄を使用している。このなかには1点のみ斜め左に下がる文様構成を採る土器片(12)が存在しており、他の3点と施文の在り方が異なる。胎土には黒色鉱物（輝石）の混入が多く、a類の土器とは胎土が大きく異なる。器壁は4mm前後を測り、薄い。

c類 無文土器は7点が出土している。器壁は3mm～4mmを測り、全体に薄手で、胎土の特徴はB類に類似している。分布もb類と共通しており、同一個体を含む可能性が強い。図示した2点は口縁部の小破片である。13は口唇部分を内外両面から削ぎ落とし、中央付近で尖る口唇形態を呈す。外面口縁部分は沈線状に窪む。14は凹凸に富む口唇形態を呈す。

口縁直下に指頭状の圧痕が見られ、盛り上がる。

第2群土器（第40図）

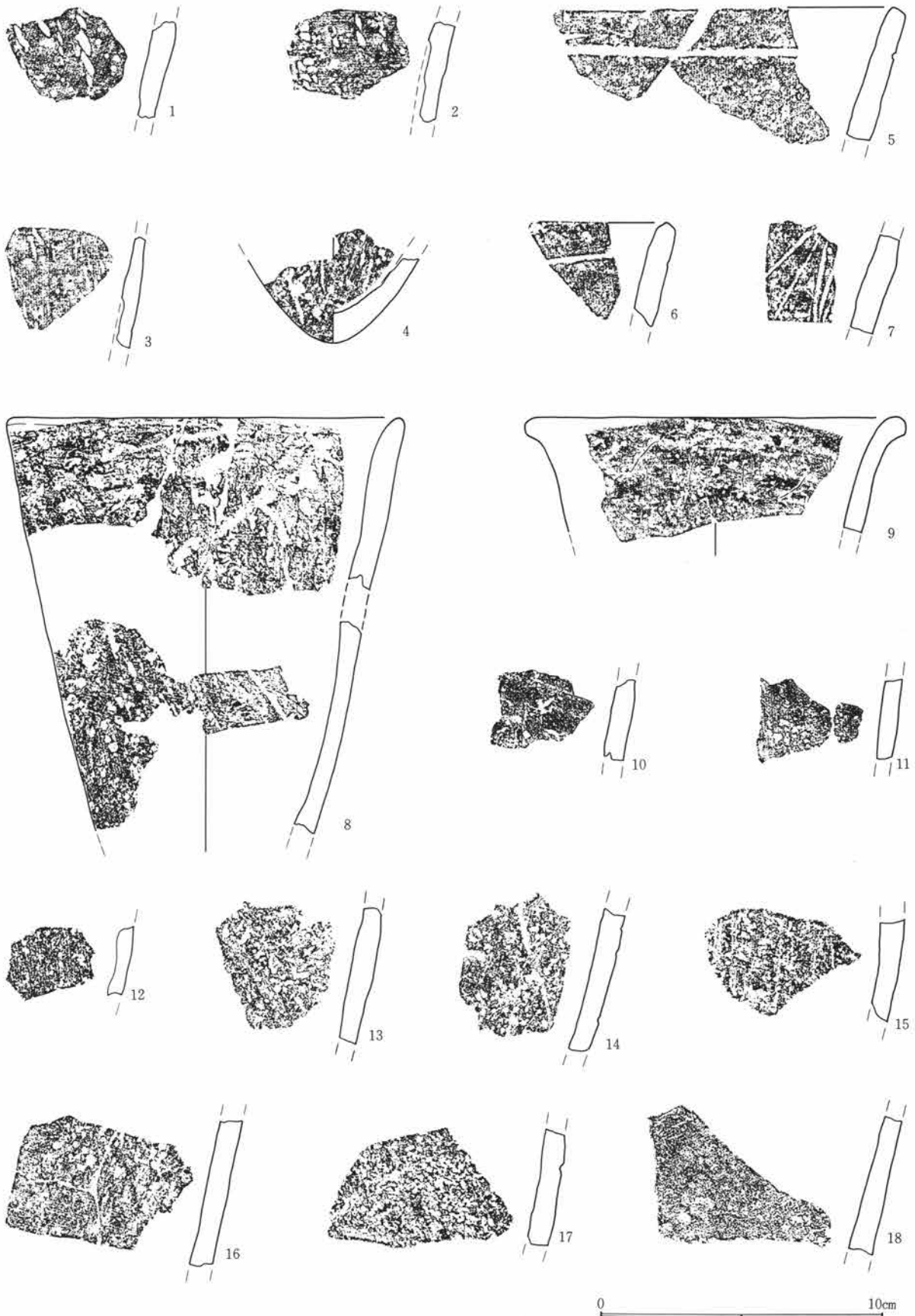
撚糸文系土器群を一括した。やや粗い撚糸を施文する一群(a類)と、沈線を施す一群(b類)、無文土器の一群(c類)の3群からなる。

a類 14点（第40図1～4・9）が出土している。1・2は条間隔の粗いRの撚糸文を施文する土器で、太い縄の間に細い縄が見られ、太細2種の撚糸原体を使用している。外面は丁寧に研磨され、内面は荒れている。胎土には、輝石や凝灰岩・石英質岩片を含む。焼成は堅い。3・4はRとLの2種類の原体を用い、撚糸条痕を施す。撚糸原体は細く、部分的に撚り戻る。外面は丁寧に研磨され、内面は荒れている。胎土には、輝石や凝灰岩、石英を多く混入し、焼成は堅い。9は肥厚・外反した丸味を持つ口縁部である。口縁直下より粗い撚糸文を施文してから、器面全体を撫でている。焼成は堅く、赤褐色に近い色調を呈す。胎土には輝石や石英、凝灰岩・石英質岩片を含む。

b類 5点（5～7）が出土している。5・6は口縁の直下に沈線1条を巡らす口縁部の小破片である。口縁部は角頭状で、外面を撫でた後、研磨している。色調は褐色に近く、やや明るい。胎土には、輝石・石英・凝灰岩・シソ輝石・石英質岩片を含む。7は胴部破片で、縦位・斜位に沈線を施す。色調は褐色に近く、黄味が強い。胎土には、石英やスコリアを含む。

c類 57点（8・10～18）が出土している。胎土や色調の異同で、大別6種に分類できよう。第40図8は胎土に結晶片岩や石英質片岩を多量に含む無文の土器で、口縁・胴部の破片からなる。口縁形態は丸味を持ち、一部で角頭状を呈す。内外両面とも器面全体を丁寧に撫でており、色調は赤褐色に近く、暗い。焼成は堅い。無文-2に分類した。11点が出土。10・11は赤味の強い褐色の胴部破片で、多少スコリアを混入する。無文-3に分類。12は砂粒や結晶片岩を混入する胴部破片で、裏面器壁は剥落している。

4. 包含層出土の遺物



第40図 包含層出土の土器 (第2群土器)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

色調は8に似る。無文-4に分類した。44点が出土。13-15・17は胎土に石英を混入するほか、石英質岩片・黒雲母・凝灰岩を混入する。全体に、器壁が荒れており、その遺存状態は悪い。色調は褐色に近く、黄味が強い。無文-6に分類した。10点が出土。16は輝石を混入するほか、凝灰岩を多く含む。外面は丁寧に撫で、若干研磨も見られ、状態は良い。第40図5・6と同一個体の可能性が高い。無文-5に分類した。11点が出土している。18は石英や輝石を混入するほか、凝灰岩を含む胴部破片で、内面の剝落が激しい。外面は丁寧に撫で、若干研磨している。無文-7に分類した。3点が出土。

第2群土器・a類～c類は「東山式土器」に比定されよう。

第3群土器 (第41図)

沈線文土器を一括した。第3群土器は10点が出土しており、このうち7点を図示した。



第41図 包含層出土の土器 (第3群土器)

1は口縁直下に2条の沈線を巡らし、その直下に山形の沈線を施す。全体に砂粒の混入は少なく、微量の繊維を含む。内面に比べ、外面の整形は丁寧に、全面を良く撫でている。赤褐色に近い色調を呈す。2～7は貝殻腹縁文や列点状沈線、蛇行沈線を伴う一群である。全体の文様構成は不明だが、7は弱く屈曲するキャリパー状の器形を呈し、「変形菱形文」を構成する。胎土には砂粒(石英が多い)を多く含む、外面は丁寧に撫でている。焼成は堅い。色調は2・4～6が黄褐色、3・7が橙褐色で、それぞれ同一個体の可能性が高い。6は焼成前に円孔を穿つ。田戸上層式土器に比定されよう。

第4群土器 (第42図1～5)

胎土に繊維を含む、前期後半・黒浜式土器を一括した。31点が出土している。

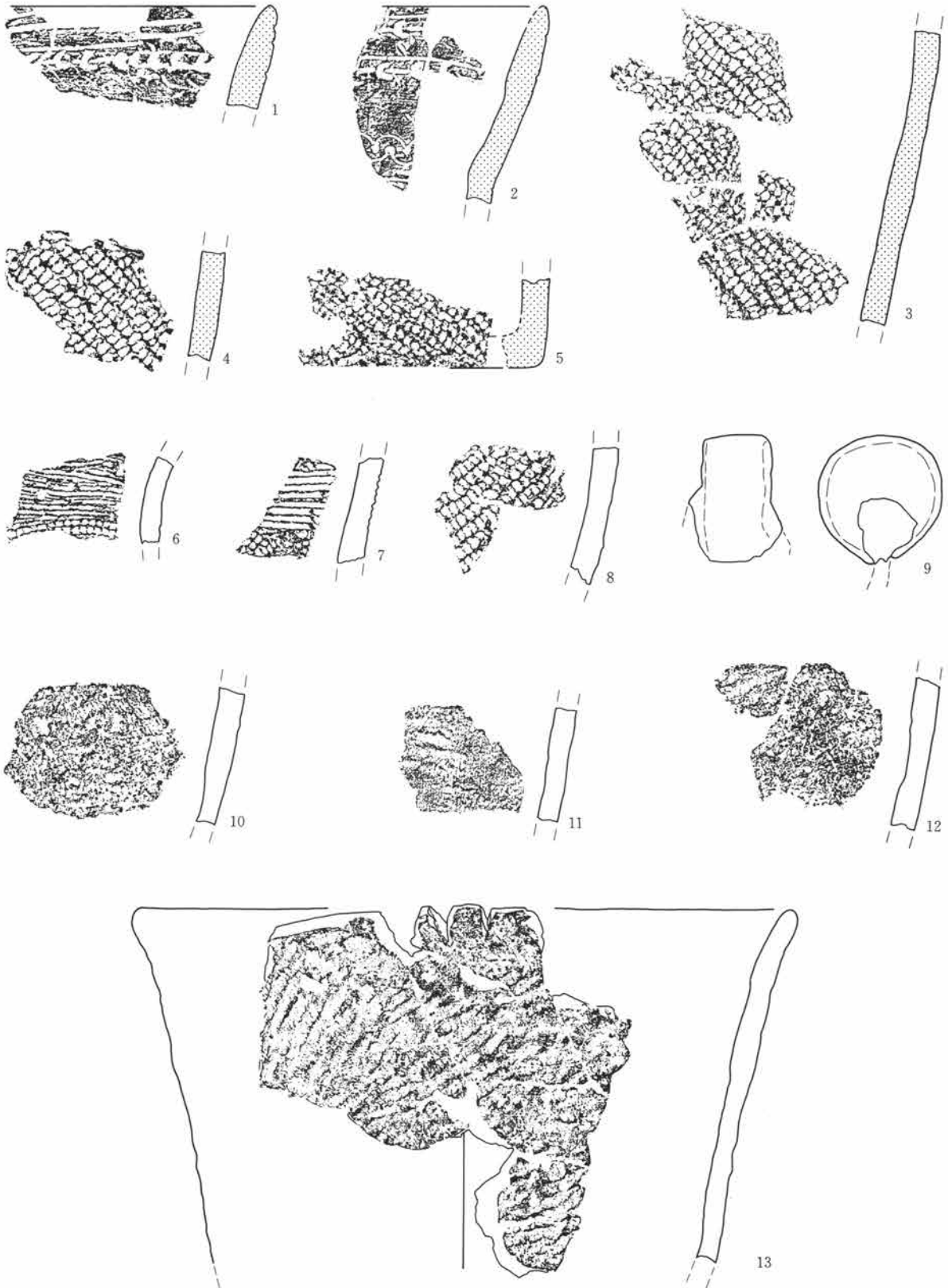
1・2は直線的に開く口縁部の小破片で、口唇下に爪形文を伴う平行沈線を2条に巡らし、「く」の字に折れる頸部直上にコンパス文を施文している。3～5は器面全面にRLの原体を用い、施文している。3点とも同一個体で、胎土には石英や凝灰岩を多く混入するほか、赤色スコリアを含んでいる。

第5群土器 (第42図6～13)

前期後半・諸磯式土器を一括した。5群の土器は60点が出土している。

6・7は集合沈線を横位に施文している。6は下半に沈線文の上から列点状の刺突文を2条施文する。胎土には輝石や石英を多く含む。7は地文に縄文を施文し、横位に集合沈線を施す。胎土には石英や輝石の他、石英質岩片を混入する。8は胴部破片で、LRの縄文を施文している。胎土は6・7によく似る。6～8は諸磯a式土器に位置づけられよう。9は口縁部に付く円形の貼付文で、諸磯c式土器に位置づけられよう。10～12は器面全体に浅く粗いLの無節縄文を施文する。3点とも同一個体で、石英質岩片を多量に混入している。13は外反気味に開く深鉢で、口縁部に文様の単位を示すV字状の刻み目

4. 包含層出土の遺物



第42図 包含層出土の土器（第4群・第5群土器）

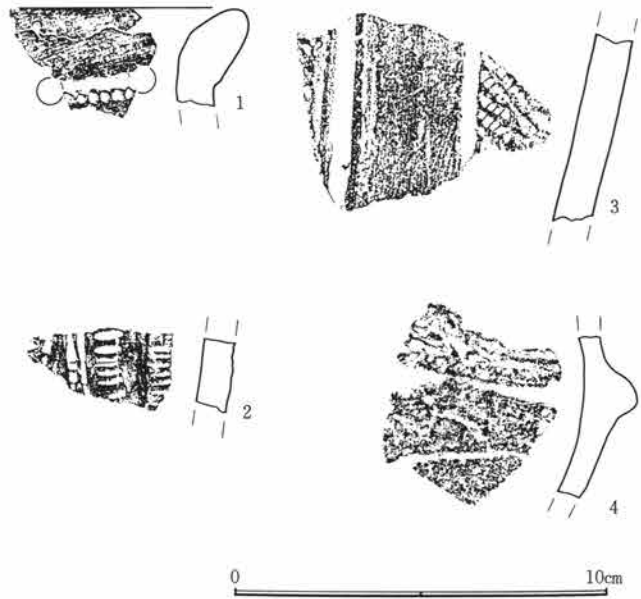
Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

を持つ。胎土には石英や輝石の他、石英質岩片を混入する。諸磯b式土器に比定されよう。

第6群土器 (第43図)

中期・後期の土器を一括した。6類の土器は10点が出土している。

1は有孔土器の口縁部小破片である。「く」の字に屈曲する頸部に円孔2個が穿たれ、その直下に連続刺突文を施文している。胎土には白色鉍物を多く混入するほか、スコリアを含む。2は胴部破片で、隆帯の両側に結節沈線文とキャタピラ文を縦位に施文している。胎土には白色鉍物・石英を混入する。3は沈線を垂下させ、幅広の無文帯を構成し、RLの縄文を施文している。石英・輝石・石英質岩片を混入する。4は胴部破片で、隆帯を横位に持つ。白色鉍物を多く混入するほか、少量の石英を含んでいる。



第43図 包含層出土の土器 (第6群土器)

1・2は勝坂式土器に、3は加曾利E3式土器に、4は堀之内1式土器に比定されよう。

a-2 出土石器

調査区内には草創期・爪形文から前期後半の土器を主体に、中期や後期の土器まで混在して出土している。出土石器の一部にはその型式的特徴からある程度その所属時期の明確な資料も存在する。だが、大半が上述した複数型式の土器に混在して出土しており、個別石器の分析のみでは、その所属時期の推定は限界に達している。石器はA区・B区を主体に、合計644点が出土している。その内訳は剥片や破片が主体で全体の66% (429点) を占めている。このほかには礫や礫片が多く、約10% (68点) を占める。残り全体の四分の1が石器で、石鏃や削器の占める割合が高い。また、磨石など礫素材の石器は撚糸文系土器群や前期後半の土器を出土する割には概して少なく、奇異に感じている。一方、石器石材は他の赤城山麓の遺跡と同様、剥片石器には黒色頁岩を主体に使用し、礫石器に粗粒安山岩を使用している。上述の石材2種で出土した石器総量の70%を占めて

おり、この時期、この地域の石材選択の傾向を良く示している。旧石器時代に多用した黒色安山岩が、縄文時代の山麓一帯の地域では石鏃や削器など少数器種に限定され、量的にも出土総量が減少したのであり、黒色頁岩が主体を占めたのである。その理由は、恐らく黒色頁岩が多種多様な機能・用途を満足するのに十分な石材性状を備えていたということであろう。今回確認した石器石材は25種類以上を確認している。

なお、この遺跡では出土した資料を対象に、石器の接合を試みた。その結果、40例に及ぶ接合資料を確認した。この時代の剥片剥離の解明・実態把握に向け、資料呈示しておく。接合資料には自然状態の中で破損した資料も含み、余り良好な資料とはいえないため、ここでは剥離の明確な資料に限定して、掲載した。

4. 包含層出土の遺物

器種 (644点)

①	③ ④	⑤ 剥片 159点 (24.69%)	⑥ 碎片 270点 (41.93%)	⑦
---	-----	--------------------	--------------------	---

②

① 石 鎌 楔形石器 削 器 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片	27点 (4.19%) 3点 (0.47%) 21点 (3.11%) 28点 (4.50%) 17点 (2.64%)	③ 敲 石 磨 石 凹 石 多孔石・石 皿・台 石・砥 石	10点 (1.55%) 8点 (1.24%) 3点 (0.47%) 各1点 (各0.15%)
② 打製石斧 三角錐形石器・スタンプ形石器・ 磨製石斧・片刃石器	6点 (0.93%) 各1点 (各0.16%)	④ 石 核 ⑦ 礫 礫 片	16点 (2.47%) 28点 (4.35%) 40点 (6.21%)

石材 (644点)

① 黑色頁岩 392点 (60.87%)	②	③ 粗粒安山岩 70点(10.87%)	④	⑤
----------------------	---	---------------------	---	---

⑥

② 黑色安山岩 ④ 黒曜石 チャート 点紋頁岩 砂 岩 変質玄武岩・溶結凝灰岩 流紋岩 頁 岩	47点 (7.30%) 14点 (2.17%) 24点 (3.73%) 39点 (6.06%) 12点 (1.86%) 各6点 (各0.93%) 5点 (0.78%) 4点 (0.62%)	⑤ 珪質変質岩・石英閃緑岩 輝緑岩 珪質頁岩・細粒安山岩・灰色安山岩・ 変質安山岩・花崗岩・珪質凝灰岩・ 閃緑岩・玉 髓・ガラス質安山岩・ 雲母石英片岩	各3点 (各0.47%) 2点 (0.31%) 各1点 (各0.15%)
		⑥ 石材不明	7点 (1.09%)

A区 器種 (17点)

①	②	③ 剥片 5点 (29.4%)	④	⑤ 礫・礫片 5点(29.4%)
---	---	-----------------	---	------------------

① 石 鎌・削 器・使用痕ある剥片	各1点 (各 5.9%)
② 敲 石	1点 (5.9%)
④ 碎 片	3点 (17.6%)

B区 器種 (578点)

①	③	⑤ 剥片 139点 (24.0%)	⑥ 碎片 265点 (45.8%)	⑦
---	---	-------------------	-------------------	---

②

④

① 石 鎌 楔形石器 削 器 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片	22点 (3.8%) 3点 (0.5%) 13点 (2.3%) 24点 (4.2%) 11点 (1.9%)	② 打製石斧 三角錐形石器・スタンプ形石器・ 磨製石斧・片刃石器	3点 (0.5%) 各1点 (各 0.2%)
③ 敲 石・磨 石 凹 石 多孔石・石 皿・台 石・砥 石	各7点 (各 1.2%) 3点 (0.5%) 各1点 (各 0.2%)	④ 石 核 ⑦ 礫・礫 片	16点 (2.8%) 57点 (9.9%)

C区 器種 (33点)

①	②	③	④ 剥片 9点 (27.3%)	⑤	⑥
---	---	---	-----------------	---	---

① 石 鎌 削 器 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片	1点 (3.0%) 6点 (18.2%) 4点 (12.1%) 3点 (9.1%)	② 打製石斧 ③ 敲 石 磨 石	2点 (6.1%) 2点 (6.1%) 1点 (3.0%)
⑤ 碎 片 ⑥ 礫・礫片	1点 (3.0%) 4点 (12.1%)		

D区 器種 (14点)

①	②	③ 剥片 5点 (35.7%)	④	⑤
---	---	-----------------	---	---

① 石 鎌・使用痕ある剥片 削 器	各2点 (各14.3%) 1点 (7.1%)
② 打製石斧 ④ 碎 片 ⑤ 礫 片	1点 (7.1%) 1点 (7.1%) 2点 (14.3%)

第44図 器種構成

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

石 鏃 (27点)

①	②	③ 黒曜石 7点 (25.9%)	④ チャート 9点 (33.3%)	⑤	⑥
---	---	---------------------	----------------------	---	---

- ① 黒色頁岩 2点 (7.4%)
- ② 黒色安山岩 4点 (14.8%)
- ⑤ 頁岩 2点 (7.4%)
- ⑥ 点紋頁岩・珪質頁岩・珪質凝灰岩 各1点 (各 3.7%)

楔形石器 (3点)

黒色頁岩 1点 (33.3%)	黒色安山岩 1点 (33.3%)	点紋頁岩 1点 (33.3%)
--------------------	---------------------	--------------------

削 器 (21点)

① 黒色頁岩 13点 (61.9%)	②	③	④
--------------------	---	---	---

- ② 黒色安山岩 4点 (19.1%)
- ③ 黒曜石 2点 (9.5%)
- ④ 溶結凝灰岩・灰色安山岩 各1点 (各 4.8%)

加工痕ある剥片 (28点)

① 黒色頁岩 21点 (75.0%)	②	③
--------------------	---	---

- ② 黒色安山岩 5点 (17.9%)
- ③ 黒曜石 2点 (7.1%)

使用痕ある剥片 (17点)

① 黒色頁岩 21点 (75.0%)	②
--------------------	---

- ② 黒曜石・頁岩・輝緑岩 各1点 (各 5.9%)

打製石斧 (6点)

黒色頁岩 6点 (100%)

凹 石 (3点)

粗粒安山岩 3点 (100%)

磨 石 (8点)

① 粗粒安山岩 7点 (87.5%)	②
--------------------	---

- ② 石英閃緑岩 1点 (12.5%)

敲 石 (10点)

①	② 砂岩 4点 (40.0%)	③
---	--------------------	---

- ① 粗粒安山岩 2点 (20.2%)
- ③ 変質玄武岩・流紋岩・石英閃緑岩・
変質安山岩 各1点 (各10.0%)

石 核 (16点)

① 黒色頁岩 12点 (75.0%)	②	③
--------------------	---	---

- ② チャート 1点 (6.3%)
- ③ 点紋頁岩 3点 (18.8%)

剥 片 (159点)

① 黒色頁岩 129点 (81.1%)	②	③	④
---------------------	---	---	---

- ② 黒色安山岩 12点 (7.6%)
- ③ 点紋頁岩 8点 (5.0%)
- ④ チャート 3点 (1.9%)
- 黒曜石・砂岩・変質玄武岩・流紋岩・
閃緑岩・ガラス質安山岩・石材不明 各1点 (各 0.6%)

碎 片 (270点)

① 黒色頁岩 187点 (69.3%)	②	③	④	⑤
---------------------	---	---	---	---

- ② 黒色安山岩 21点 (7.8%)
- ③ 点紋頁岩 26点 (9.6%)
- ④ 粗粒安山岩 11点 (4.1%)
- ⑤ チャート 8点 (3.0%)
- 溶結凝灰岩 3点 (1.1%)
- 砂岩 2点 (0.7%)
- 黒曜石・変質玄武岩・流紋岩・頁岩・
輝緑岩・粗粒安山岩・玉髓 各1点 (各 0.4%)
- 石材不明 5点 (1.9%)

礫 (28点)・礫片 (40点)

① 粗粒安山岩 43点 (63.2%)	②	③	④	⑤	⑥
---------------------	---	---	---	---	---

- ② 黒色頁岩 6点 (8.8%)
- ③ チャート 3点 (4.4%)
- ④ 砂岩 5点 (7.3%)
- ⑤ 溶結凝灰岩・珪質変質岩 各3点 (各 4.4%)
- ⑥ 蛇紋岩・雲母石英片岩・石英閃緑岩・
花崗岩 各1点 (各 1.5%)
- ⑦ 石材不明 1点 (1.5%)

三角錐形石器 (黒色頁岩)
 スタンプ形石器・片刃石器・多孔石・石皿・台石(粗粒安山岩)
 磨製石斧 (変質玄武岩)
 砥石 (流紋岩) 各1点

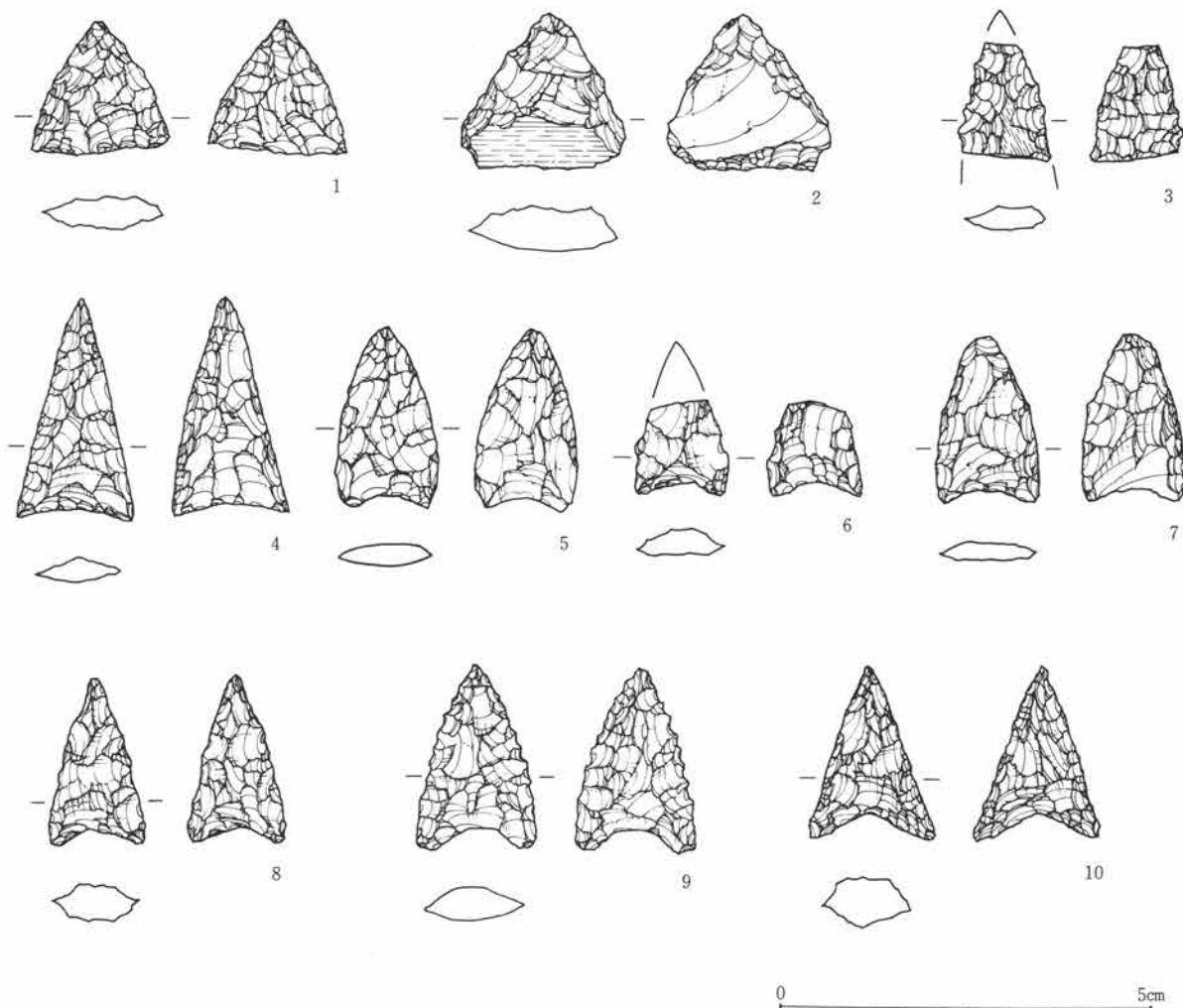
第45図 石器と石材構成

石鏃 (第46・47図)

石鏃は27点が出土している。形態の内訳は、凹基無茎鏃21点・平基無茎鏃2点で、このほかにも形態が不明な石鏃4点が出土している。欠損資料は14例と、半数以上が欠損している。先端部や返し部を欠損している場合が多い。石器石材はチャートが10例と最も多く、次いで黒曜石・黒色安山岩が、そのほか珪質頁岩・頁岩を使用している。なお、石鏃の中には完成状態で出土した資料の他に、欠損資料や製作の途中で放棄したとも思えるほど、その形態が完成状態に近い資料が存在している。

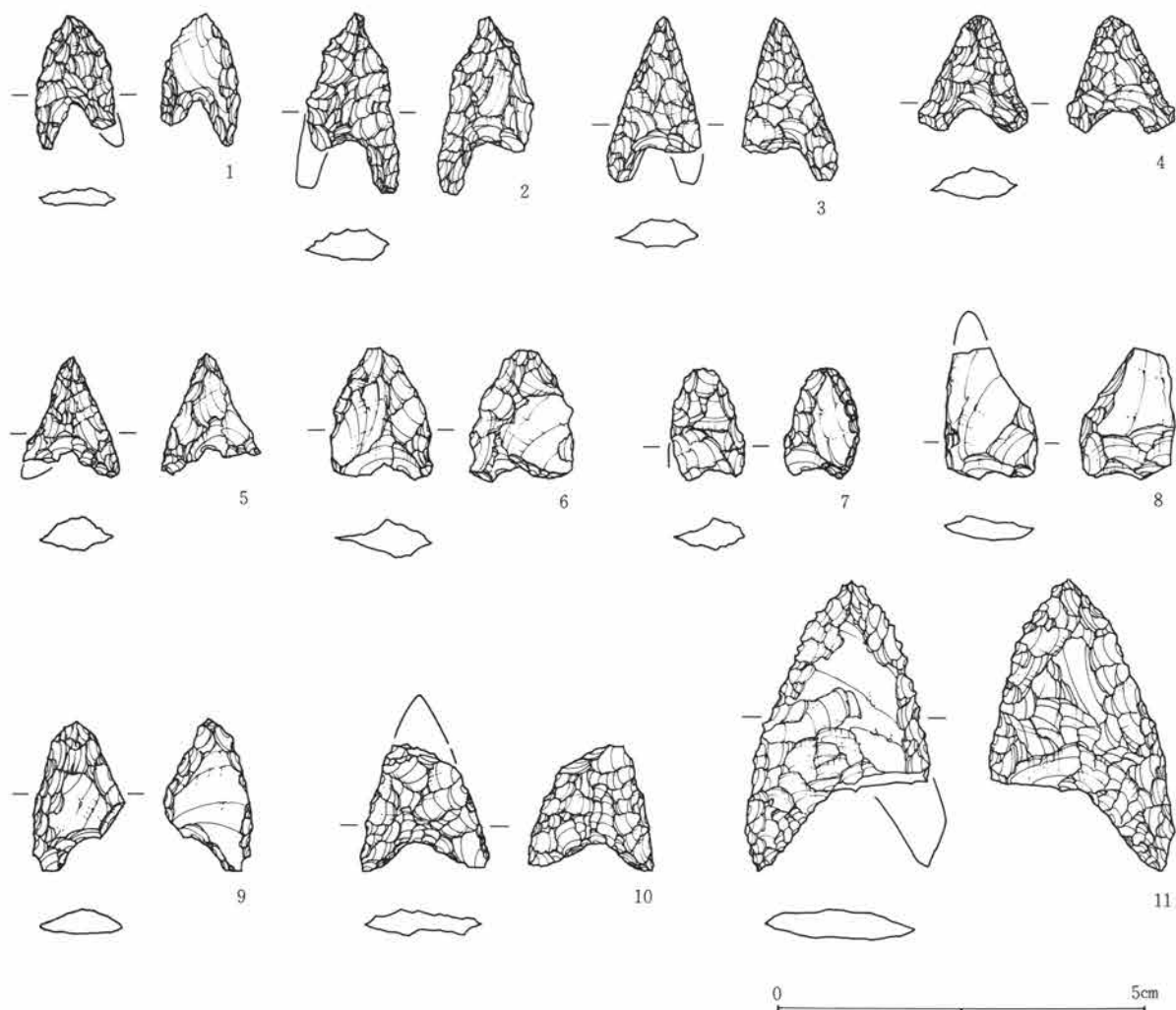
第46図1・2は平基無茎鏃である。1は全面に加工が及ぶ。2は第1次剝離面を残し、加工を素材の周辺に限定している。第46図4～9は凹基無茎鏃で、

浅く丸味を持つ「抉り」を作出している。第46図10は若干だが深く「抉り」を作出し、三角形の基部を持つ。第47図1～3は凹基無茎鏃で、深い「抉り」を持ち、長い「返し部」を作出している。1・2の2点は加工も粗く、周辺に限定され、製作途上の未製品である可能性が高い。一方、第47図4～6は、やや開いた「抉り」を持つ。1～3に比べ、「返し部」は短い。加工状態から4を除く2点は、製作途上の未製品である可能性が高い。第47図7～9は加工を周辺に限定した、製作途上の未製品である。第47図10・11の2点は大型の凹基無茎鏃で、やや深い「抉り」をもつ。その側面形状は鋸歯状を呈し、特徴的である。



第46図 包含層出土の石器 (1)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



第47図 包含層出土の石器（2）

磨製石斧（第48図1）

磨製石斧は1点のみ出土している。遺存部分全体、特に、側縁には研ぎ面が存在すること、先端部分に打痕が存在する特徴から、磨製石斧の頭部破片と判断した。B区出土。変玄武岩。

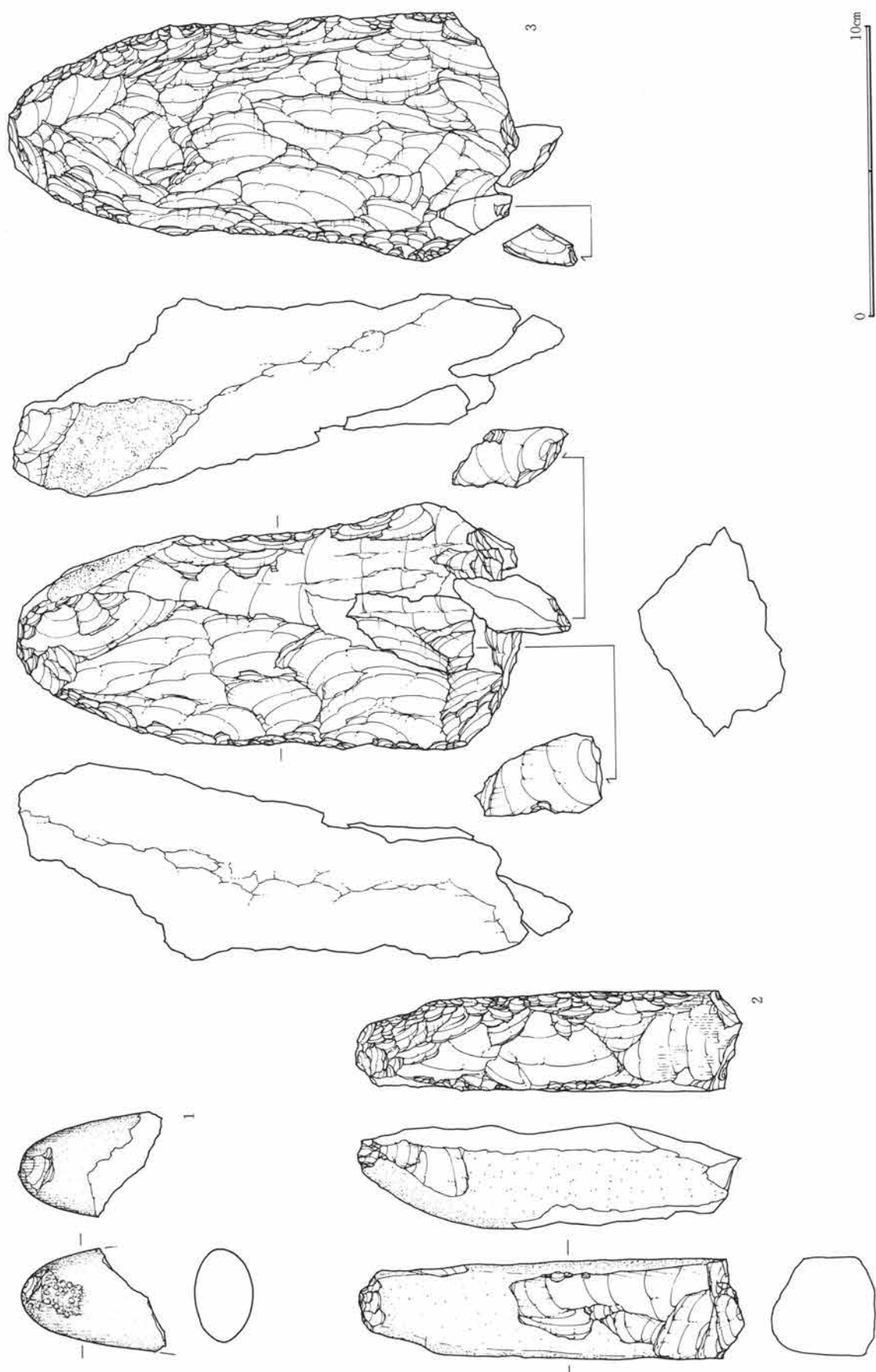
打製石斧（第48図2・3、第49図）

第48図の2点の資料は打製石斧の一種だが、その形態の特徴から、第49図の剥片素材の打製石斧とは明確に区別されよう。第48図2は三面に礫面を残し、一面には全面を覆う丁寧な加工を施し、全体を柱状に整形している。石器下端には摩耗が見られ、多分に石器の機能を暗示している。この摩耗部分は裏面の加工に切られ、刃部再生を試みており、刃部再生

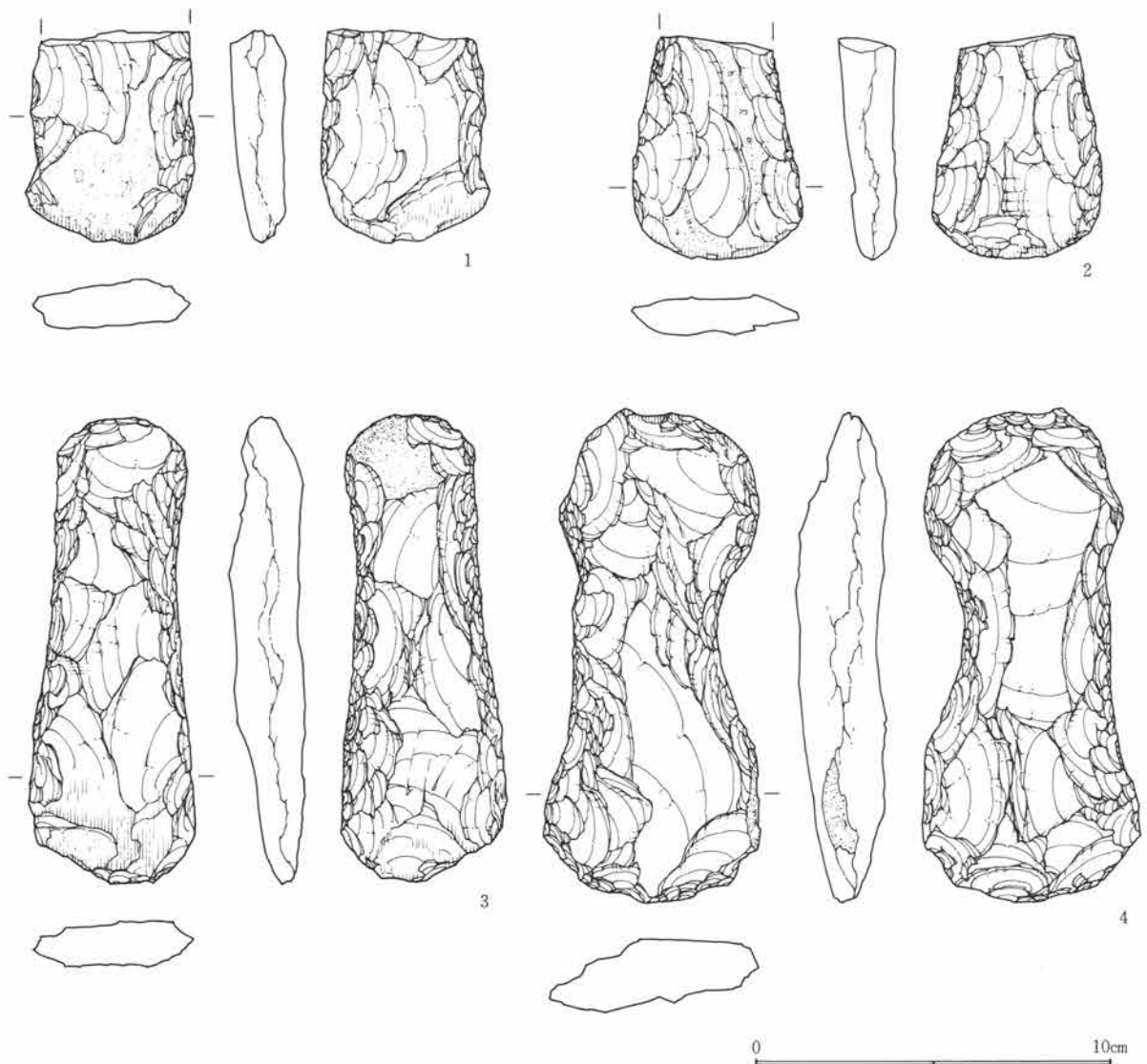
を果たす事なく破棄している。第48図3は側縁に礫面を残す甲高の石器で、剥片3点が接合する。全体に加工は粗く、製作途中で放棄している。

第49図1～4は剥片素材の打製石斧だが、この種の石器は合計5点が出土している。4点を図示した。

第49図1・2は、2点とも器体の上半を欠損している。石器表面には礫面を残し、この部分に刃部を設定している。1は粗粒安山岩を用いている。3は礫面を石器頭部に残す打製石斧で、ほぼ完形状態を保つ。刃部に顕著な摩耗が見られ、やや抉れた側縁形状を呈す。ほぼ全面に加工が及ぶ。C区出土。4は、ほぼ完形状態を保つ打製石斧で、剥片の第一次剝離面を表裏両面に残している。3に比べ、側縁は大きく抉れる。D区出土。



第48図 包含層出土の石器 (3)



第49図 包含層出土の石器（4）

片刃石器（第50図1）

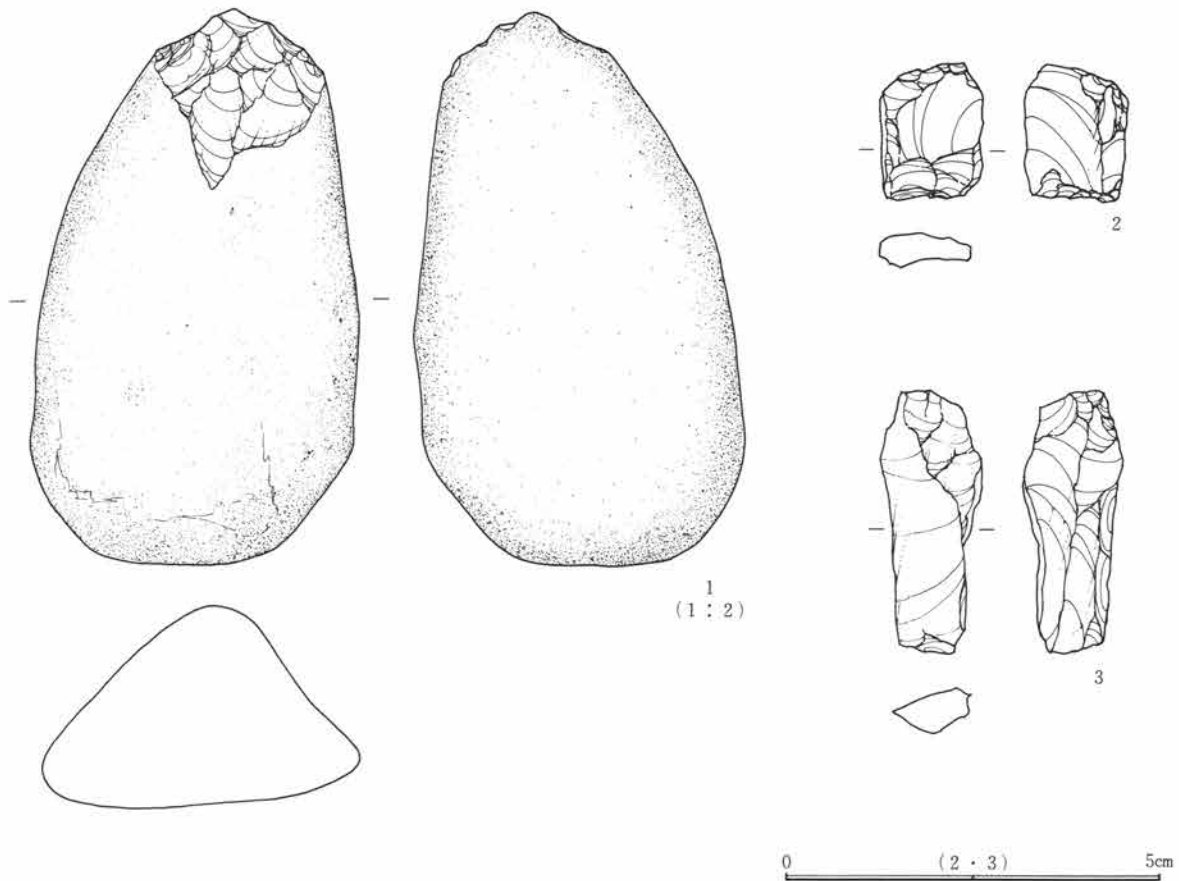
1点のみ出土している。楕円形状を呈す円礫を素材に用い、小口部分を裏面から加工して石器を作出している。刃部の加工は粗い。三角形の断面形状を呈す。B区出土。

楔形石器（第50図2・3）

楔形石器は3点が出土している。第50図2は側面に礫面を残す薄手の剥片素材の楔形石器で、珪化の進んだ黒色頁岩を素材に用いている。上下両端より表裏両面に対向する剥離を施す。B区出土。第50図3は縦長の剥片を素材に用いた楔形石器で、黒色の

斑点を多く含む点紋頁岩を素材に用いている。石器上端の表裏両面には器体の長軸に平行する剥離が見られ、こうした剥離の特徴から器種認定した。出土資料にはこの石器と同一の母岩を多く確認しており、接合資料（接合資料-4、第13図）も確認していることから、この遺跡で製作した石器と判断している。B区出土。点紋頁岩。

なお、このほかにも黒色安山岩を用いた楔形石器が1点出土している。幅広の剥片を用いたこの石器は器体の中央で破損するため、全体形状は不明だが、その一端に残る表裏両面の対向する剥離の在り方は、第50図に示した石器と同様な特徴を有している。



第50図 包含層出土の石器 (5)

削器 (第51・52図)

削器は19点が出土しており、B区から12点・C区から6点・D区から1点と、B区に多い。素材剥片は縦長剥片と横長剥片を1:1の割合で用いており、拮抗している。また、その加工部位は縦長の剥片を素材に用いる場合には左右の側縁に、横長剥片を用いる場合には剥片端部に刃部を作出する傾向が指摘されよう。

第51図1は、やや幅広で小形の縦長剥片を素材に用い、左右の側縁に微細な加工を施して石器を作出している。剥片の表面には一部礫面を残す。石器の表面側に残る剥離面の剥離方向は剥片の長軸に直交している。剥片は礫面を打面に剥離され、素材剥片の形状を大きく変えることなく刃部を作出している。取り上げ段階に石器下端右側を欠損している。良質な黒曜石を用いている。C区出土。

第51図2は、横長剥片を素材に用い、表裏両面に

加工を施して石器を作出している。器体の上半を欠損するため全体の石器形状は不明だが、全体に平坦な剥離を施して石器を作出することから、明確な石器の作出意図が窺われ、第51図9に似た剥離の特徴を重視して、ここでは削器に分類した。石器石材は絹雲状の白い縞の入る半透明の黒曜石を用いている。C区出土。

第51図3は、打面・側縁に礫面を残す縦長剥片を素材に用い、左側縁に連続した剥離を加え、石器を作出している。その加工状態は丁寧で、剥片の表面から裏面に向け剥離している。加工は素材剥片の形状を大きく変えるものではなく、剥片形状を見事に利用している。黒色頁岩。B区出土。

第51図4は、縦長の剥片を素材に用いる。剥片は平坦な礫面を打面に剥離され、その末端はヒンジ状に捲れている。側縁に鋸状の微細な剥離を加えて刃部を作出しており、剥片端部は欠損している。やや

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

青味を帯びた黒色頁岩を素材に用い、全体の質感は第48図2の打製石斧に似ている。B区出土。

第51図5は、横長の剥片を石器素材に用いた石器で、全体の石器形状は長方形を呈す。やや粗い剥離を石器の表面に施し、石器の形状を整えてから、側縁や端部に微細な剥離を加えて、刃部を作出している。石器裏面には平坦な剥離を加えている。黒色安山岩。B区出土。

第51図6は、側縁の一部に礫面を残す横長剥片を素材に用いている。石器の形状は三角形を呈し、剥片端部や石器上半に丁寧な剥離を施す。その加工は剥片の形状を著しく大きく変えるものではなく、素材剥片の形状を見事に利用しているといえよう。直刃に近い刃部形状を作出する一方、嘴状の刃部の要素も同時に具備している。黒色安山岩。D区出土。

第51図7は、やや幅広の縦長剥片を素材に用いている。概ね、石器の形状は楕円形に近く、左右の側縁に加工を加えて、石器を作出している。その加工状態は、左側縁では粗く側縁形状を整える程度だが、右側縁では連続した丁寧な剥離を加え、やや角度の付いた弧状の刃部を作出している。石器の打面や表面の一部に礫面を残す。熱で剥落した痕跡を石器の表裏両面に残す。黒色頁岩。C区出土。

第51図8は、大形の縦長剥片を素材に用いている。石器形状は楕円形状を呈し、明確な石器の作出意図が窺われ、鋸歯状に近い弧状の刃部を側縁に作出している。石器は楕円形状の石器形状を意識しており、右側縁の平坦面は素材剥片を剥離してから作出している。上述の平坦面を打面に表面側・右側縁を剥離して、石器の厚味を減じている。裏面には礫面を大きく残す。黒色頁岩。B区出土。

第51図9は、器体上半で欠損した石器の接合資料（接合資料-33）で、石器上半がBe-3Gより、石器下半がBg-3G（取り上げ番号不明）より出土した。石器表面に礫面を大きく残した横長剥片を素材に用いている。左右の側縁が平行するよう意図して石器は作出され、左右対象の石器上端は平坦に、下端は尖る。石器表面の加工は粗く、階段状剥離に

近い剥離を側縁に加える一方、石器下端には微細な剥離を加え、やや角度の強い刃部を作出している。また、裏面には素材剥片の打面付近に平坦な剥離を施し、器体の厚味を減じている。器体の上半で欠損したこの石器が製作途上で欠損したのか、使用している最中に欠損したのか不明だが、左側縁の接合面に段差が生じていることから、石器の再生を試みている可能性が強い。白色の斑晶が入る黒色安山岩を用いる。B区出土。

この石器は横長の素材剥片を縦位に用いて、縦長剥片と同様な効果を得ている。その形状は石刃素材の削器に酷似しており、石器の製作意図が明確に読み取れる。また、素材剥片の形状が最後まで影響を及ぼす尖頭器の製作と同様に、その加工状態は裏面の平坦部分では浅い剥離が、表面ではやや角度の強い剥離が主体を占め、真に尖頭器製作と同一の技術基盤上に位置づけうる、ということを示している。第51図2や5は、こうした剥離の在り方を示す事例と思われ、型式的特徴ともなる可能性を秘めている。更に、5と9は石材の風化状態や斑晶の入り具合も酷似しており、そうした特徴の一致も上述した2点の石器の類似性を強調している。

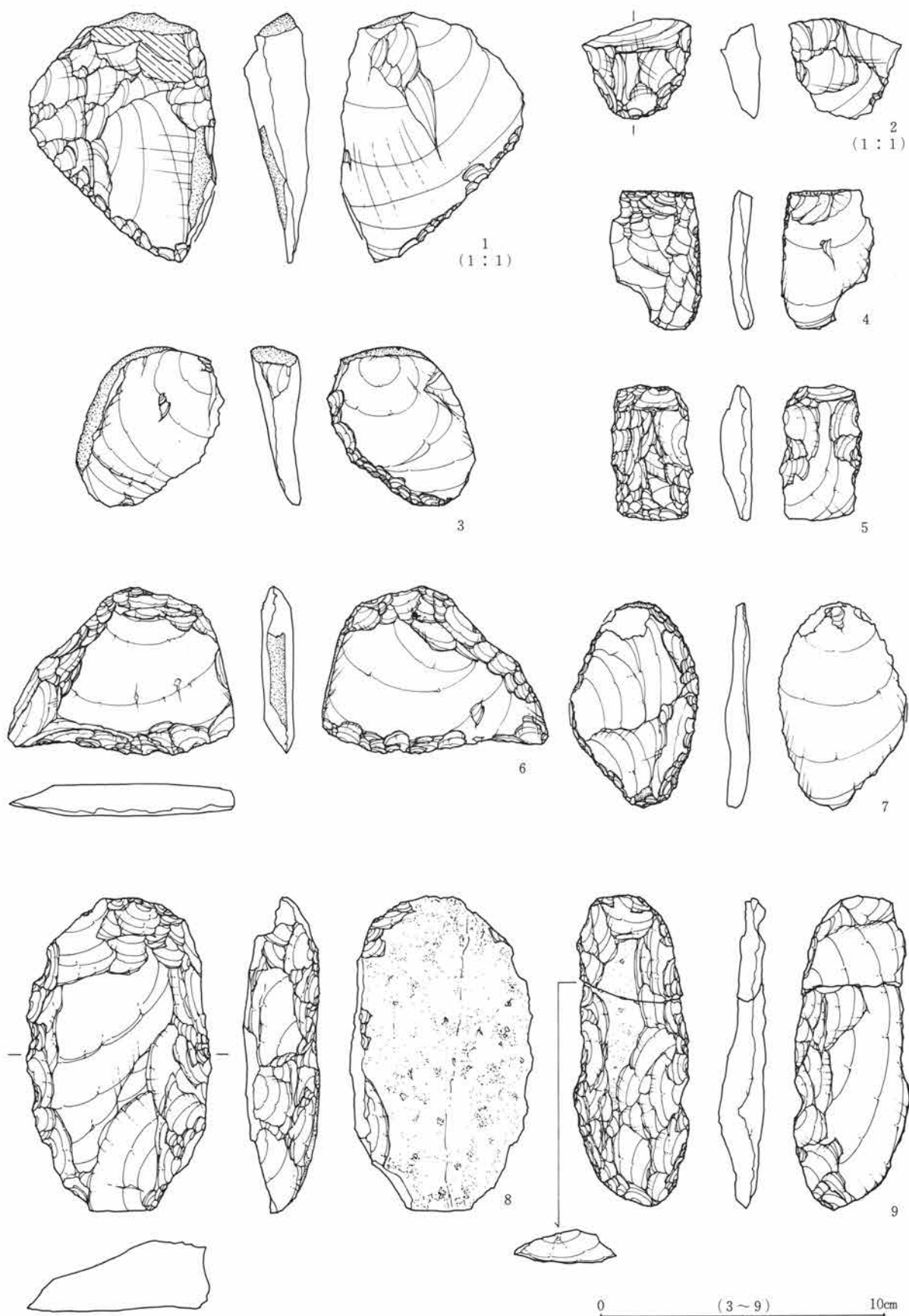
第52図1は、裏面に礫面を大きく残す幅広の剥片を石器素材に用いている。調整加工は打面部分を中心に左右の側縁に及ぶ。その加工は粗く、裏面から石器表面に向け、加工を施す。石器の下端は多分に欠損している。黒色頁岩。B区出土。

第52図2は、横長の剥片を石器素材に用いている。その加工状態は丁寧で、素材剥片の裏面に加工を加えている。石器は縦位に欠損しており、各々Bc-22G・Bd-4G・Be-4Gから出土した3点が接合（接合資料-3）。黒色頁岩。

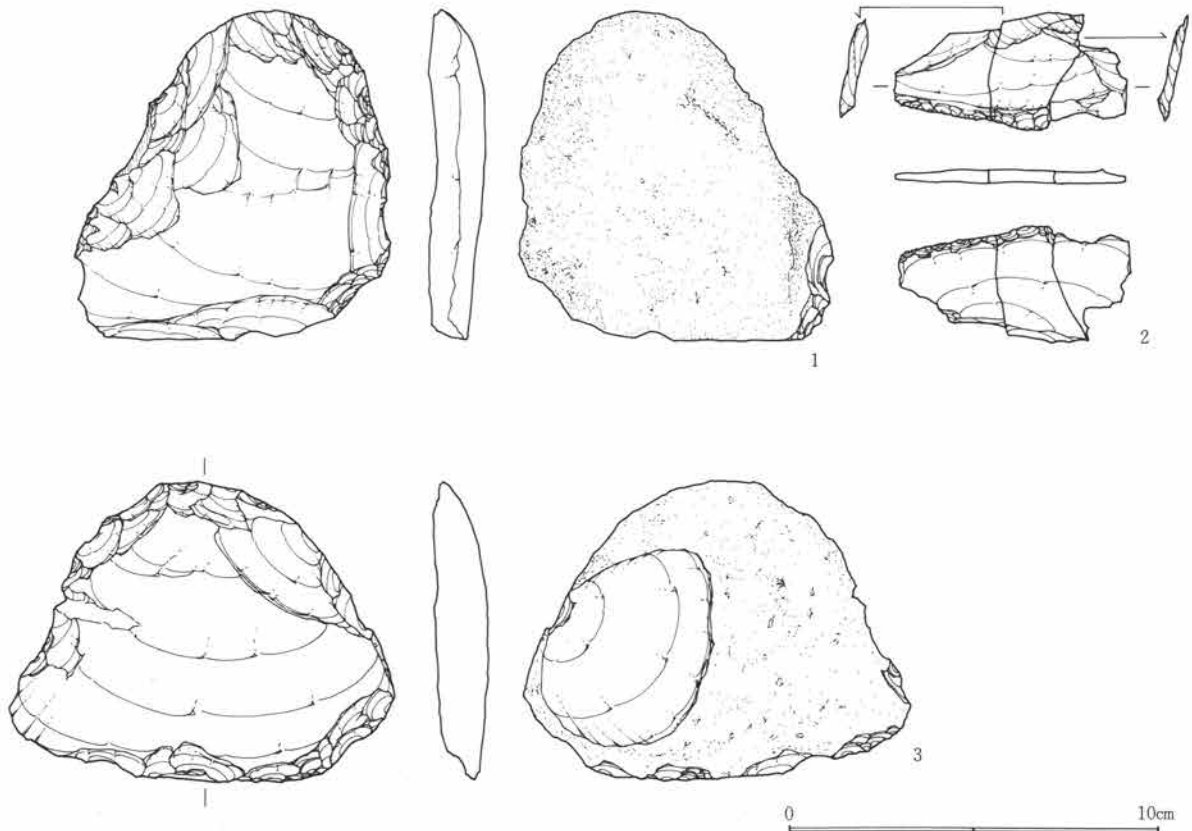
第52図3は、裏面に礫面を大きく残す幅広の剥片を素材に用いている。調整加工は打面部分を中心に左右の側縁と剥片端部に及び、概ね、素材剥片の裏面に加工を施す。その加工状態は第52図1に類似し、ほぼ同一の特徴を有す。灰色安山岩。A区出土。

このほか、図示していない削器が9点出土している。

4. 包含層出土の遺物



第51図 包含層出土の石器 (6)



第52図 包含層出土の石器 (7)

その内訳は、薄い剥片を素材に石器を作出しているもの6点・厚い大形剥片を素材に作出しているもの3点で、本書に図示した定形的石器は含まず、良好な形状の剥片の一端に加工して石器を作出している場合が多い。

加工痕ある剥片 (第53図)

B区から16点が出土したほか、C区に5点が出土したのにすぎない。素材剥片の形状は全体の3分の1が不明だが、この遺跡の場合、横長の剥片を素材に用いる方が圧倒的に多く、14点中12点を占める。石器の加工部位は、横長剥片の場合には剥片端部に、縦長剥片の場合には剥片の側縁に設定する場合が多い。本書ではその製作意図が不明な資料を中心に、この項目に分類して図示した。

第53図1は、幅広の剥片を素材に用い、打面部分と左右の側縁に粗い加工を施している。器体の下半が欠損している。黒色頁岩。B区出土。

第53図2は、礫面を石器表面に残し、左右の側縁を中心に粗い加工を施す。広義の削器に分類が可能かもしれない。黒色頁岩。C区出土。

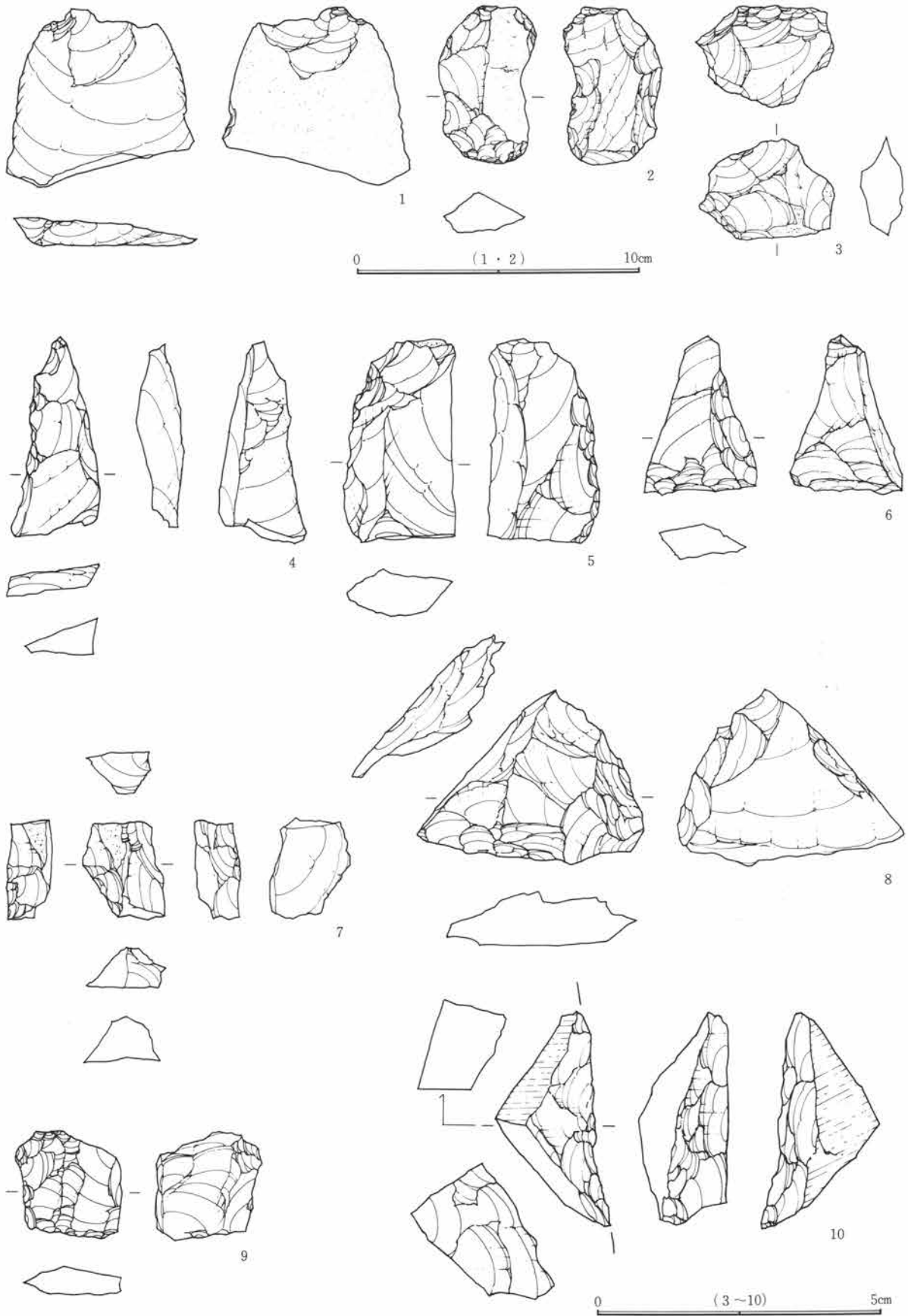
第53図3は、石器の表裏両面を粗く加工している。その製作意図は理解できない。黒曜石。B区出土。第53図4・6・8は、側縁・剥片端部に加工を施す石器で、3点とも欠損している。そのため、全体の石器形状は不明だが、恐らく横長三角形の剥片を素材に、側縁や剥片端部を加工した削器の作出を意図した可能性が強い。出土位置もBd-20G・21Gと近く、3点とも黒色安山岩を用いている。

第53図5は、裏面を粗く加工した石器で、器体の中央で左右・上下に欠損する。黒色安山岩。B区。

第53図7・10は、側縁に急峻な加工を加えた石器で、2点とも欠損している。黒色頁岩。B区出土。

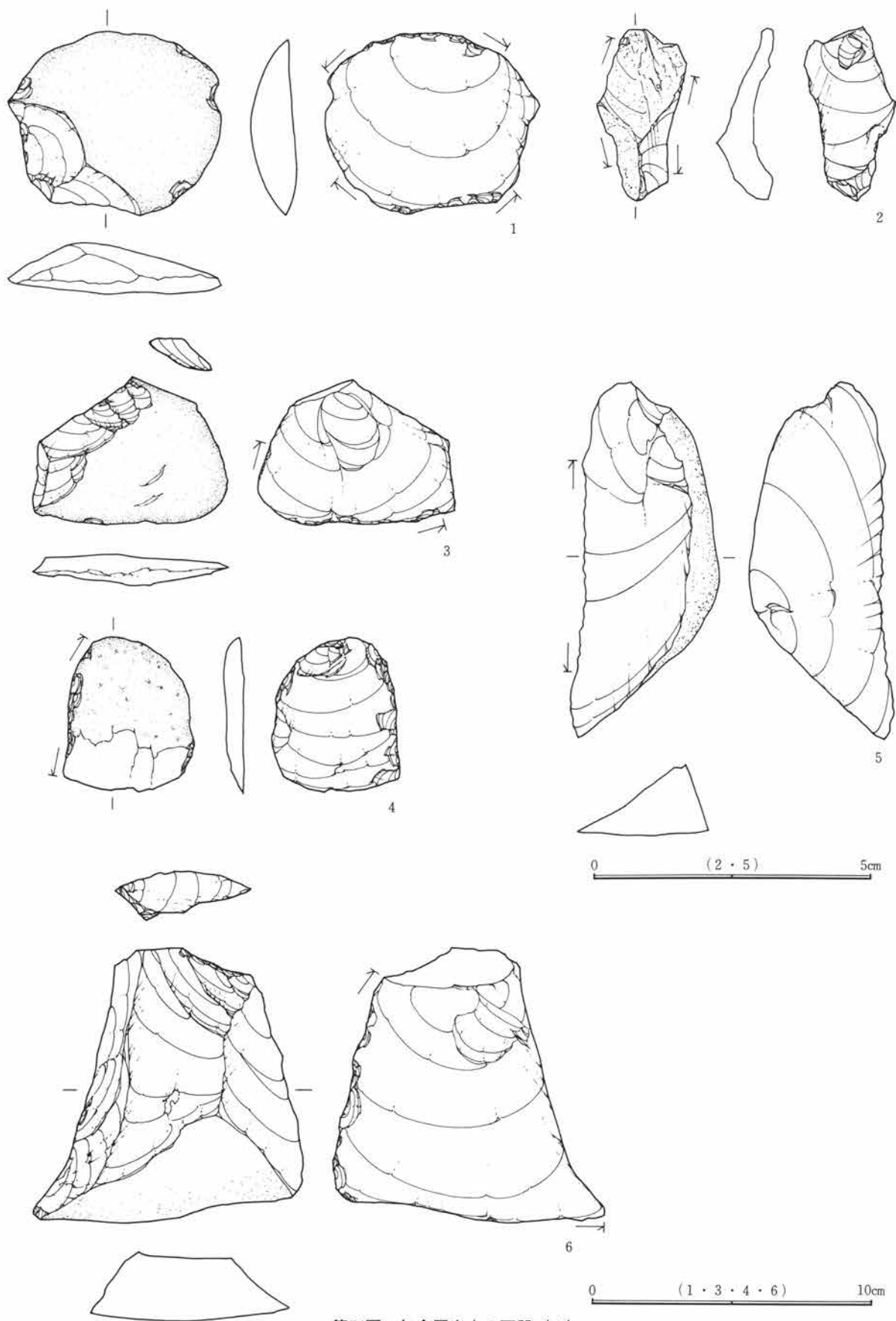
第53図9は、石器表面の上下両端に対向する剥離を施す。裏面には同様な状態が見られないため、楔とは断定できない。チャート。B区出土。

4. 包含層出土の遺物



第53図 包含層出土の石器 (8)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



第54図 包含層出土の石器 (9)

使用痕ある剥片（第54図）

B区から9点が出土したほか、A区で1点・C区で3点・D区で2点が出土している。石器素材に採用している剥片形状は縦長剥片と横長剥片が半々で、ほぼ拮抗している。縦長剥片を素材に用いる場合は左右の側縁に、横長剥片を素材に用いる場合は剥片端部に、それぞれ刃部を設定している。石器石材は黒色頁岩が多用され、15点中13点を占める。また、剥片は表面に礫面を残す場合が多く、こうした在り方は極めて大きな特徴でもある。第54図2は黒曜石を素材に用いた石器で、B区から出土している。

石核（第55図）

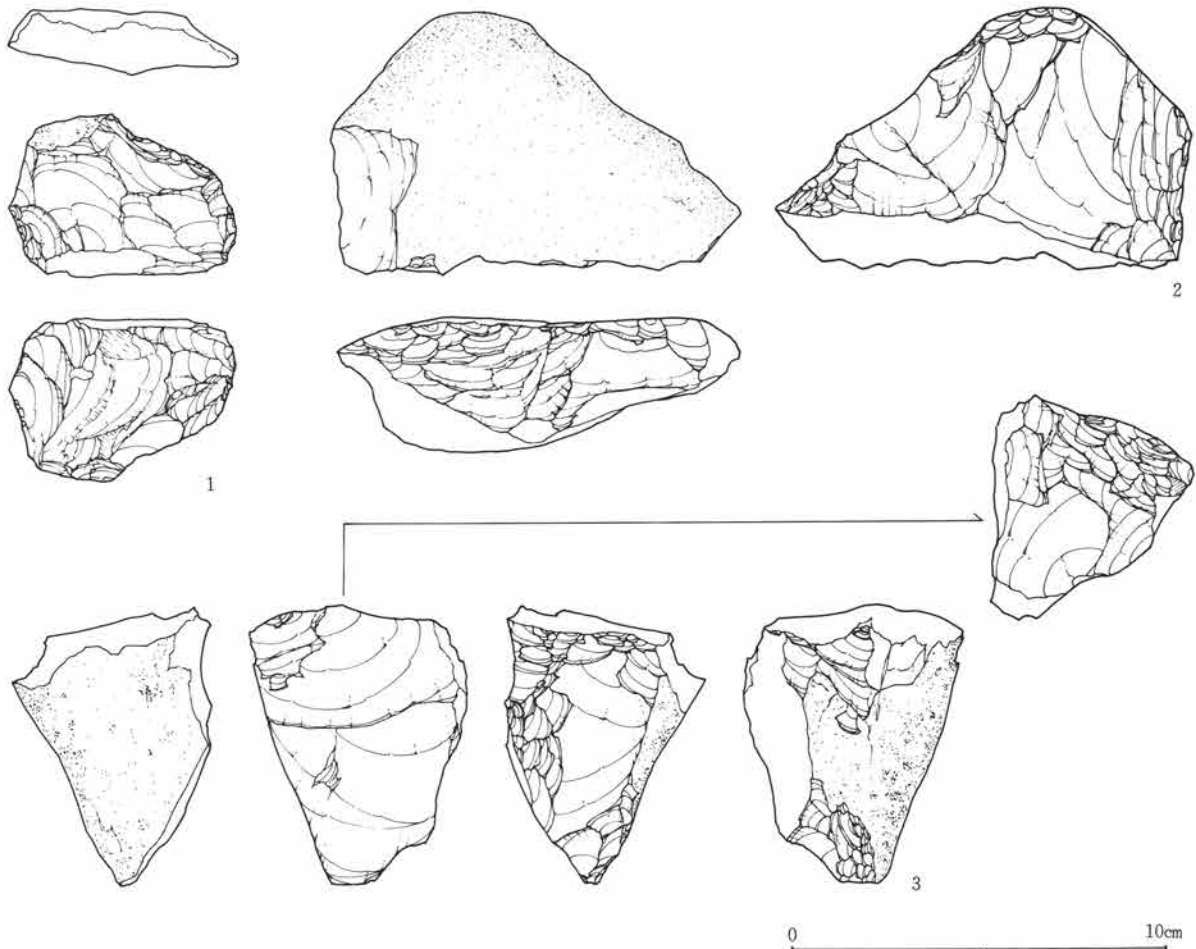
石核は5点が出土しており、このうち3点を図示した。どの資料も不定形であり、一定の剥離形態は

看取されない。

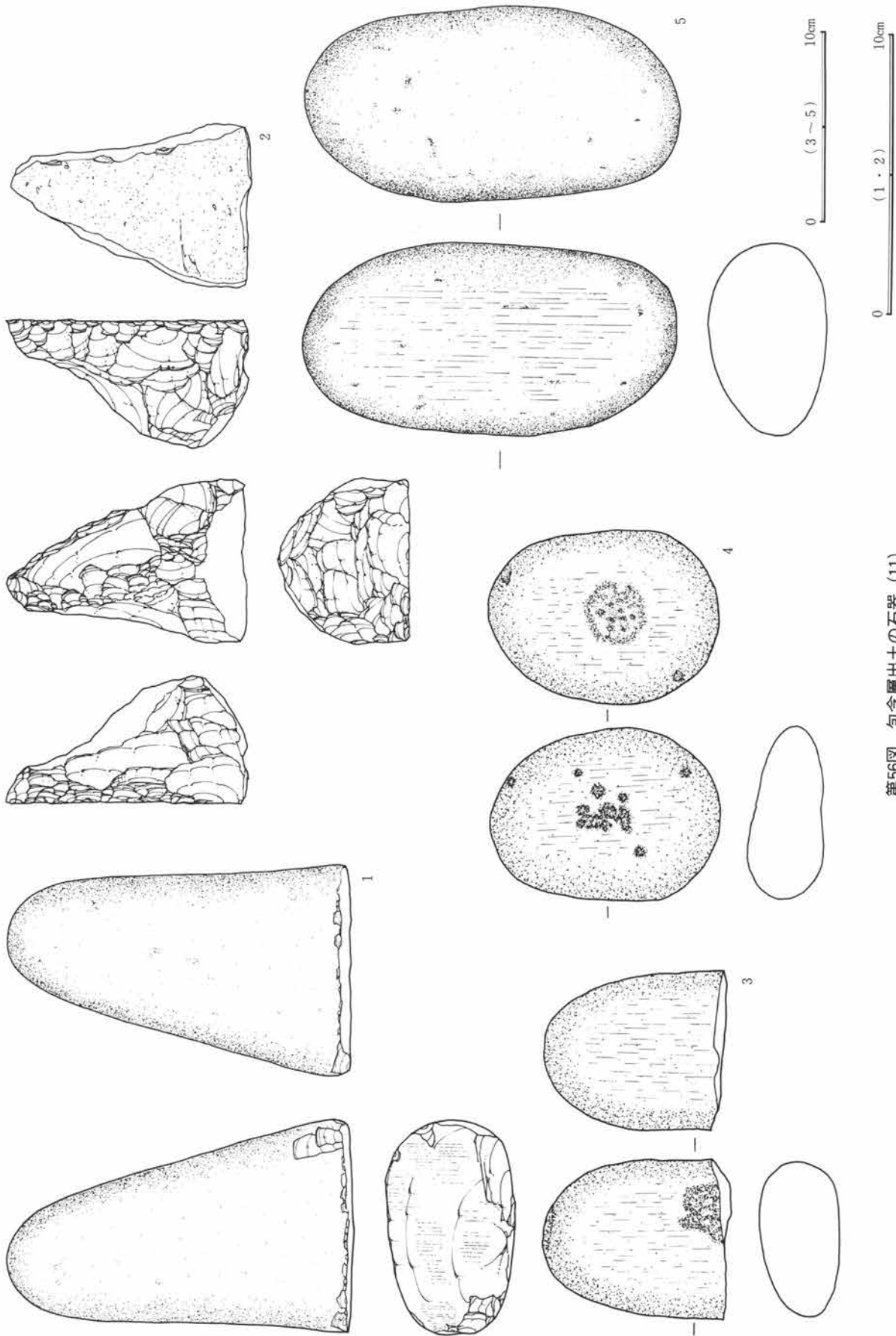
第55図1は、大形の板状剥片を石核素材に用いている。石核の表裏両面で剥離を行い、幅広の剥片を剥離している。表面側に節理面を大きく残している。また、石核右側の側縁に微細な加工が集中していることから、石核を転用している可能性も残る。B区出土。

第55図2は、裏面に礫面を残す大形の剥片を石核素材に用いている。剥離面の切り合い関係から石器裏面を剥離してから、下端に最終的な作業面を移動している。黒色頁岩。B区出土。

第55図3は、全体の剥離状態や一面に礫面を残す特徴から、三角錐形石器を石核に転用した可能性が強い。黒色頁岩。B区出土。

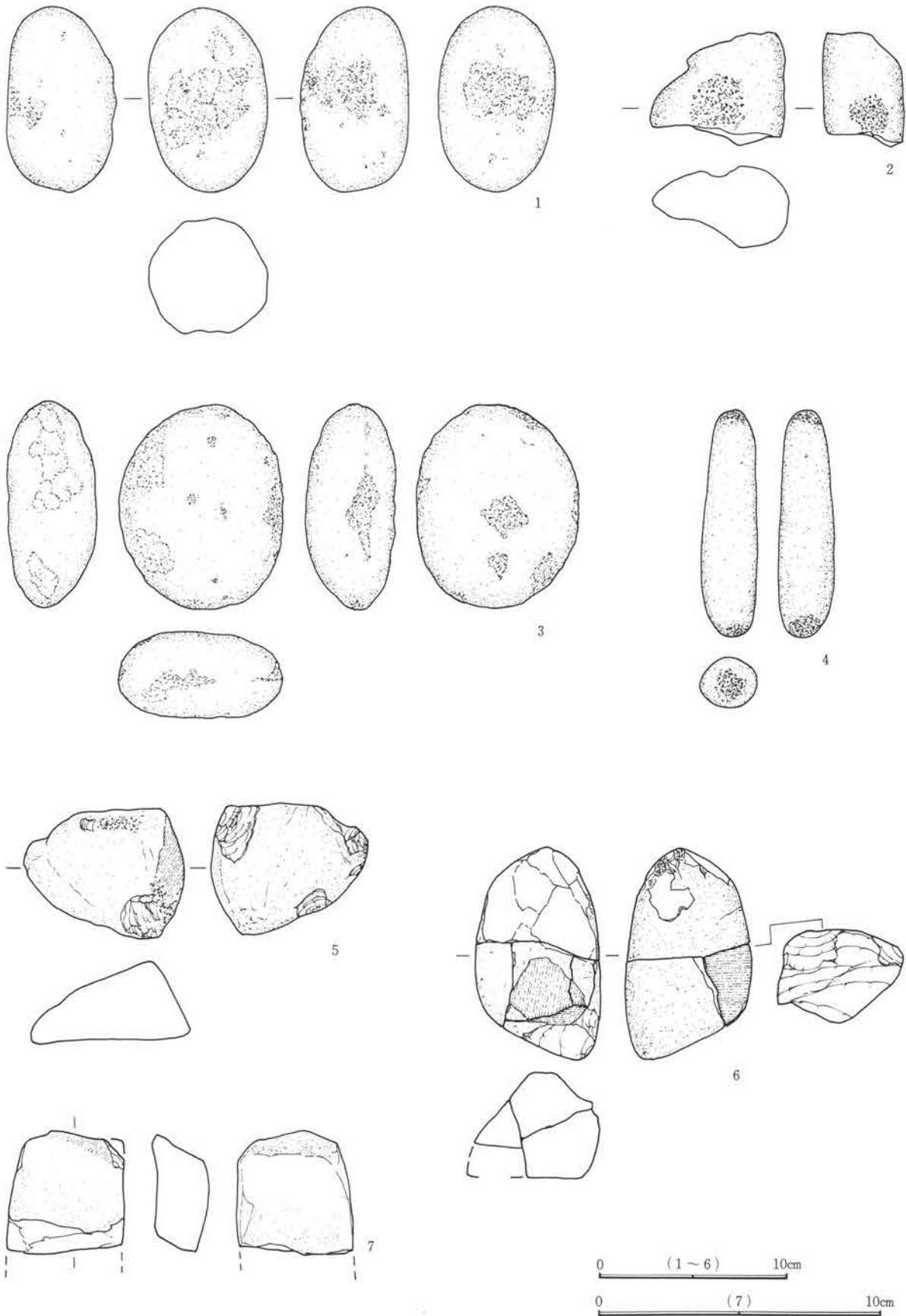


第55図 包含層出土の石器（10）



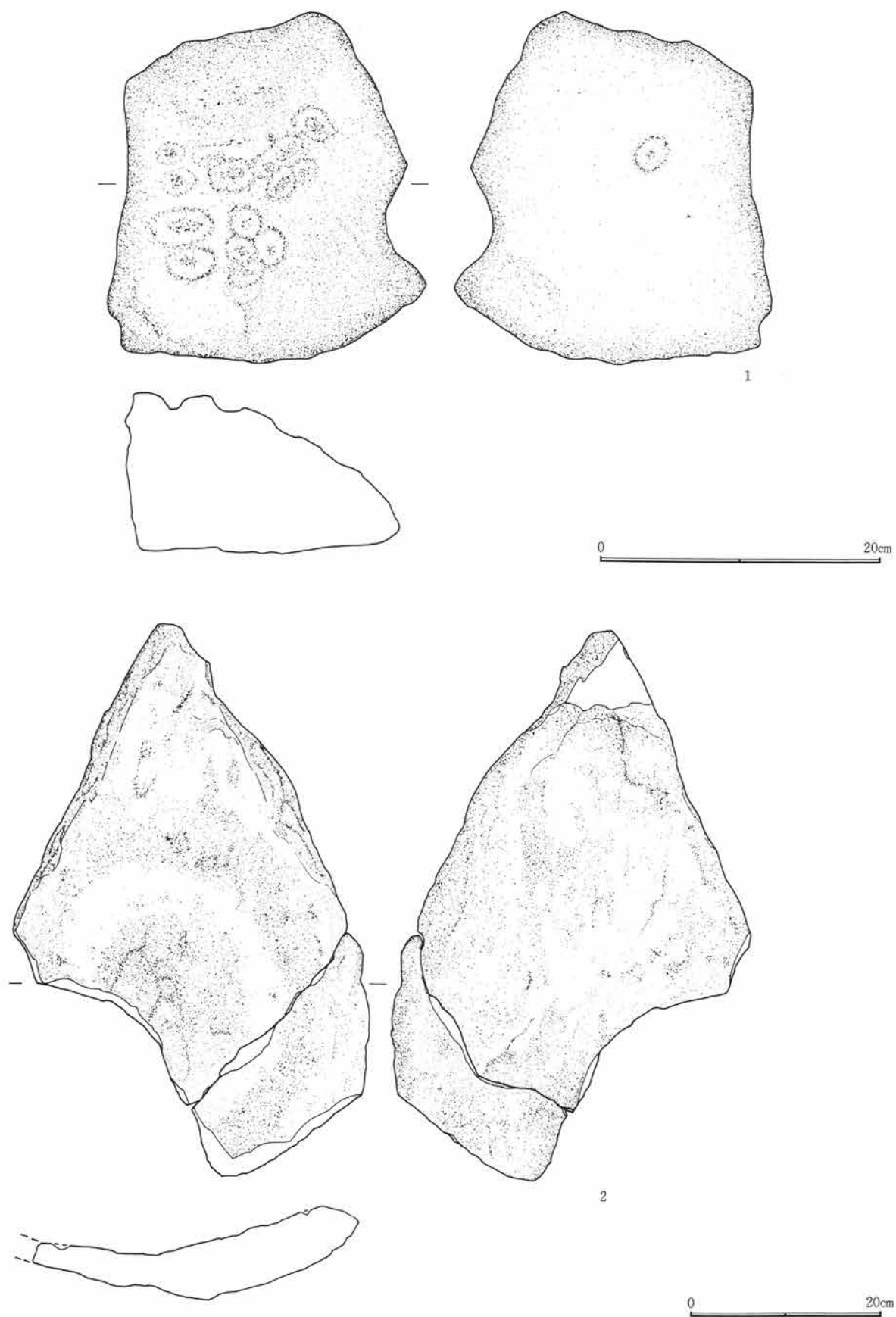
第56図 包含層出土の石器 (11)

4. 包含層出土の遺物



第57図 包含層出土の石器 (12)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



第58図 包含層出土の石器 (13)

スタンプ形石器 (第56図1)

1点が出土している。偏平な棒状の礫を半割して石器の素材に用い、使用している。その結果、底面には顕著な摩耗と、周辺に微細な剝離が生じている。石材は周辺地域で容易に採集可能な粗粒安山岩を用いている。B区出土。

三角錐形石器 (第56図2)

1点が出土している。長さ8.6cm・幅5.7cmを測り、この種の石器の中では小形の部類に属す。握り部は細く、使用するには都合が悪い。普通、この石器は手の平で握れるよう器体が作出され、底面を減じるよう石器を再生使用していくこと、この石器は他の遺跡で製作し、搬入した可能性も否定できないことから、石器の最終形状を示す可能性を残している。黒色頁岩。B区出土。

磨石 (第56図3～5)

6点がB区より出土している。手の平に入る程度の偏平な円礫を選択しており、石英閃緑岩を用いる第56図5を除き、5点が粗粒安山岩を用いている。表裏両面が摩耗しているほか、中央付近に若干打痕が存在する場合が多い(第56図4)。また、第56図5は磨石の中では大形の部類に属し、石器の重量も1kgを越えることから考えて、他の2点(3・4)とは区別すべきである。

凹石 (第57図1・2)

3点がB区より出土している。3点とも集合打痕が顕著で、アバタ状の凹み部を形成している。3点とも手の平に入る程度の粗粒安山岩を使用している。図示した石器は2点とも表裏両面の他、側面に凹み部を持つ。

敲石 (第57図3～6)

A区・B区から4点、C区から2点出土している。小形で棒状の円礫を素材に用いるもの4点・円礫を素材に用いるもの2点からなる。棒状の礫を用いた

敲石は上下両端の小口に打痕が、円礫を用いた敲石は上下両端の小口部分・側縁に打痕が存在する場合が多い。第57図5は礫の小口部分と側縁に顕著な打痕が存在するほか、打撃で生じた剝離痕が伴う。第57図6はBb-2G・Bc-3G・Be-21Gから出土した5点が接合(接合資料-38)した敲石で、節理面で不規則に割れている。

砥石 (第57図7)

1点が出土している。器体の下半を欠損するため、全体の形状は不明だが、本来は長形状に近い石器形状を呈す可能性が強い。石器表面のみ研ぎ面に使用している。やや目の粗い砂岩に似た流紋岩を素材に用いている。B区出土。

多孔石 (第58図1)

1点がB区より出土している。大形の角礫を素材に用いている。表面には10カ所を越すV字状を呈す凹み部が存在するほか、裏面にも1カ所に浅い凹み部が存在している。左側の側面や石器下面には分割した痕跡を止め、素材を分割した可能性が強い。本来の原石の形状はD字状の断面形状を呈していたかもしれない。

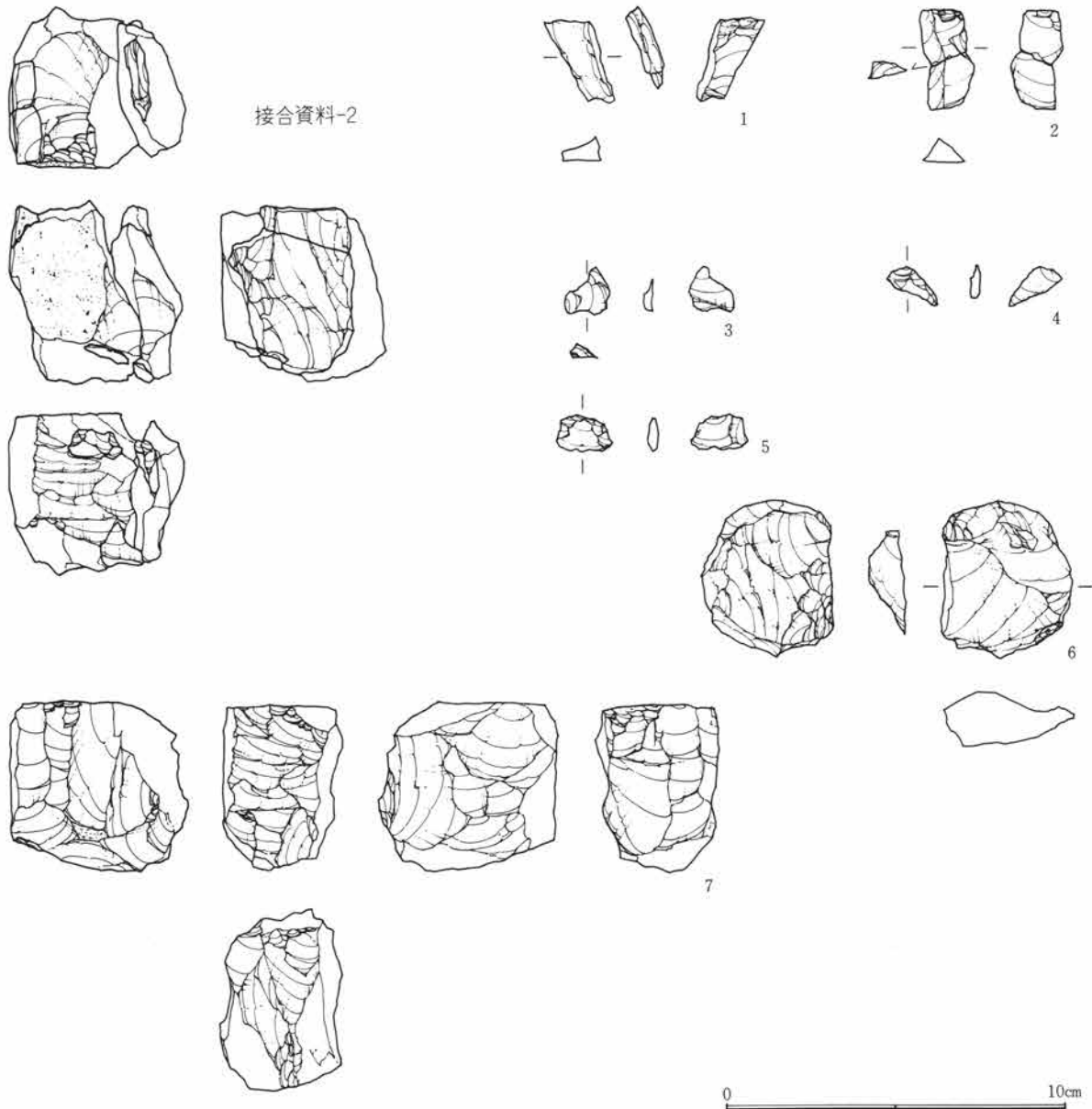
石皿 (第58図2)

1点がB区より出土している。三角形状を呈す板状に近い角礫を素材に用いている。この石器は全体形状を円形に整える石皿の典型とは大きく異なり、素材の形状を変えることなく使用している。石器の断面形状から推定して、このままでは安定性に欠け、その機能を発揮するのは無理だが、一部を土に埋め込み、使用することで充分機能した可能性が強い。機能面の摩耗痕は顕著ではない。石器下端の左側を欠損している。

接合資料 (第59～64図)

接合資料・40例を確認した。ここでは、そのうち9例を図示した。

III 縄文時代の遺構と遺物

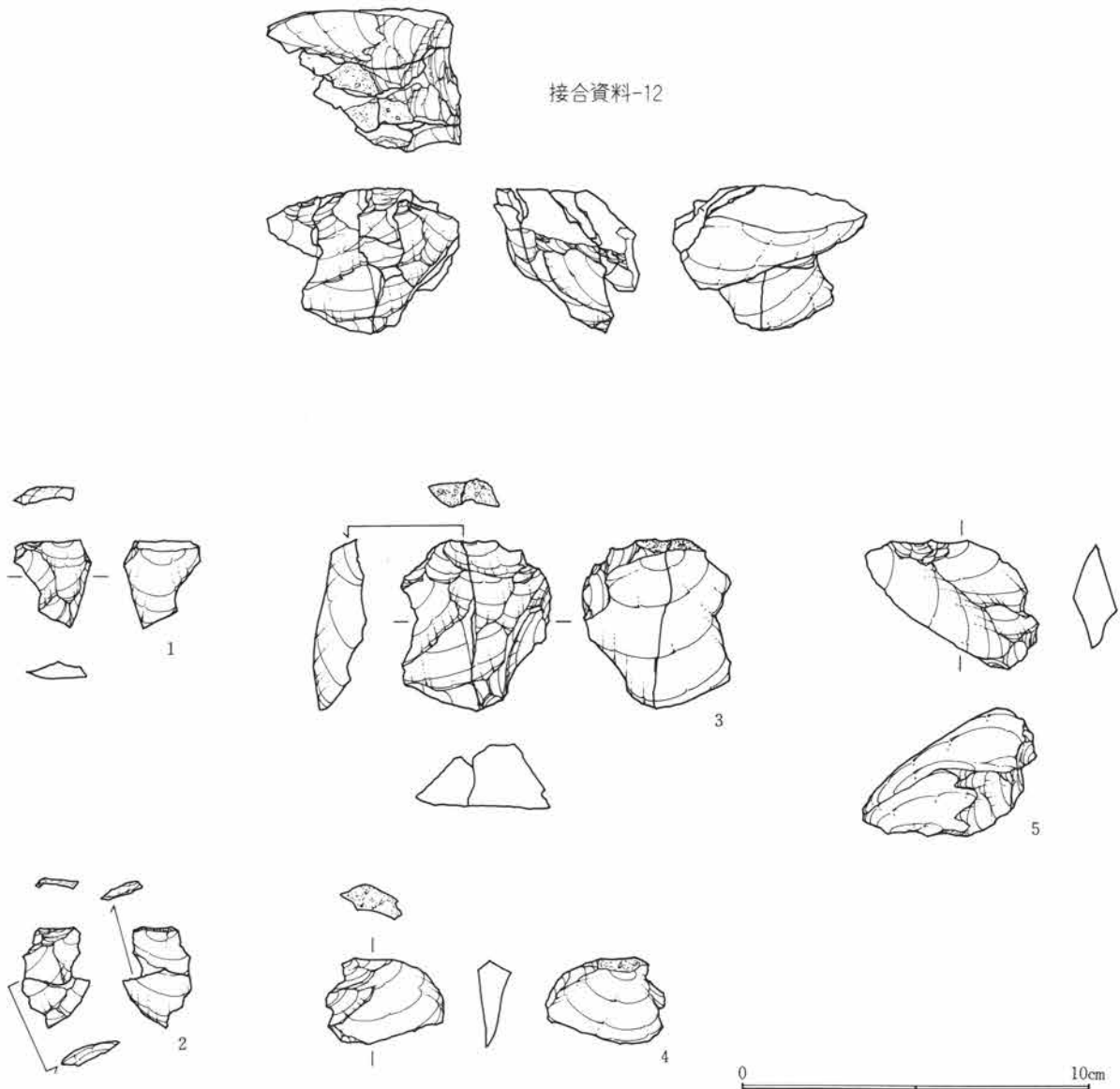


第59図 接合資料-2

接合資料-2 (第59図) は、石核に6点の剥片や
 碎片が接合する接合資料で、2号住居の北側を中
 心に集中して出土した。剥片剥離作業は2点の剥片と
 碎片(1・2)を剥離する。その剥離が終了して、
 打面を移し、3~5の碎片を剥離している。剥離は
 素材剥片の剥離が目的ではなく、打面の調整が目的
 なのかもしれない。最後に打面を転移して剥片(6)
 を剥離して作業を終了している。この資料では正面
 や左右の側面で剥片を剥離しており、方形状の石核
 形状を呈す。一面に平坦な礫面を残す石核の形状や

正面の剥離状態、接合資料全体の形状は、先に紹介
 した三角錐形石器(第56図2)に酷似しており、その
 転用とも考えられよう。黒色頁岩。B区出土。

接合資料-12(第60図)は、剥片5点の接合資料
 で、2号住居の北側に集中して出土した。やや厚手
 の板状剥片を石核素材に用い、一部礫面を残す平坦
 な打面から連続して剥片を剥離している。剥離した
 剥片の形状は幅広で、概して小さい。剥離は打点を
 左右に振り、後退するよう展開する。こうした打面
 を固定した剥離の在り方は、石核上面にも存在して



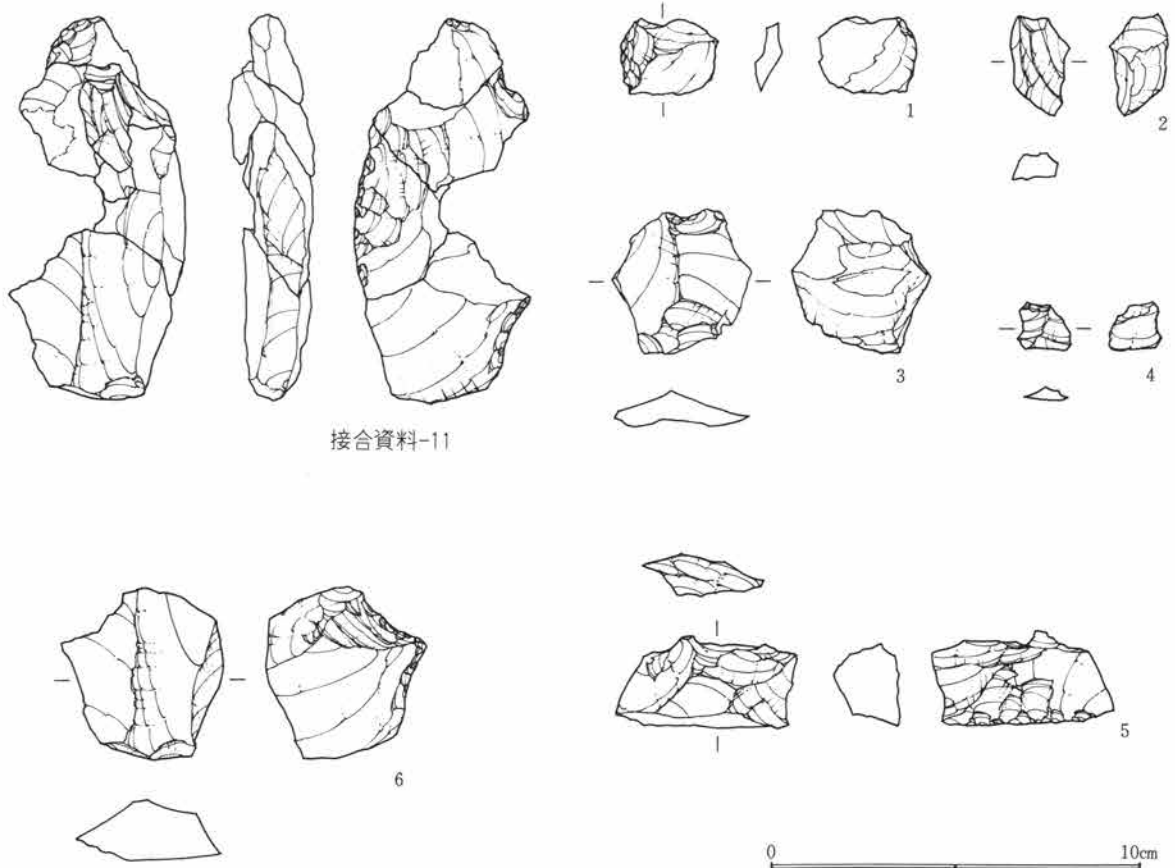
第60図 接合資料-12

いる。黑色頁岩。B区出土。

接合資料-11 (第61図) は、石核 (6) に5点の剥片が接合する接合資料で、2号住居の北側に分布していた。板状の大形剥片を石核素材に用い、剥離が展開しており、やや幅広の剥片を剥離する。剥離は交互剥離に近い状態で行われ、まず、1～3の剥片が同一打面から連続して剥離され、この剥離が終了してから、打撃面と作業面を入れ換え剥離を行い、3・4の2点を剥離している。その後、剥離が展開していく過程で5・6に割れており、剥離の意図に反して破損した可能性が強い。破損した後も、6は

石核の用を達しており、数枚の剥片を剥離している。ただ、6の縁辺には微細な加工が施され、錐状に加工しており、他の石器器種に転用しているかもしれない。この接合資料は板状の大形剥片を石核素材に用い、小形横長剥片を剥離するものだが、剥片剥離する以前に、石核素材の裏面部分に平坦な加工を施している。こうした状態から、本来は別の器種を製作する目的も推定され、何等かの理由で、その目的を放棄した可能性が強い。黑色頁岩。B区出土。

接合資料-13 (第62図) は、剥片5点の接合資料で、2号住居の北側に分布していた。礫面を打面に



第61図 接合資料-11

打点を左右に振り、やや幅広の小形剥片を連続して剥離している。こうした剥片剥離の在り方からみて、恐らく、打製石斧の初期調整加工の状態を示す資料ではないかと考えている。黒色頁岩。B区出土。

接合資料-16 (第62図) は、4点の剥片からなる接合資料で、2号住居の北側に集中して出土した。接合資料には打面作出剥片(1)と上下両端の打面が存在する。黒色の斑晶が入る点で特徴的であり、これ以外には同一の母岩は確認されない。黒色頁岩。B区出土。

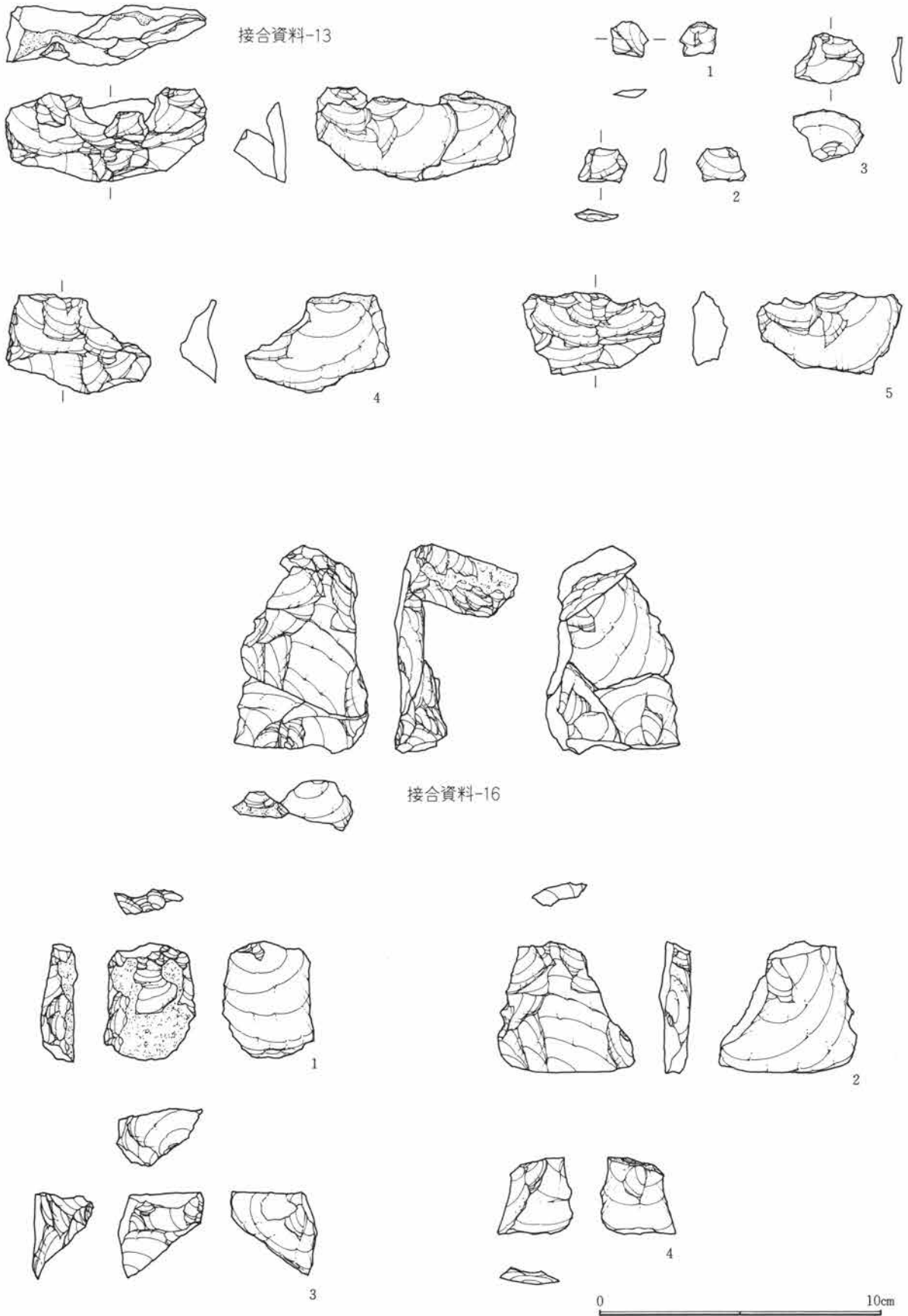
接合資料-17 (第63図) は、3点の剥片からなる接合資料で、2号住居の北側から集中して出土している。剥片剥離は上面の礫面を打面に、接合資料の右側から左側に打点を移動して剥離している。黒色頁岩。B区出土。

接合資料-4 (第63図) は、剥片と石核からなる接合資料で、2号住居の西側から集中して出土した。

礫を分割して石核素材を獲得しており、上面の平坦な礫面を打面に剥離が展開している。石核は剥離が展開するその過程で二分した状態で破損している。この接合資料は微小な黒色の斑晶を含む黒色頁岩で、接合資料が出土した周辺には同一の母岩が20点以上出土している。

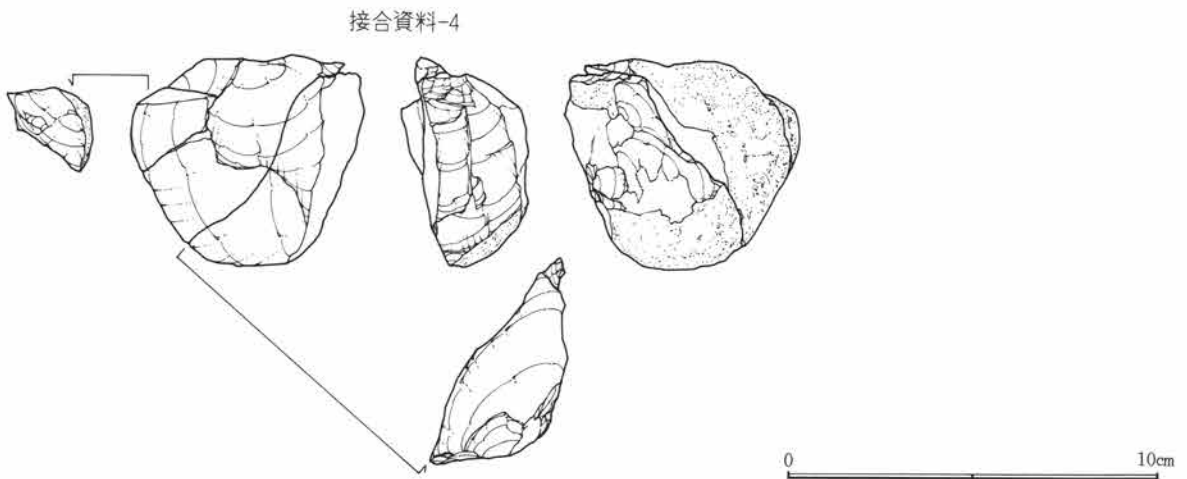
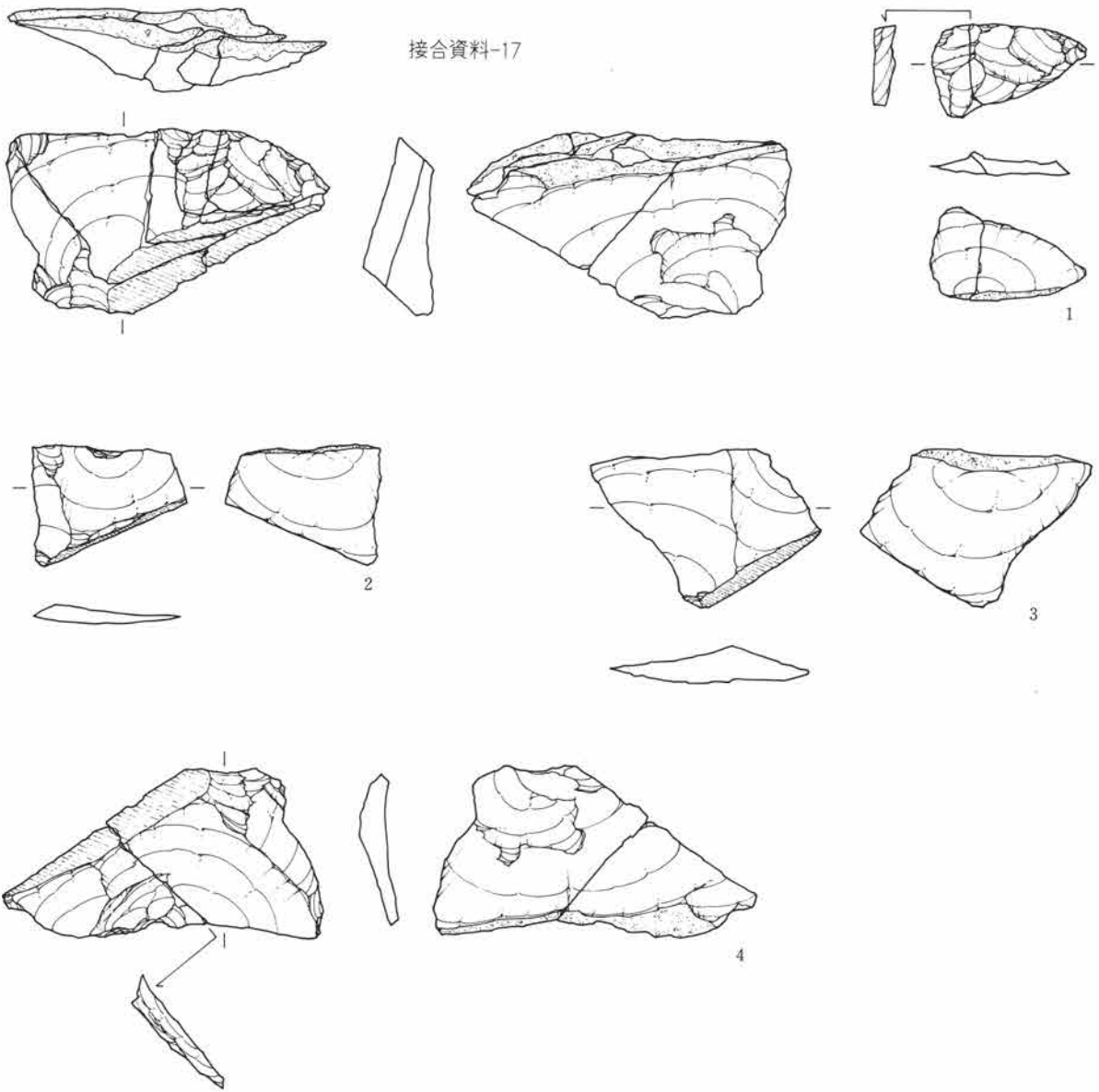
接合資料-8 (第64図) は、2点の剥片からなる接合資料で、これまで紹介した接合資料が南側集中地点から出土していたのに対し、北側集中地点に分布していた。剥片剥離は上面の打面から連続して行う。黒色頁岩。B区出土。

接合資料-30 (第64図) は3点からなる接合資料で、北側の遺物集中地点に分布していた。石核素材は偏平な礫を用い、平坦な礫面を打面に剥離の主体が展開している。黒色頁岩。B区出土。

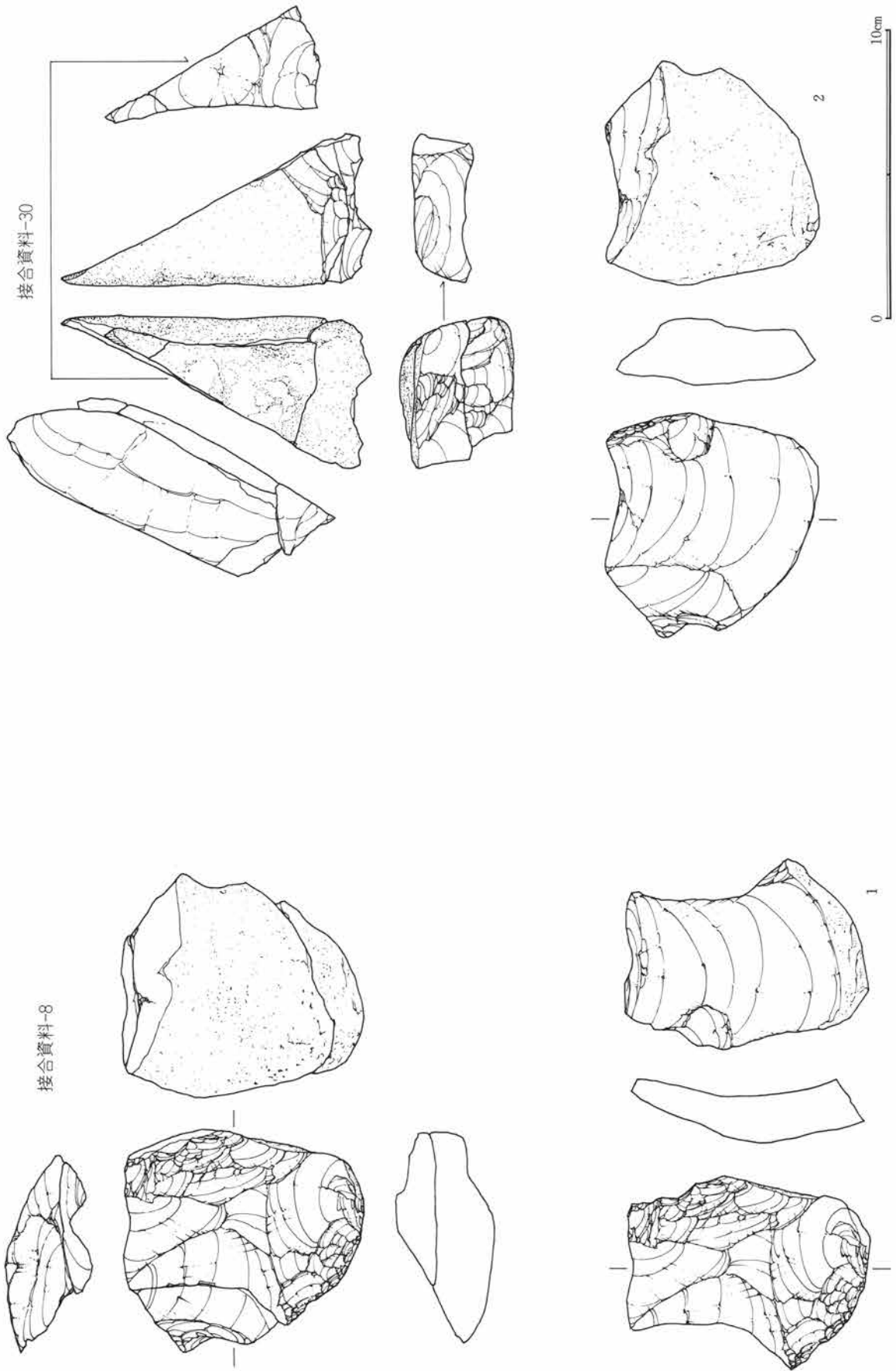


第62図 接合資料-13・16

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



第63図 接合資料-4・17



第64図 接合資料— 8 ・ 30

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

b-1. 土器の分布 (第65図)

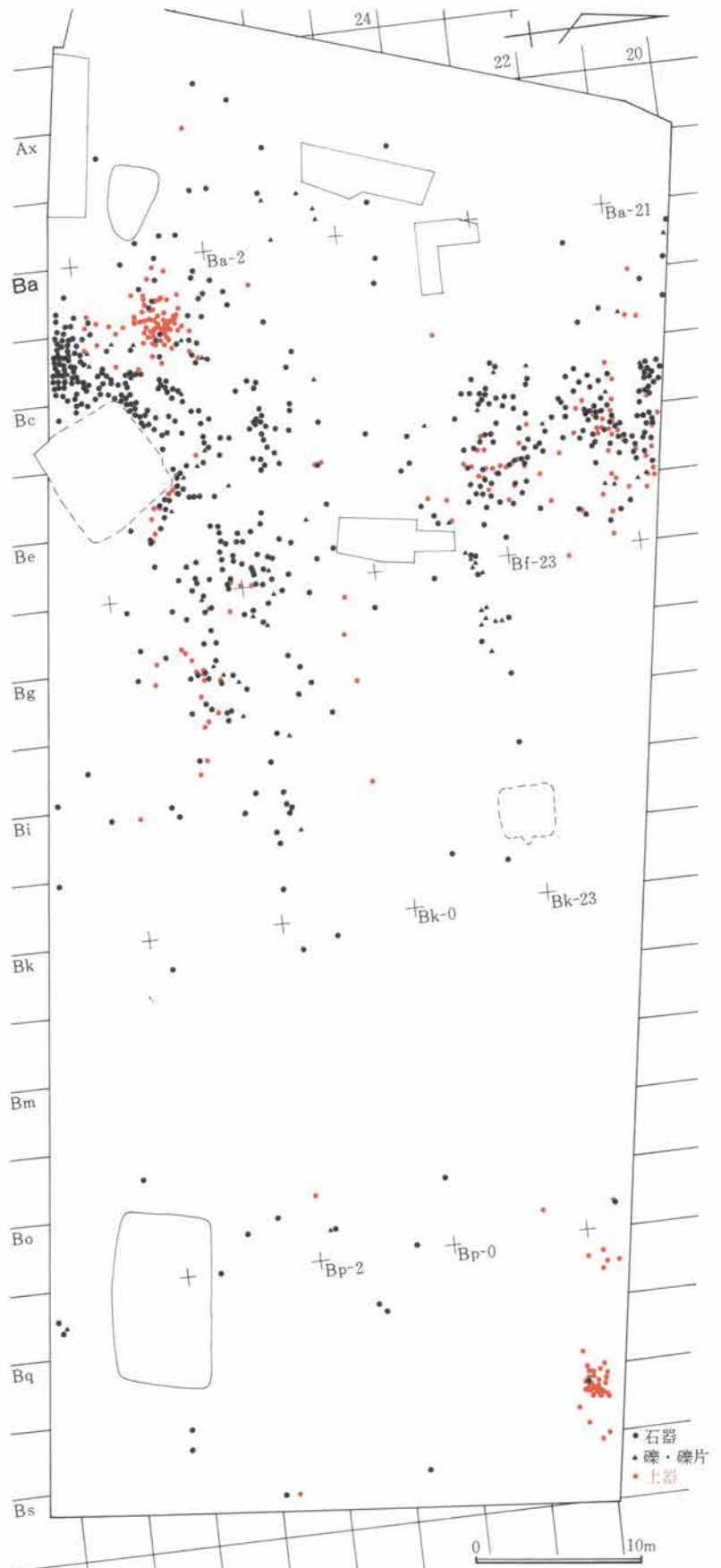
約200点の土器が遺跡西側の台地縁辺を主体に出土している。概ね、その分布範囲は石器の分布範囲に一致しており (第65図)、台地縁辺に近い地点に2カ所を確認したほか、台地内部に1カ所を確認している。今回検出した土器は、縄文時代早期後半の撚糸文系土器群や前期の黒浜式土器・諸磯式土器が主体で、このほかには草創期の爪形文や押圧縄文、中期・後期の土器が出土している。以上複数の土器型式は、それぞれ一部で重複分布する一方、より後出の土器型式 (前期の黒浜式土器・諸磯式土器) が良く集中分布する傾向を示している。

以下、型式別に見た土器分布を示し、その分布傾向を把握していきたい。なお、分類不明な土器と、単独分布する中期・後期の土器は、ここでは図から省いた。

第1群土器の分布 (第66図)

台地縁辺に近い南北両端の2地点に分布域を持つ。草創期 (第1群) の土器は3群からなり、北側の集中地点には爪形文土器 (a類) が9点、南側の集中地点には押圧縄文 (b類) 4点と、無文土器 (c類) 5点が分布している。

c類に分類した土器は全体に薄手で、胎土や焼成の特徴がb類の土器に類似していることから、同一個体を含む可能性が強く、それぞれ施文方法の違う土器が北側の集中地点と南側の集中地点に分布域を違え分布するといえよう。



第65図 石器と土器の分布

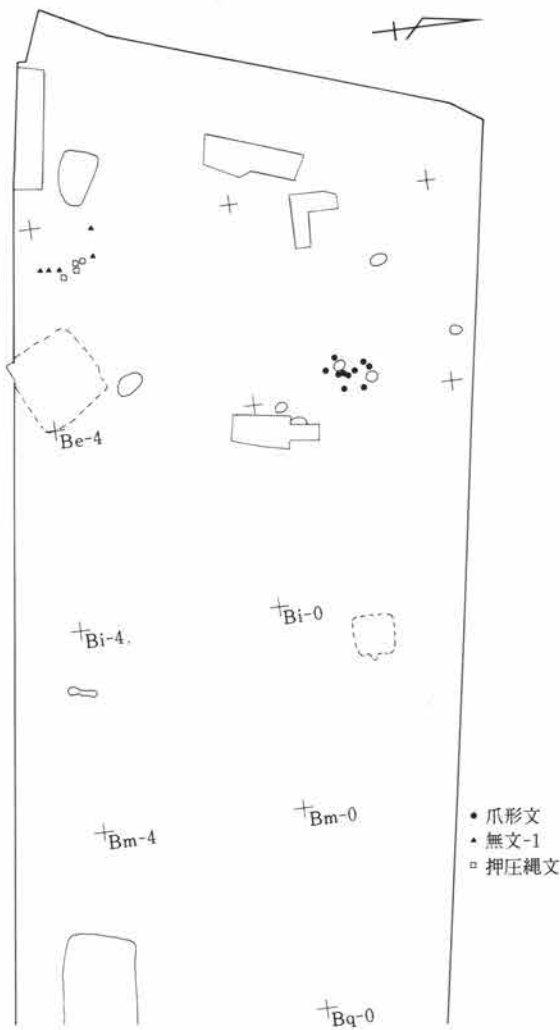
第2群土器の分布 (第67図)

遺跡西側の台地縁辺に分布しており、出土点数も多い。その分布範囲は調査区外にも広がり、また、住居にも破壊され、全貌は明らかではない。第1群土器の分布には粗密が見られ、4カ所に集中部を形成している。本類の土器は撚糸文や沈線文を施す土器と無文土器からなる。前者は3群に、後者は6群に細分され、以下この細分に従い、その分布の在り方を指摘するなら、分布は粗密が存在すること、集中分布するものにも複数の地点に分布する資料が存在すること、が指摘されよう。以上の分布の相違に対し、分布の成因を一々評価するのは極めて難しい。ただ単純に、同一地点に同一型式の土器が分布する

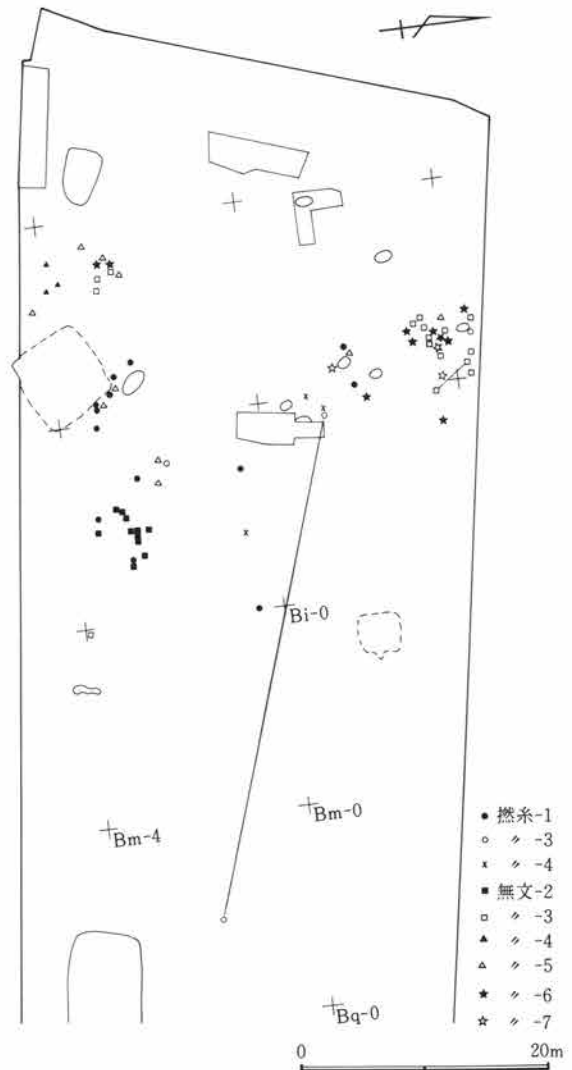
場合には純粹に「廃棄か、遺棄か」で解釈可能だが、複数の地点に分布する場合には、出土数量も少なく、複数の土器型式が混在するので解釈が難しくなる。この遺跡の場合には撚糸文や沈線文を施す土器にも無文土器と同様に複数の地点に分布する資料が存在するため、個体単位で分類できないためとも思われ、結論は保留しておきたい。

第3群土器の分布 (第68図)

遺跡西側の台地縁辺に近い北側の遺物集中地点に分布している。その分布範囲は広く、散漫な状態で分布しており、概ね、第2群土器(撚糸文土器)の分布に一致している。



第66図 型式別土器の分布(爪形文・押圧縄文・無文-1)



第67図 型式別土器の分布(撚糸文-1・3・4, 無文2~7)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

複数の個体よりなる可能性が強い。

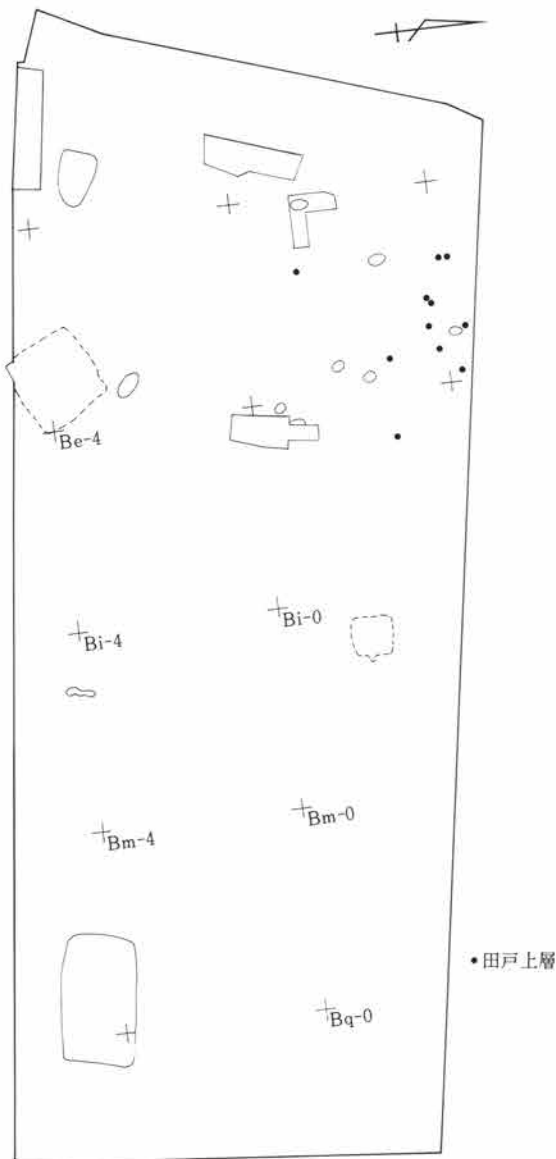
第4群土器の分布 (第69図)

台地縁辺から50m以上内側の地点に分布しており、良好な状態で集中出土した。第4群土器に分類した土器は総て同一個体で、「廃棄か、遺棄か」は別に本来の状態を良く残している。

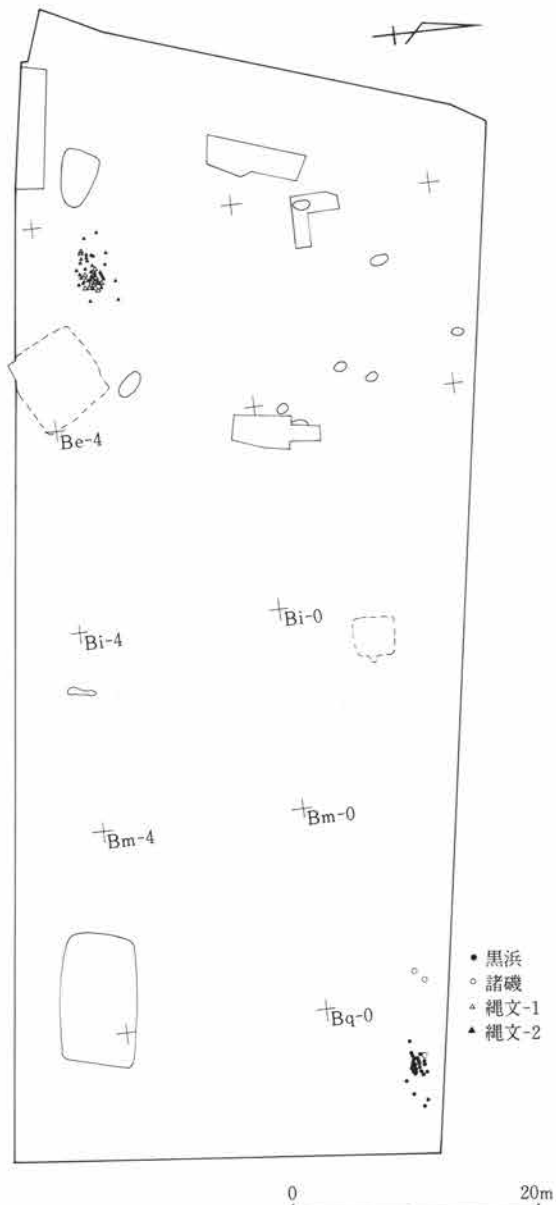
と、台地縁辺から50m以上も内側の地点に分布している。前者は同一地点から出土しており、赤味の強い一群 (第42図10~12) と、褐色の一群 (第42図13) からなり、同一個体の可能性が強い。第2群土器の分布と一致している。後者は第4群土器の分布よりやや西側に2点、同一地点に1点が分布している。

第5群土器の分布 (第69図)

遺跡西側の台地縁辺に近い南側の遺物集中地点



第68図 型式別土器の分布 (田戸上層)



第69図 型式別土器の分布 (黒浜・諸磯・縄文-1・2)

b-2. 石器の分布 (第65図)

石器は全体の約90%がA区とB区に集中して出土している。遺物を伴う明確な遺構が少なく、遺物は総て包含層(第Ⅱ層)から出土している。石器分布は土器分布と同様に遺跡西側の台地縁辺に集中しており、台地内部の分布は薄い。この地点では多時期に亙る複数の土器型式が混在して出土しているため、ここでは、石器と石材の関係把握を目的に石材毎に分け、図示した。

黒色頁岩の分布 (第70図、上段)

全体の60%を占め、最も多く石器素材に使用している。一部住居に破壊され、更に調査区外にも確実に石器分布が広がることから、その正確な分布状況は不明だが、現状でも石器分布の粗密が生じており、南北の集中地点には複数の石器集中地点が存在している。石器の集中地点を単位に石器組成を概観してみた場合、どの地点でも剥片や碎片の出土量が多く、製作途中で破損した石鏃や削器、加工痕や使用痕を残す剥片が多く存在すること、接合資料も多く存在することから(第72図)、石器製作の状態を良く残している。一方、石器が集中分布する地点より東側には削器を主体に完成状態の搬入石器が多出する傾向が指摘されよう。

以上の分布傾向から、台地縁辺の石器が集中分布する地点と、それより東側の石器が散漫に分布する地点に二分され、一見して場の「使い分け」が存在していたように見える。だが、西側の集中地点にも搬入石器が存在すること、多時期に亙る土器型式が存在することから一概には断定できない。

黒色安山岩の分布 (第70図)

出土量は極めて少なく、全体の7%(47点)を占めるのにすぎない。北側の集中地点に多く分布するほか、南側の集中地点にも出土している。出土点数に対し、完成した状態の石器が多く存在しており、南北の石器集中地点には有意ある関係が見られないため、同時存在した可能性は低い。

点紋頁岩の分布 (第70図)

出土量は極めて少なく、全体の6%(39点)を占めるのにすぎない。主に南側の集中地点に分布しており、調査区外にも確実に分布が広がる。石器集中地点には剥片や碎片が多く出土しているほか、接合資料も存在することから(第63図、接合資料-4)、この地点で石器製作が展開した可能性が高い。

黒曜石の分布 (第71図)

出土量は極めて少なく、14点が出土しているのにすぎない。分布は明確に集中せず、石鏃や加工痕・使用痕を残す石器が多い。剥片や碎片の量も少なく、石器製作の痕跡は乏しい。

チャートの分布 (第71図)

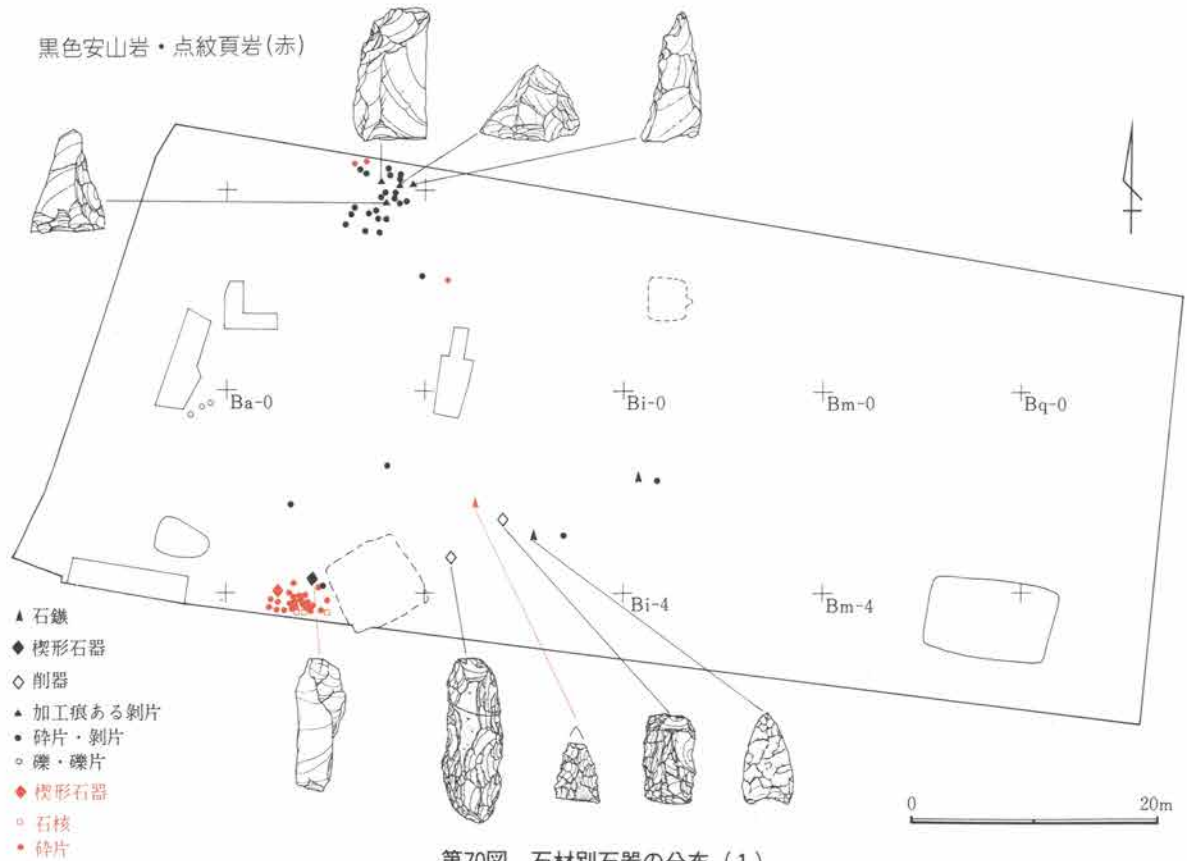
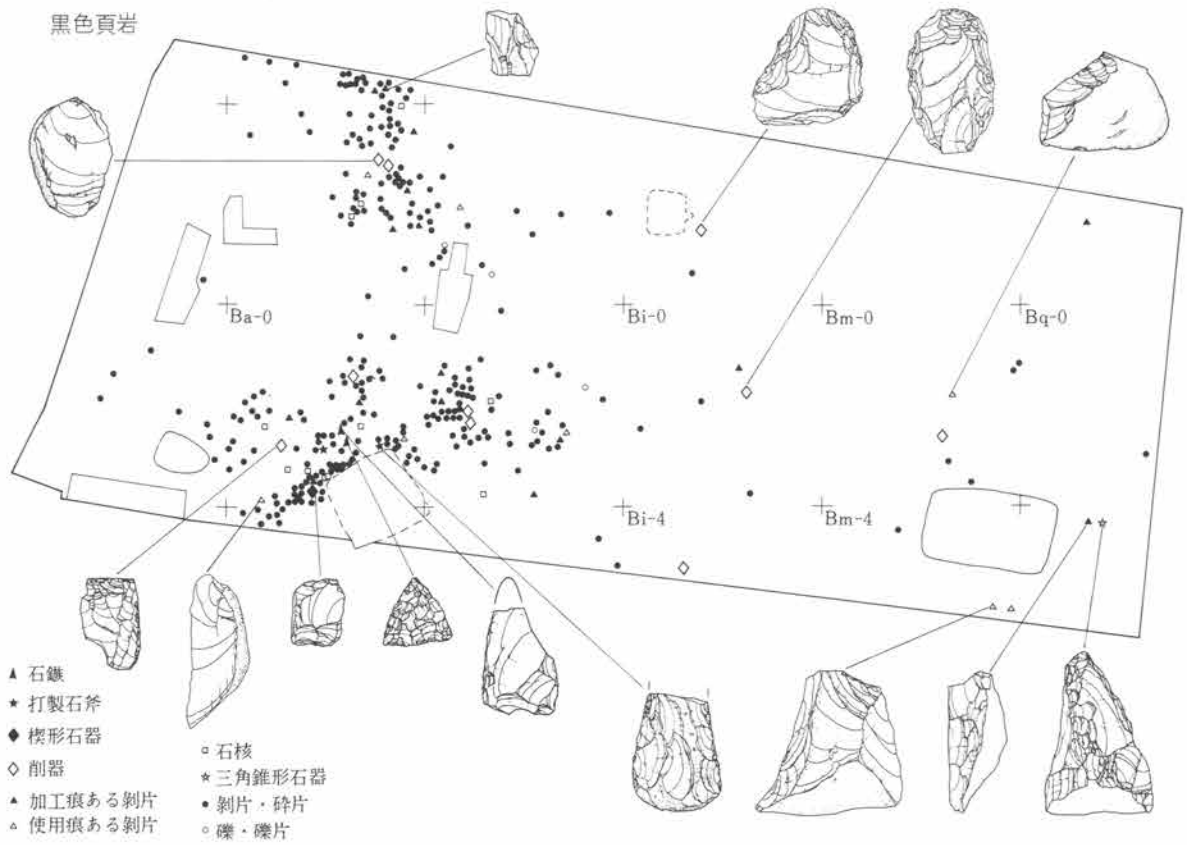
出土量は極めて少なく、24点が出土しているのにすぎない。南側集中地点に多く分布しており、石鏃と碎片が同一地点に分布していた。石鏃は母岩も大きく異なるほか、碎片も複数の母岩からなり、そのため、この地点で石器を製作したとは断定できない。

その他の石材分布 (第71図)

出土石器には多様性に富む石材が存在しており、1点のみ出土した石器も多い。石鏃や削器・砥石の他、片刃石斧・磨製石斧など定形石器が多く、この地点以外で製作した石器を搬入している可能性が高い。その分布状態は一定の地点に集中することなく、それぞれ他の石器の分布に重なるよう分布している。また、敲石に用いる輝緑岩や閃緑岩は碎片や礫片の状態で出土しており、恐らく使用の結果、破損した可能性が高い。

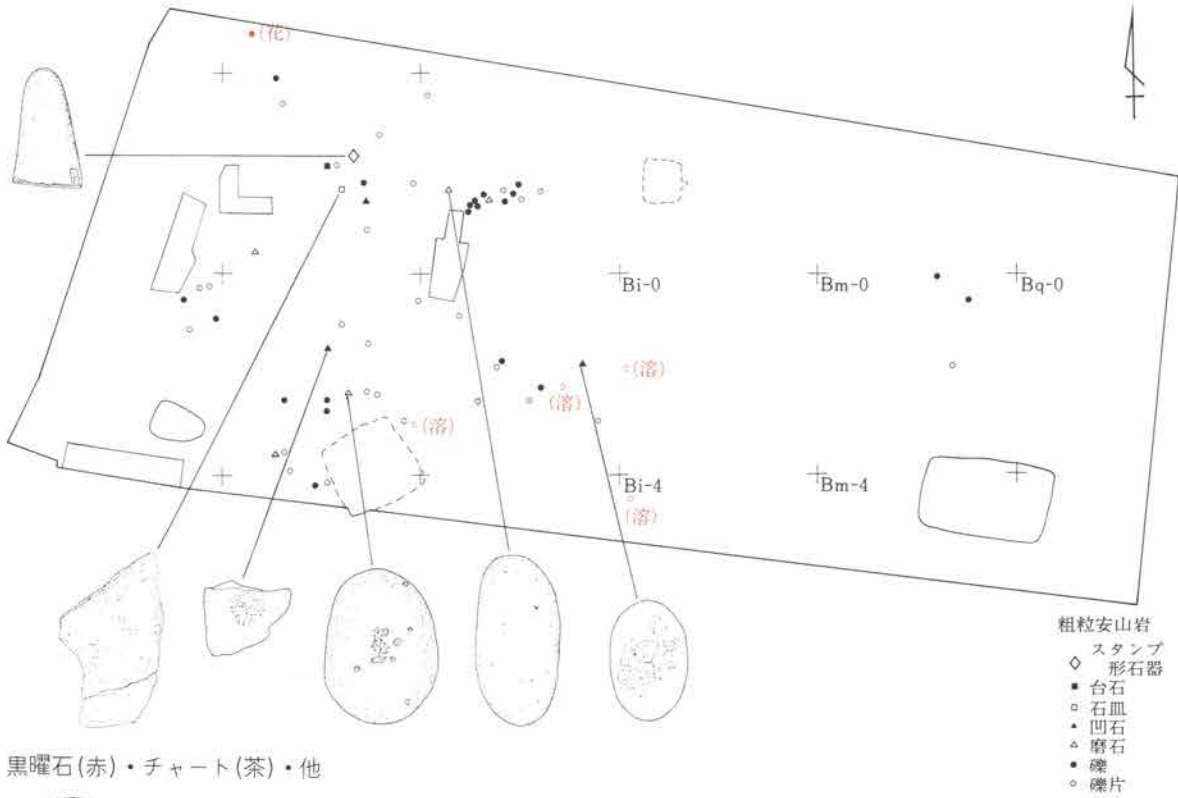
石器の分布状況を概観した結果、同一母岩と断定可能な石材(点紋頁岩)は一定範囲に集中する傾向が指摘され、このほかにも黒色安山岩の一部が集中分布する傾向を示していた。黒色頁岩も石器の集中地点が複数存在しており、それぞれ石器の集中地点が重複して台地縁辺の石器分布を形成した可能性が

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物

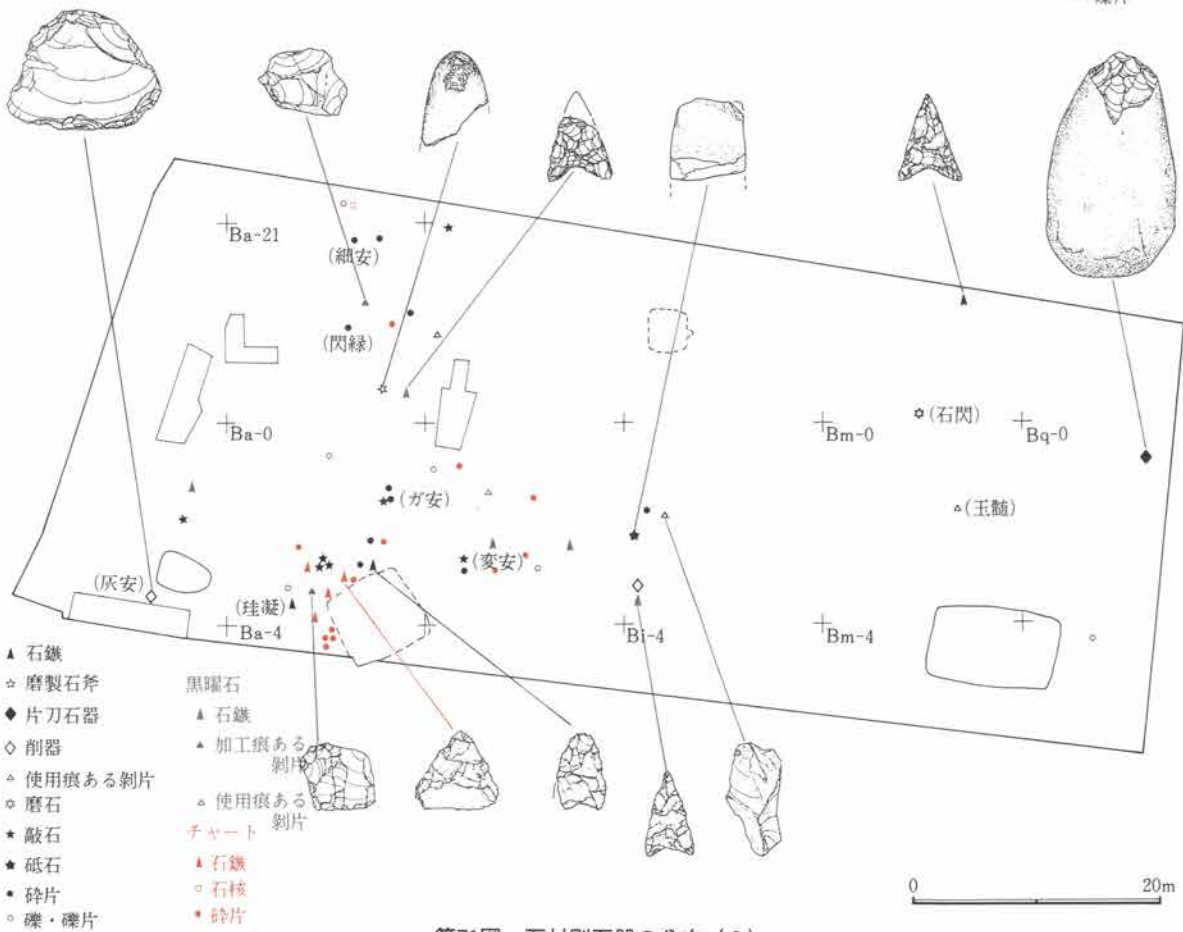


第70図 石材別石器の分布(1)

花崗岩(赤)・溶結凝灰岩(赤)・粗粒安山岩

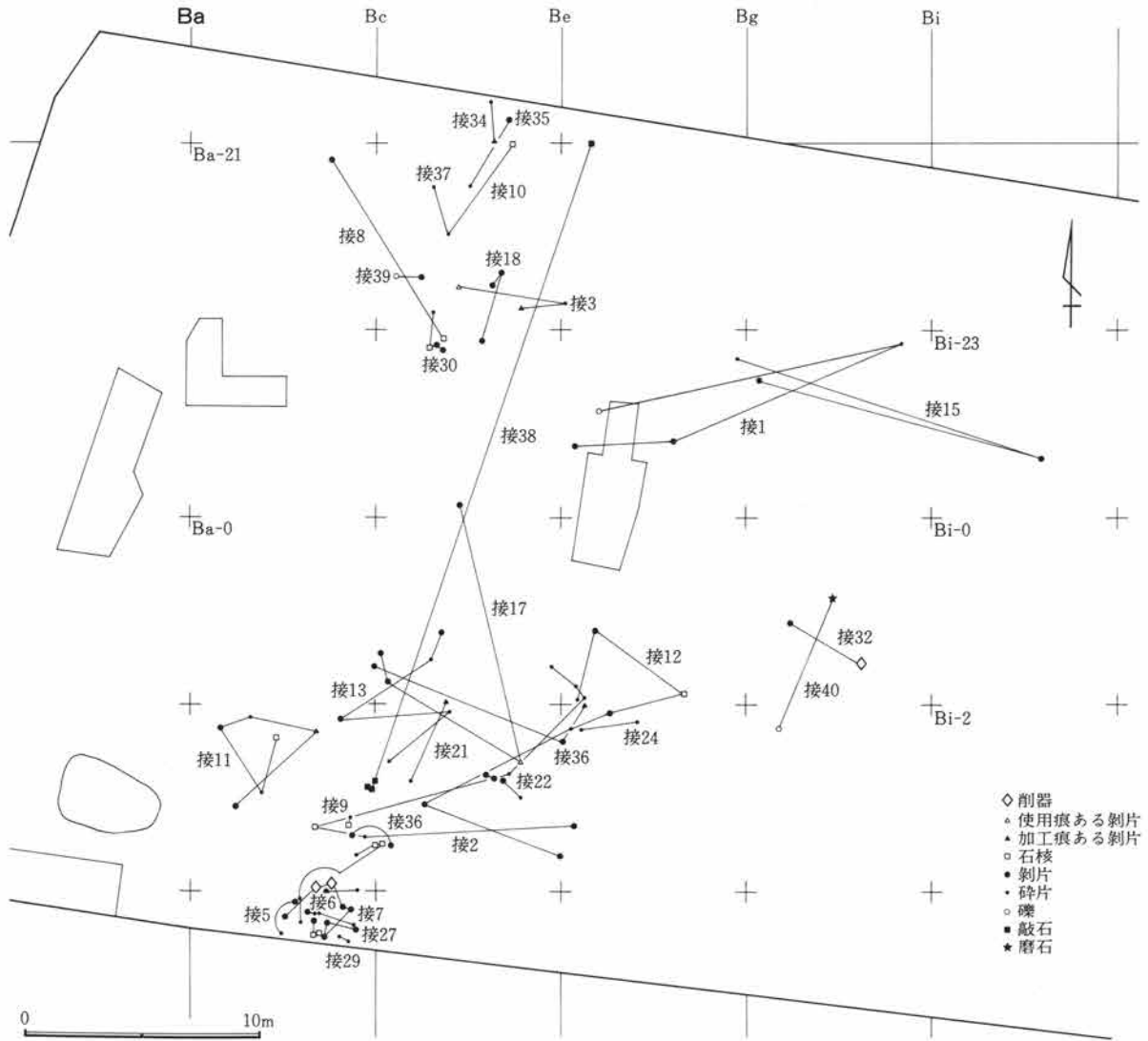


黒曜石(赤)・チャート(茶)・他



第71図 石材別石器の分布(2)

Ⅲ 縄文時代の遺構と遺物



第72図 接合資料の分布

指摘されよう。一方、接合資料は1点（接合資料—38、第57図6）を除き、同一地点で完結している。接合資料は南北の地点を跨ぐ接合資料は見られないのであり（第72図）、北側集中地点と南側集中地点の関係を暗示している、と思われる。ただ、型式別に見た土器分布は後出の土器ほど集中するのに対し、石器には同様な傾向が窺われない。石器の接合資料も広範に分布しており、各々の地点で出土した石器が同時に存在したのか否か、石器や土器の分布状態だけでは判断できない。多時期に互る土器が示す通り、棒状を呈す礫器（第48図2）や、大形肉厚の打製石斧（第48図3）の他、製作意図の明確

な、独特な形状を呈す削器（第51図5・9）など、縄文石器とは毛色の違う石器も若干だが出土しており、各々の段階の石器が混在する可能性と、一方で、量的に多い撚糸文土器群に伴う石器が主体を占めるのではないかと推定している。

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

1. 概 要

古墳時代以後の遺構には、7世紀後半段階の住居1軒・9世紀後半段階の住居1軒・墓壇1基の他、道跡・溝・時期不明の土坑が多数ある。全般に遺構の分布密度は低く、切り合い関係を持つ遺構は希である。それでも住居や墓壇は台地西側のA区やB区に集中する傾向が窺われ、台地縁辺に立地していた。

住居は2軒が確認され、それぞれ住居の所属時期は大きく異なる。

また、この地区では古道を1条検出している。遺跡の南側には隣接して飯土井神社が位置する。神社は南北に鳥居を設けており、今回検出した古道は、北側の鳥居の延長線上に位置している。その構築年代や使用時期は不明だが、硬化面が浅間起源のAs-Bに似た砂質土であることや、位置関係から飯土井神社に関係する可能性が強い。

このほか、溝(3条)や土坑(60基)を検出している。調査範囲の全域に分布しており、特に、A区・B区に集中する傾向が指摘されよう。遺構に伴う遺物が皆無で、所属時期の不明な遺構が多く、遺構の性格も不明確である。とはいえ、なかには明確に区画を意図した溝(1号)も存在していた。溝は調査区内でL字状を呈し、長さ140m~150mを測る。この区画の中に土坑も多く存在していること、土坑の配置・配列を規定していることから、位置関係から神社との関連の中で、その性格を把握すべきものと考えている。

2. 住 居

住居は2軒とも台地西側の縁辺(A区)に単独住居で検出され、良好に遺存していた。それぞれ住居の埋没土層の堆積は若干相違しており、古墳時代後期の2号住居にはAs-Bの純層が堆積しているのに対して、平安時代の1号住居には純層の堆積が確認

できない。

1号住居(第73図、PL9)

位 置 Bi・Bj-22・23Gに位置する。

形 状 一辺が3.3mを測る正方形を呈す。各辺ともほぼ垂直に壁が立ち上がる。

主軸方位 N-100°-E

床 面 確認面(ローム層の上面)より50cmから60cm掘り込み、床面を構築している。床面の構築方法は住居の周辺付近では5cmほど深く掘り込み、褐色土とローム土を充填して床面を構築しているのに対し、住居の中央付近ではそのままロームを直接床面に使用している。床面は全体に平坦だが、カマドを構築した東壁周辺で高く、若干傾斜している。西壁周辺の床面とは、約5cmほど高低差がある。

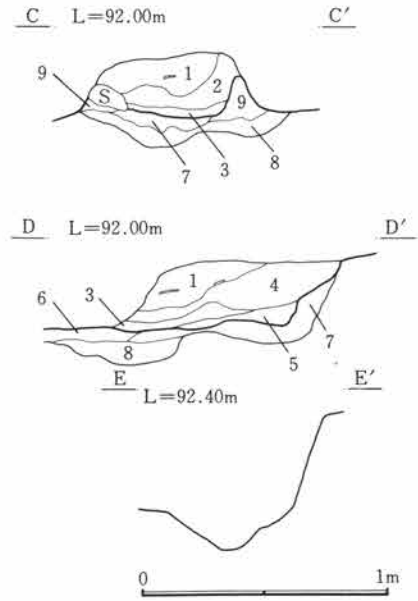
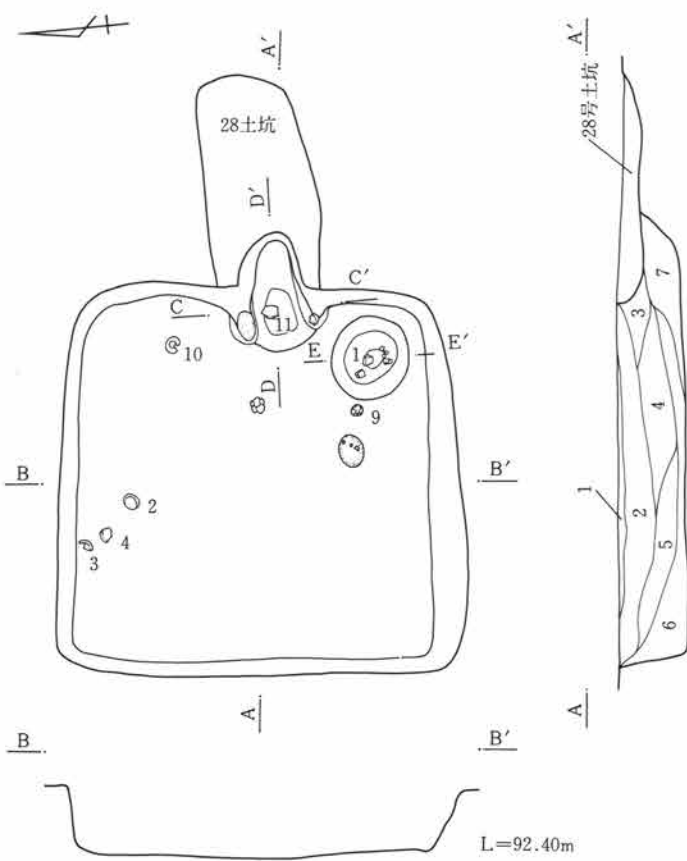
カマド 東壁の中央付近に構築している。全体の形状は楕円形状を呈し、住居内部にカマド燃焼部を持ち、その前面は良く熱を受けている。右側袖部には礫を、左側袖部には土器の破片(杯、第47図7)を袖芯に使用している。一部、上面が土坑(28号土坑)と重複しているため、全体の規模は不明確である。現状で、全長95cm・幅75cm・燃焼部の幅は35cmを測る。
貯蔵穴 住居南東、カマドの右隅に位置している。長径68cm・短径60cm・深さ28cmを測り、平面形状は楕円形状を呈す。埋没土中より杯の破片(第74図1)が出土している。

柱穴 未検出である。

埋没土層 最上層(第1層)にAs-B起源の砂質土を含む黒色土が堆積するほか、褐色土が堆積する。

出土遺物 カマドの周辺から須恵器、碗(第74図8・9)が、北側の壁際に土師器、杯(第74図1・2・4)が、甕(第74図11)がカマドの内部から出土している。なお、この甕はカマドの使用面から15cmほど浮いており、カマド天井部を構築するのに使用した可能性が高い。

IV 古墳時代以降の遺構と遺物



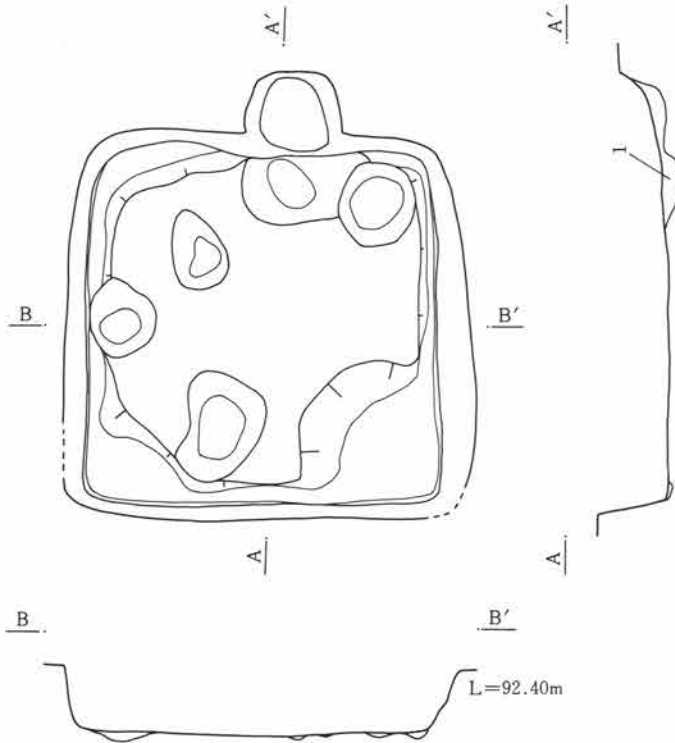
1. 黒色土 砂粒 (As-B) を含む。
2. 暗褐色土 ローム土を主体に、焼土粒を少量混入する。全体に粘性に乏しい。
3. 〃 2層に類似する。焼土粒・焼土塊を多く含む。
4. 〃 ローム粒を多量に混入。
5. 〃 黒色土を斑状に含む。全体に色調は暗い。
6. 黄褐色土 ローム土を多く含む他、炭化粒を少量混入。

(掘り方)

1. 暗褐色土

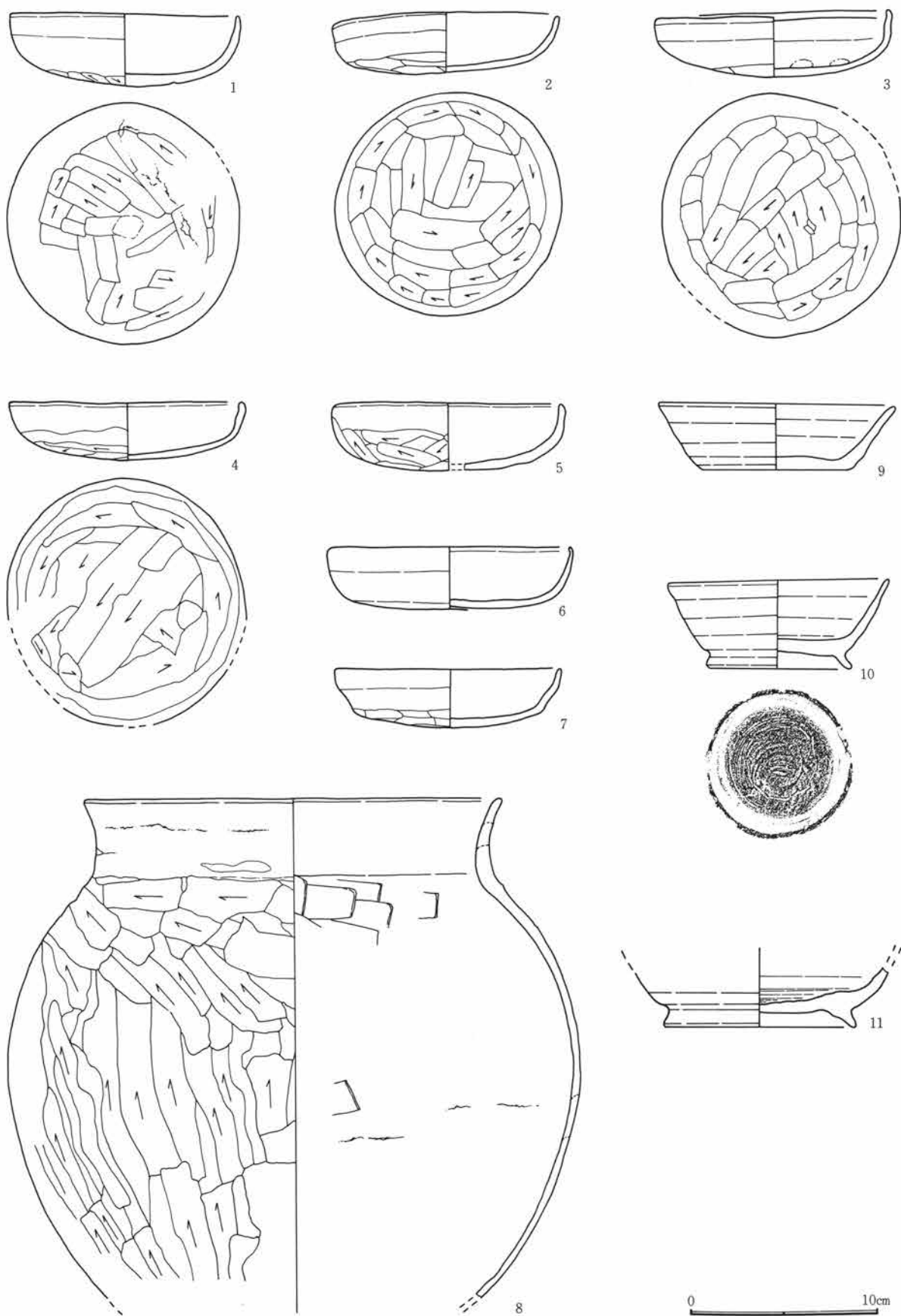
カマド

1. 暗褐色土 ロームを主体に、焼土粒・炭化粒を少量混入。
2. 褐色土 焼土粒・焼土塊を多量に混入。
3. 暗褐色土 灰と炭化粒の混土層。
4. 〃 炭化粒を多く含む。3層に類似している。
5. 〃 焼土と、灰の混土層。
6. 褐色土 熱で上面は赤化している。
7. 〃 ローム粒・炭化粒を少量混入。
8. 〃 ロームと黒色土の混土層。
9. 〃 粘土とローム土の混土層。



第73図 1号住居跡

0 2m



第74图 1号住居跡出土遺物

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

番号・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第74図1 土師器杯	口径：12.0 底径：— 器高：3.7	No. 1・9 掘り方 覆土 ほぼ完形	口縁部は内湾して立ち上がり、底部は弱い丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物(輝石)・石英を多く含む。 ②酸化焰。 ③橙(5 Y R 6/6)。
第74図2 土師器杯	口径：12.0 底径：— 器高：3.2	No. 3 完形	口縁部は内湾して立ち上がり、底部は弱い丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物・石英の他、凝灰岩を少量混入。 ②酸化焰。 ③橙(5 Y R 6/6)。
第74図3 土師器杯	口径：12.5 底径：— 器高：3.1	No. 1・5・7 カマド 覆土 カマド掘方覆土 ほぼ完形	口縁部は直立気味に立ち上がり、底部は丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物・石英を混入。 ②酸化焰。 ③赤褐(5 Y R 6/8)。
第74図4 土師器杯	口径：12.5 底径：— 器高：3.4	No. 2 覆土 ほぼ完形	口縁部は直立気味に立ち上がり、底部は丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物・石英を混入。 ②酸化焰。 ③にぶい橙(7.5 Y R 6/4)。
第74図5 土師器杯	口径：(12.4) 底径：— 器高：3.4	カマド 覆土 1/4	口縁部は直立気味に立ち上がり、底部は丸味を持つ。口縁部は横撫で、底部は篋削り。	①黒色鉱物・石英の他、凝灰岩を混入。 ②酸化焰。 ③にぶい橙(7.5 Y R 6/4)。
第74図6 土師器杯	口径：(12.8) 底径：— 器高：3.2	覆土 1/5	口縁部は直立気味に立ち上がり、底部は丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物・石英を混入。 ②酸化焰。 ③赤褐(5 Y R 5/6)。
第74図7 土師器杯	口径：11.9 底径：— 器高：3.1	No. 8 覆土 3/4	口縁部は外反気味に立ち上がり、底部丸味を持つ。口縁上半は横撫で、下半は無調整、底部は篋削り。	①黒色鉱物を少量混入。 ②酸化焰。 ③にぶい黄褐(10 Y R 5/3)。
第74図8 土師器甕	口径：22.0 底径：— 器高：(25.8) 最大径：30.1	No. 6・7 カマド 覆土 28号土坑 1/2	口縁部は弱い「コ」字状を呈し、胴部中位で最大径を持つ。口縁部は横撫で、胴部上位は横方向の篋削り、中位以下は縦方向の篋削り。	①黒色鉱物・石英など、砂粒を多く含む。 ②酸化焰。 ③明赤褐(5 Y R 5/6)。
第74図9 須恵器杯	口径：12.5 底径：7.9 器高：3.8	No. 11・12・13・14 ・15 覆土 4/5	轆轤右回転。口縁部は外反して立ち上がり、直線的に開く。底部は回転篋起こし。	①白色岩片(凝灰岩)を多量に混入する。 ②還元焰。 ③灰(5 Y 6/1)。
第74図10 須恵器碗	口径：11.6 底径：7.6 器高：4.5	No. 4・5 ほぼ完形	轆轤右回転。口縁部は外反して立ち上がり、直線的に開く。高台は「ハ」の字状を呈す。底部は回転糸切り。	①白色岩片(凝灰岩)を多量に混入する。 ②還元焰。 ③灰(10 Y 5/1)。
第74図11 須恵器碗	口径：— 底径：10.1 器高：(2.8)	No. 5 カマド 底部のみ	轆轤右回転。高台は断面三角形形状を呈し、「ハ」の字状に開く。底部杯部の切り離し技法は不詳。	①鉱物の混入は少なく、少量の岩片を混入。 ②還元焰。 ③灰(7.5 Y 6/1)。

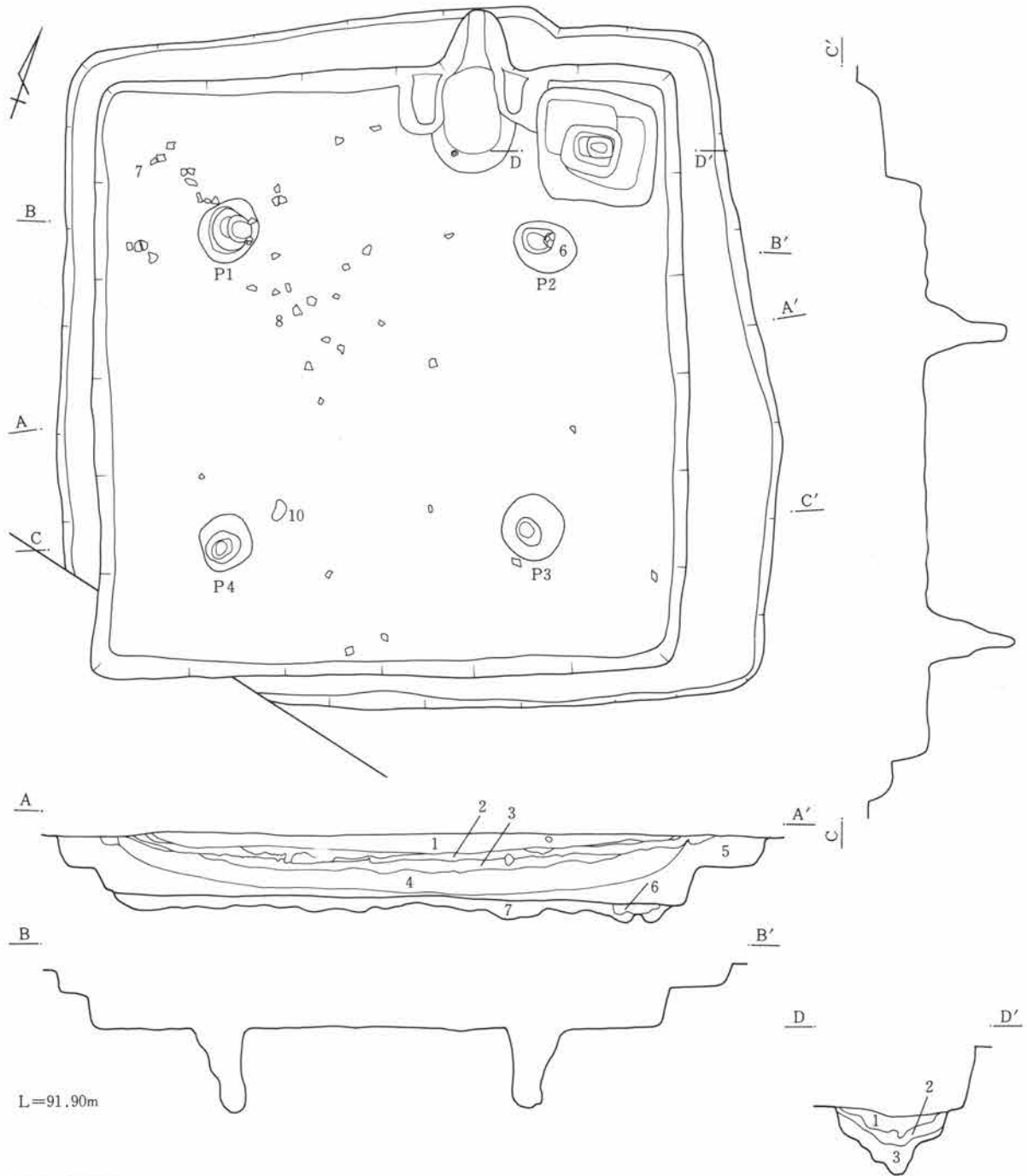
2号住居 (第75図、P L 10)

位置 調査区南側の Bc・Bd-3・4 G に位置する。

形状 一辺が6.4mを測る正方形形状を呈す。各辺とも幅35cm~70cmのテラスを持つ。

主軸方位 新(N-20°-W)、古(N-71°-E)

床面 確認面(ローム層の上面)より50cm~60cm掘り込み、床面を構築している。床面の構築方法は、住居の周辺を若干深目に掘り込み、黒色土とローム土を充填して構築している。全体に床面は平坦だが、床面から30cmの所と、10cmの所にテラスが存在するのを確認した。1段目の高い方のテラスは全周して、



B区2号住居跡

1. 暗褐色土 全体に砂質で、サラサラしている。粘性は乏しい。
2. As-Bの純層。
3. 黒色土 As-Cを少量混入。
4. 暗褐色土 ローム粒を少量混入。
5. 褐色土 ロームを主体に、少量の焼土を含む。
6. ◇ ロームと黒色土の混土層。
7. ◇ ロームと黒色土の混土層。

2号住居跡貯藏穴

1. 暗褐色土 黒色土とロームの混土層。
2. 褐色土 炭化粒を少量混入。粘性は強い。
3. ◇ ローム土を主体に、少量の焼土を含む。粘性は強い。

0 2m

第75図 2号住居跡

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

2段目の低い方のテラスは東壁を中心に検出され、それぞれ住居に伴う施設と考えている。また、南側の壁際には小ピットを伴う方形の「落ち込み」が確認され、その検出位置から出入に要した施設と考えている。

カマド 2カ所に新旧・2基のカマドを検出した。新しいカマドは住居北側の中央よりやや右側に構築され、燃焼部を住居内に持つ。その内部には灰層が良好に遺存しており、また、前面の焚口付近には焼土が散布していた。カマドの袖はローム土をベースに、上面を茶褐色の粘質土で覆い袖を構築している。煙道は短く立ち上がる。現状で、全長1.2m・幅1.2m・燃焼部の幅は0.6mを測る。古い方のカマドは、住居東側の中央よりやや右側で検出した。燃焼部や袖の状態は不明だが、煙道部分のみ確認した。煙道は長く、1.35mを測り、テラスを突き抜けている。

貯蔵穴 住居の北東隅と南東隅の2カ所に、新旧・2基の貯蔵穴を確認した。北東隅の貯蔵穴は2段に構築され、途中で平坦面を持つ。概ね、方形に近い平面形状を呈し、長軸1.11m・短軸1.01m・深さ0.60mを測る。貯蔵穴はレンズ状に褐色土・黒色土が堆積している。南東隅の貯蔵穴は長軸0.74m・短軸0.60m・深さ0.72mを測り、長方形の平面形状を呈す。褐色土が主体に堆積し、特に、その上層にはローム土を多く含む。明確な貼床の痕跡は不明だが、人為的に褐色土を充填している可能性が高い。

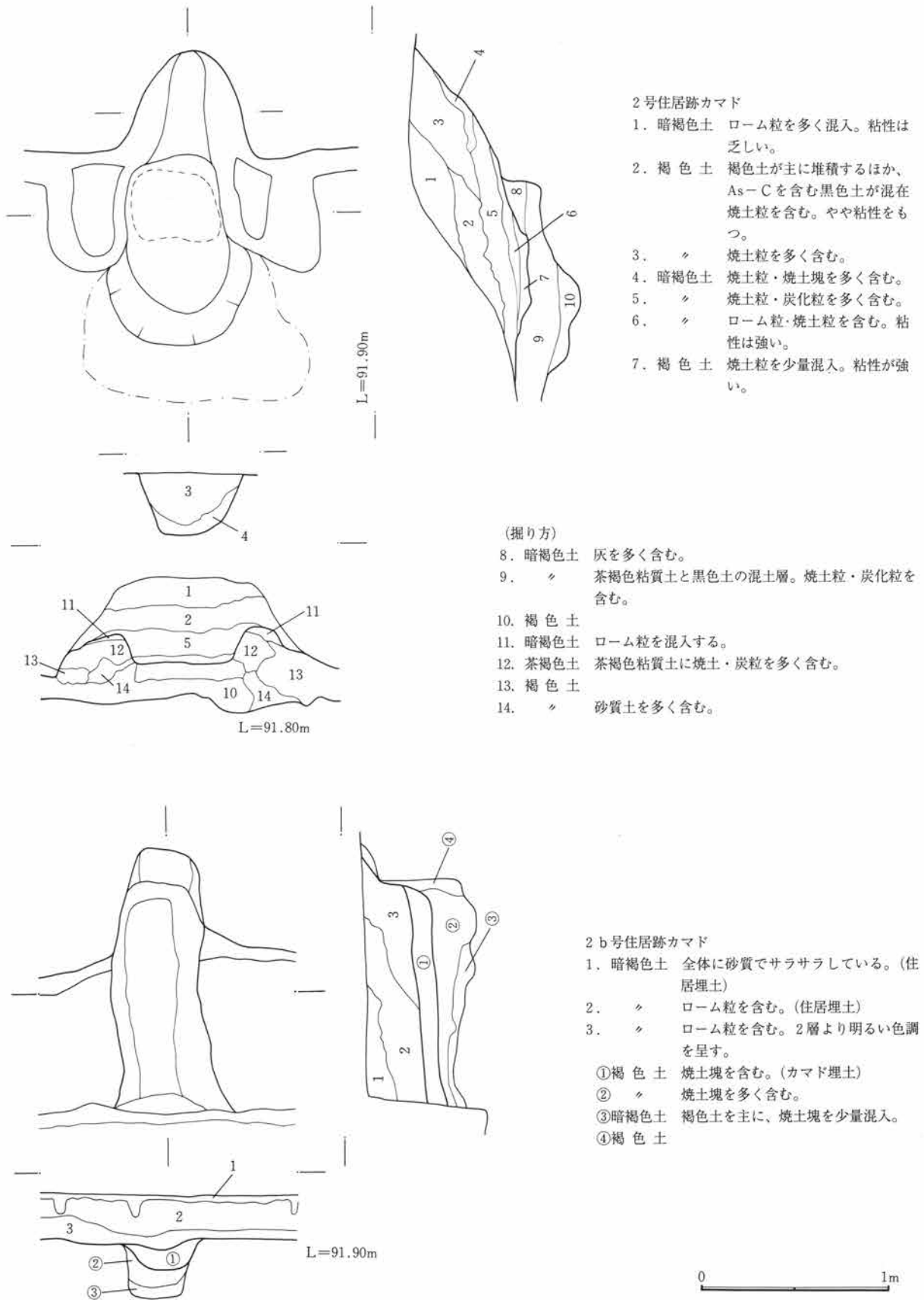
柱 穴 各コーナーを結ぶ対角線上に4本を検出した。各柱穴の心々間を結んだ形状と住居の外形は、概ね一致する。ただ、P1の柱穴が若干内側に入る。各々の柱穴の規模(長径・短径×深さ)は、P1が62cm・53cm×78cm、P2が60cm・48cm×70cm、P3が58cm×77cm、P4が55cm・51cm×83cmを測る。

埋没土層 1層にAs-B起源の砂質土を多く含む黒色土が、2層にAs-Bが純層で堆積していた。それより下位にはAs-Cを含む黒色土や、ローム土を多く含む褐色土がレンズ状に自然埋没の状態に堆積していた。

出土遺物 全般に、住居の北西コーナーと南東コーナーを結んだ対角線上に、床面よりやや浮いた状態で出土している。その内訳は杯2・甌2・甕6で、このほか、用途不明の石製品(第78図9)が1点出土している。

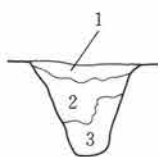
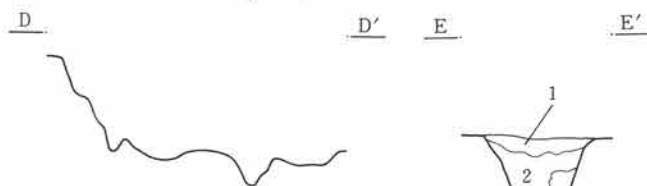
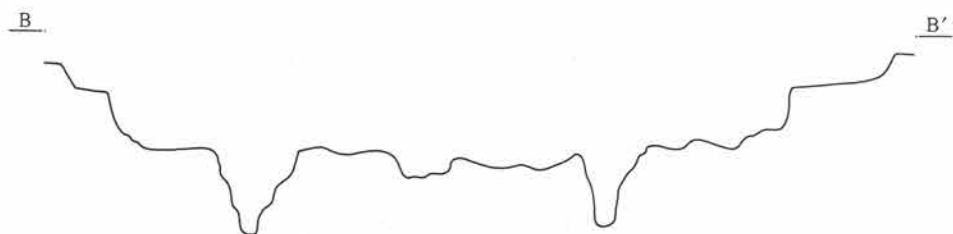
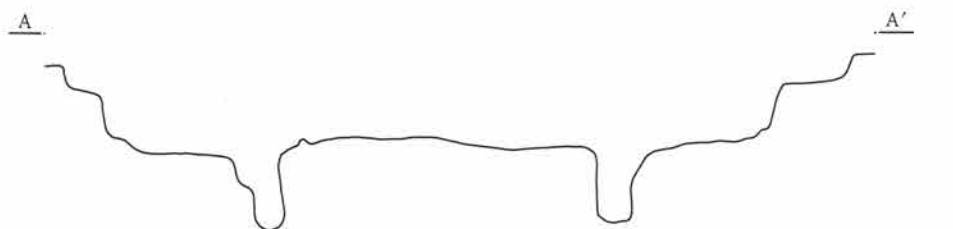
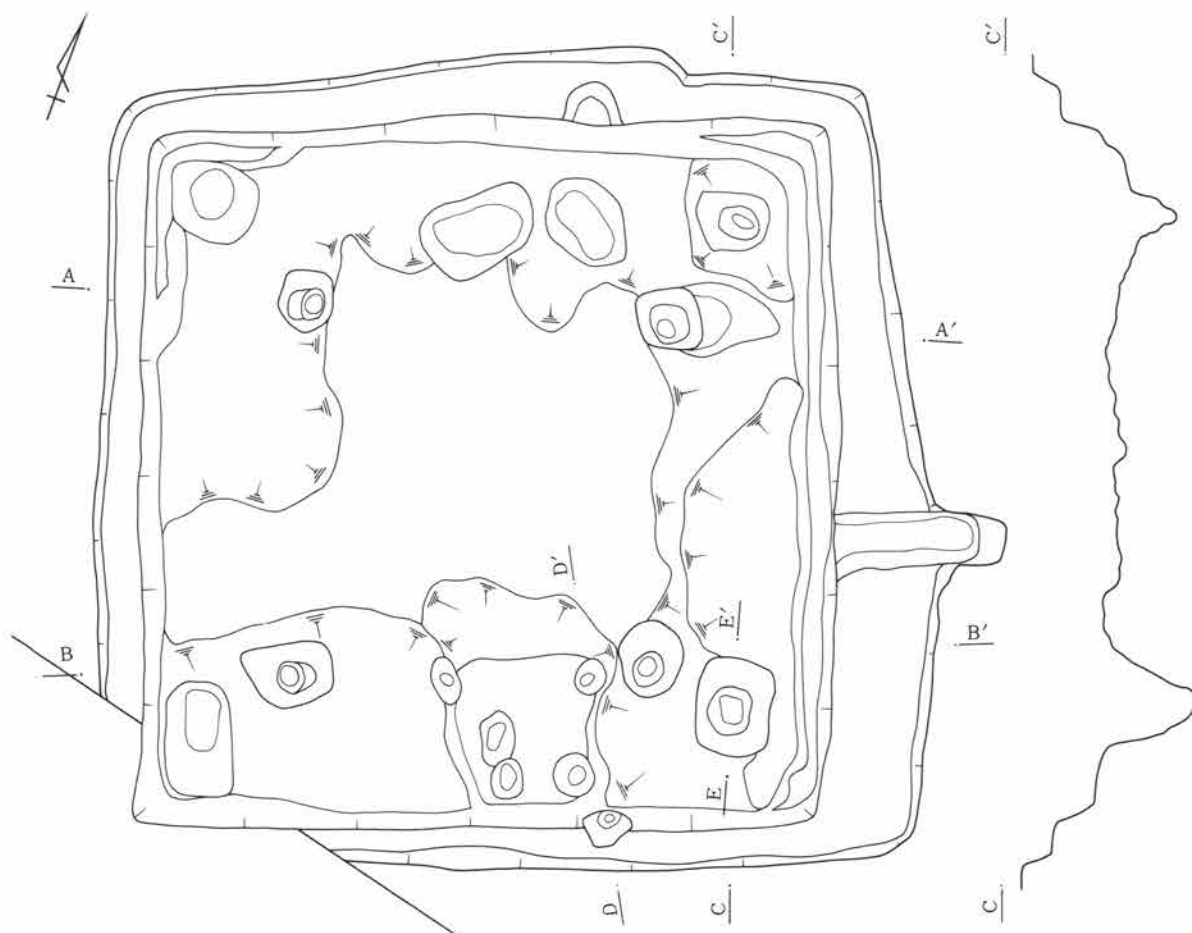
備考 この住居には東壁と北壁の2カ所にカマドが存在していた。カマドは東壁から北壁に移築して使用しており、東壁のカマドは煙道を確認したのにすぎない。即ち、カマドは東壁から北壁へ移動しているということがわかる。また、この住居では4本の柱穴しか確認できないことから、途中でカマドを移動・移築する必要が生じた可能性が高い。また、貯蔵穴は2カ所に確認され、北東隅の貯蔵穴は床面の調査で、南東隅の貯蔵穴は床下の調査で確認した。その前後関係は明確で、カマドと共に移築している可能性が強く支持している。また、調査の終盤に近い段階で検出したテラスも、出土遺物から検討できないのが残念だが、一定レベルで平坦に掘り込んでいることから、住居に伴う施設と考えている。

また、遺物は北西隅と南西隅を結ぶ対角線上に床面から浮いた状態で出土した。更に、壁際から出土した遺物は住居の中央付近から出土した遺物に比べ、より高いレベルで出土する傾向を示しており、流れ込んだ状態で遺物が出土している。だが実際には、大半の資料が接合することから、第一次埋没土の堆積が終了した時点で一括廃棄している可能性を暗示している。



第76図 2号住居跡カマド

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

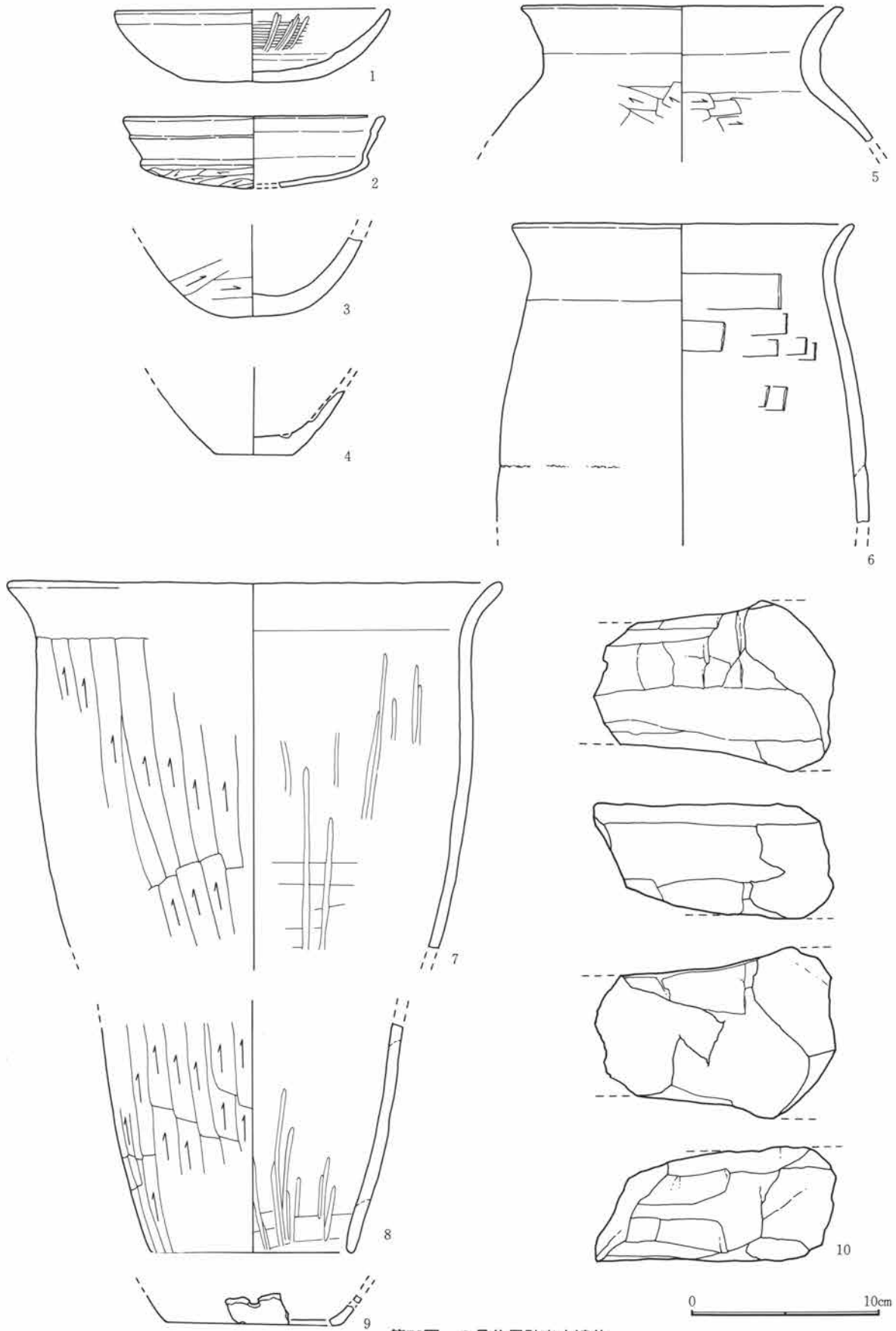


2号住居跡床面下土坑

- 1. 褐色土
- 2. 炭化粒を多く含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒を混入。やや暗い色調を呈す。

0 2m

第77図 2号住居跡掘り方



第78图 2号住居跡出土遺物

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

番号・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第78図1 土師器杯	口径： 14.6 底径： — 器高： 3.7	No.37・38・39・40 覆土 1/2	口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は直立している。底部は小径で、丸味を持つ。底部内面には弱い稜を持ち、全体を丁寧に磨いている。内面は粗れ、剥落が著しい。	①輝石・石英を多量に混入するほか、流紋岩や凝灰岩を混入。 ②酸化焰。内面黒色処理。 ③浅黄(2.5Y R7/3)。
第78図2 土師器杯	口径： (13.8) 底径： — 器高： (3.7)	No.12・14 1/4	口縁部は直線的に開き、2段に稜を持つ。底部は弱い丸味を持ち、平底に近い。口縁部は横撫で。底部は篋削り。	①鉱物の混入は少ない。 ②酸化焰。 ③橙(5 Y R6/6)。
第78図3 土師器甕	口径： — 底径： 3.8 器高： (4.0)	No. 9・13 カマド 底部のみ	底部は小径の平底を呈す。胴部外面は篋削り、内面は篋撫で。	①石英を主体に多量の砂粒を混入する。 ②酸化焰。 ③にぶい黄褐(10Y R6/4)。
第78図4 土師器甕	口径： — 底径： 4.0 器高： (3.3)	No. 1 覆土 底部のみ	底部は小径の平底を呈す。胴部外面は篋削り、底部は篋調整。器面は粗れ、特に、内面の剥落は著しい。	①白色岩片・輝石が多量に混入。 ②酸化焰。 ③にぶい褐(7.5 Y R5/4)。
第78図5 土師器甕	口径： (17.0) 底径： — 器高： (7.0)	No.33 覆土 口縁部破片	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部は丸味が強い。胴部外面は横方向の篋削り、胴部内面は横方向の篋撫で。	①黒色鉱物を混入するほか、岩片を少量混入。 ②酸化焰。 ③明赤褐(2.5 Y R5/6)。
第78図6 土師器甕	口径： (18.0) 底径： — 器高： (15.5)	No. 2・4・7・8 口縁部～胴部	口縁部は外反気味に立ち上がり、胴部は弱い丸味を持つ。胴部外面は篋削り後、撫で調整を施している。胴部内面は篋撫で。	①黒色片岩を特徴的に多く含む。 ②酸化焰。 ③橙(5 Y R6/6)。
第78図7 土師器甕	口径： (26.0) 底径： — 器高： (18.0)	No. 7・25・26・29 カマド 覆土 口縁部～胴部	口縁部は外反気味に立ち上がり、胴部は弱い丸味を持つ。胴部外面は縦方向の篋削り、胴部内面は横方向の篋撫で後、縦方向の篋磨き。	①黒色鉱物・白色岩片を混入。 ②酸化焰。 ③にぶい黄橙(10Y R6/3)。
第78図8 土師器甕	口径： — 底径： (10.7) 器高： (11.8)	No.18・19 胴下部～底部	胴部は若干外反気味に立ち上がる。底部には筒状の単孔を穿つ。胴部外面は縦方向の篋削り、胴部内面は横方向の篋撫で後、縦方向の篋磨き。	①黒色鉱物・白色岩片を混入。 ②酸化焰。 ③にぶい黄橙(10Y R6/4)。
第78図9 土師器甕	口径： — 底径： (9.2) 器高： (1.5)	覆土 底部破片	底部に筒状の単孔を穿つ他、胴部側面に径5mmの孔を穿つ。外面は篋削り。内面は篋撫で。	①鉱物の混入は少ない。 ②酸化焰。 ③にぶい橙(7.5 Y R6/4)。
第78図10 用途不明 石製品	長さ： (16.9) 巾： 11.8 高さ： (8.0)	No.35 両端部欠損	全体形状は柱状を呈す。全面に擦り面と、はつり痕(鑿)が著しい。	①榛名山ニツ岳噴出軽石

3. 墓 壙

台地縁辺より約55m内側の地点（AI-3G）で、墓壙と推定可能な土壙（30号土壙）を1基検出した。

土壙の平面形状は、やや歪んだ長方形形状を呈し、特に、西壁は外側に張り出している。壙底は概ね平坦で、ほぼ垂直に壁が立ち上がる。主軸は北東方向を指し、主軸方位はN-31°-Eを示す。長軸2.52m・短軸0.96m・深さ0.75mを測る。埋土は

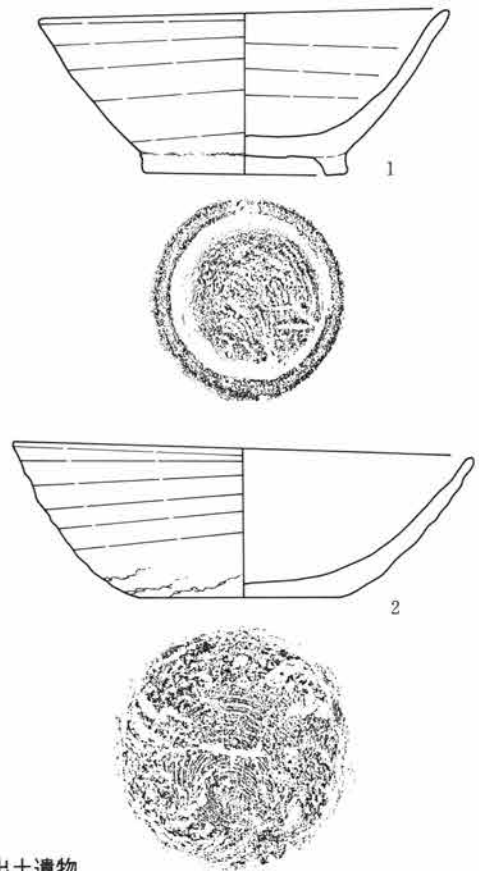
ローム土を多く含む褐色土を主体に堆積しているほか、上層にAs-Bを含む黒色土が堆積していた。

出土遺物は南壁に近い壙底よりやや浮いた状態で、椀（第79図1・2）が出土している。

この土壙には墓壙と断定する積極的根拠に乏しい。ここでは、土壙の平面形状と、人為的な埋没状態を示す土層の堆積、埋設したかのようにも見える土器の出土状態を根拠に墓壙と判断した。



1. 暗褐色土 As-Bを含む。全体に砂質で、粘性に乏しい。
2. ◇ ローム土を混入する。
3. ◇ ローム土を混入する。2層に比べ明るい色調を呈す。
4. 褐色土 ローム土を多量に混入する。



第79図 土壙（30号土壙）と出土遺物

第4表 第30号土壙出土遺物観察表

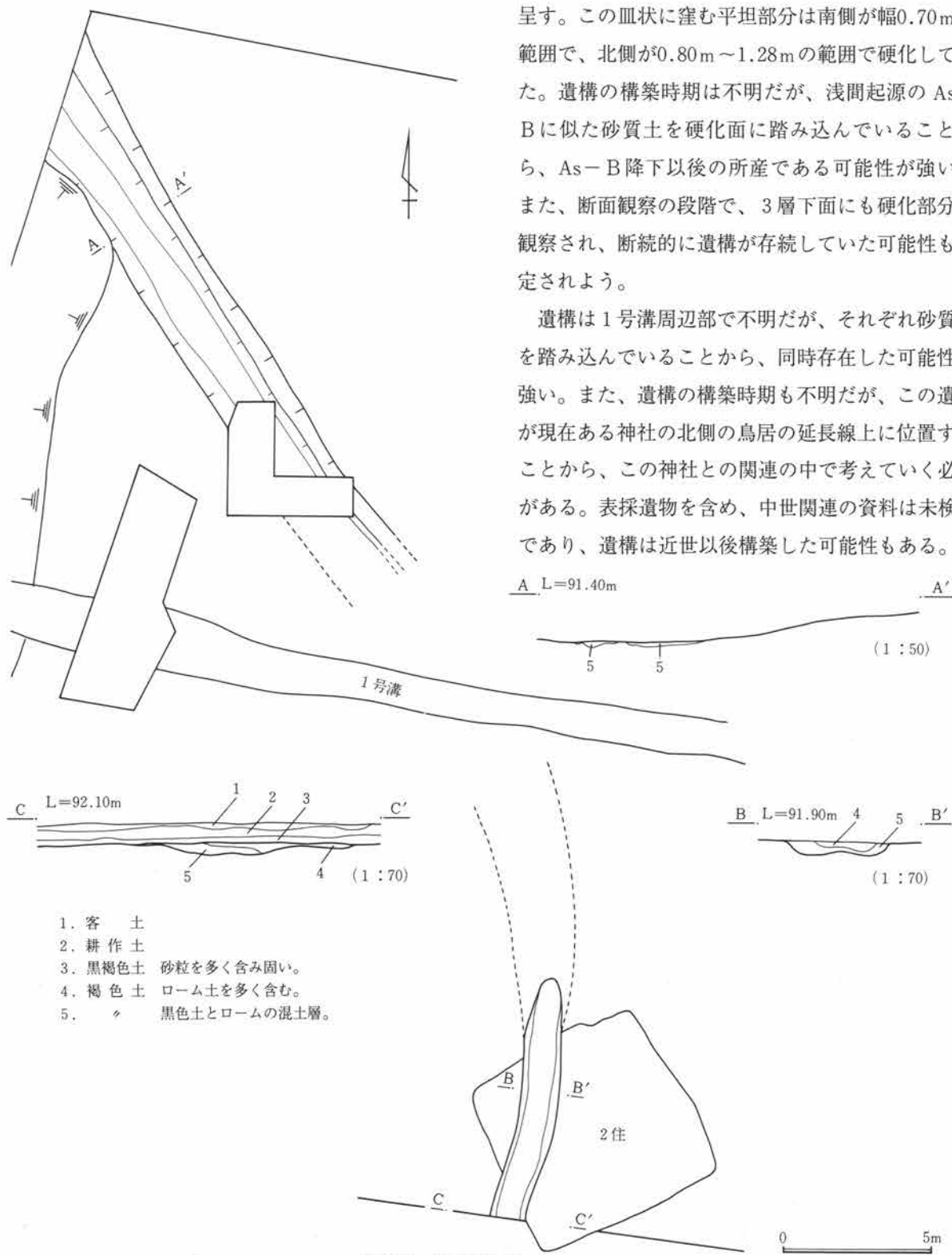
番号・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第79図1 須恵器椀	口径：15.7 底径：8.2 器高：5.2	No. 2 ほぼ完形	轆轤右回転。体部は外反気味に立ち上がる。高台は断面四角形状を呈し、僅かに開く。底部は回転糸切り。	①輝石安山岩・粗粒安山岩の岩片を多量に混入するほか、輝石を少量混入する。 ②還元焰。 ③灰(10Y R6/1)。
第79図2 須恵器椀	口径：18.2 底径：— 器高：6.2	No. 1 ほぼ完形	轆轤右回転。体部は外反気味に立ち上がる。底部は回転糸切り。内面は丁寧に磨かれ、本来黒色処理を施していた可能性が強い。土器は二次的に焼き戻り、黒色処理を逸している。	①黒色鉱物を多量に混入。 ②酸化焰。 ③橙(10Y R8/3)。 ④切り離し直後の惰性で、シワが腰部周辺に生じている。口縁部を二次的に整形している。

4. 道路状遺構

台地縁辺に近いA区・B区に位置する。1号溝の周辺部で、一部その走行は不明だが、1号溝より南

側では南北方向に、それより北側では北西方向に走行を変えている。遺構の規模は、南側で長さ8.2m・幅1.14m・深さ0.10m、北側で長さ20.0m・幅2.36m・深さ4cm~48cmを測る。皿状の断面形状を呈す。この皿状に窪む平坦部分は南側が幅0.70mの範囲で、北側が0.80m~1.28mの範囲で硬化していた。遺構の構築時期は不明だが、浅間起源のAs-Bに似た砂質土を硬化面に踏み込んでいることから、As-B降下以後の所産である可能性が強い。また、断面観察の段階で、3層下面にも硬化部分が観察され、断続的に遺構が存続していた可能性も想定されよう。

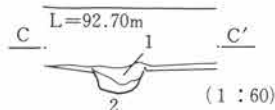
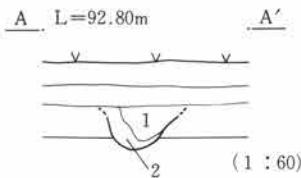
遺構は1号溝周辺部で不明だが、それぞれ砂質土を踏み込んでいることから、同時存在した可能性が強い。また、遺構の構築時期も不明だが、この遺構が現在ある神社の北側の鳥居の延長線上に位置することから、この神社との関連の中で考えていく必要がある。表採遺物を含め、中世関連の資料は未検出であり、遺構は近世以後構築した可能性もある。



第80図 道路状遺構

5. 溝

4条の溝を検出した。このうち、1号溝はA区～C区にL字状に検出され、最大の規模を有す。その規模は東西方向で長さ142.4m・南北方向で13.3mを測る。溝の幅は1m前後だが、本来2m前後の幅を有していた可能性が強い。その断面形状は皿状を呈す。砂質土を多く含む黒色土と褐色土で埋没しており、自然埋没状態を示していた。出土遺物は皆無で、そのためその所属時期は明らかではない。この溝には流痕を確認できないことから区画を意図する溝であることは明確で、遺跡南側の神社と関連する可能性が最も強い。2号～4号の溝はU字状の断面形状を呈す。その性格や所属時期は不明確である。

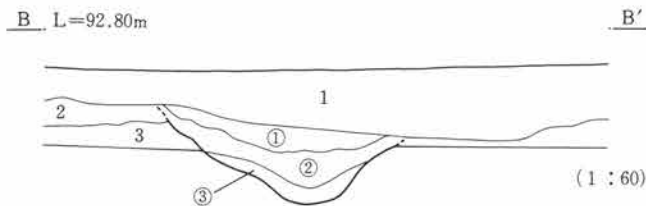


B区 2号溝

- ①暗褐色土 ローム粒を多く含む。全体にサラサラしている。
- ②褐色土

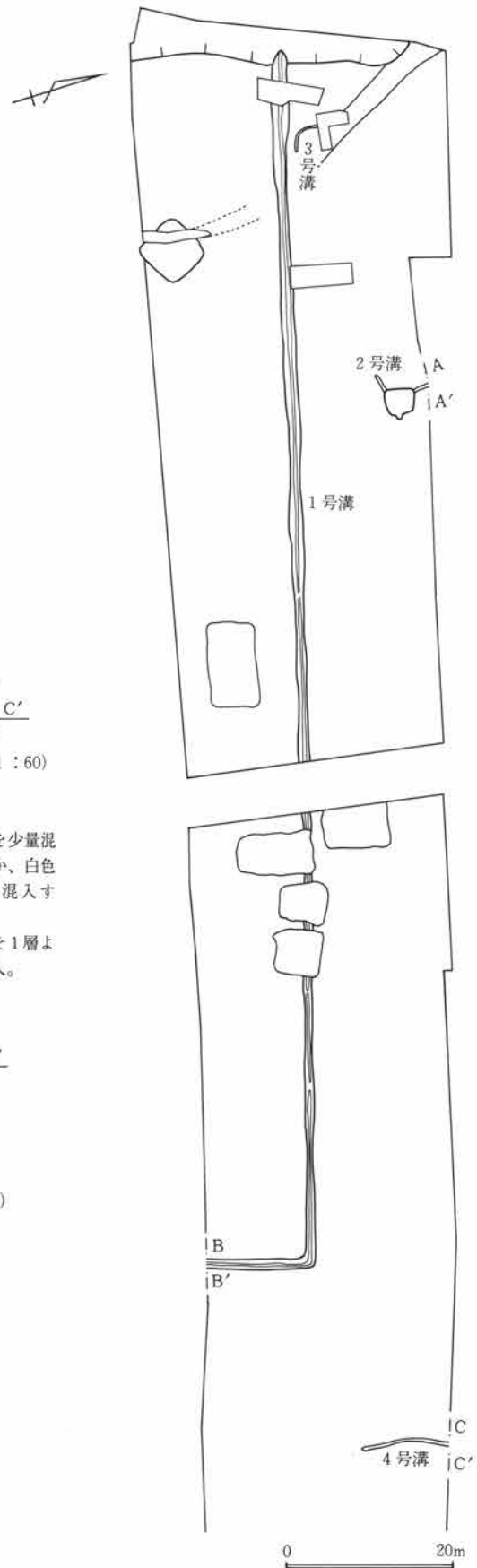
C区 4号溝

- 1. 暗褐色土 ローム粒を少量混入するほか、白色バミスを混入する。
- 2. ♪ ローム粒を1層より多く混入。



1号溝

- 1. 表土層
- 2. 黒色土 As-Cを含む。
- 3. 暗褐色土 (溝埋没土)
 - ①黒褐色土 全体に砂質で、若干As-Cを含む。
 - ② ♪ ①層に類似するほか、やや暗い色調を呈す。
 - ③ ♪ 崩落土 (ローム) を多く含む。



第81図 溝

6. 土 坑

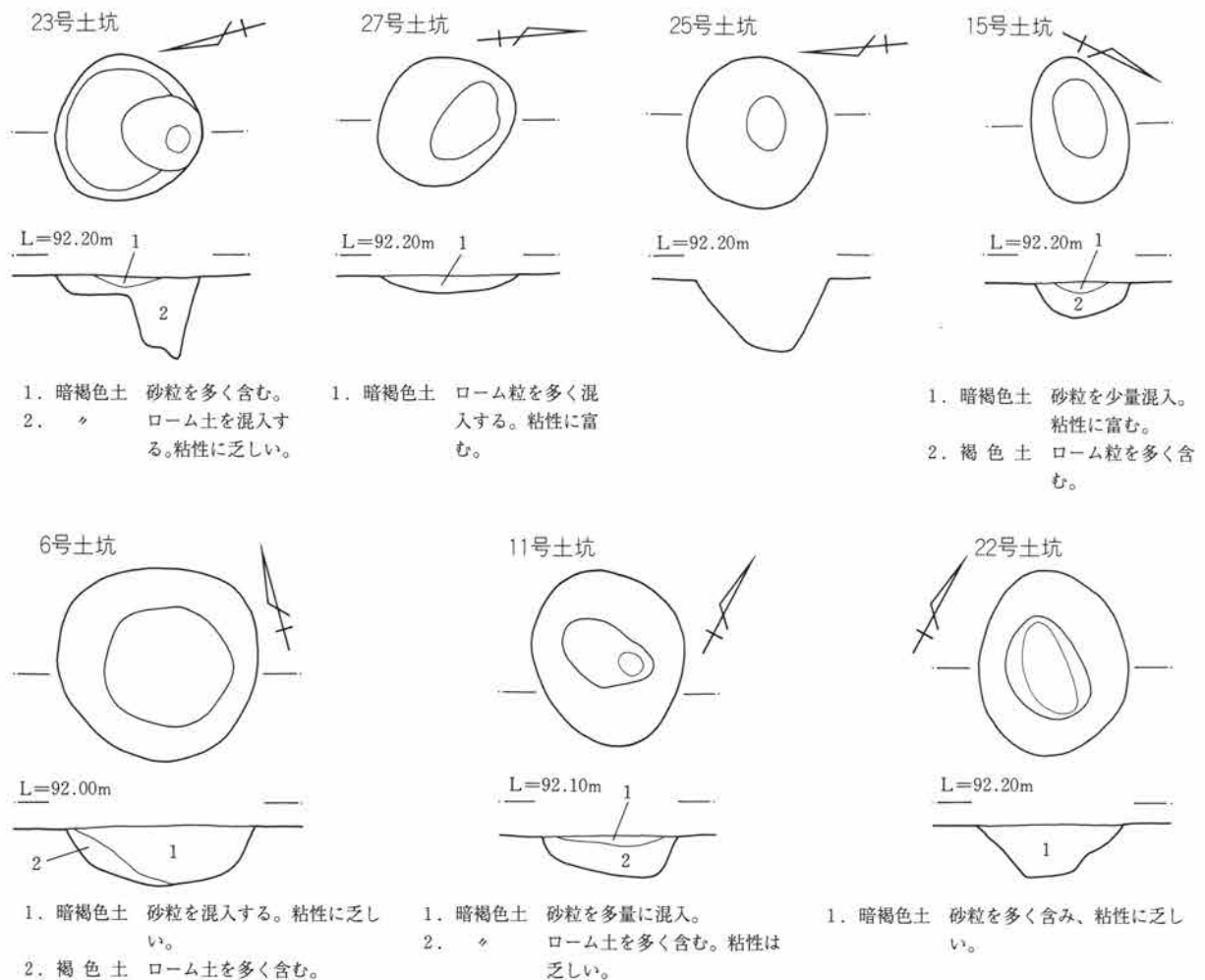
土坑はA区・B区に集中するほか、C区○ライン～C区tラインに集中しており、偏在した分布状態を示している。特に、A区・B区では1号溝の内側に分布する傾向が指摘されよう。土坑の形態は円形・方形を基調とし、As-Bを含む砂質土で埋没した浅い土坑が多い。

円形を呈す土坑は17基を検出している。D区検出の円形土坑2基(64号・65号)を除き、溝(1号)の内側に分布している。径0.8m～1.2m・深さ0.1m～0.3mを測る土坑が多く、皿状の断面形状を呈す。その分布は溝の走行に規定され、両者の密接な関係

が想定されよう。

方形に近い形状の土坑を含む、長方形の土坑は24基を確認した。この形態の土坑はC区に集中する傾向が看取され、A区・B区には3基のみ分布していた。土坑には大小の形状の差異が指摘され、小形の土坑は長軸1.2m～1.4m・短軸0.8m～1.2mを、大形の土坑は長軸2.0m～2.8m・短軸0.55m～0.25mを測る。このうち、小形の土坑の中には、一辺が外側に張り出す特殊な形態の土坑(44・49・52・54・56・57号土坑)が存在している。このほか、形態の定まらない土坑が4基検出している。

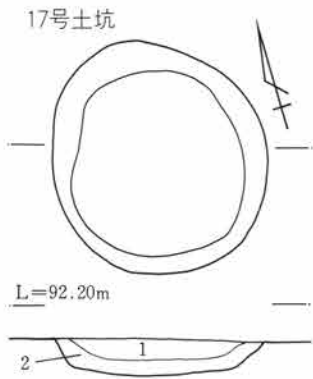
全体に土坑の長軸方向は溝の走行と一致しており、両者の密接な関連を示唆している。



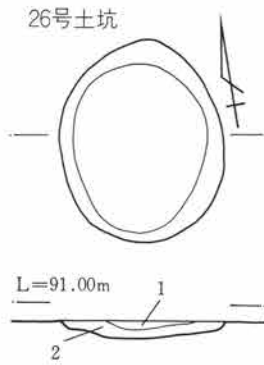
0 2m

第82図 土坑(1)

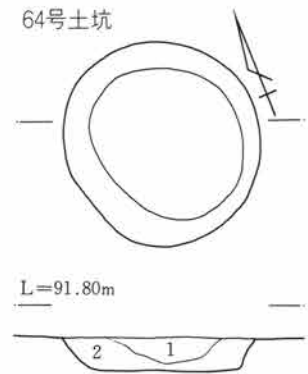
6. 土 坑



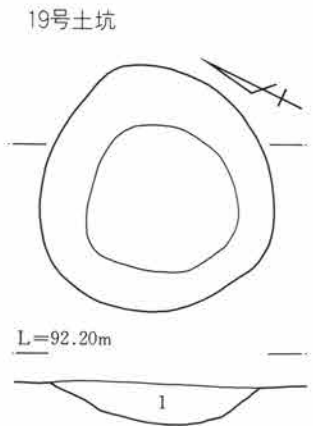
1. 暗褐色土 砂粒を混入。
2. 褐色土 ローム粒を多く混入。



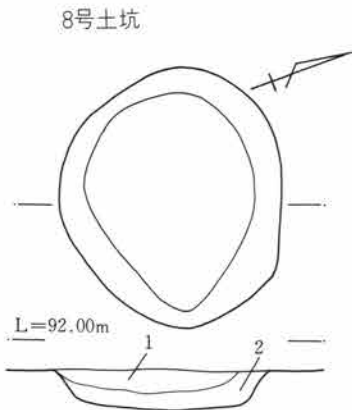
1. 暗褐色土 砂粒を混入。
2. 褐色土 ローム土を多く含む。



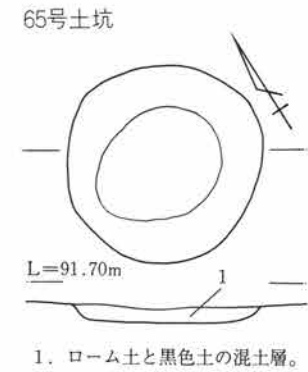
1. 黒褐色土 白色バミス混入。しまりは強い。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く混入。しまりは強い。



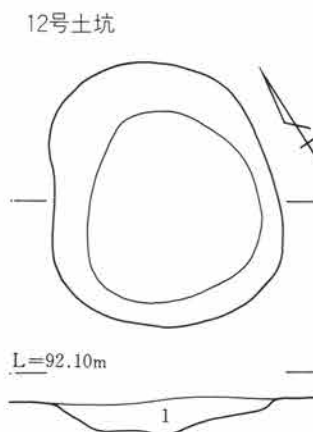
1. 暗褐色土 砂粒を含む。ローム土を含む。



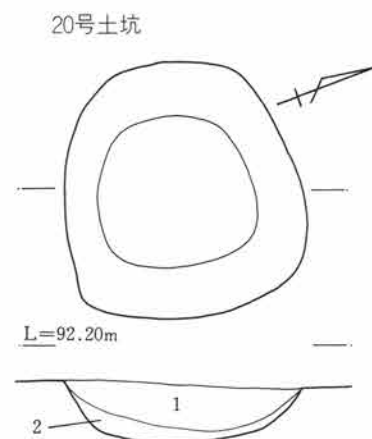
1. 暗褐色土 砂粒を多く含む。
2. 褐色土 ローム土を多量に混入。



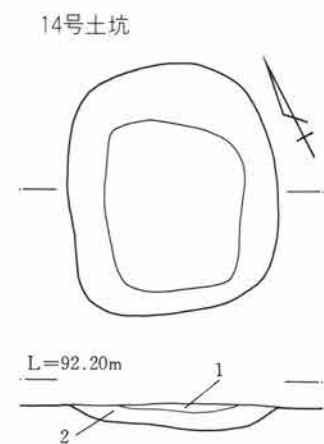
1. ローム土と黒色土の混土層。



1. 暗褐色土 全体に砂質でサラサラしている。ローム土を含む。



1. 暗褐色土 全体に砂質でサラサラしている。ローム土を含む。
2. 褐色土

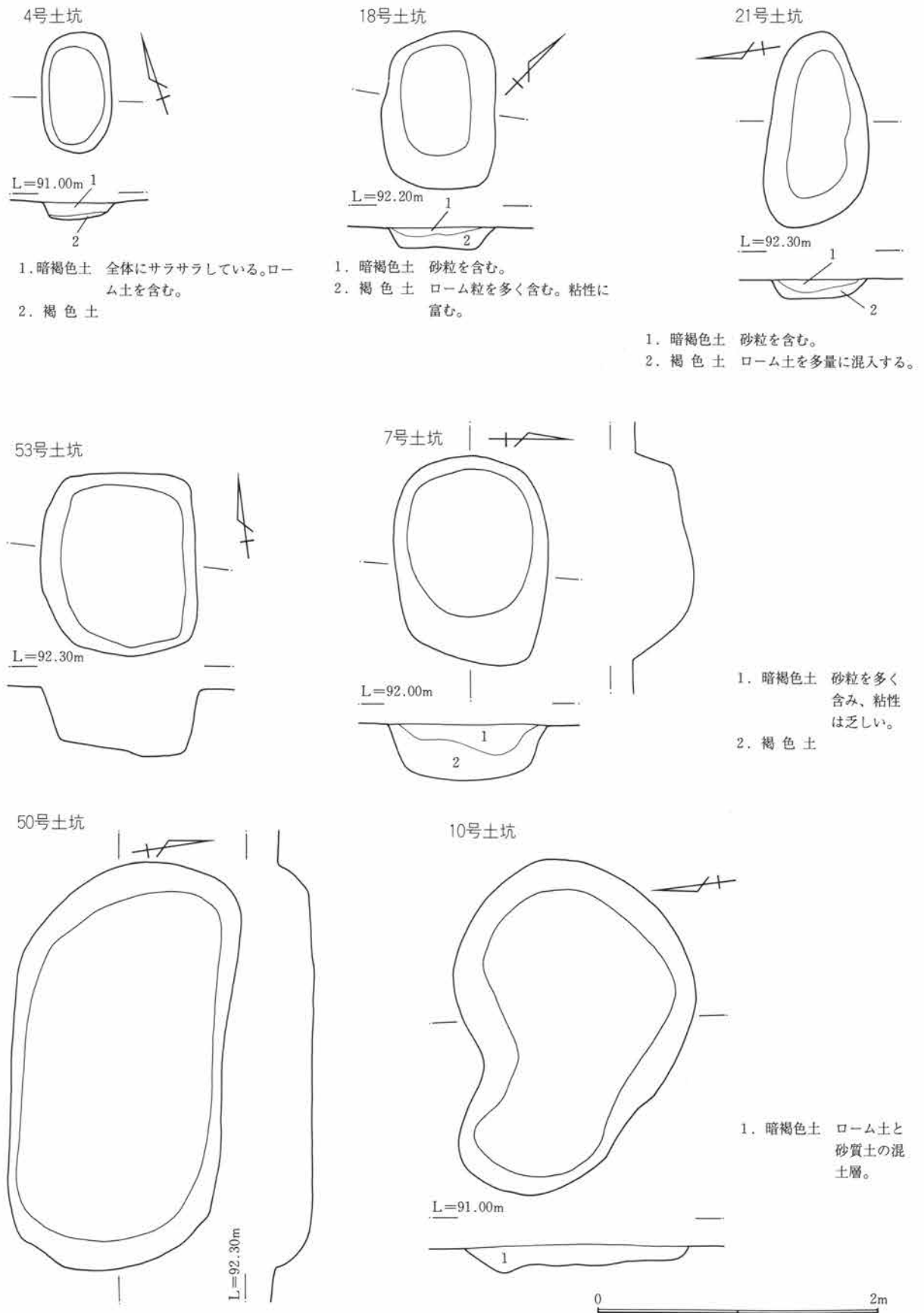


1. 暗褐色土 砂粒を多く含む。
2. 褐色土



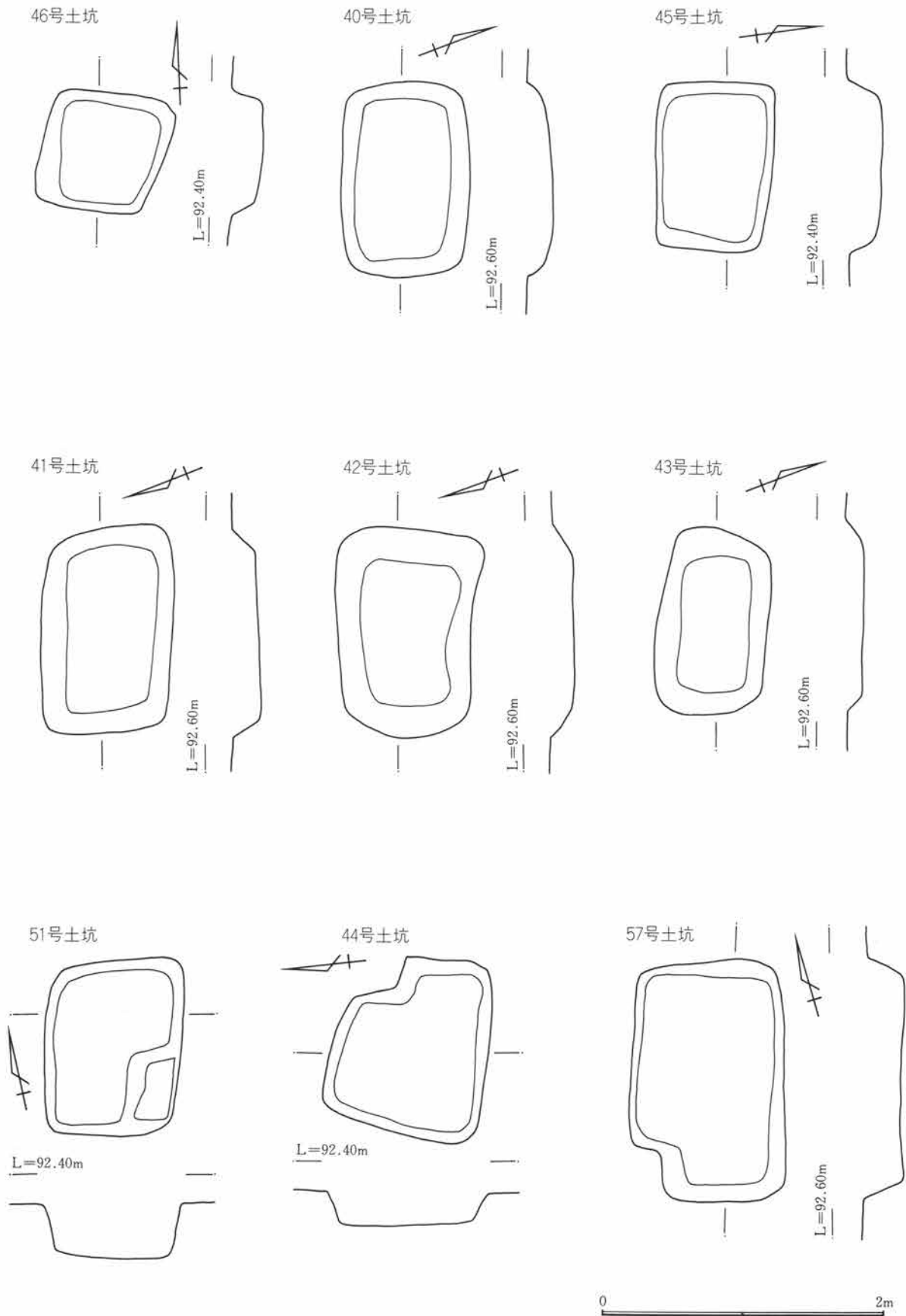
第83図 土坑 (2)

IV 古墳時代以降の遺構と遺物



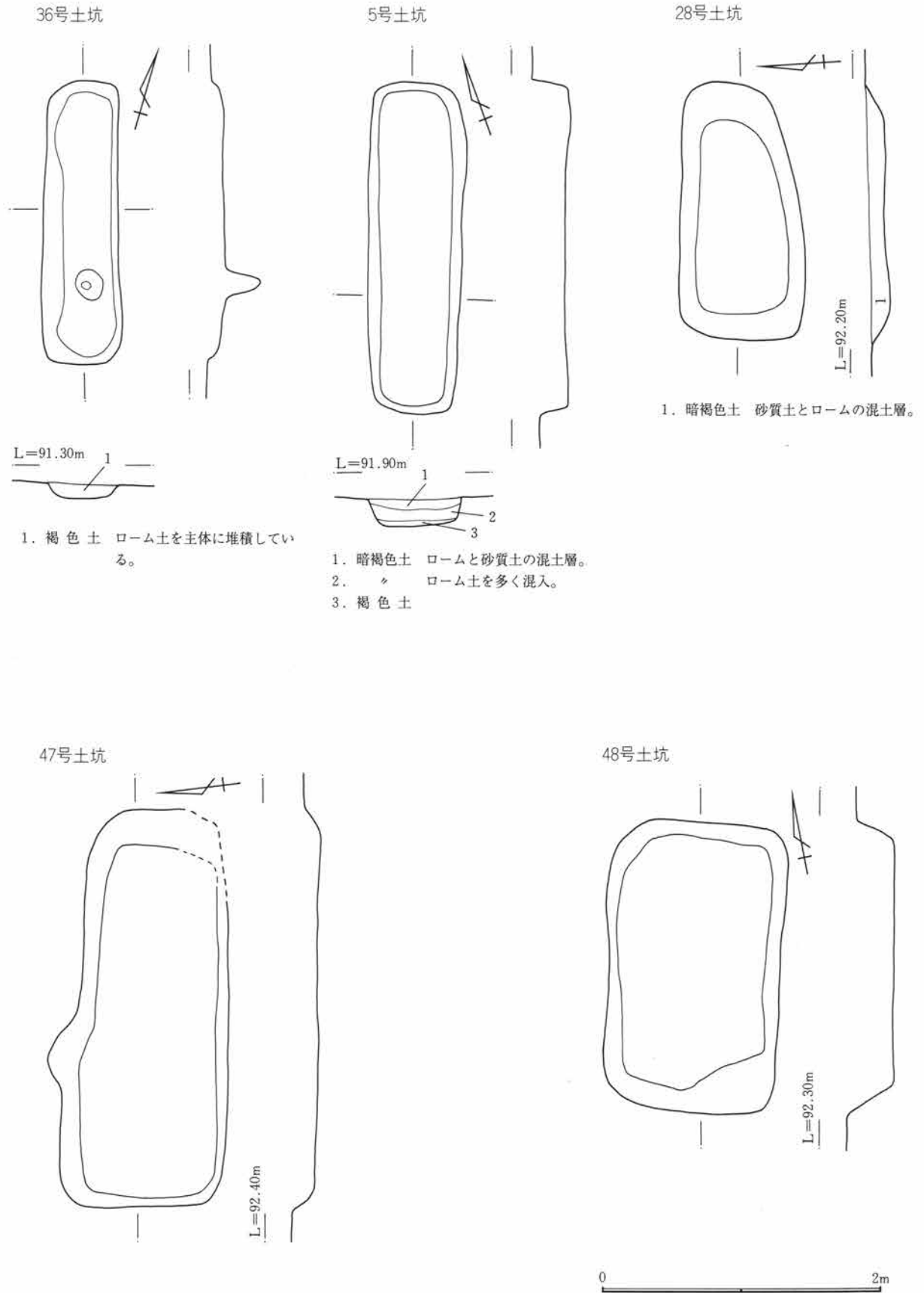
第84図 土坑 (3)

6. 土 坑



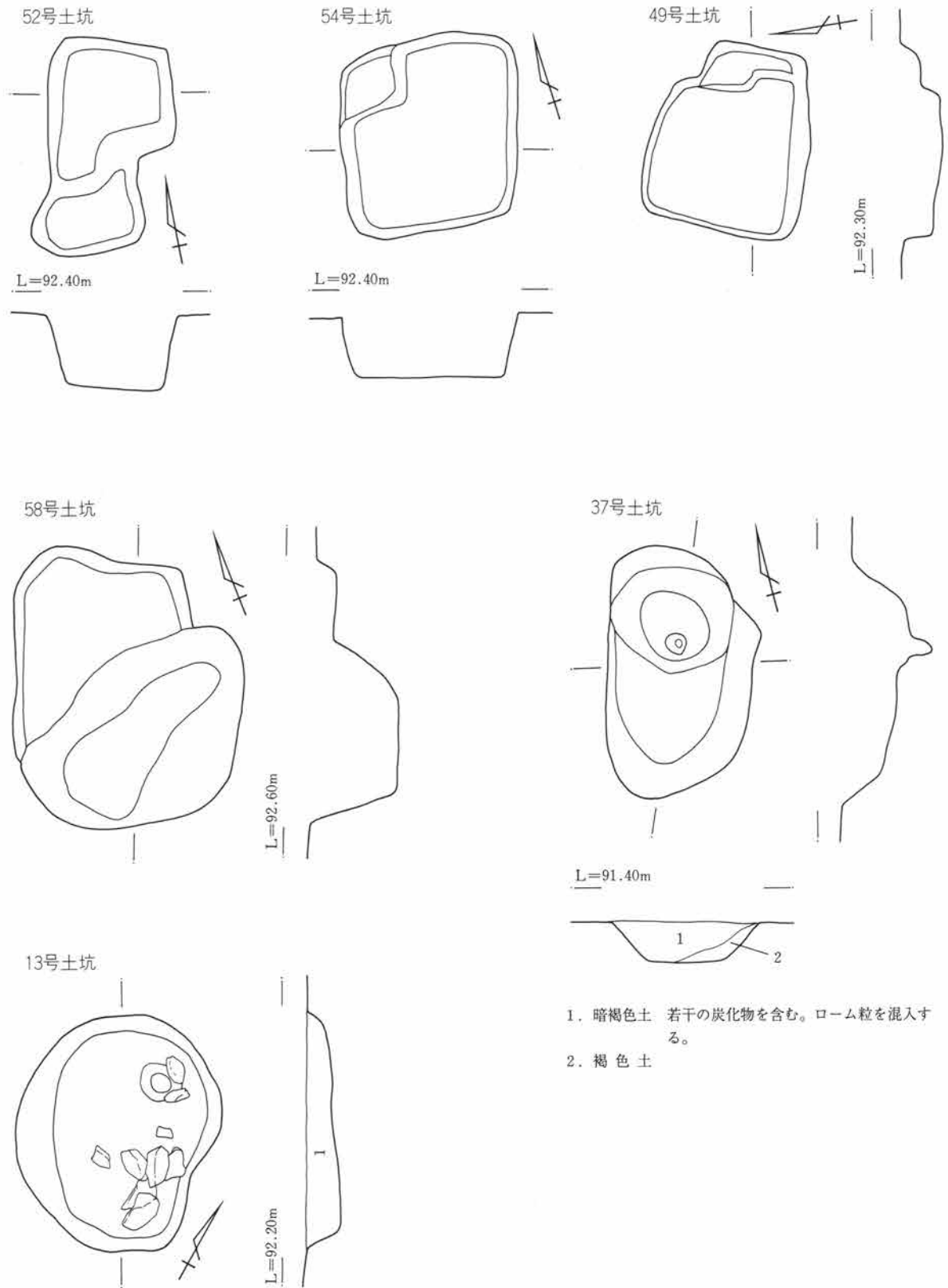
第85图 土坑 (4)

IV 古墳時代以降の遺構と遺物



第86図 土坑 (5)

6. 土 坑



1. 暗褐色土 砂質土とローム土の混土層。

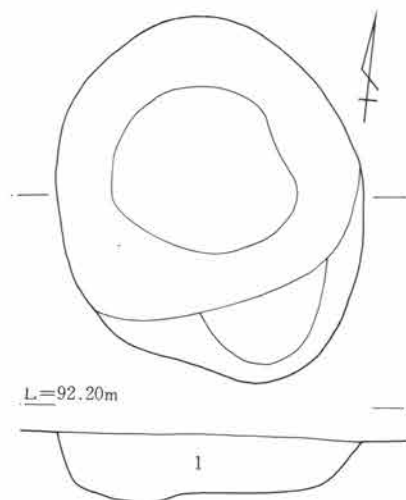
第87図 土坑 (6)

IV 古墳時代以降の遺構と遺物

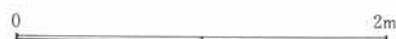
55・56号土坑



16号土坑



1. 暗褐色土 砂質土とロームの混土層。



第88図 土坑 (7)

番号	位置	形態	長軸	短軸	深度	主軸方位	番号	位置	形態	長軸	短軸	深度	主軸方位
23	Bq-6	円形	80	79	45・12	北-76度-西	46	Co-8	方形	87	85	22	北-4度-東
27	Br-4	円形	73	68	10	北-18度-西	40	Cf-2	方形	135	92	18	北-71度-西
25	Br-5	円形	78	75	37	北-37度-西	45	Co-9	方形	118	83	22	北-84度-西
15	Bk-2	円形	80	54	9	北-50度-東	41	Cf-2	方形	147	93	19	北-79度-西
6	Bf-2	円形	109	103	32	北-15度-東	42	Cg-2	方形	146	92	16	北-70度-西
11	Bi-4	円形	97	81	23	北-34度-西	43	Cg-3	方形	130	77	11	北-71度-西
22	Bm-2	円形	93	81	28	北-29度-西	51	Cr-10	方形	120	97	41	北-89度-西
17	Bl-5	円形	128	113	19	北-10度-西	44	Co-9	方形	123	112	21	北-28度-東
26	Br-5	円形	107	87	13	北-10度-東	57	Cs-5	方形	166	109	25	北-17度-東
64	Df-11	円形	109	107	17	北-5度-東	36	Bb-22	長方形	198	54	38・11	北-11度-西
19	Bm-4	円形	129	125	18	北-66度-東	5	Be-2	長方形	232	67	23	北-20度-東
8	Bg-4	円形	137	120	21	北-69度-西	28	Bj-23	長方形	109	86	13	北-88度-西
65	De-12	円形	107	102	8	北-35度-東	47	Co-9	長方形	280	108	16	北-80度-西
12	Bi-4	円形	141	118	16	北-33度-東	48	Cp-9	長方形	203	123	28	北-11度-東
20	Bm-5	円形	132	127	22	北-76度-西	52	Cr-10	長方形	146	78	48	北-13度-東
14	Bk-2	円形	130	113	13	北-28度-東	54	Ct-8	方形	128	119	40	北-14度-東
4	Be-1	長方形	84	49	12	北-14度-東	49	Cp-10	方形	125	107	28	北-65度-西
18	Bl-4	方形	109	82	14	北-38度-西	58	Cs-7	方形	144	143	33	北-24度-東
21	Bn-3	長方形	132	68	13	北-76度-西	37	Cs-7	方形	116	(44)	(13)	北-24度-東
53	Cs-10	方形	128	109	46	北-8度-東	13	Bk-2	不整形	167	100	59・32	北-21度-東
7	Bh-2	円形	143	111	38	北-89度-西	56	Bj-2	不整形	158	136	20	北-29度-西
50	Cq-1	方形	278	149	24	北-81度-西	55	Bl-3	不整形	196	166	36	北-27度-西
10	Bi-2	不整形	233	157	16	北-56度-西	16	Cr-5	不整形	175	155	60	北-21度-東

第5表 土坑一覧表

単位：cm

V 成果と課題

今回検出した遺構・遺物は量的に乏しく、断片的で不明な点が多い。それでも、A Tの降灰段階を境に上層と下層で石器群（文化層）を確認したほか、縄文関連では、これまで資料が不足していた草創期の爪形文や押圧縄文土器を確認するなど、調査の成果は極めて大きい。このほかにも、台地の西側縁辺を中心に撚糸文主体の遺物包含層や、前年調査した飯土井二本松遺跡から続く土坑群（陥し穴）の一部を確認しており、貴重な資料を得ている。ここでは、整理作業を経て得た、若干の成果と今後の課題を記しておきたい。

1. 旧石器時代

今回検出した石器は、黒曜石・輝緑凝灰岩主体の一群と黒色安山岩主体の一群からなる。前者の一群はⅣ層からⅤ層に、後者の一群はⅦ層を主体に出土している。このことから出土石器は新旧二群に大別が可能で、前者を第一文化層と、後者を第二文化層（第32図参照）と呼称して区別した。両者とも出土点数が少ないため出土資料のみから断じるのは困難だが、整理作業を通して得た石器の出土層位に関する所見を踏まえ、石器群とテフラに関する従前の知見に検討を加え、併せて上層出土の石器群（第一文化層）と下層出土の石器群（第二文化層）を対比する中で、石器群の構造的差異を考えていきたい。

石器の出土層位に関連する問題

第一文化層と呼んだ石器群の出土層位に関して、若干の見解を得ている。

県内出土のAs-B Pを前後する段階の石器群に関する従来の知見ではAs-B Pを挟んで下層には岩宿Ⅱ段階の石器群が、上層には武井Ⅱや岩宿Ⅲの段階の石器群が出土するということが概ね一致している。その大筋は現在でも変わることなく有効だが、

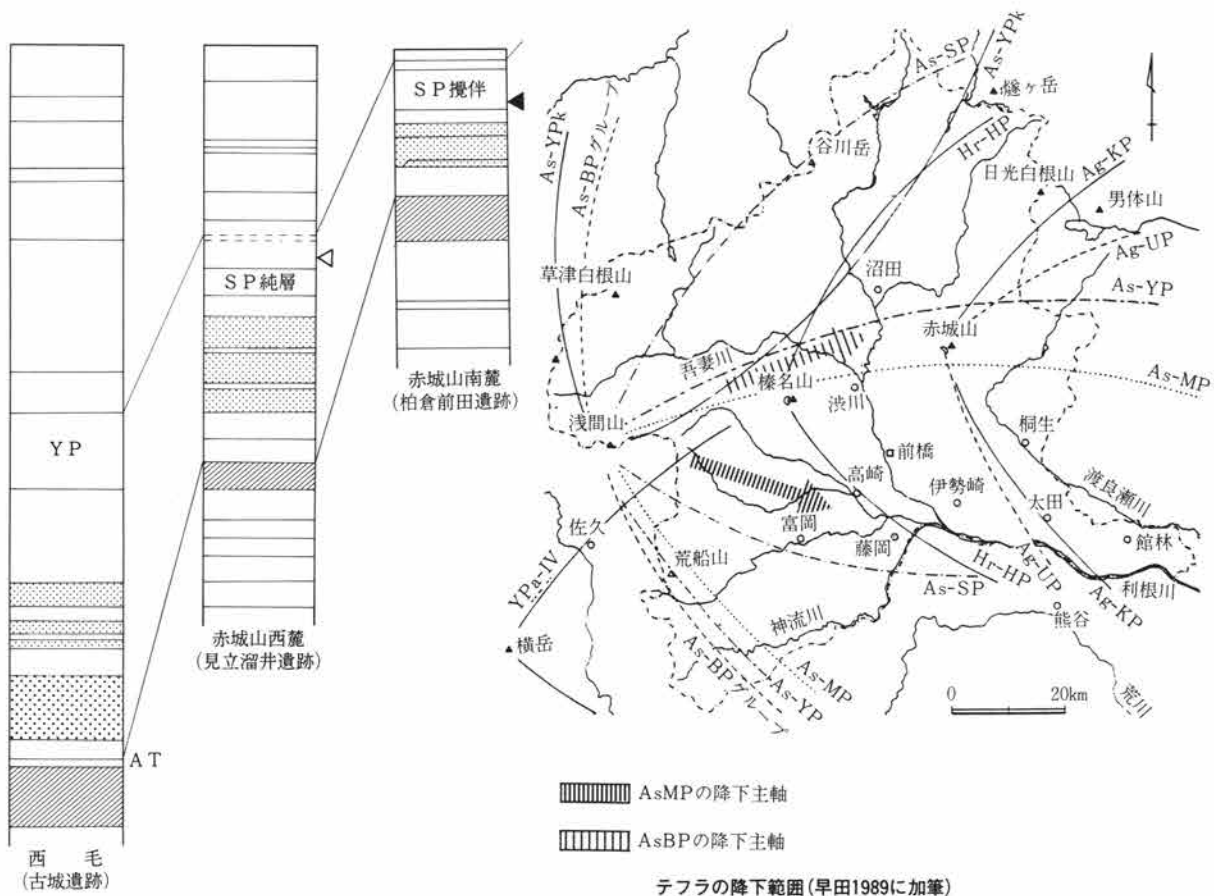
岩宿Ⅱ段階の石器群と武井Ⅱ段階の石器群の間には段階的差異が確実に存在しており、その間を埋める資料の欠落が著しい。石器群の層位的出土が豊富な相模野台地や武蔵野台地の実態を踏まえれば、これまで出土している県内資料には「砂川段階」の明確な資料が欠落しており、As-B Pより下位に主体的層序を持つ本遺跡出土の上層石器群（第一文化層）は、資料の欠落が著しいこの部分を埋める可能性を暗示していたのである。即ち、武蔵野編年で言うⅡb期の石器群の一部、特に砂川段階前半の石器群は数回に分け堆積したより新しい段階のAs-B Pの降下以前に遡る可能性を示していたのである。

県内の旧石器石器群の調査は、大半がA T降下以前の石器群であるという事情もあり、この部分に意識は集中しているのが実態だが、火山災害と、遺跡増減の動態と正しく把えるためにも、より厳密に石器群とテフラの関係で把握する必要が指摘されよう。

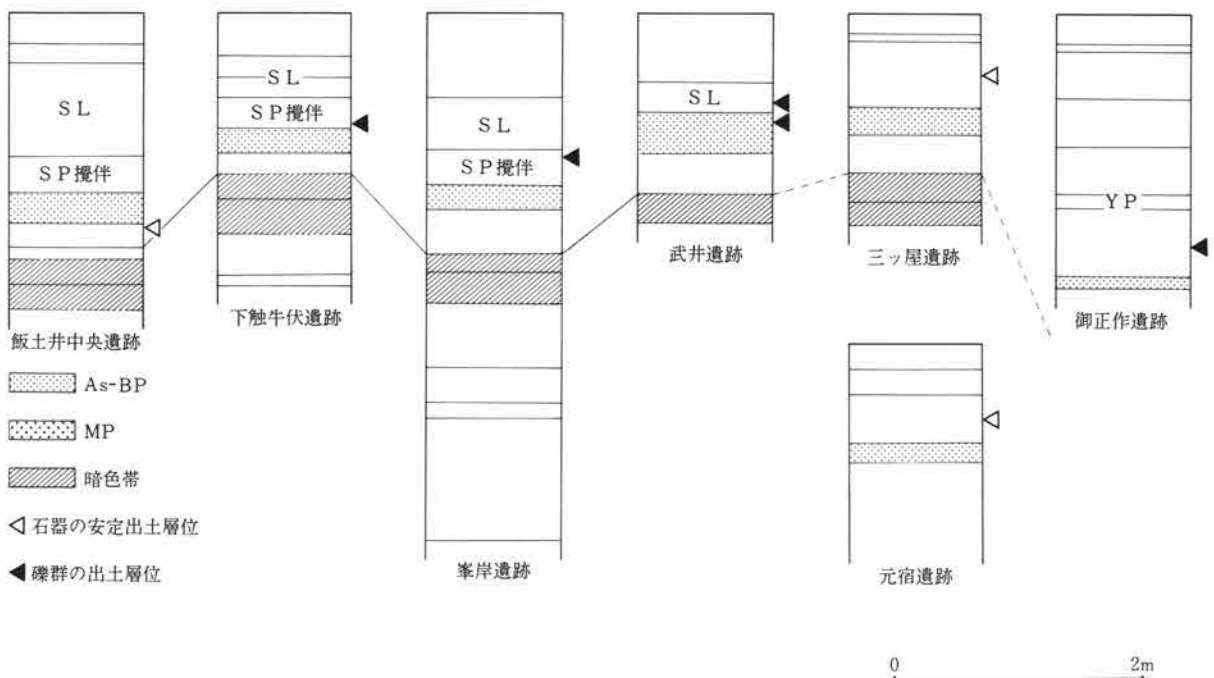
本論で論じるAs-B Pは石器の変遷を考える上で重要な鍵層だが、本遺跡が立地する赤城山の南麓一帯ではその堆積状態が極めて悪い。大半の場合、As-B Pが塊状に堆積する他は、攪拌した状態で堆積している程度だが、赤城山の西麓では間層を挟んで3枚のAs-B Pが、西毛の安中市域では間層を挟んで5枚が堆積しており、給源に近づくほど良好な堆積状態を示している。既に発掘調査でも確認している以上の堆積状態を踏まえれば、従来の分析同定では正確な対比が完了したとはいえない状況が生じてきており、今後より厳密なテフラの同定作業を積極的に行う必要を感じている。更に、最近では西毛（鎗川流域）の調査が進んだ結果、従来一括把握していたAs-B Pの内、最下層のテフラを「室田バミス、以下MPと略記する」と呼んでいること、MPとAs-B Pとは降下範囲や降下方向が大きく異なることなど、我々の間でもロームの堆積状況の認識が深まりつつある。

最近調査した遺跡のロームの堆積状況を見ても、同じ南麓でも標高100m以下の山麓端部と、標高

V 成果と課題



ロームの堆積状況と
槍先形尖頭器出土層位



第89図 ロームの堆積状況と石器の出土層位

400mを越す地域ではAs-BPの堆積状況は若干異なる。標高の高い地域ではAs-BPの堆積も厚く細分も可能で、テフラの降下方向と堆積層厚が良く一致している(第89図、上段右図を参照)。このうち、槍先形尖頭器を出土した県内遺跡に限定して、石器と出土層位の関係(第89図、下段の図)を検討して気づくのは、総てAs-BP降下以後の所産であるという点である。各々の遺跡ともAs-SPが攪拌したローム層中から出土しているため、槍先形尖頭器がAs-SPの降下以後まで残存するのか、否か、層位的根拠は乏しい。一方、このAs-SPの降下段階は細石刃石器群が出現する時期でもあり、宮城村柏倉前田遺跡(細野 1988)では矢出川タイプの細石刃がAs-SPが攪拌した層位から出土している。前田遺跡の細石刃石器群はAs-SPの降下以後(細野はAs-SP降下時期に近い段階を想定)の所産と推定され、付近には著名な榊形遺跡も立地する遺跡の密集する地域でもあり、細石刃石器群の段階的変遷が辿り得る可能性を秘めた地域でもある。南関東地方、特に相模野台地の層位的分析・形態的分析に基づく成果を念頭に置き、県内出土の槍先形尖頭器や細石刃石器群の基本的な在り方を考えた場合、既に細石刃石器群の層位的な所見は上記地域の在り方に一致しており、母岩単位の分析でも槍先形尖頭器と細石刃石器群の共存を証明することさえ想定され、槍先形尖頭器がAs-SP降下以後まで残る可能性は当然否定できないのである。As-SP上位に出土した赤城村見立溜井遺跡の槍先形尖頭器は多分に上述の事情を反映する可能性を示している。と同時に、細石刃石器群がAs-SPの攪拌層中の下位に出土した柏倉前田遺跡ではAs-BPとAs-SPの間に明確な間層が存在していること、更に、As-SPとAs-YPの間に槍先形尖頭器が出土した見立溜井遺跡の事例を踏まえれば、As-SPが攪拌したローム中から出土する南麓地域の槍先形尖頭器には段階的変遷が容易に想定され、石器群が混在している可能性が高い、と判断されよう。

該期の県内資料の中では、古い様相を示す(麻生・

大工原 1989) という大胡町の三ツ屋遺跡や大泉町御正作遺跡から出土した槍先形尖頭器もAs-BP降下以後の所産であるということは确实だが、上述した理由からその評価に関して検討の余地を残している。特に、三ツ屋遺跡ではAs-BP上位のⅢ層中位に石器が多く出土しており(相沢・関矢 1988)、石器の出土層位や付近一帯のロームの堆積状況からみて、As-BPの直上に礫群を伴う下触牛伏遺跡の出土資料より先行する可能性を層位的所見は否定している。牛伏の上層石器群(第一文化層)は剥片剥離や母岩の共有関係の在り方から、二側縁加工の茂呂型ナイフや小形の槍先形尖頭器を組成する一群と、槌状剥離を有す尖頭器を主体に各種彫器を組成する一群に大別が可能で、両群とも全く同様な出土状態を示していた。そのため、報告段階では両群が共存したのか否か、判断を保留した。この時点では、後者の一群に対して技術的見地より男女倉型尖頭器や東内野型尖頭器を技法的に完成度の高い状態と考え、男女倉や東内野の石器群は牛伏に後出する評価を与えた。

その後の議論は槌状剥離を有す尖頭器の技術的な議論より、寧ろ、槍先形尖頭器の持つ形状に議論が集中している感が強い。この背景には、男女倉出土の石器群を除いて搔器の存在が明確ではないため、技法自体の検討を要す(堤 1989)事情が反映している。相模野の層位的所見では左右対称の形態を呈す一群(男女倉型尖頭器)が古く、片側が「く」の字状を呈す一群(東内野型尖頭器)が後出する傾向が見られ、後者の一群に近い尖頭器を組成する牛伏より男女倉が後出的である、という上記見解は訂正を要す。相模野台地や武蔵野台地の層位的・形態的分析の成果(諏訪間 1990、栗島 1990)に従えば、渋川タイプの槍先形尖頭器が古期に位置づく可能性は極めて低い。更には、上記地域で出土している槍先形尖頭器の在り方は、木葉形状を呈す槍先形尖頭器を一貫して製作する一方で、槍先形尖頭器が石器群の主体的器種に変わる以前の段階に一時、肩が強く張る槍先形尖頭器が出現している。この段階の槍

V 成果と課題

先形尖頭器は槌状剥離の有無に関係なく同一の石器形態を志向しており、東内野タイプに近い牛伏の槍先形尖頭器は、槍先形尖頭器が組成の主体を占める段階より先行する段階に位置づく可能性が高い、と現状では想定しておきたい。この辺にも、As-B Pの降下時期より以前に槍先形尖頭器の出現初期の様相は潜んでいるという感触を強く感じるのである。

以上の見解を踏まえ、飯土井中央遺跡出土石器群（第一文化層）を検討していきたい。第一文化層を構成する石器は剥片や碎片が主体を占める。概して、定形石器は少なく、二側縁加工のナイフ1点（第6図1）と搔器1点（第6図3）が出土したのにすぎない。第6図1は茂呂型ナイフであり、第6図3の搔器は槍先形尖頭器に良く伴出する。資料点数が少なく、県内では同様な出土状態を示す報告も見られないため、断定するのは避けるべきだが、石器群の形態的特徴から判断して、一般的にはII b期に位置づけられよう。この点でも、As-B Pが降下する以前にも槍先形尖頭器の存在（II b期の石器群）を想定しておきたいのである。

県内出土資料から槍先形尖頭器の出現初期の様相を把握するのは極めて難しく、全体的に資料不足は著しい。最近の調査成果を踏まえれば男女倉タイプの尖頭器が一概に古期に位置づくとはいえない状況も生じており、今回報告した資料の層位的所見も非常に微妙な要素を多分に含んでいることから、現状では問題提起に留めたい。

石器群の構造に関する問題

石器群を構造的視点で分析した結果、第一文化層と第二文化層の間には石材組成や消費の在り方に若干の相違が存在していた。以下、社会構造の変化を念頭に、各々の特徴を要約しておきたい。

第二文化層を構成する石器群は黒色安山岩を主体に若干の黒色頁岩を組成していた。石器群を構造的観点からみた石器の製作構造は、黒色安山岩は遺跡で剥片剥離を行い石器を製作しているのに対して、

黒色頁岩は単独状態で出土しており、外部から搬入している可能性を示していた。一方、第一文化層を構成する石器群は、黒曜石を主体に組成していた。石器製作の在り方は、石核と剥片の接合資料（接合資料-1）や碎片も出土していることから剥片剥離工程の存在は確実だが、以下の理由で大半は剥片の状態に遺跡に搬入している可能性を想定している。母岩別に見た黒曜石の分布状況（第28図）は、1-4の母岩とも集中分布する地点と単独出土する地点からなるため、同一母岩の分布状況から見る限り、集中地点で製作され、別の地点に「譲渡」したとも言える印象を与えている。だが、実際には接合資料が極めて少ないこと、また、母岩別に見た器種構成は剥片の量に比べ碎片の量が少ないことから、この地点で剥離工程の全体が展開しているとはいえない状況を示しており、剥片の状態に搬入してから石器を製作する石器製作の在り方を暗示していた。更に、出土資料の中には上述の母岩単位で見た推定を裏付ける資料が存在していたのである。第6図5は表裏両面にスレが著しいのに対し、剥片端部（刃部）や周辺の加工部分にはスレが観察できないことから、剥片の剥離段階と加工段階の時間的な経過を示していた。このスレは転石に見られる風化とは違い、極めて微弱な摩耗で、持ち運んだ際に生じた可能性が強く、剥片の状態に搬入してからこの地点で石器に加工した、と推定されよう。このほか、同様な状態を示す資料が剥片の中にも存在していることから、剥片の剥離を行う一方で、確実に剥片の状態に持ち込んだ資料が出土している、と断言できよう。

以上、第一文化層と第二文化層の特徴を石器組成や石材消費の在り方を検討した。分析資料には一部制約条件も加わるため断定は困難だが、一応の見解を示しておきたい。

下層出土の第二文化層を構成する石器群は、大別2種の石材からなり、石器製作の主体は黒色安山岩を用いていた。一方、黒色頁岩は単独の状態に出土しており、完成した状態で搬入した可能性が強い、と推定している。上記石材は県内のA T降下以前の

石器群を構成する主体的石材で、一方の石材で石器の製作を行い、他の石材は搬入石器で存在する在り方や、母岩の完全消費が目的とも思えるほど進んだ母岩の消費状況（原石、或は、原石を分割した状態まで復元可能な接合資料が多い）が窺える在り方は、ある意味では該期特有な現象ともいえよう。一方、上層の第一文化層を構成する石器群は、一連の石器製作が完結した状態ではなく、ある母岩では剥片の剥離を、また、ある母岩では二次加工を施し、石器を製作するなど剥片の剥離工程を欠いており、母岩単位で製作段階の違う資料が混在していた。剥片の作出、及び、剥片作出以後の工程（二次加工を施し、石器製作する）の占める割合が若干相違する点を除けば、この遺跡に近い下触牛伏遺跡（第一文化層）でも同様な状態を確認しており、製作段階の異なる資料が複数集合して石器群が成り立つ構造的特徴は、砂川遺跡の在り方に近い内容を示している。

以上、上層出土石器群と下層出土石器群の比較を試みた。分析は概して雑駁だが、それぞれ石器製作や石材構成の相違が指摘可能な状態を示していた。この比較はA T降下以前の石器群とA T降下以後の石器群の比較でもあり、以下に若干の検討を加えてA T降下段階を境に前後に分け、集落構造の変化・変質を見通していきたい。

該期の集落、特にIX層段階の集落に関する近年の見解は大小規模の差こそあれ、環状分布を呈す集落形態が一般的形態と考える見解が大勢を占めている。筆者は以前これ以外にも別の集落形態を予想して、若干私見（岩崎 1988・1989）を述べた。ここでは母岩単位の分析が可能で、最小の単位集団（単純な集落構造）を示す可能性の強い砂川遺跡と、勝保沢中ノ山のA地点を取り上げ比較を試みた。その結果、母岩消費や搬入石器の在り方は一致すること、同じ単位の石器群でも、砂川遺跡はブロックで石器製作が完結する様相を呈するのに対し、勝保沢中ノ山のA地点では原石の消費個数や搬入石器に対等な関係を持つ各々のブロックで、一方のブロックは狩猟具を、一方のブロックは加工具を製作するなど、

石器製作の在り方は若干相違していることから、A Tの降下以前と以後で石器製作の変化＝単位集団（世帯）間の関係変化を想定した。その中では様々な形態を採る集落形態を大規模集落と小規模集落に象徴させ論じたわけだが、その背景には下触牛伏の分析結果に基づく考え方が大きく働いていた。既に、牛伏の集落構造に関する見解は表明しており（岩崎 1989）、複数の単位集団が中央広場（共同使用の炉）を中心に集住していた可能性を指摘した。複数の単位集団の集住を想定したのは接合資料がブロック内や隣接するブロック間に存在する場合は圧倒的に多く、連続して並ぶ3～4のブロックが石器製作の単位を示す、と考えたからでもある。石器製作や接合資料の在り方は砂川遺跡の様相とは異なる反面、石器群の単位性は規模的に一致していることから、必ず分散居住したとき営んだ集落が存在するはず、と考えたのである。その後、環状分布を呈す集落の分析（大工原 1990、須藤 1990）も進んできており、同じ環状分布する集落でも規模の差が著しく、居住形態のレベル差が解明されつつある。上記分析成果に従えば、集団が離合集散していた蓋然性は極めて高く、規模の大小に関係なく環状に分布するのは、社会的規範・規制の反映と推定している。この集落形態は地域的偏在性が指摘できないことから、現状では繰り返し訪れる居住形態の在り方を示す、と考えておきたい。石材の採集形態や分散居住の有無を社会的レベル・経済的レベルの観点から評価する見解（安斉 1990）は該期の社会構造を考える上で示唆に富み、この時代の社会や生活が多様な観点から語り得る可能性を説いている。今後、母岩単位で見た搬入石器の有無、遺跡周辺地域で入手が困難な石材の産地同定、及び、その搬入状態（原石か、石器か）など、より広い視野に立つ分析と地域特性の抽出が急務と考えている。学史的経過を踏まえ、分析を展開していきたい。A T降下以前の集落は、IX層段階に限らず比較的大規模な集落が多く（VII層段階の後田遺跡、VI層段階の堀下八幡遺跡など）、IX層段階以外のA T降下以前の集落に関する評価は今後

に残る課題でもある。

一方、AT降下以後の集落はそれ以前の集落規模に比較して、極めて小さい集落が多い点に気づく。更には、単に規模が小さいというだけでなく、剥片剥離が展開していた痕跡の乏しい二次加工に比重を置く（特に、信州産の黒曜石や、東北地方に多い濃い茶色の硬質頁岩を用いる石器に良く当て嵌まる）集落が目につく点も特徴的である。二次加工に比重を置く石器製作構造を有している、この遺跡や下触牛伏の分析結果からみて、常に現地から上記石材を剥片の状態で搬入していたとは思われないため、必ず周辺の地域に上記石材を集中剥離する集落が存在する、と想定している。即ち、AT降下以後の集落は、母岩の消費が管理され、石器の譲渡関係が対等に成り立つ（栗島 1986）砂川の様相を示す集落の他にも、二次加工に比重を置いていた集落や、剥片を集中剥離していた集落も加わり、多様性に富んでいるとも換言されよう。とはいえ、その集落構造は比較的小規模な集落が多く、以上の多様な石器製作構造は移動性の高い生活様式を反映したその時々^(註5)の事情を示している、と評価しておきたい。

一般に、大規模集落に関する評価は「拠点集落」と見る考え方と、単位集団の集落が複数重複した姿と見る考え方に大別されよう。接合資料の分析や、母岩単位で見た石器の譲渡関係を検討した、最近の研究では後者の考え方が有力で、回帰的移動を伴う居住形態や、一定範囲の領域の形成が推定されつつある。接合資料の分析や、石器の譲渡関係から集落研究を展開していく砂川の研究の方法は現状では最も有効な分析手法と考えており、今後ともこの分析方法の元に詳細な分析を展開していきたい。ただ、遺跡構造の復元が可能な上記分析方法は、簡単に言えば、母岩単位に発掘資料総体を分解していく性質を有しており、そのため最小の単位集団を示す石器製作の単位を抽出するには有効性が高い反面、集住した場合や石器製作のサイクル（原石の入手から消費まで）^(註6)を越えた継続的居住を想定した場合には、単位集団相互の関係を解明するには困難も予想さ

れ、ある意味では方法的な限界性を憂慮している。特に、石器製作が個別に独立している傾向の強いAT降下以後の集落から拠点集落を抽出するのは難しく、従来の分析方法で得た結果の他にも、元々所持していた母岩と搬入母岩の区別、搬入母岩の産地や分有状態、石器の移動など周辺遺跡の分析を含む多様な観点で分析を要す。膨大な資料を有す大規模集落の分析は困難だが、まず母岩単位で見た分析を行い、その上で更に多様な観点から分析する必要があると感じている。この段階の県内遺跡では武井遺跡が最も充実しており、分析の結果次第で拠点集落と積極的評価を与え得る内容を有している。武井遺跡では石器の分布範囲が調査区内の全域に及んでおり、試掘結果から想定可能な石器の分布範囲（集落の範囲）は南北40m・東西20m程度の規模が予想され、出土資料全体の2/3を占める多量の碎片も槍先形尖頭器の製作に伴う可能性（杉原 1977）が強く、109個に及ぶ槍先形尖頭器は単位集団の所有と考えるには破格の量と見られ、質量とも充実している。一方、武井遺跡には石器群の混在説も見られ、礫群の出土層位も混在説を支持しているようにも思える。母岩単位の分析が難しいため早急な結論は避けるべきだが、石器分布から判断して、槍先形尖頭器はBトレンチを中心に出土していること、石器群（文化層）の重複が少ない県内の地域特性を考えた場合には、豊富な内容を有している武井遺跡は異質でもあり、単なる重複では理解できない内容を有している。同段階の石器群が出土している峯岸遺跡（内田・能登・大工原 1989）が武井遺跡の北方、約150mの地点に存在しており、武井遺跡、及び、峯岸遺跡の乗る台地は集団の居住形態を議論する上で重要な位置を占めている。母岩単位で見た石器の分析が待望されよう。

大規模遺跡が、同一集団の継続的な占地を示しているのか、断続的・回帰的な占地を示しているのか、或は、もう一步議論を進め、「拠点集落」を想定するのか、集団の集住が想定可能か、検討事項は山積している。分析次第ではこの時代の社会観や時代

観に新たな展望が開ける、と確信している。

2. 縄文時代

諸々の事情で十分な分析が果たせないため、以下に問題点を列記しておく。後日、稿を改め具体的に分析検討していきたい。

遺構関連では、まず土坑（特に、I類に分類した「陥し穴」）の配置が注目されよう。既に述べた通り、今回検出した「陥し穴」は飯土井二本松遺跡で検出した土坑群を含む分析を要している。飯土井二本松の土坑群は、河川性氾濫層の層位的関係や出土遺物より前期後半から中期前半に構築時期が限定され、その点では希な例である。各々の土坑とも2～3のピットを坑底に持つ点や、杭を押し込んでいる点で一致する一方、土坑の形態にはバラツキが著しく、坑底の形態や下部構造、面積からみて細分が可能と言える。恐らく、3基程度の土坑が1群を成して、列状に配置していた可能性が強い。特に、旧河道の東側では列状の配置形態が顕著で、更に、杭も差し替えて使用しており、土坑も密に分布していることから長期に亙る場の利用状況が窺える。以上の状態から考えて、遺跡東端で検出した66号土坑と飯土井二本松の西側に位置する52号土坑は位置的にも形態的にも強い関連性を示す、と推定されよう。今回の調査で検出した土坑には、坑底に下部構造を持つ土坑（I b類）の他に、「Tピット」と称している土坑（I a類）も存在する。この土坑の分布は特徴的で、I b類の土坑が旧河川の際や台地の縁辺に分布するのに対して、I a類の土坑はI b類の土坑より台地の中央に分布する傾向が窺える。I a類の土坑はロームに似た褐色土で埋没している場合が圧倒的に多く、検出するためには相当な注意を要す。普通、ロームの上面で確認するのは極めて難しく、最終的にはハードロームの上面で確認した。類例が少ないのは上述した制約条件が確実に原因している。先に述べた形態の違う土坑の分布状況を示す例に、下触牛伏遺跡の例を上げておきたい。牛伏では台地東側斜面を中心にI a類の土坑が分布しており、I b類

の土坑はa類の土坑を挟んで、台地縁辺と台地中央に分布していた。両者が同時存在していたのか不明だが、後者の土坑は2列に配され、各列の土坑は各々土坑の間を埋めるよう位置していた。この配置状態から考えて、動的な組織的狩猟も十分想定可能な状態を想定され、狩猟の方法に踏み込んだ分析も可能と感じていた。今回検出した土坑には、a類の土坑が台地中央に、b類の土坑が台地縁辺に分布する点が牛伏の例と類似するほかには、牛伏と同様な関連性の強い土坑の配置状態が見られないこと、土坑長軸とコンタの関係が一律ではないことなど、類似要素より相違点が多く、また、他にも類例も見られない。全般に同時性の問題や狩猟面の評価は極めて難しい要素を含んでおり、今後に残る大きな課題と言える。

土坑以外では、台地西側の縁辺に存在した包含層出土の土器や石器に注目しておきたい。土器の分類は型式分類と可能な限り個体の把握を試みた。一方、石器は接合資料の抽出と母岩単位の把握を目指した。以上の作業を行い、どの程度分析が可能か、を整理作業の基本方針に据えた。個別型式単位や石材単位で見た場合、各々の集中地点や傾向は指摘できても、同時性に関する土器と石器の関係は、平面、及び、垂直分布を含め全く明確な根拠を欠いているため、ここでは、判断を保留しておきたい(第68～72図)。同一地点の断続的占拠が著しい縄文遺跡の分析は多岐に及ぶ問題を残しており、より単純な遺跡を対象にデータを積み上げていく努力が要請されよう。

V 成果と課題

- (註1) 今後調査では、As-B Pが塊状に堆積している場合でも何枚目のテフラが堆積しているのか、厳密なテフラの同定作業が要請されよう。
- (註2) 男女倉型尖頭器がⅡ a期まで遡れば、As-B Pの下位に出土するわけだが、現状では牛伏より古く遡る例は見られない上、単独出土するケースが多く、良好な資料に乏しい。最近の調査でAs-S Pの攪拌しているロームの上位より男女倉型彫器の出土を確認しており、複雑な様相を示している。今後は技法自体の変化や地域的差異を考慮した分析が必要と考えている。
- (註3) 本文中(P38)に記した通り、母岩別に見た黒曜石の分類は充分ではなく、斑晶の混入の有無や、縞状構造の特徴で黒曜石を三分した。少量の斑晶を含む黒曜石-1や、茶の縞模様が入る黒曜石-2の中には、黒曜石-3に共通する筋状の縞が入る資料や絹雲状の縞模様が入る資料、透明感の似た資料も存在しており、厳密な意味で確実な母岩分類を行えたとは思われない。敢えて、誤解を招く危険を承知で図化したのはこの分析方法が集落構造の解明には不可欠であり、完全な分類ではなくても、多少なりとも分析に必要な情報を与え得る、と考えたからである。
- (註4) 下触牛伏遺跡出土の上層石器群(第一文化層)は、既に述べた通り、2群に大別されよう。ここでは櫛状剝離を有す尖頭器や各種彫器を組成する一群に限定して、母岩単位に石器製作の在り方を整理してみた。この一群に分類可能な母岩は、削片の存在から推定した資料を含め12種類を確認した。このほかにも母岩分類が困難な石材が存在するため、母岩の数は更に増す可能性が高い。現在判明している12の母岩の内、この地点で石核から剝片の剝離を行い、石器を製作している確実な母岩は、僅か1例(黒色安山岩、報文では安山岩1と記載している)を確認したのにすぎない。この母岩には両設打面を持つ石核2点・縦長剝片の側縁に調整加工を施したナイフ2点の他、櫛状剝離を施す石器・2種(幅広の一群と細身の一群)を含んでおり、接合資料も確認していることから、縦長剝片の剝離を指向する剝離過程と、一連の工程の中で生じる幅広の剝片も同時に石器素材に取り込む石器製作構造を想定した。この構造的所見を元に他の母岩に分類した資料を検討した結果、剝片剝離に伴い生じる不良剝片が極めて乏しいこと、櫛状剝離を有す尖頭器・彫器の作出段階で生じる削片や、二次加工段階で生じる破片が多く出土していることから、質的にも量的にも素材剝片の状態か、完成状態に近い状態で持ち込んで加工のみ展開する状態を示している、と判断した。
- (註5) 単位集団の残した集落や、石器製作の様子を解明した砂川遺跡の成果は極めて大きく、石器群を構造的に把える砂川の分析方法は集落研究の在り方を確立した。一方、集団の離合集散は今から10年以上も前の想定だが、実際、集団が集住した集落の発見は最近のことである。該期遺跡の半数以上にも及ぶ(佐藤 1988)環状構造を呈す集落の発見は縄文中期の環状集落に似た分布的特徴に端を発しており、言わば、砂川の分析は集落を構成した複数の石器製作単位(単位集団=世帯)の証明手段に終始したようにも思える。砂川の分析の有効性に鑑み、集落分析を試みてきた経過を踏まえ、今後は多岐に亘る視点から集落分析に取り組んでいきたい。
- (註6) 当時の環境や石材入手、その他の儀礼的側面など、多様な側面(安齊 1990)を想定した場合には、A T降下以後の集落が総て砂川の構造を示す集落と簡単に規定するわけにはいかない。石材の互惠の交換の想定は魅力的仮説だが、具体的痕跡を残しているのか、注目していきたい。

引用参考文献

- 『後田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年
『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988年
『下触牛伏遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
『堀下八幡遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990年
『御正作遺跡』大泉町教育委員会 1984年
『三ツ屋遺跡』赤城山麓の旧石器所収 1988年 講談社
『元宿遺跡』赤城山麓の旧石器所収 1988年 講談社
『峯岸遺跡』群馬県史資料編1所収 1988年 群馬県史編纂室
『群馬県武井における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告 第7冊 1977年
『砂川先土器時代遺跡』所沢市教育委員会 1974年
- 安齊正人 『無文字社会の考古学』1990年 六興出版
安森政雄 『先土器時代人の生活空間—先土器時代のムラー』
『日本村落史講座』2 雄山閣 1990年
岩崎泰一 『旧石器人のムラを求めて』『悠久への出発』1989年
上毛新聞社
『ブロックの形成と遺跡の構造』『勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989年
大工原豊 『A T下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論』
(1)(2) 『旧石器考古学』41・42号 1990・1991年
栗島義明 『先土器時代遺跡の構造的序説』『土曜考古』11号
1986年
佐藤宏之 『台形様石器研究序論』『考古学雑誌』73巻3号 1988年
須藤 隆 『先土器時代集落の成り立ち』『信濃』43巻4号 1991年
白石浩之 『旧石器時代の石槍』1989年 東京大学出版会
諏訪順順 『相模野台地における尖頭器の様相』『長野県考古学会誌』
59・60号 1989年
堤 隆 『有櫛尖頭器をめぐる評価』『長野県考古学会誌』59・
60号 1989年
細野高伯 『市之関前田遺跡の細石刃文化』『第3回長野県旧石器
文化研究交流会』1990年
早田 勉 『示標テフラの種類と性質』『群馬県史通史編1』
1990年 群馬県史編纂室

計測値一覧表

凡 例

1. 長さ・幅は、小数点第2位を四捨五入し、cm単位で表示した。
2. 遺物重量の計測には電磁式はかり（EY-2200A）を使用し、小数点第3位を四捨五入しg単位で表示した。
3. 「器種」の欄の略号は次の事を示す。

ナイフ：ナイフ形石器	楔：楔形石器
加剥：加工痕ある剥片	磨斧：磨製石斧
使剥：使用痕ある剥片	打斧：打製石斧
三角錐：三角錐形石器	片刃：片刃石器
スタンプ：スタンプ形石器	
4. 「石材」の欄の略号は次の事を示す。

黒安：黒色安山岩	黒頁：黒色頁岩
粗安：粗粒安山岩	珪頁：珪質頁岩
石閃：石英閃緑岩	点頁：点紋頁岩
灰安：灰色安山岩	変玄：変玄武岩
変安：変質安山岩	溶凝：溶結凝灰岩
輝凝：輝緑凝灰岩	

計測値一覧表

旧石器時代の単独石器

挿図番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	挿図番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第5図-1	外(Bk-3)	ナイフ	7.8	2.4	20.56	黒頁	第10図-1	4	剥片	2.7	1.8	1.76	黒曜石
第6図-1	4	ナイフ	4.5	2.1	5.00	黒曜石	2	2	剥片	2.2	2.1	1.71	黒曜石
2	1	ナイフ	3.6	2.7	7.27	黒安	3	4	剥片	1.7	1.5	1.14	黒曜石
3	4	搔器	4.5	2.8	18.02	黒曜石	4	3	剥片	3.8	2.1	5.15	黒曜石
4	2	彫器	1.6	1.9	2.58	珪頁	5	2	剥片	2.2	1.3	0.79	黒曜石
5	5	削器	3.0	3.8	8.06	黒曜石	6	5	剥片	1.8	1.8	1.82	黒曜石
6	5	削器	1.1	2.7	1.36	黒曜石	7	1	剥片	3.2	2.1	4.38	黒安
第7図-1	5	加剝	2.9	2.1	2.69	黒曜石	8	1	剝片	3.9	2.2	7.03	黒安
2	4	加剝	1.4	1.0	0.52	黒曜石	9	1	剝片	2.6	2.2	2.68	黒安
3	2	使剝	3.6	1.9	3.97	黒曜石	10	外(Bp-3)	剝片	4.2	1.9	4.70	黒安
4	4	使剝	5.2	2.0	2.67	黒曜石	11	1	剝片	3.3	2.6	7.28	黒安
5	5	使剝	5.3	1.7	5.50	黒曜石	12	1	剝片	1.9	1.7	1.69	黒頁
6	4	使剝	4.6	0.9	1.94	黒曜石	第11図-1	2	剝片	4.0	3.0	7.77	黒曜石
第8図-1	2	使剝	3.6	3.0	4.47	黒曜石	2	4	剝片	2.3	2.8	2.02	黒曜石
2	1	使剝	3.5	3.4	7.46	黒曜石	3	1	剝片	2.5	4.1	4.48	黒安
3	5	使剝	3.2	2.6	5.42	黒曜石	4	1	剝片	3.1	3.9	6.53	黒安
4	Bq-4	使剝	4.4	3.4	12.70	黒曜石	5	1	剝片	4.6	3.4	9.23	黒安
5	4	使剝	2.9	3.1	4.98	黒曜石	6	外(Br-4)	剝片	4.9	3.8	33.81	黒頁
6	2	使剝	4.2	3.0	13.35	黒曜石	7	2	剝片	4.9	6.2	70.90	黒頁
7	外(Bo-3)	使剝	6.9	4.0	32.23	黒頁	第12図-1	外(Bo-5)	敲石	6.4	4.9	97.72	粗安
8	4	使剝	4.2	3.8	12.34	黒曜石	2	外(Bm-3)	敲石	5.1	3.2	32.05	粗安
第9図-1	2	石核	3.1	3.1	16.04	黒曜石	第21図-1	外(Ba-0)	石核	4.6	3.2	12.95	黒安
2	2	石核	2.9	2.5	15.61	黒曜石	2	外(Ay-0)	剝片	1.4	3.2	2.29	黒頁
3	4	石核	2.2	4.0	20.06	黒曜石							

旧石器時代の接合石器

資料番号 (挿図番号)	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	資料番号 (挿図番号)	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-4 (第13~15図)							2	2	剝片	5.5	5.1	38.32	輝凝
1	1	碎片	1.0	1.6	0.40	黒安	3上	2	剝片	2.0	3.1	5.72	輝凝
2左	1	剝片	3.2	1.4	2.11	黒安	3下	2	剝片	3.6	3.1	10.35	輝凝
2右	1	剝片	3.2	2.0	2.48	黒安	4	4	石核	7.3	6.8	577.40	輝凝
3	1	剝片	4.7	5.6	25.78	黒安							
4	1	剝片	3.7	4.5	11.88	黒安	接合資料-1 (第18図)						
5	1	剝片	3.1	5.9	17.17	黒安	1	4	剝片	2.7	1.6	1.38	黒曜石
6	1	碎片	1.6	3.3	1.94	黒安	2	4	碎片	2.5	0.9	0.39	黒曜石
7	1	剝片	3.9	3.1	12.02	黒安	3	4	碎片	2.2	1.2	0.81	黒曜石
8	1	剝片	3.8	4.7	11.52	黒安	4	4	石核	4.1	3.0	28.33	黒曜石
9	1	碎片	0.7	2.0	0.49	黒安	接合資料-6 (第19図)						
10	1	石核	3.4	4.0	26.82	黒安	1	1	碎片	2.6	1.6	1.94	黒安
11	1	ナイフ	3.6	2.7	7.27	黒安	2	1	碎片	1.7	2.0	1.27	黒安
12	1	剝片	3.7	3.8	19.82	黒安	3	1	碎片	1.7	2.8	1.52	黒安
13	1	碎片	1.9	2.7	1.86	黒安	接合資料-7 (第19図)						
14	1	碎片	1.6	1.5	1.18	黒安	1	1	剝片	3.9	2.3	5.34	黒安
15	1	剝片	2.9	2.2	3.03	黒安	2	1	剝片	4.6	1.5	5.47	黒安
16	1	剝片	3.4	1.9	4.35	黒安	接合資料-11 (第20図)						
17	1	碎片	2.0	2.4	2.03	黒安	上	1	碎片	2.4	1.1	0.92	黒安
18	1	碎片	1.9	3.0	0.53	黒安	下	1	碎片	2.2	1.5	1.24	黒安
19	1	石核	4.8	5.6	63.44	黒安	接合資料-12 (第20図)						
接合資料-13 (第16・17図)							左	1	碎片	2.1	0.8	0.81	黒安
1	2	剝片	5.0	3.1	17.52	輝凝	右	1	碎片	2.1	0.5	0.24	黒安

資料番号 (挿図番号)	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-8 (第20図)						
上	1	剥片	2.9	1.6	1.40	黒安
下	1	砕片	1.5	1.3	0.30	黒安
接合資料-5 (第20図)						
上	3	剥片	5.7	2.8	16.23	黒安
下	3	砕片	2.9	2.6	5.96	黒安
接合資料-9 (第20図)						
左	1	砕片	2.7	2.4	1.43	黒安
右	1	剥片	3.4	2.6	5.90	黒安
下	1	砕片	1.7	2.1	1.59	黒安

資料番号 (挿図番号)	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-10 (第20図)						
左	1	砕片	1.5	0.8	0.13	黒安
右	1	砕片	1.1	1.5	0.34	黒安
接合資料-3 (第20図)						
上	2	使剥	2.8	5.2	19.05	黒曜石
下	2	使剥	3.4	3.0	8.19	黒曜石
接合資料-2 (第20図)						
上	5	使剥	3.5	2.8	4.71	黒曜石
下	5	砕片	1.0	1.3	0.27	黒曜石

縄文時代の単独石器

挿図番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第46図-1	Bc-2-13	平基無茎鎌	1.8	1.8	1.03	黒頁
2	Bc-3-20	平基無茎鎌	2.1	2.2	2.34	チャート
3	Be-2-15	石鎌	(1.6)	(1.3)	(0.53)	点頁
4	Bn-22Gr	凹基無茎鎌	3.0	1.6	1.29	チャート
5	Bg-2-11	凹基無茎鎌	2.0	1.4	1.07	黒安
6	B区2土坑	凹基無茎鎌	(1.3)	1.3	(0.60)	チャート
7	B区7土坑	凹基無茎鎌	2.2	1.4	0.87	黒安
8	Bi-3-6	凹基無茎鎌	2.2	1.3	0.85	黒曜石
9	Bc-3Gr	凹基無茎鎌	2.5	1.6	0.69	頁岩
10	Bo-22-2	凹基無茎鎌	2.4	1.8	1.12	珪頁
第47図-1	Bb-2-49	凹基無茎鎌	1.8	1.1	0.39	チャート
2	Bb-3-42	凹基無茎鎌	2.0	(1.3)	(0.91)	チャート
3	Cn-8-1	凹基無茎鎌	2.2	(1.3)	(0.54)	黒曜石
4	Bw-3Gr	凹基無茎鎌	1.6	1.5	0.60	チャート
5	Ay-1-4	凹基無茎鎌	1.8	(1.3)	(0.40)	黒曜石
6	Bc-3-1	凹基無茎鎌	1.8	1.5	0.82	チャート
7	Bc-2-7	凹基無茎鎌	1.5	1.0	0.43	頁岩
8	Bc-2-16	凹基無茎鎌	(1.9)	(1.3)	(0.62)	頁岩
9	Dd-7-1	凹基無茎鎌	2.0	(1.2)	(1.63)	チャート
10	Bd-24-5	凹基無茎鎌	(1.7)	1.7	(0.78)	黒曜石
11	Dc-9-1	凹基無茎鎌	4.0	(2.5)	(2.62)	チャート
第48図-1	Bd-24-3	磨製石斧	(5.0)	(3.6)	(38.58)	変玄
2	Bb-2-45	打製石斧	13.3	3.5	245.80	黒頁
3	Be-23-1	打製石斧	17.5	8.5	1250.00	黒頁
	Be-24-1	剥片	4.4	2.7	4.82	黒頁
	Bf-24-1	剥片	4.0	2.1	6.70	黒頁
	Bh-23-1	砕片	2.5	1.3	0.76	黒頁
第49図-1	Bi-1-2	打製石斧	(5.9)	4.8	(54.57)	粗安
2	Bd-2-1	打製石斧	(6.2)	4.8	(49.97)	黒頁
3	Cc-0Gr	打製石斧	12.9	4.7	138.72	黒頁
4	Da-9-1	打製石斧	13.6	6.1	210.30	黒頁
第50図-1	Bs-0-1	片刃石器	14.6	8.5	912.10	変玄
2	Bb-3-32	楔形石器	1.8	1.4	1.09	黒頁
3	Ba-4-2	楔形石器	3.9	1.4	5.41	点頁
第51図-1	Cg-5-1	削器	4.3	3.4	11.25	黒曜石
2	Ce-6-2	削器	1.8	2.0	1.52	黒曜石
3	Bd-22-19	削器	5.5	5.2	44.10	黒頁
4	Bb-2-12	削器	4.8	3.3	11.48	黒頁
5	Bf-2-15	削器	4.7	2.9	15.77	黒安

挿図番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
6	Dd-12-1	削器	5.8	8.0	61.00	黒安
7	Cm-6-3	削器	7.2	4.5	27.33	黒頁
8	Bk-1-1	削器	10.9	6.5	221.40	黒頁
9	Be-3-1	削器	3.8	3.6	16.03	黒頁
	Bg-3Gr	削器	7.8	4.0	53.92	黒頁
第52図-1	Bj-23-1	削器	8.7	8.4	124.55	黒頁
2	Bc-22-4	削器	2.4	2.8	3.42	黒頁
	Bd-22-22	削器	3.1	2.5	3.91	黒頁
	Be-22-4	削器	2.3	2.1	1.83	黒頁
3	Ax-3-1	削器	7.9	10.2	131.41	灰安
第53図-1	Br-23-10	加剥	6.2	6.4	58.09	黒頁
2	Cw-10-1	加剥	5.5	3.4	28.25	黒頁
3	Bc-22-3	加剥	1.7	2.3	2.81	黒曜石
4	Bd-20-16	加剥	3.5	1.6	3.57	黒安
5	Bd-20-3	加剥	3.5	2.0	7.59	黒安
6	Bd-21-27	加剥	2.7	2.0	2.62	黒安
7	Bd-20-7	加剥	1.8	1.0	2.07	黒頁
8	Bd-20-21	加剥	3.1	4.1	9.63	黒安
9	Bb-3-12	加剥	1.9	1.8	1.75	黒曜石
10	Br-4-2	加剥	4.3	2.1	8.98	黒頁
第54図-1	Cq-6-1	使剥	6.5	7.6	80.57	黒頁
2	Bf-1-6	使剥	3.0	1.6	2.22	黒曜石
3	Bo-1-2	使剥	5.2	7.0	42.06	黒頁
4	Dd-8-1	使剥	5.4	4.7	23.70	黒頁
5	Ba-3-15	使剥	6.2	2.1	15.80	黒頁
6	Bp-5-1	使剥	9.7	9.6	222.50	黒頁
第55図-1	Bc-20-5	石核	4.3	6.0	44.65	チャート
2	Bg-3-3	石核	6.9	11.0	256.30	黒頁
3	Bc-2-6	石核	7.4	5.9	203.60	黒頁
第56図-1	Bc-22-11	スタンプ	12.2	7.5	558.50	粗安
2	Br-4-3	三角錐	8.6	5.8	232.50	黒頁
3	Bn-24-1	磨石	(10.0)	8.3	(549.80)	石閃
4	Bc-2-18	磨石	12.1	9.1	654.40	粗安
5	Be-23-9	磨石	19.0	10.0	1846.00	粗安
第57図-1	Bh-1-1	凹石	9.5	6.2	348.10	粗安
2	Bc-1-8	凹石	(5.8)	(7.1)	(125.89)	粗安
3	Cn-3-1	敲石	10.5	8.6	666.50	石閃
4	Ct-7-1	敲石	11.7	2.9	151.78	粗安
5	Bd-1-5	敲石	6.8	8.4	315.70	変玄

計測値一覧表

挿図番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
6	Bb-2-46	敲石	10.9	6.6	459.38	砂岩
	Bb-2-47					
	Bb-2-48					
	Be-21-3					
	Bc-3Gr					

挿図番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第57図-7	Bi-2-1	砥石	(4.2)	4.4	(47.3)	流紋岩
第58図-1	Be-23Gr	多孔石	24.5	22.3	6310.0	粗安
2	Bc-23-3	石皿	57.3	37.5	14400.0	粗安

縄文時代の接合資料

資料番号 (挿図番号)	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-2 (第59図)						
1	Bd-1-3	碎片	2.4	2.1	0.80	黒頁
2上	Bd-3-28	碎片	1.6	1.4	1.46	黒頁
2下	Bd-2-22	碎片	1.7	1.4	1.21	黒頁
3	Be-1-21	碎片	1.4	1.4	0.41	黒頁
4	Be-1-2	碎片	1.2	1.5	0.28	黒頁
5	Be-1-22	碎片	1.0	1.6	0.63	黒頁
6	Be-3-2	剥片	4.5	3.8	30.04	黒頁
7	Bb-3-21	石核	4.7	3.5	115.70	黒頁
接合資料-12 (第60図)						
1	Bd-3-3	剥片	2.4	2.2	2.26	黒頁
2上	Be-2-7	碎片	1.6	1.6	1.41	黒頁
2下	Be-1-1	碎片	1.4	1.9	1.10	黒頁
3左	Be-2-20	剥片	4.8	2.3	12.62	黒頁
3右	Bf-1-8	石核	4.8	2.5	20.67	黒頁
4	Be-1-12	剥片	2.5	3.4	5.31	黒頁
5	Bc-3-10	剥片	3.6	4.9	16.96	黒頁
接合資料-11 (第61図)						
1	Ba-3-4	剥片	2.6	2.1	3.76	黒頁
2	Ba-2-33	剥片	3.8	3.8	11.49	黒頁
3	Ba-2-15	碎片	2.6	1.5	2.52	黒頁
4	Ba-2-34	碎片	1.3	1.5	0.61	黒頁
5	Bb-2-36	加剥	2.4	4.8	19.83	黒頁
6	Ba-2-1	石核	4.4	4.3	31.91	黒頁
接合資料-13 (第62図)						
1	Bc-2-8	碎片	1.3	1.2	0.44	黒頁
2	Bc-1-8	碎片	1.2	1.7	0.72	黒頁

資料番号 (挿図番号)	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
3	Bc-2-11	碎片	1.8	2.4	1.17	黒頁
4	Bc-1-1	剥片	3.5	5.1	18.16	黒頁
5	Bb-2-13	剥片	2.9	5.0	15.24	黒頁
接合資料-16 (第62図)						
1	Be-2-23	剥片	4.1	3.2	17.54	黒頁
2	Be-1-23	加剥	4.6	4.8	21.85	黒頁
3	B区表採	剥片	2.9	3.0	4.42	黒頁
4	Bb-1-1	剥片	2.7	2.6	5.33	黒頁
接合資料-17 (第63図)						
1左	Bc-1Gr	剥片	2.7	1.5	1.74	黒頁
1右	Bc-1-6	剥片	2.3	3.4	4.44	黒頁
2	Be-2-5	剥片	3.5	4.5	8.38	黒頁
3	Bc-24-2	剥片	4.6	6.7	22.95	黒頁
4左	Bc-1-4	剥片	3.3	5.9	13.95	黒頁
4右	Bd-2-24	使剥	4.9	6.3	23.76	黒頁
接合資料-4 (第63図)						
	Bb-4-13	剥片	2.2	2.2	2.99	点頁
	Bb-4-16	石核	5.1	4.7	61.75	点頁
	Bb-4-32	石核	5.0	5.5	47.24	点頁
接合資料-8 (第64図)						
1	Bb-21-6	剥片	8.3	6.5	102.77	黒頁
2	Bc-23-9	石核	7.4	7.7	133.40	黒頁
接合資料-30 (第64図)						
	Bc-22-12	碎片	2.2	1.1	0.90	黒頁
	Bc-23-5	石核	10.0	4.7	160.10	黒頁
	Bc-23-6	剥片	2.1	5.0	20.01	黒頁
	Bc-23-10	剥片	7.4	4.0	13.82	黒頁

※出土位置には、遺物の取り上げ番号を付した。

例えば、Bc-23-10はBc-23グリッドの取り上げNo.は10を示す。

写 真 图 版



遺跡の遠景



1. B区調査風景（西側より）



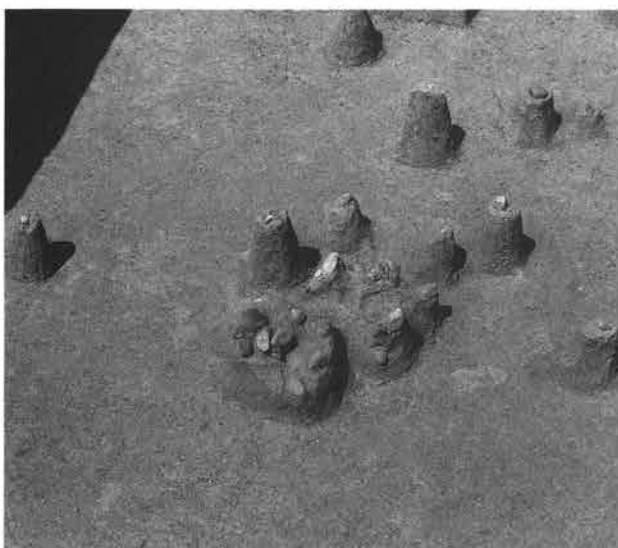
2. B区南壁セクション（P～Nライン）



1. 1号礫群確認状態



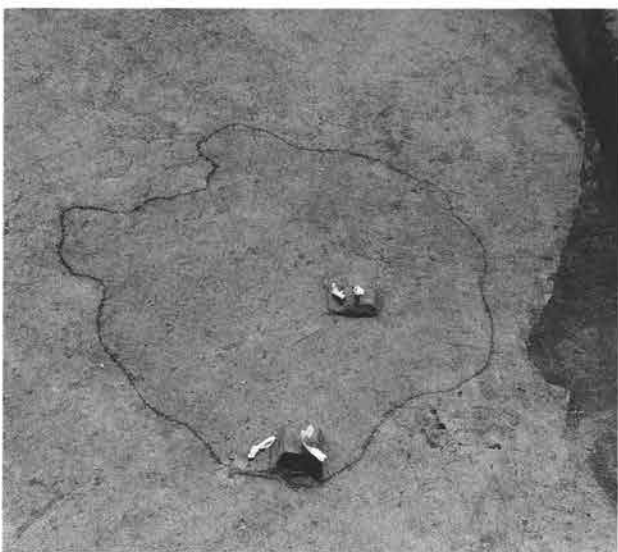
2. 1号礫群確認状態と石器（手前）出土状態



3. 1号礫群出土状態（1）



4. 1号礫群出土状態（2）



5. Bq-4Gr VII層の膨張現象（VII層上面で確認）

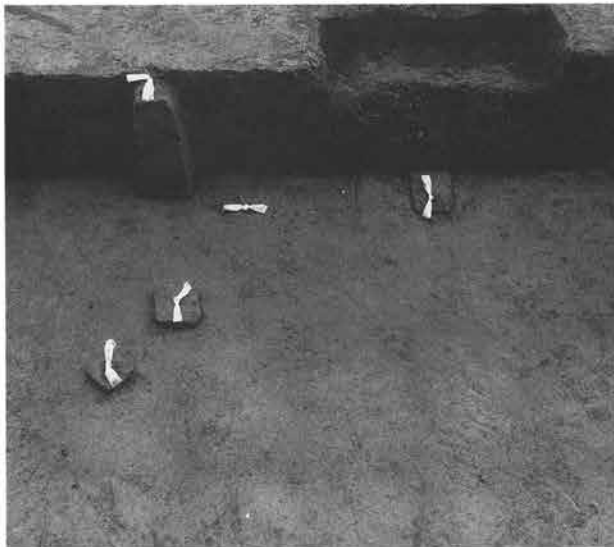
1号ブロックでは、VI層上面にVII層が露出しており、堆積が一樣でないことを示していた。VII層の膨張現象は自然営力に起因する可能性が強く、石器の移動する一因と考えられる。



1. 1号ブロック石器出土状態 (1)



2. 1号ブロック石器出土状態 (2)



3. 3号ブロック石器出土状態

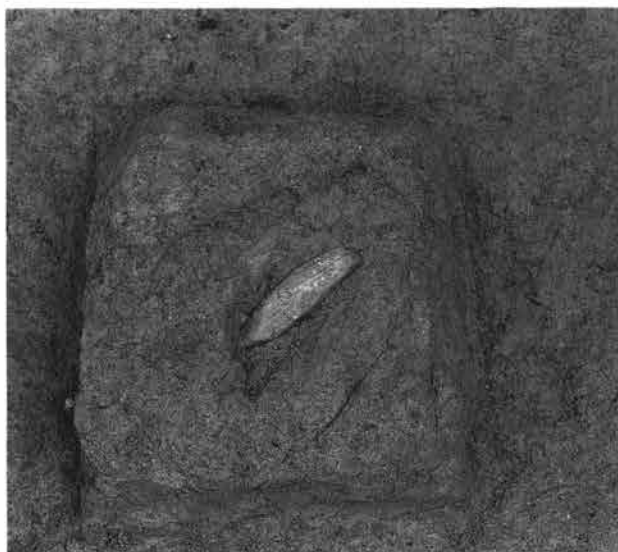


4. 4号ブロック (西側から)



5. 4号ブロック (北側から)

1号ブロックは、BP (IV層、白く見える) より下位の層序から出土するのに対し、他のブロックは、BP 層序に多出している。その中には、II b 期に特徴的なナイフを含んでいる。



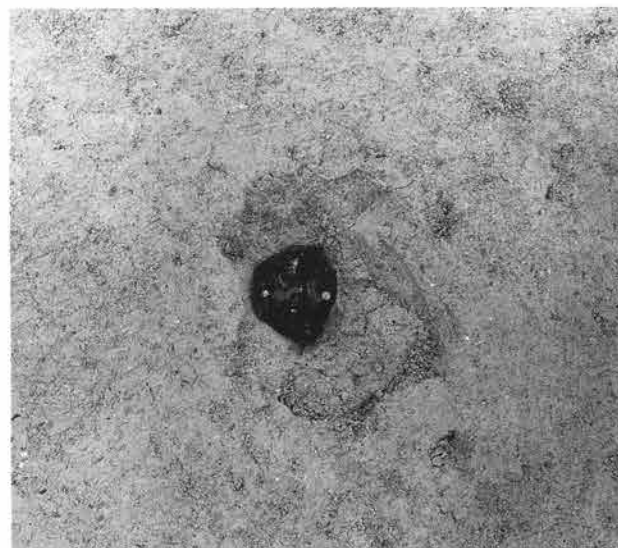
1. 石器（第5図1）の出土状態（1）



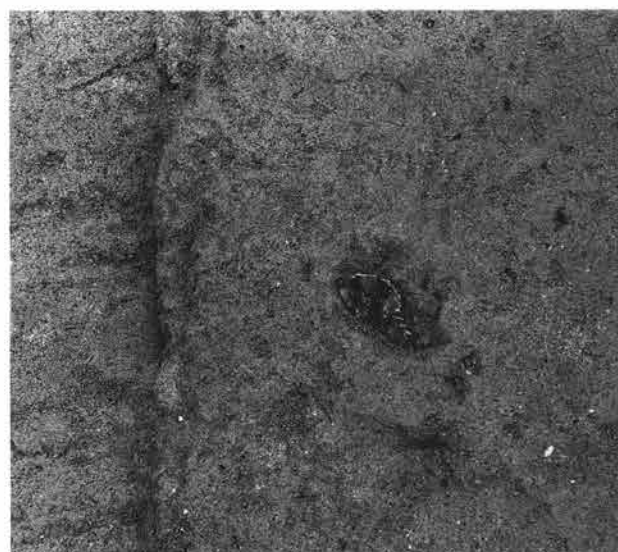
2. 石器（第8図7）の出土状態（2）



3. 石器（第17図4）の出土状態（3）



4. 石器（第18図1）の出土状態（4）



5. 石器（第6図1）の出土状態（5）



6. 石器（第6図3）の出土状態（6）



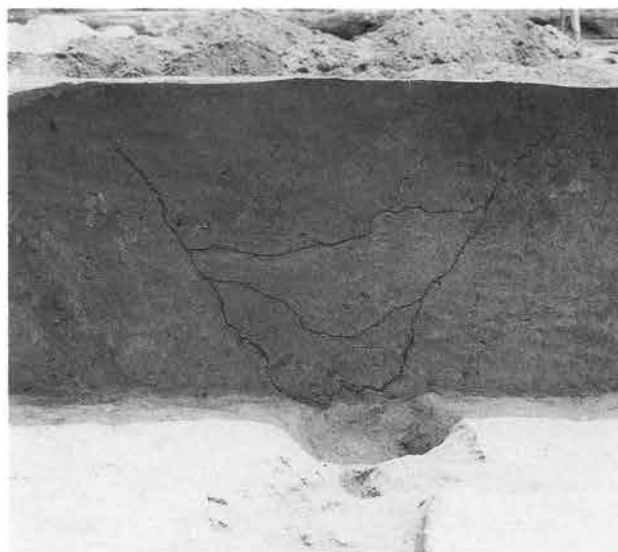
1. C区・D区 旧石器試掘調査区全景



2. B区 縄文土器・石器の分布



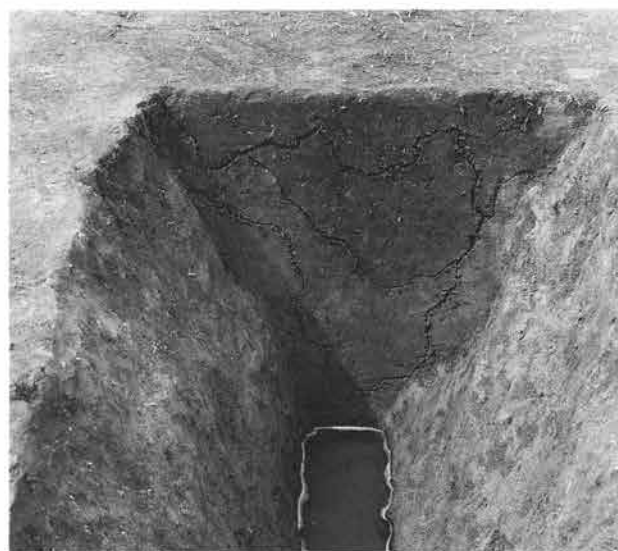
1. 39号土坑



2. 39号土坑セクション



3. 60号土坑 (南側から)



4. 60号土坑セクション



5. 62号土坑



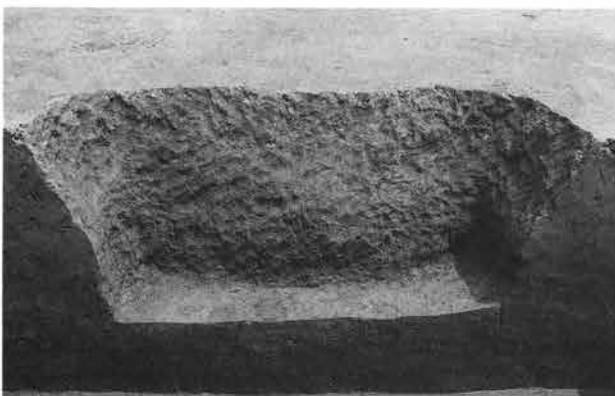
6. 62号土坑セクション



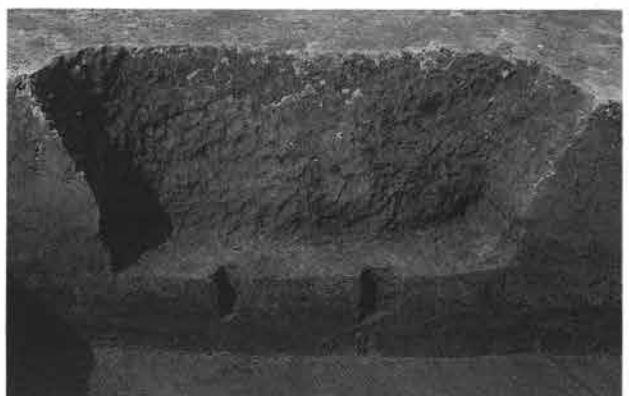
1. 66号土坑



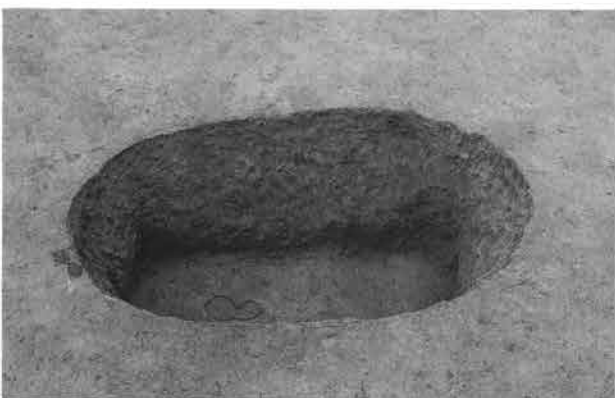
2. 66号土坑セクション(1)



3. 66号土坑セクション(2)



4. 66号土坑坑底裁ち割り調査



5. 40号土坑



6. 40号土坑セクション



7. 40号土坑坑底裁ち割り調査



8. 同 pit 部分



1. 1号土坑



2. 2号土坑



3. 3号土坑



4. 33号土坑



5. 32号土坑



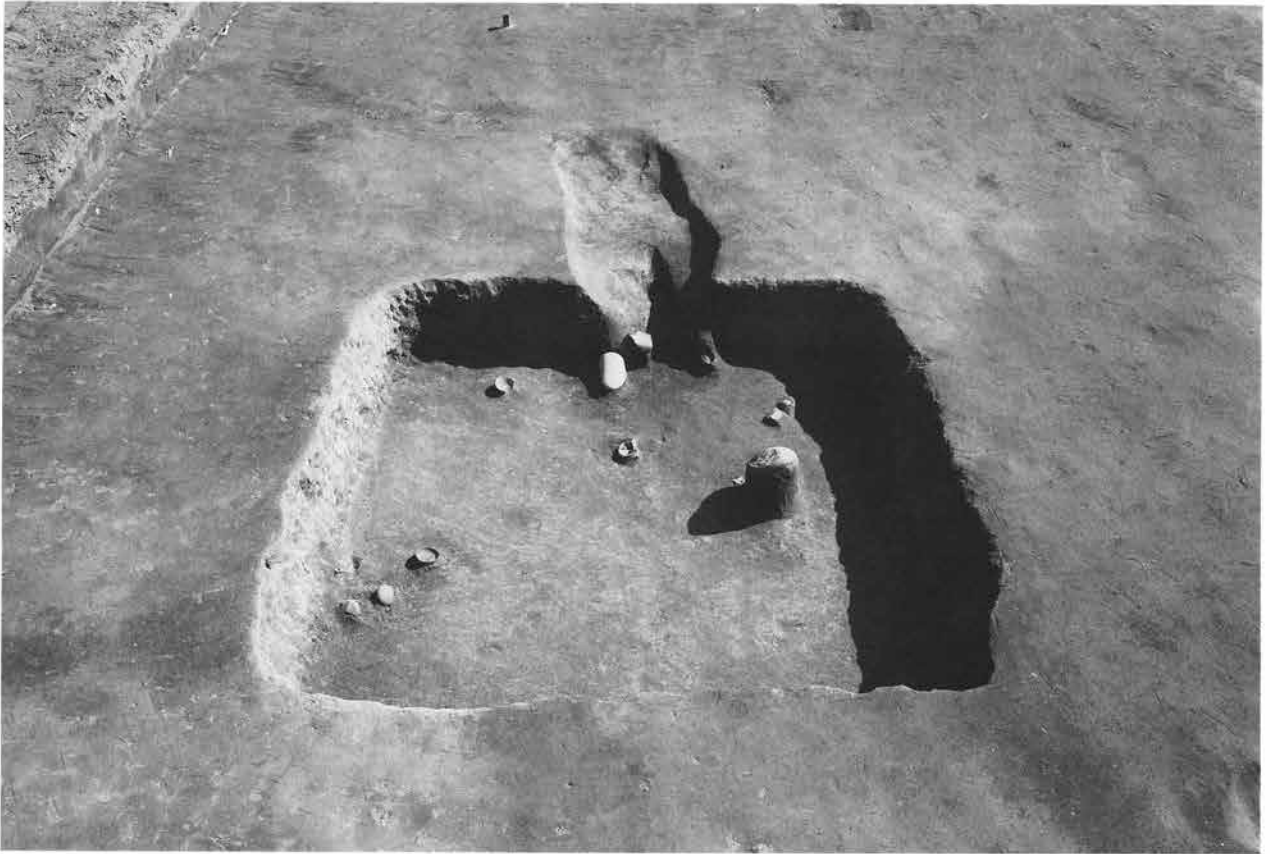
6. 32号土坑セクション



7. 34号土坑



8. 35号土坑



1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡セクション



3. 1号住居跡遺物出土状況



4. 1号住居跡カマド遺物分布



5. 1号住居跡掘り方



1. 2号住居跡全景



2. 2号住居跡全景・遺物分布



3. 2号住居跡北カマド付近遺物出土状態



4. 2号住居跡東西セクション



5. 2号住居跡東西セクション



1. 2号住居跡北カマド・遺物出土状態



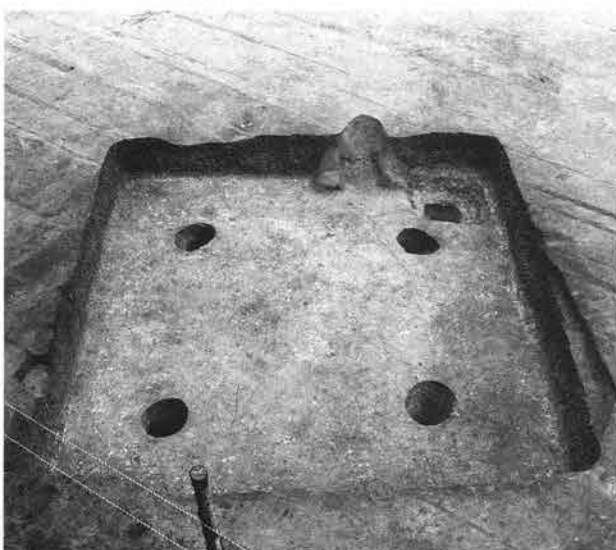
2. 2号住居跡東カマド



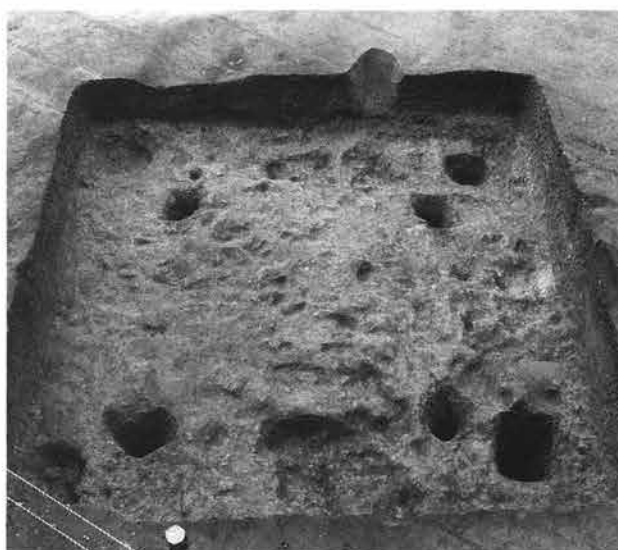
3. 2号住居跡貯蔵穴



4. 2号住居跡貯蔵穴セクション



5. 2号住居跡全景



6. 2号住居跡掘り方



1. 30号土壙 (墓壙)



2. 30号土壙 (墓壙) セクション



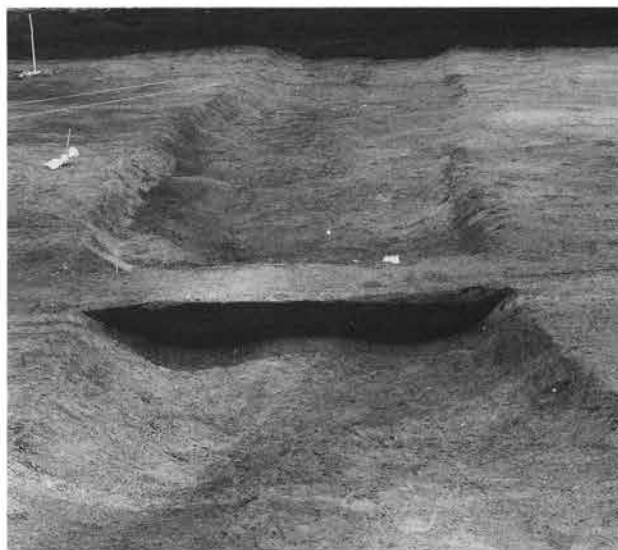
3. 道路状遺構 1 (北側から)



4. A・B区道路状遺構 2 (南側から)



5. 道路状遺構セクション (1)



6. 道路状遺構セクション (2)



1. 1号溝 (東側から)



2. 1号溝全景 (西側から)



3. 1号溝セクション



4. 4号溝全景



5. 4号溝セクション



1. 23号土坑



2. 27号土坑



3. 25号土坑



4. 15号土坑



5. 6号土坑



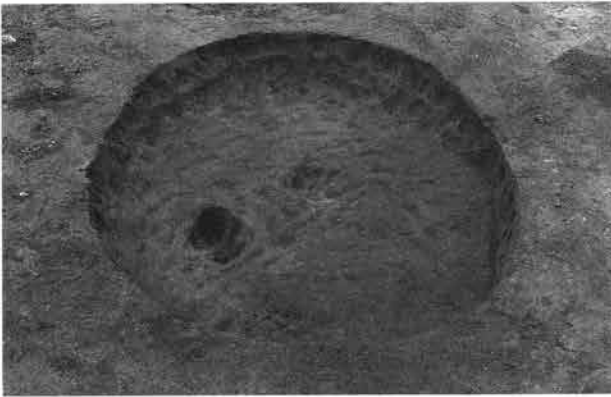
6. 11号土坑



7. 22号土坑



8. 17号土坑



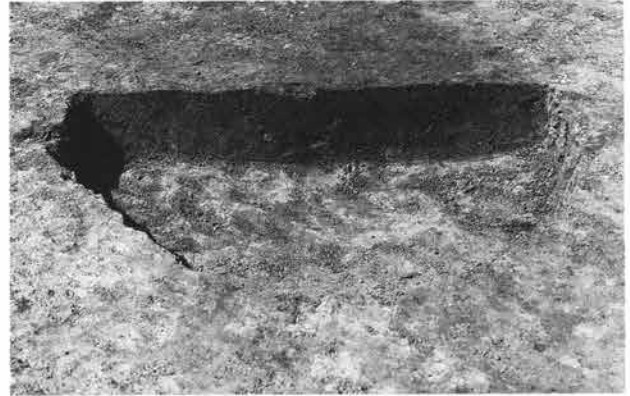
1. 26号土坑



2. 19号土坑



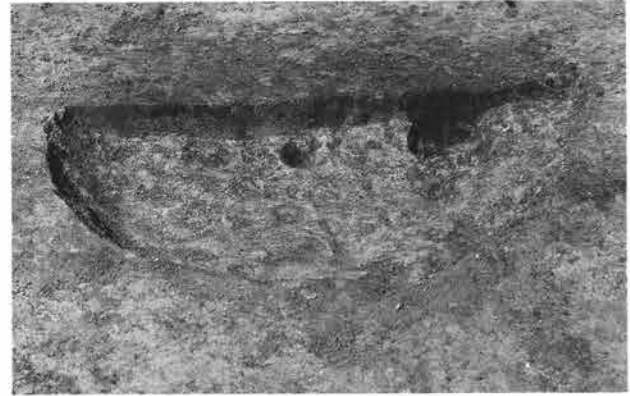
3. 64号土坑 (南側から)



4. 64号土坑セクション



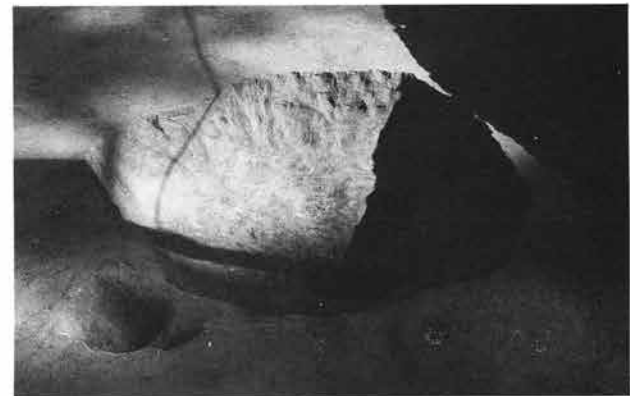
5. 65号土坑 (南側から)



6. 65号土坑セクション



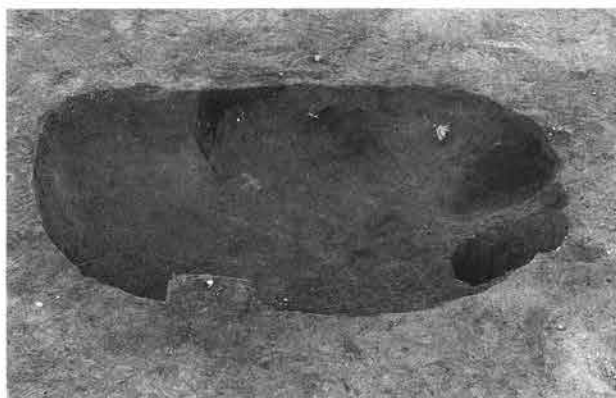
7. 8号土坑



8. 20号土坑



1. 4号土坑



2. 18号土坑



3. 21号土坑



4. 10号土坑



5. 40号土坑



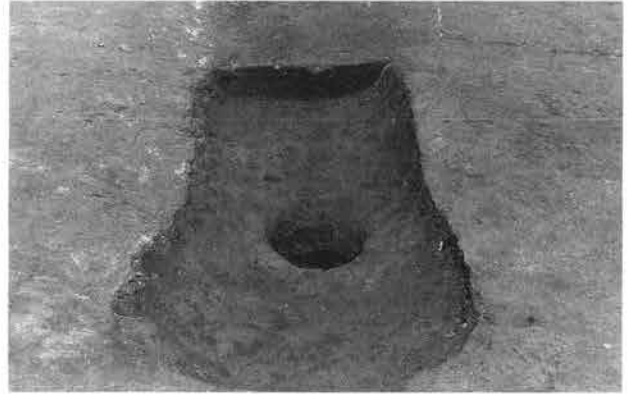
6. 41号土坑



7. 40~43号土坑



1. 42号土坑



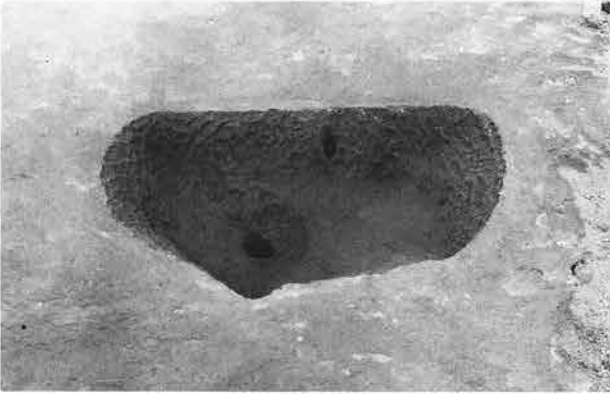
2. 36号土坑



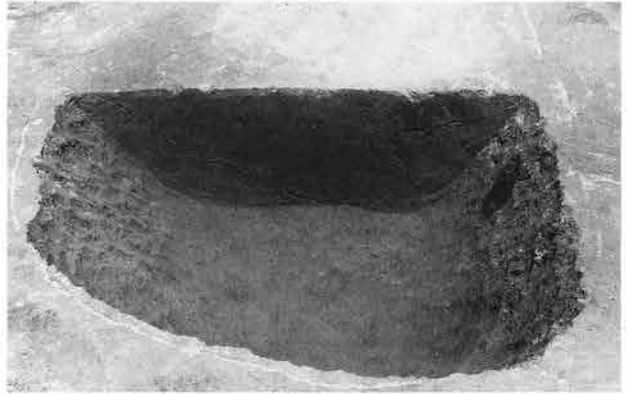
3. 43号土坑



4. 5号土坑



5. 37号土坑



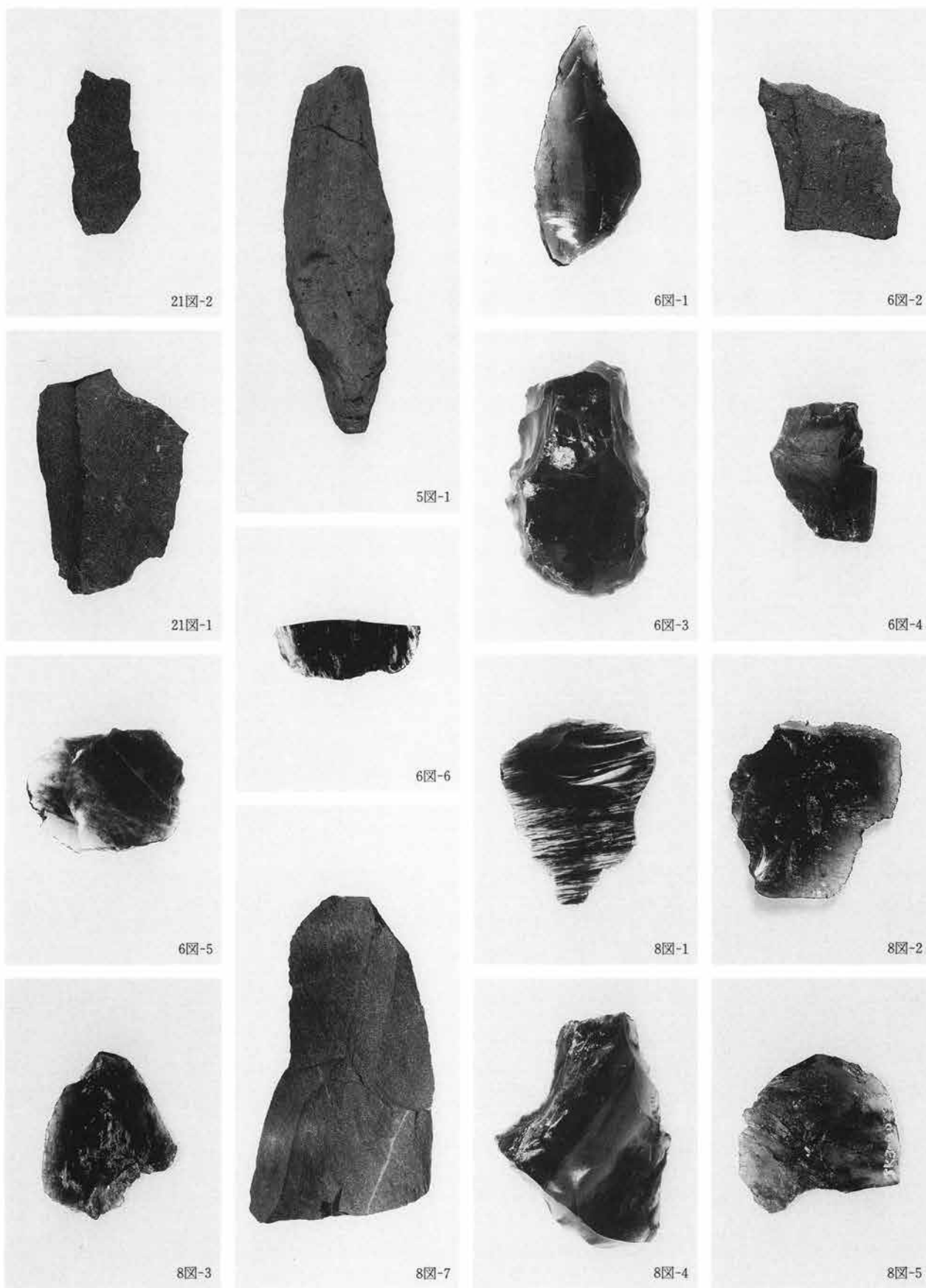
6. 37号土坑セクション



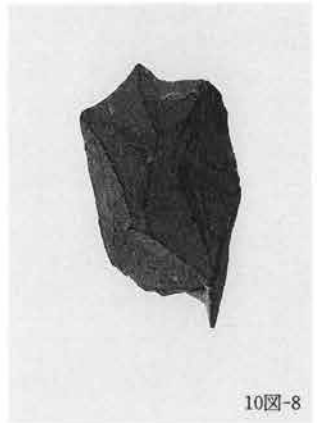
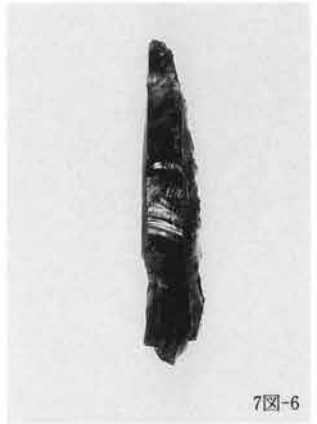
7. 13号土坑



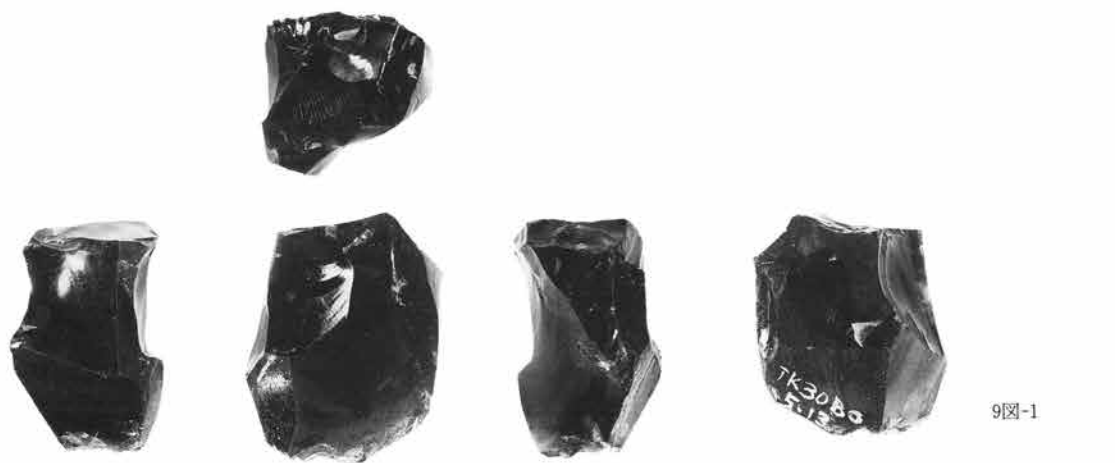
8. 16号土坑



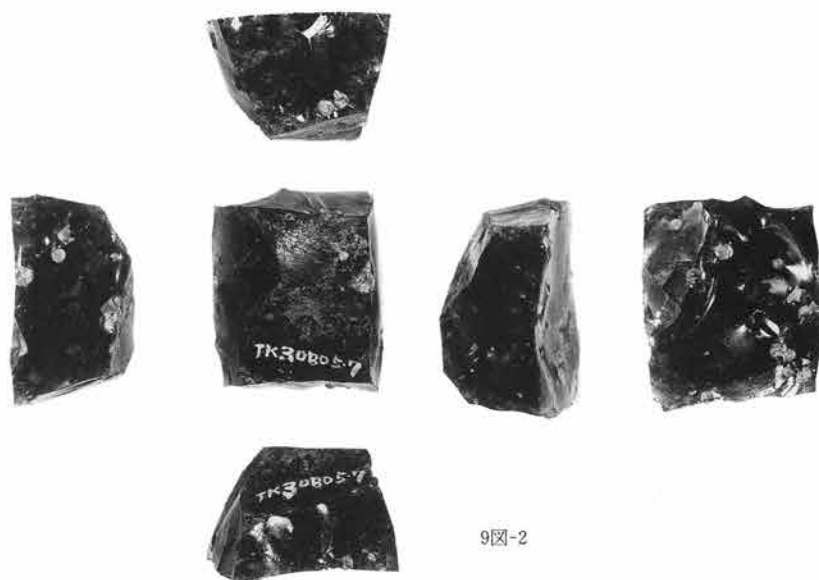
出土石器 (1)



出土石器 (2)



9图-1



9图-2



9图-3

出土石器 (3)



10图-9



10图-10



10图-11



11图-1



10图-12



11图-3



11图-2



11图-4



11图-5



11图-6



12图-2



11图-7



12图-1

出土石器 (4)



接合資料-4(13図)



接合資料-13(16図)



接合資料 (1)



接合資料-1 (18図)



接合資料-7 (19図)



接合資料-6 (19図)



接合資料-11 (20図)



接合資料-8 (20図)



接合資料-12 (20図)



接合資料-10 (20図)



接合資料-9 (20図)



接合資料-5 (20図)

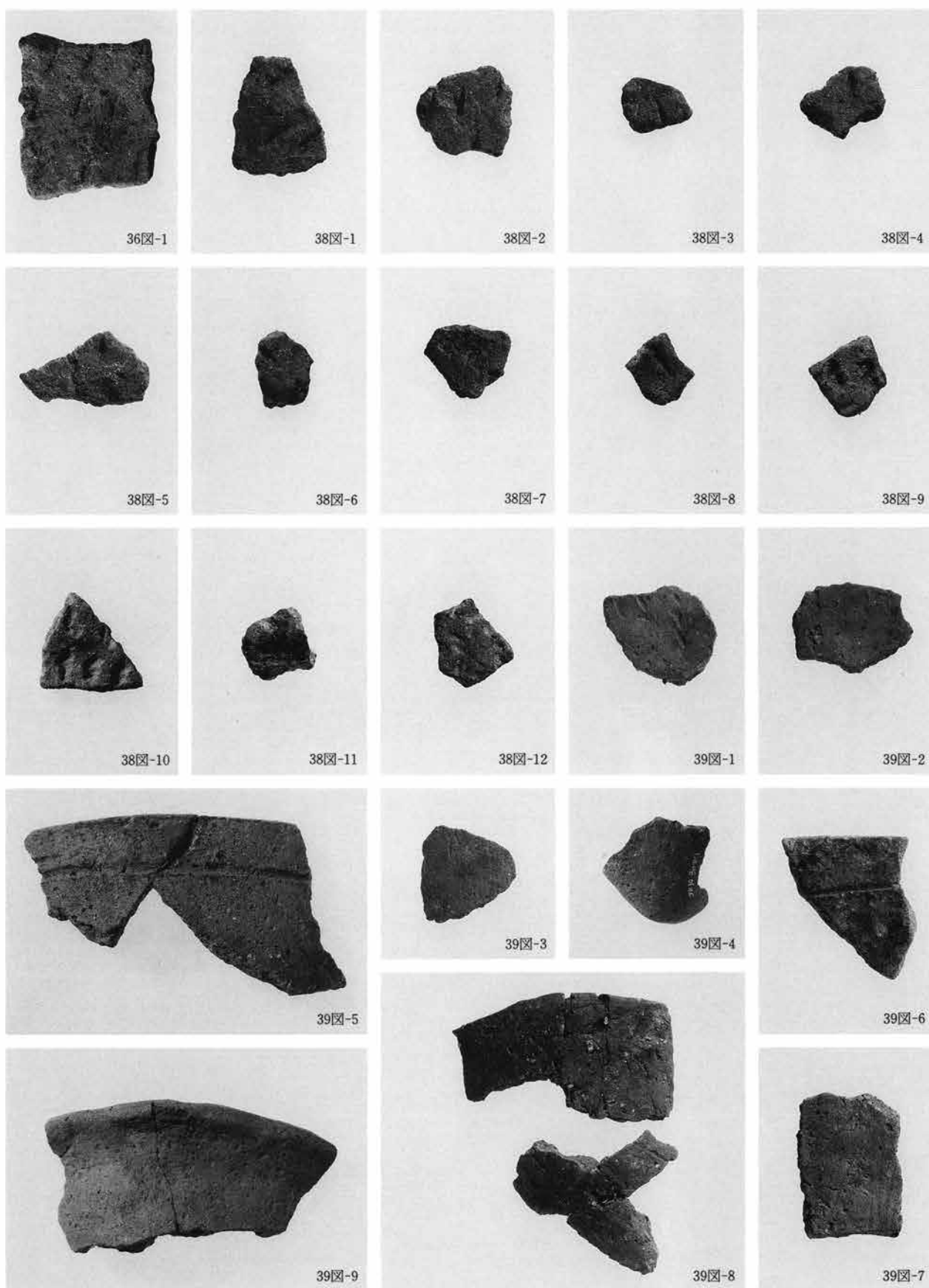


接合資料-3 (20図)

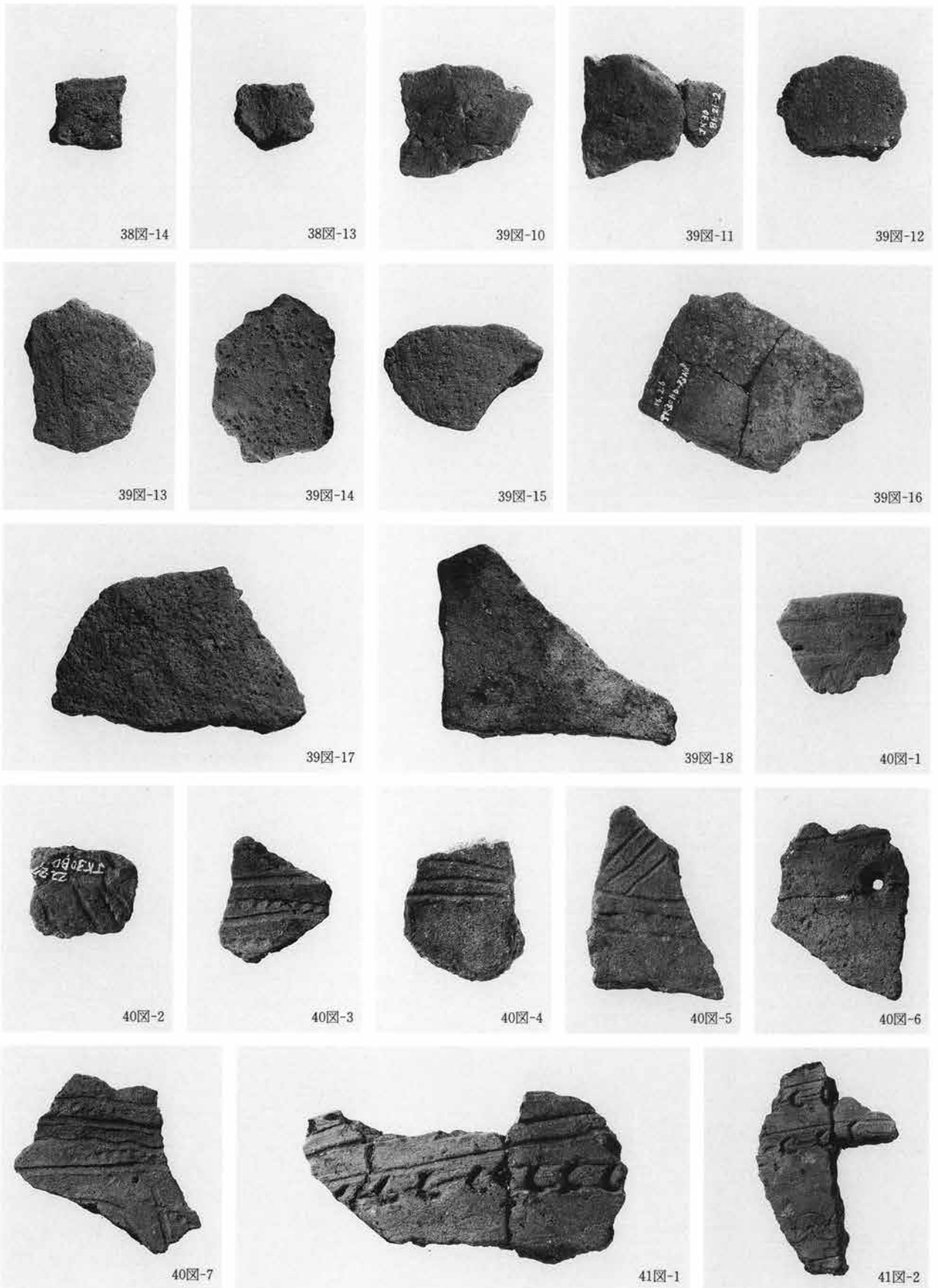


接合資料-2 (20図)

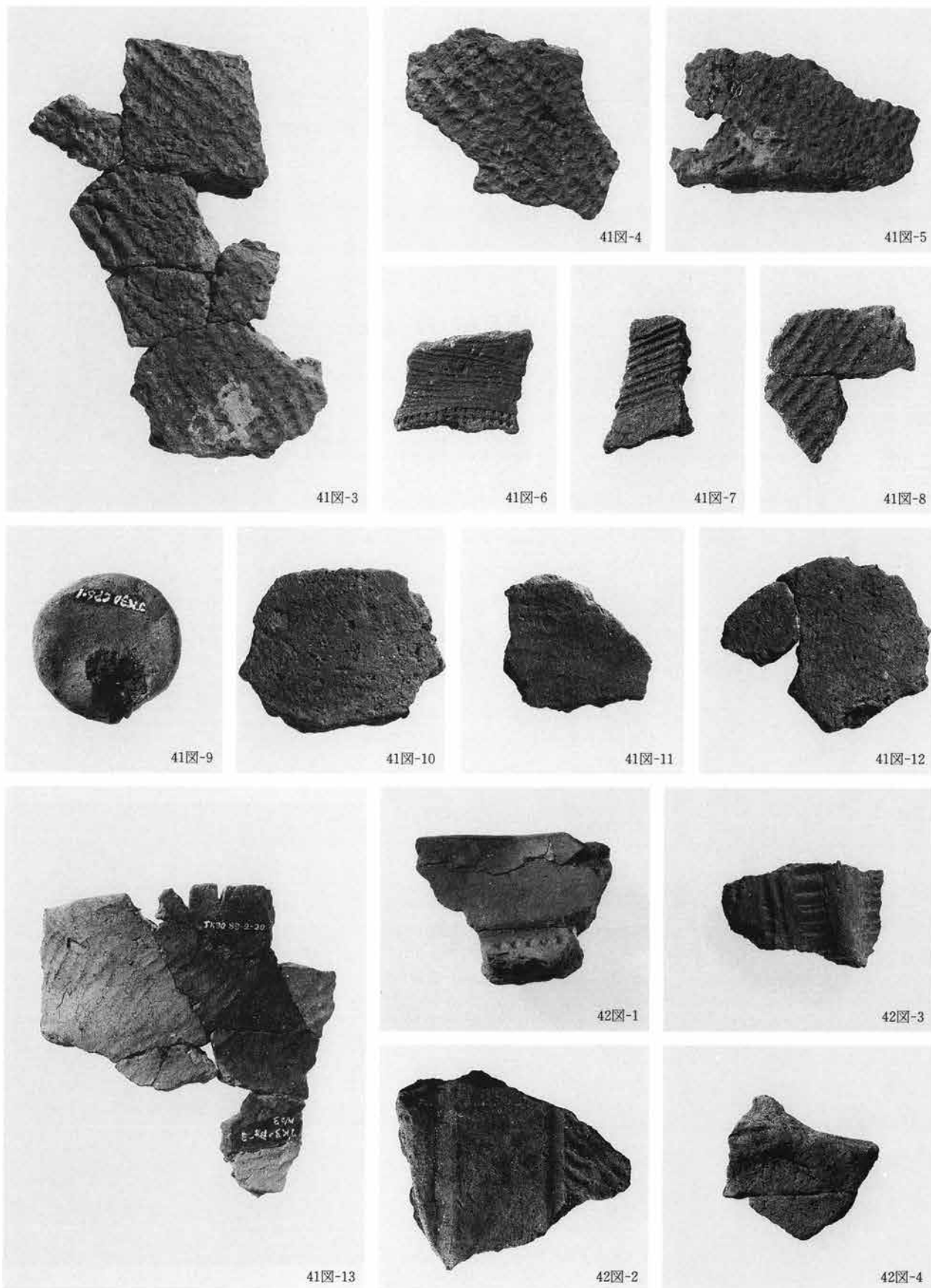
接合資料 (2)



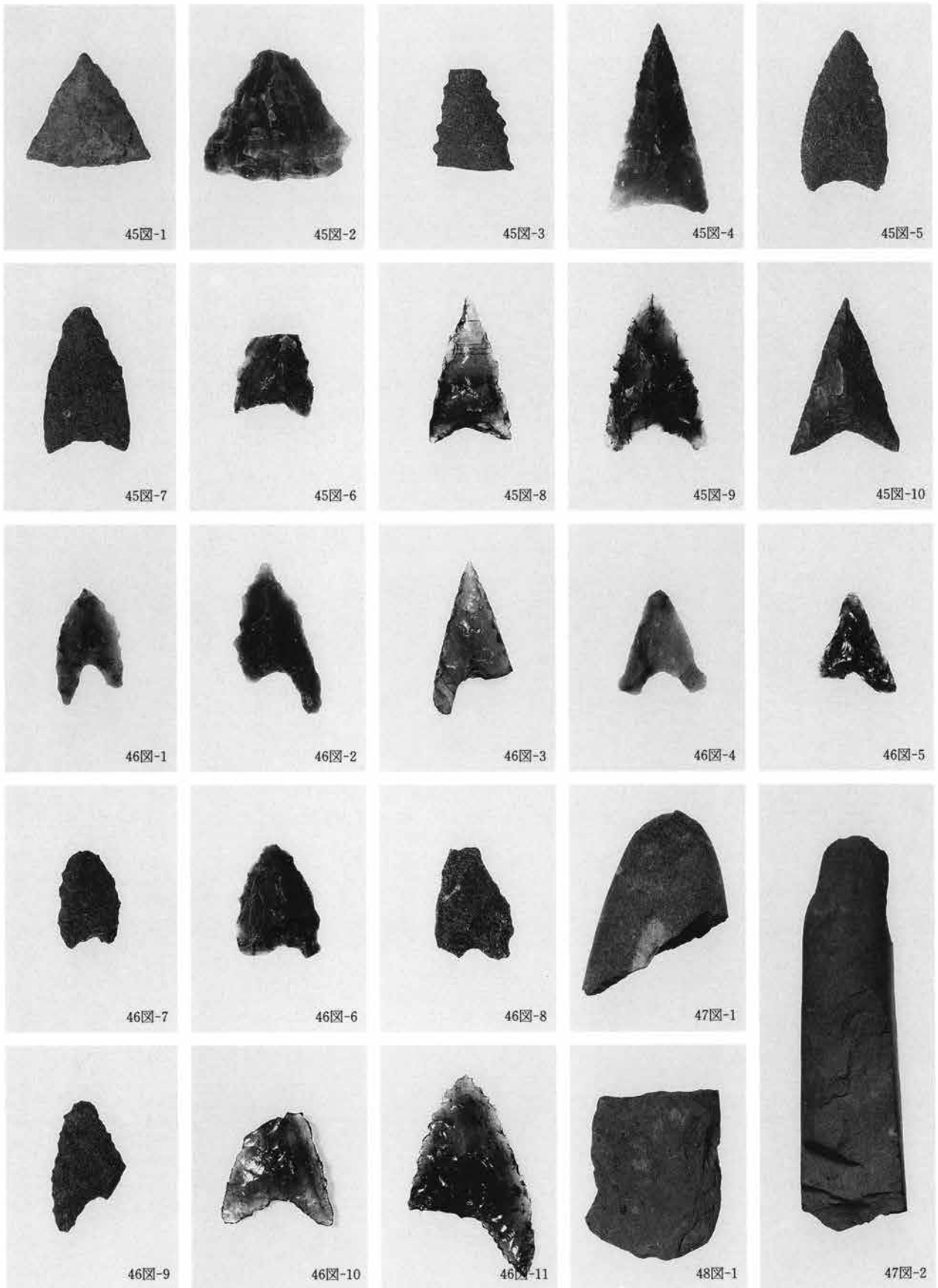
包含層出土の土器 (1)



包含層出土の土器 (2)



包含層出土の土器 (3)



包含層出土の石器 (1)



47図-3



48図-3



48図-4



48図-2



49図-1



49図-3



50図-1



50図-3



50図-4



49図-2

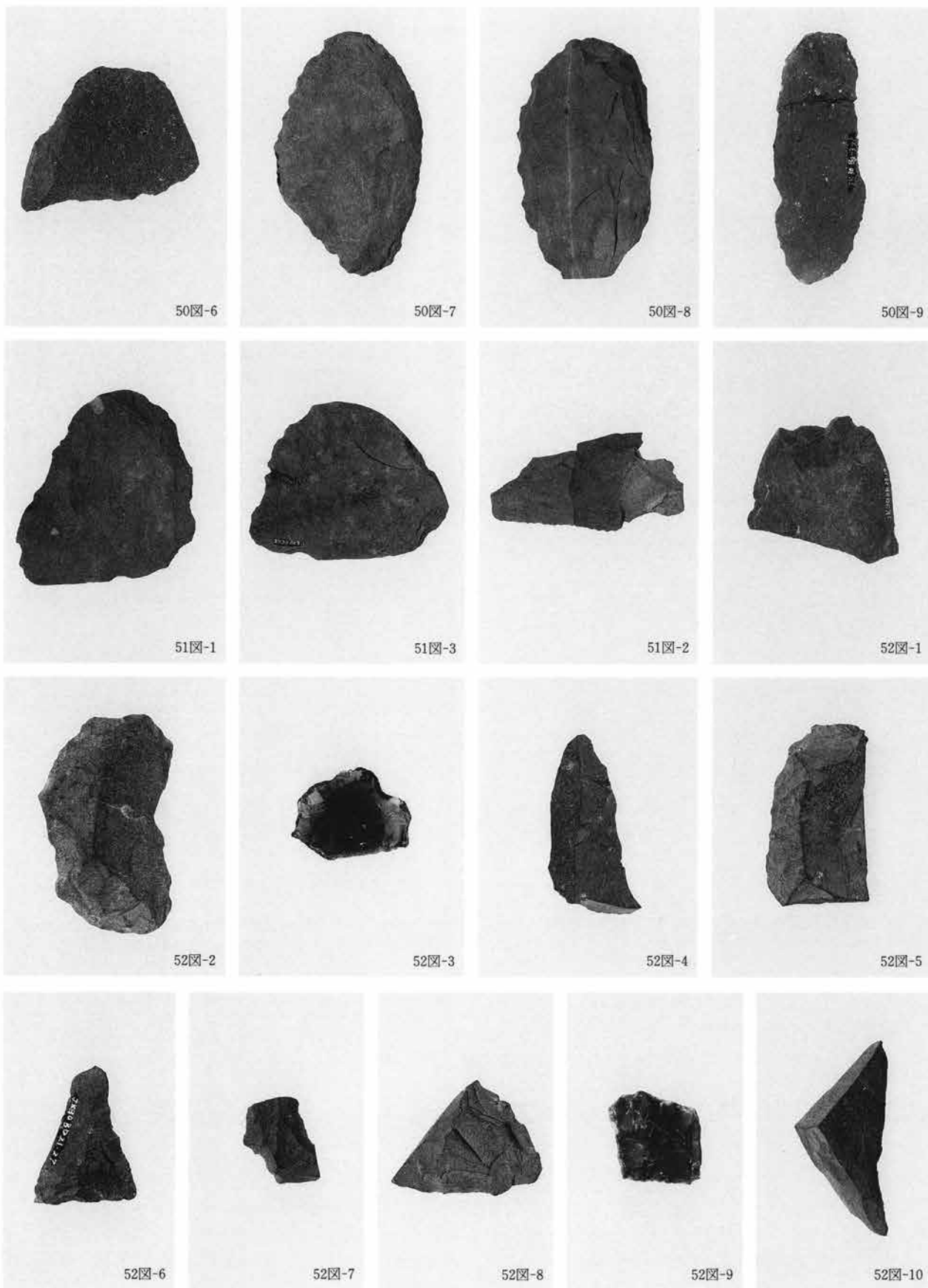


50図-2

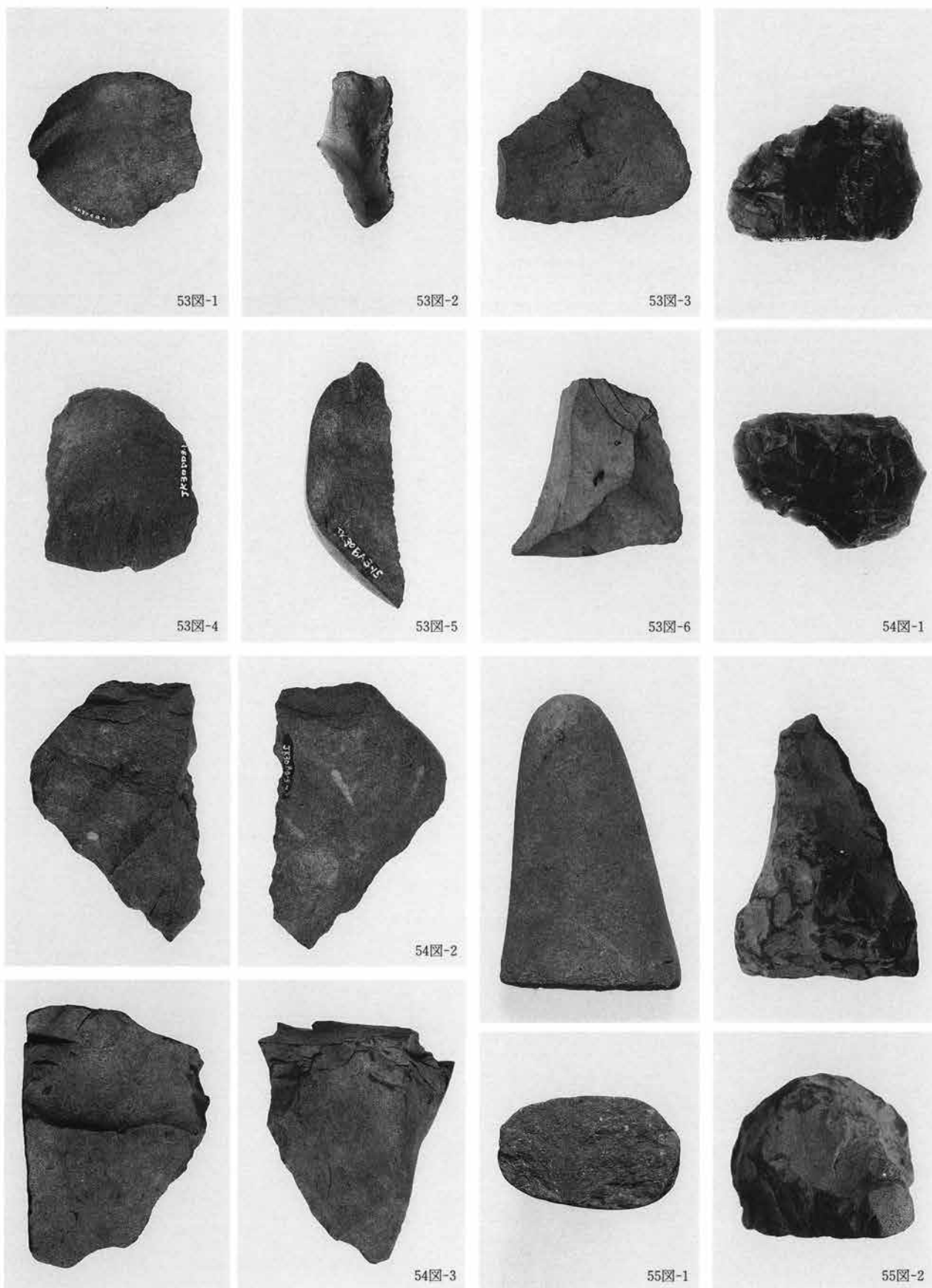


50図-5

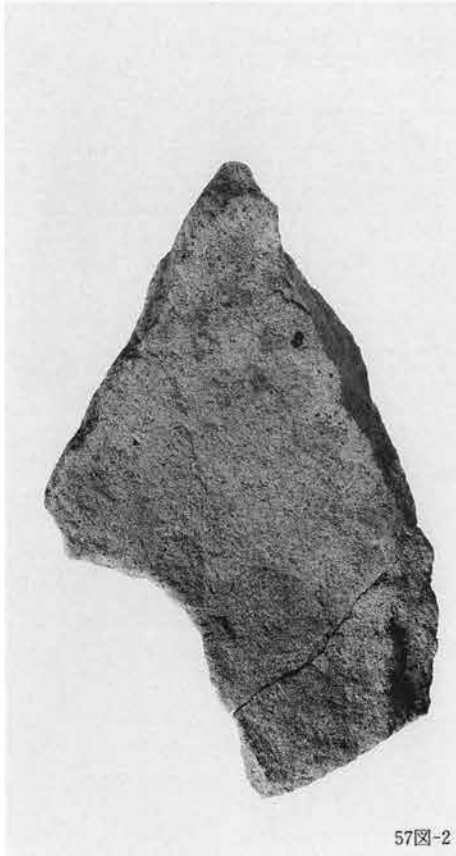
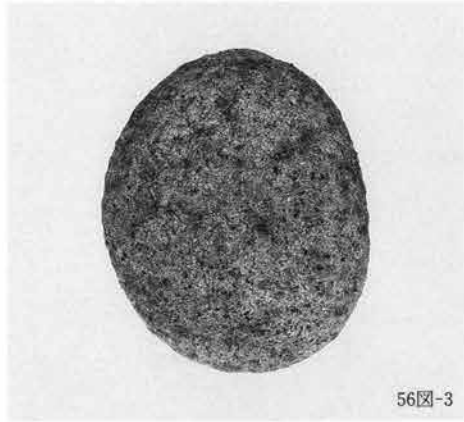
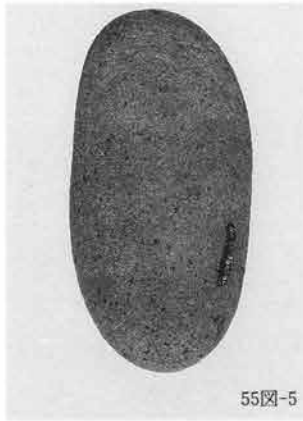
包含層出土の石器 (2)



包含層出土の石器 (3)



包含層出土の石器 (4)



包含層出土の石器 (5)



接合資料-2(58図)



接合資料-13(61図)

接合資料-11(60図)



接合資料-12(59図)



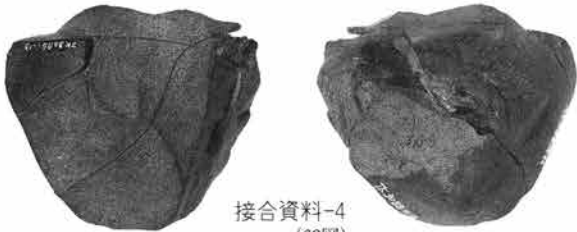
接合資料(1)(縄文)



接合資料-16
(61図)



接合資料-17
(62図)



接合資料-4
(62図)



接合資料-30
(63図)



接合資料-8
(63図)

接合資料 (2)





73図-1

73図-2

73図-3



73図-5



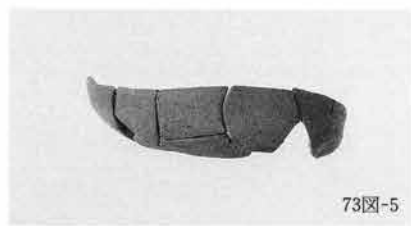
73図-9

73図-4

73図-10



73図-8



73図-5

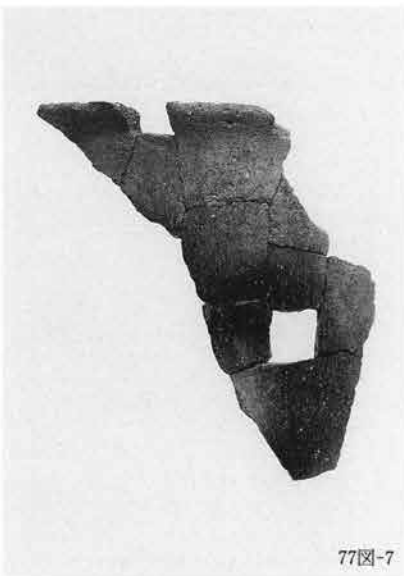
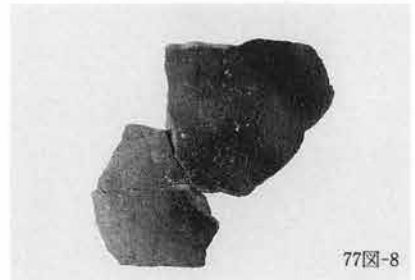
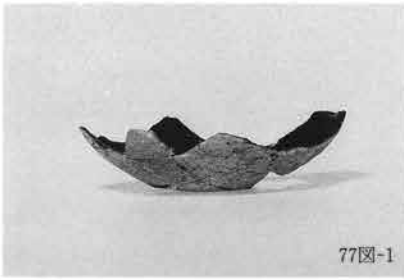


73図-6



73図-11

1号住居跡出土の遺物



2号住居跡・30号土坑（墓坑）出土の遺物

財群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第123集

飯土井中央遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年11月21日 印刷

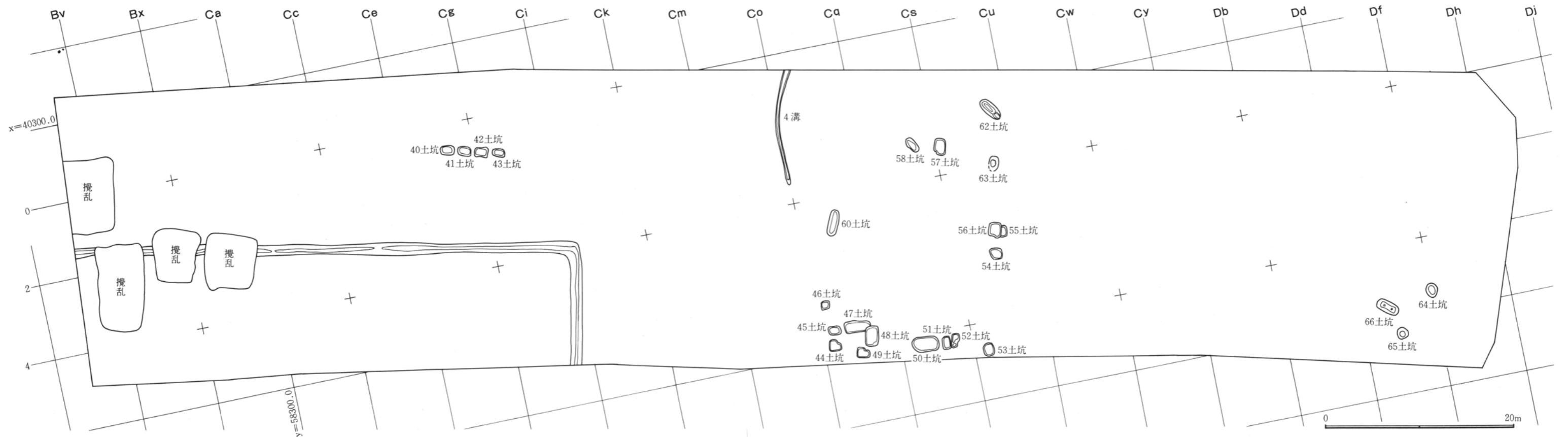
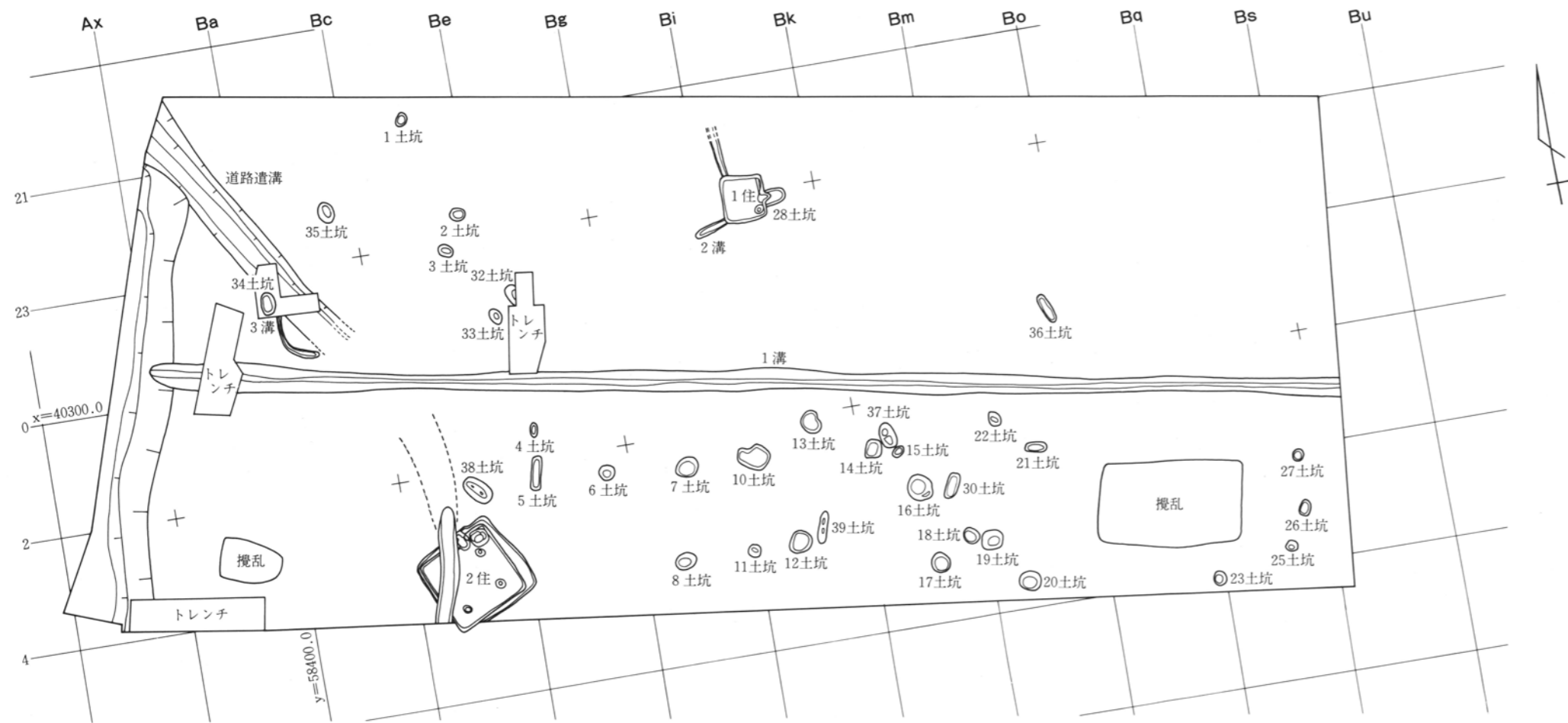
平成3年11月27日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所



付図 飯土井中央遺跡遺構配置図